

---

# IS(インフィニット・ストラトス)-the Garden of sinners-

御崎 マナ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

インフィニット・ストラトス

I S - t h e   G a r d e n   o f   s i n n e r s -

### 【Nコード】

N 5 0 7 1 S

### 【作者名】

御崎 マナ

### 【あらすじ】

ふとした拍子に世界で唯一ISを動かせる男となってしまう織斑一夏。そのままなし崩し的にIS学園へと入学することになった彼だが、一つだけ救いで、疑問となることがあった。

それは、彼の双子の弟である織斑春佳がIS学園に入学していたことだった

空の境界とISのクロスオーバーかつオリジナル小説。

それは、本来あるはずのない”もしも”の話

・注、当小説はいくつかのオリジナル要素、オリジナルなストーリー展開などが含まれています。

現在原作二巻終了。三巻へ進行します。

## 零（前書き）

はじめまして、御崎マナと申します。

我ながら「どうしてこうなった!」としか言い様のない物語ですが、それでも読んでくれる人の時間潰しにでもなったら、と思います。

少し変わった構成ですが、精一杯書きますのでよろしくお願いします。

では、はじまりはじまり。

零

「おい春佳<sup>はるか</sup>。あの新聞の織斑一夏<sup>おりの</sup>ってヤツ、お前の兄貴だよな？」

事務所に入って来るなり、羽織ったジャケットも脱がずに彼女は僕へと新聞を投げてきた。

内容は先程彼女自身が述べた通り、僕の兄について、である。

「そつだよ、式<sup>しき</sup>」

「はっ、ずいぶん面白いことになってるじゃないか」

「なんだなんだ、ずいぶんと珍しいな。式が興味を示すとは」

「そりゃ、女にしか使えないと言われているIS<sup>インフィニット・ストラトス</sup>を使える男。なんてこんな大きく出されれば興味も沸くよ。ましてや、そいつの名字が知り合いと同じで、その写真には数回とは言え見知った顔。いくらオレでもそこまで世間に対して薄情じゃない」

「なるほど。して春佳<sup>はるか</sup>、どういった経緯<sup>いきわづらひ</sup>でお前の兄、織斑一夏はISを操作できるとわかったんだ？」

ジャケットをいつもの場所に掛けて、幹也みきやがいないので自分でコーヒーを淹れつつ肩を疎める式に我らが社長にして僕の師匠たる魔術師、橙子さんいじくは式から僕へと視線を移し、尋ねて来た。

「単純な話だよ、橙子さん。先週、僕と一夏くん　兄は受験があったでしょ？」

まあ、僕は千冬姉　姉に学校へ行けと言われても働く気だったからいいとして、兄はそんな姉には逆らえず、受験をしたんだよ」

「それが、IS学園か？」

「うちのお兄ちゃんはそんな狂った人じゃないから安心を。と言うか我が家で壊れてるのは僕だけだし。と、ごめんなさい、脱線しちゃったね。」

兄が受ける”はずだった”学校の名前は藍越学園。つまりは「

「名前を間違ったのか」

「そういうこと。したらあら不思議、ISが反応しちゃったってわけ」

「……ずいぶんな間抜けだな」

「もう本人には言ったよ。さすがにそんなことがあってたまるかって思ったけど、残念ながらこれが現実だった」

「クク、いや、実に興味深いじゃないか。姉はブリュンヒルデの名を冠する世界最強で、兄は世界で唯一ISを動かせる男子。お前は何かないのか？」

「IS関連ではまったく。せいぜいそこの機械弄りの人よりはISについて詳しいくらい。と言うか僕がどうという人間かは僕よりあなたのほうがよく知ってるよね」

「式含め、お前達が自分の根幹以外に興味を示さないからな。私だけでなく黒桐もお前達には詳しいぞ」

「それに関しては同意するよ。幹也のヤツは隠し事をしても”見つけて”しまうから」

「……違いない。で、そんな我らの子犬くんはどこに？」

「仕事で向かわせてる。ちょっと面倒なヤマが当たってな。人脈がありすぎると言つのも考えものだ」

「それ、化物を殺せるのか？」

一度、人を殺してしまった式はある理由によりもう人は殺せないけれど、内なる衝動と言うものは無くなるわけでもなく、今の彼女は人ではなく”化物”みたいな”異質”を殺すことに熱を注いでいたりする。

「成り行きによつては、だな。正直、何が出て来るかは私も判断しかねる。だが、まあ荒事にはなるだろう」

「できれば最初から説明してもらえると助かるんだけど……」

「ああ、そうだな。まあ、簡単に言えばISについてだ。アレの進出により魔術師<sup>わたしたち</sup>の肩身はより狭くなった。魔法の定義も現存する魔法使い分の魔法以外の魔法はいくつか減ったほどだ。それは春佳もわかるな？」

「一応は。と言っても僕が知る魔術師は師匠である橙子さん、あとはあの怪物僧侶の荒耶宗蓮とそれにくつついてた赤い人しかいないけどね。ああ、妹弟子の鮮花も含めておくね」

「別にそこは問題ではない。そもそもお前は魔術師だが、本質は式と同じ側だ。

お前が式に並ぶ戦闘技術を持っていたのなら魔術などいらなかっただろう？」



「それは……まあ確かに。けど、あくまでイフの話だね。僕は伽藍洞でも虚無でもないもの」

「そうだな。と、脱線してきたな、話を戻すでしょう」

タバコに火をつけて一服。口から煙を吐いて橙子さんは机の上にあった手紙を片手に掴んだ。  
おそらく、あれが今回の仕事に関することなんだろうね。

「だが、肩身が狭くなったと嘆いてる暇もないのでな、コネはあった方がいい、とそちら関連にも人脈を広げたところ、仕事の依頼が来た。それも、かなり面倒な」

……つまり、それは、

「「自業自得じゃないか」」

あ、式とハモった。向こうも思うところがあったのかこちらに視線を向けて、ふん。と鼻で笑った。

「自業自得なものか。ふむ、鮮花にもだがお前達には魔術師の在り

方からしつかりと学ばせるべきだったか」

「工房は要塞、とかじゃなくて？」

「魔術は隠匿する、の本質だ。あまりにもそれをひけらかし過ぎれば協会に嗅ぎ付けられてしまうからな」

「なるほど」

「おい、また脱線してるぞ」

「失礼。それで、だ。IS学園　春佳の兄が入学する学園に講師として招かれた」

「「は？」」

「ああ、私はISは知らん。適性にも興味はない。精神的な成長のフォローをする為に招かれたんだ。忘れたか？　それでも心理力ウンセラーをやることもある」

「ああ、アレは騙ってたわけじゃなかったんだな」

まあな。と不敵に笑う橙子さん。こういう姿を見るとカウンセラー  
ってより悪徳催眠術師な感じがする。

「まあ建前だな」

「建前？」

「ああ。言っただろう、私には人脈があると。つまり、向こうにも  
私の正体を知る者がいるんだ」

「おい、さっき隠匿がどうのって言ってなかったか？」

式がジト目で睨むも、橙子さんはそれを軽く受け流して笑う。

「鮮花の時と同じだ。不本意な露見をしたんだよ」

……橙子さんで、もしかしてすっかり屋さんなのかな。

「何か失礼なことを考えてるな、お前」

「いや、別に」

「……まあいい。本件は警護みたいなものだな」

「へえ、何か嫌なモノでも来るのか？」

「それは知らん。だが、以前IS学園に行った時は探知魔術を見つけた。つまり、相手方に魔術師がいるのは確かだ」

「そいつ、強いのかな」

今度は僕だ。会話から具体的な”敵”の雰囲気を感じれたからか、ちよつとドキツとしてしまった。自分でも意図しない一言だったけど、橙子さんはため息を吐いて僕に視線を向けた。

「知らん、と言っただろう。私が聞いているのはISを使ったテロリストがいること、その中に奇妙な技を使う者や、異形の者がいるという”噂”があるということだけだからな。ああ、そんな楽しそうな顔をするなこの殺戮バカ共」

「いや、だってなあ」

「うん。そんな面白そうな話を聞いて黙ってられるわけがないよ、橙子さん」

「……では、お前達もやるのだな？」

「「当たり前」」

だって、こんな楽しそうで面白そうなことはあの日以降全然なかったんだから仕方ないじゃないか。

あの時　僕が式や幹也と知り合ってからあったことだって、大半が僕の範囲外のことばかりで、拳句橙子さんの手を出すなの一言。もう一年近く経つけど、まだ燻ってはいるんだから。

「ならば春佳、お前はこれを書け」

「？　なにこれ」

「見ればわかる」

ニヤリと笑った橙子さんは一枚の封筒を僕に投げ渡した。とりあえず言われた通りに封筒を開くと、中から数枚の紙が出て来た。なになに

「って、ISメカニック!？」

「ああ。なんでもIS学園は”メカニック枠”なんてものの募集もしていたようだな、これなら男も受けることは可能らしい。もっとも、そんな男はお前以外ないだろうがな」

「つまり、僕も入学しろと」

「そうだ」

「ぷっ……はは、良かったな春佳。大好きなお兄ちゃんと同じ学校に行けるぜ?」

「うるさいよ式」

「なんだ、断るのか?      お前はISにも詳しいし、できなくもないだろう?」

「それはそうだけど……」

「なんだ、ずいぶん歯切れが悪いな」

「こつちにも家庭の事情つてものがあるんですよ」

千冬姉は僕や一夏くんにISについて全然教えてくれなかったし、  
必要ない。の一点張りだった。だからこそ僕は必要以上にISにつ  
いて調べてしまったんだけど、もちろん秘密にしてるわけで、そん  
な僕がIS学園、しかもメカニック枠で入学なんてしたら何を言わ  
れるか……

「春佳」

「はい？」

「受けなかったら減給だ」

「……」

結局のところ、僕に選択肢なる者は存在しなかったようである。

今の時代は女尊男卑、とか言われてるけどさ、僕はそれよりも前か  
ら女性つてのはとても強い生き物だったんじゃないかと思うんだよ  
ね。

まあ、物心ついてすぐにISが進出しちゃったから真相は闇の中だ

けどさ。

「これで何もなかったらホントに救われないよね」

「ふん、三年間勉強できるのだからいいだろうが」

「もう働いて稼ぎたかったんだよ」

一夏くんも言っただけで、僕らは千冬姉に多大な負担を強いてきたんだから。

「安心しろ、給料は出してやる。で、式は私の関係者と言うことで話を通しておく。別に今から学園に揶じ込む事も可能だが」

「やめろやめろ。オレだって一応は学生なんだ。それにISなんて面倒なのはオレにはじゃないよ」

「だろうな。では、それで行こう。  
クク、何かがあるといいな、春佳？」

「まっただよ」



こうして、非常に不本意ながら僕の高校生活が始まることになったのだった。

## 零（後書き）

はい、そんなわけで空の境界サイドのプロローグでした。

橙子さんや式のキャラって掴み所が難しくて上手く書けたか不安です。

ついでにオリジナル設定をいくつか追加してしまいました。これは、僕がISの小説を書こうと思ってた際に考えてたことで、男のIS操縦者は一夏のみでやろう。と言うことでした。だからこんな無理をしてしまったわけですが（汗

でもISに乗れるのは女だけでもISの整備をするのは男でもできることだと思います。女尊男卑のISの世界では厳しいかもしれませんが、不可能ではないかな、と。

よって、春佳はISには乗れません。けど、千冬姉の言い付けを破ってた上に橙子さんを師匠に持つような子なのでISには一夏より詳しいです。そんな感じの子です、春佳は。

ちなみにIS学園、織斑の家、伽藍の堂は全て同じ市内にあります。なので空の境界のかつてのキャラもたまに出るかもしれません。って言うてもだいたい本編で死んじゃってるからかなり少ないけど。

では、そんなこんなで始まったこの作品、これからよろしく願います！

## 巻（前書き）

あ、書き忘れてたのですが、この小説は視点が変わることがあります。

春佳の視点、一夏の視点、ヒロイン達の視点、それぞれから見たこの物語をお楽しみください。

では、はじめはじまり。

## 壺

「……で、だ。なんでお前がここにいるんだよ、春佳」

「だから言ったじゃないか。僕も受験して入学したの、IS学園に」

「どうやってだよ。ISは基本的に女しか動かせないぞ」

最初、何か間違えたのかと思った。

ふとした拍子にISなんてものを動かしてしまった俺は、”世界で唯一ISを動かせる男”なんて肩書きの元このIS学園に入学した。今日はその入学式で、式を終えて教室へ戻ってみれば空席であった俺の後ろの席には何故か俺の双子の弟である春佳が座っていた。

「もちろん、僕はISなんて動かせないよ」

「なら、なんでここに？」

「メカニック枠って言ってね。今年から募集が始まった枠があるんだけど、僕はそれで受験したわけ。運良く受験日も通常より遅いから間に合ったんだ」

「間に合ったって……」

「うん。一夏くんが入学したって聞いたからせつなくなんで、思  
つて」

「……」

こいつは……と思ったけど、同時に感謝もしてしまった。

女の園に男一人よりは男二人、それも双子の弟がいた方が精神的に  
はかなり楽だからな。うん、ポジティブに考えよう。

……女子ばかりのクラスの真ん中最前列なんて地獄にいるんだ、春  
佳一人がいるだけかなり違うだろう。

「まあ、いいけどさ。あ、ところで春佳、お前入学式はいなかった  
けど、なんで？」

「準備が忙しくて遅刻しました」

「……アホ」

「わ、酷い」

酷くない。昔っからこいつはいろいろと鈍くてダメだ。

千冬姉や春佳から、それはお前だ。みたいな反応をよくもらうけどそんなことはないと思う。俺は春佳よりは準備は早いぞ。

「ふふ、けど弾くん辺りが知ったら発狂しそうだよね。あんなに――夏くんにいろいろ言ってたから」

「あー、かもな。いや、けど……実際どうよ、この環境」

「ん、僕は別に。まあ、肩身は狭いかなーって思うけど、それくらいかな」

「楽観的だなあ、春佳は。俺はこのパンダを見るような視線がキツいよ」

肩を竦めてため息を吐いたら、なんと春佳は笑いやがった。

「残念だけど、僕にそんな視線は来ないんですよ、お兄ちゃん」

「え、なんで？」

おかしいだろ。って春佳に言おうとして、その理由に気づいちまっ

た。  
つまり、見た目だ見た目。

「そういうことが、このチビ助」

「チビ言うな」

俺と春佳は双子だけど、それはもうびっくりするくらい見た目が似てない。

髪の毛の色とかは一緒だけど、身長から始まってもうまったくの別人だ。性別からして違うつて言ってもおかしくない。

まず、春佳は小さい。高校一年の平均身長より低く、俺の肩より少し高い程度。確か鈴よりちょっと高いくらいの身長だったはずだ。

次に、その見た目。春佳の見た目はいわゆる中性的つてやつで、男にも女にも見えるつてやつだ。しかもどちらかと言うと女よりで、格好によつては女で通る上に整つてるときた。

本人もそれを理解してるのか髪の毛を長くしてて、正直春佳のバイト先の式さんと並んでる時の方が双子っぽく見える。髪の毛の長さとかが同じくらいなんだ、あの二人は。そんなわけで、おそらく春佳は俺ほど浮いていない。おそらくじゃない、間違いなく。

「あと、パンダを見るような視線つてのはちょっと違うと思うよ」

「？      じゃあなんだつてんだ？」

「それは秘密。自分で気づかないと成長しないものだよ、少年」

「お前にだけは言われたくないぞ、弟よ」

ふふ。なんてこれまた女っぽい笑い方をする春佳。いや、この顔で「がっはっはー」なんて笑われるよりはいいけど、狙い過ぎてやしないだろうか。

「って、そんなことより……春佳」

「うん？」

「あの窓際にいるの、箒だよな」

窓際の席から時折こちらに低温の視線を送って来る女子。俺はその女子には見覚えがあった。

幼なじみの篠ノ之箒。小学生の時に転校しちゃったけど、昔と髪型が変わってないからすぐに気づけた。気づけたけど、話しかけに行っているものか非常に疑問だ。なんせ機嫌が悪い。あの低温の視線がそれを物語っている。

「……なんだよ、その顔は」



「いや、超絶朴念人の一夏くんでもそういつのには気づくんだな  
て」

「お前、たまに凄い毒を吐くよな。で、どう思う？」

「うん、言われてみれば箒ちゃんっぽいかな」

「だろ？」

「うん。ま、自己紹介なりでわかるんじゃないかな。ほら、先生入  
って来たよ」

春佳に言われて前を見ると先生らしき人がドアから入って来た。っ  
て……

「なんだあの人、ホントに先生か？」

「制服じゃないし、そうじゃないかな。

……僕も自信を持ってないけど」

入って来た人は、制服を着てさえいれば生徒でもおかしくなさそうな感じの人だ。

あれだ、童顔ってやつ。しかも身長も低いから余計に。

「はい、それではショートホームルームを始めますね?」

おっとりした口調でそう言う先生(仮)。いや、ショートホームルームって言ったんだから先生確定か。

何はともあれ、こうして、俺の学校生活は開始した。

「……」

まずい、非常にまずい。

何がまずいかって? それは、自己紹介の順番だ。

てつきり左からとか右からってなると思ってたんだ。だから、真ん中の俺はゆっくり考えて自己紹介すればいいって。けど、現実なのは非情で残酷だった。そう、名前の順番で始まりやがった!

「……くん、織斑くんっ!」

「は、はいっ!?!」

反射的に返事して立ち上がる。……う、またこの視線か……

「あつ、あの、お、大声出しちゃってごめんなさい。

お、怒ってる？ 怒ってるかな？ ごめんね、ごめんね！

でもね、あのね、自己紹介、”あ”から始まって今”お”の織斑くんなんだよね。

だからね、ご、ごめんね？ 自己紹介してくれるかな？ ダ、ダメかな？」

早口でそうまくし立てられ、必死に頭を下げる……えっと、そう、副担任の山田真耶先生。上から読んでも下から読んでも”ヤマダマヤ”だからすんなり覚えられた。  
じゃなくて！ サイズの合ってなさげな眼鏡がずり落ちそうなくらい頭を下げる山田先生をどうにかしないと。

「あの、先生。そんなに謝らなくても自己紹介をしますから……」

「ほ、本当ですか！？ 絶対ですよ？ 約束ですからね！？」

…… 本当にこの人は年上と言うか教師なのだろうか。  
同年代の人が無理に先生をしてるって方が頷けるぞ。

「よし」

と、そんなことを思ってる時間も視線がなくなるわけではないので、とつとと終わらせる為に振り返る。正直何も良くないし、言うことも決まってるから忘れることにした。

「う……」

これは、すげえ。他人事だったらニヤニヤしながらそいつを見てられそうなくらいの状況だ。

全員が、俺を見てる。しかも女子。別に女子とは中学の頃から話とかしたし、特別苦手なわけじゃない。そうじゃなかったとしても、うん、これはキツイ。

おいこら春佳、そんなに楽しそうに笑ってるな。次はお前の番なんだから！

「お、織斑一夏、です。よろしく、お願いします」

微妙に噛んだけど、片言にならなかっただけマシだ。うん、これで終わり。ってなんだこの「それだけ？」みたいな空気は。それだけだよ、いいじゃないか簡潔で。

別に人に言うほどの趣味があるわけでもないし、なんか特別なことがあるわけでもないんだから。

……まずい。このままでは暗いやつに認定されてしまう。よし。

「以上です」

ガタガタつとコケる音が聞こえたけど、知らない。俺は終えたんだ、次は春佳の番なんだ。

「あ、あの……」

後ろから声が聞こえる。なんだ、なんでそんな涙声に……って春佳？  
なんでそんなびっくりした顔を

「！？ いつ……」

突如、凄まじい衝撃と痛みが俺の脳天を襲った。いや、待て、これは……やばい。  
誰だ、こんなことをするのは！

「……」

「げえ、関羽」

振り返った俺に再び同じ衝撃が襲いかかってきた。

なるほど、名簿で叩いてるのか、じゃなくて！

「ち、千冬姉！？」

「馬鹿者、ここでは織斑先生と呼べ。それとなんだ、お前は挨拶も口々にできないのか」

……職業不詳、月に一、二回しか帰って来ないうちの姉が立っていた。名簿を持っていかに教師な感じで。

「織斑先生、職員会議はもう終わったのですか？」

「ああ。すまないな山田君、ホームルームを任せてしまつて」

千冬姉はそう言うと言壇に立つて俺達を見下ろした。覇気でも纏ってるんじゃないか、つてくらいのオーラで。

「諸君、私が織斑千冬だ。君たち新人を一年で使い物になる操縦者、メカニックにするのが私の仕事だ。私の言うことはよく聞き、理解しろ。できない者にはできるまで指導してやる。」

私の仕事は弱冠十五歳を十六歳までに鍛え抜くことだ。逆らってもいいが、私の言うことは聞け、いいな」

言葉がまるで物質化でもしたんじゃないかって思うくらいに強い声が俺達に響き渡って行く。うん、この暴力宣言は間違いなく俺達の姉、千冬姉だ。

「キヤーッ！　　千冬様よ！　　本物の千冬様よ！」

「わ、私ずっとファンでした！」

「お姉さまって呼んでもいいですか！？」

「私、お姉さまの為なら死ねます！」

俺が生きてきた中で一番の騒音が鼓膜を揺らした。  
なんだ、これは……

「春佳、知ってたか？」

「知らなかったよ。まさか、こんなとこにいたなんて、ね」

うん、いつも笑ってばっかの春佳も珍しく本気で驚いてる。  
だよな、仕事の事を聞いたってまるで教えてくれなかったし。

「……毎年、よくもこれだけ馬鹿者が集まるものだ。感心させられる。」

それとも何か、私のクラスにだけ馬鹿者を集中させてるのか？」

違うぞ千冬姉。その理論だとおそらくこの学園の生徒の大半が馬鹿者になるぞ。

「キヤー！　　千冬様、もっと罵って！」

「付け上がらないように躑をしてえっ！」

「……馬鹿者つてより、変態かな」

春佳が、苦笑しながら呟いた。

うん、俺もそう思ったよ、春佳。

「そついえば、織斑くん、さっき千冬姉つて……」

「名字も一緒だし、まさか姉弟！？」



「いいなあ、変わって欲しいなあ」

うわ、なんかこっちにまで飛び火してきやがった。

千冬姉も、お前のせいだみたいだな目をしないでくれよ。言わなかったそっちにも問題有りだからな！

怖いからそんなこと言えないけど。

「……まあいい、続けるぞ。お前はもう少しまともな挨拶をするように」

「はい」

千冬姉に返事をして春佳が席を立った。俺も振り向いて春佳に視線を向ける。

「織斑春佳と言います。似てないけどその一夏くんとは双子で、僕が弟です。」

男ですが、僕はISメカニック枠で入学しました。なので、当たり前だけどISは動かせません。でも、まあ存在してるかなーくらいには相手をしてもらえると嬉しいです。

あ、趣味……と言うか特技は人形やぬいぐるみ作り。言ってくれば作りますので、そちらもどうぞ。では、一年間よろしく願います」

……あいつ、考えてたな、絶対。  
こら、こつち見て笑うんじゃない。

「え、男の子？」

「と言うか、織斑くんと双子ってことは千冬様の弟？」

「いいなあ、変わって欲しいなあ」

その人、さつきもそれ言ってた。どっだけ千冬姉の妹になりたいんだよ。

「及第点だな。では次」

さすが千冬姉。あれで及第点なのか……  
そんなこと考える俺を余所に、自己紹介はどんどん進んで行くのだ  
った。

「はあ、疲れた」

ホームルームが終わって千冬姉と山田先生が教室から出て、俺はため息を吐いた。

千冬姉の登場が更にダメージだったな、うん。ニヤニヤ笑ってる春佳が恨めしい。

「お疲れ様、お兄ちゃん」

「おう。にしてもお前はズルいよな。千冬姉が話してる間に考えてたろ」

「いや、その前から考えてはいたよ。ま、僕は一夏くんの次だったから一夏くんの弟です。って言えるアドバンテージが最初からあったからね」

「なるほど」

「うん。けど一夏くん、さすがにあの自己紹介はダメだよ？  
いいんだよ、趣味とか言っておけば」

「いや、けど俺の趣味なんて別に人に言うほどのモノでもないぞ？」

「いいんだよ。自己紹介なんて自分のことを言うんだから。危ない

性癖とかはさすがに隠さないとだけど一夏くんはそついつのじゃないんだから言わないと」

「そつか。ん、次から気をつけるよ」

「よろしい」

春佳は俺の返事に満足したのか周りをキョロキョロと見回していた。……これも疲れてる理由の一つなんだけど周りが見てるだけなんだ。話しかけてくれた方が楽なんだが……

「あ、箒ちゃん」

「え？」

「……少し、いいか？」

春佳の声に振り返ると、そこにはやっぱり不機嫌そうな箒の姿。えっと、つまり顔を貸せてことか。

「別にいいけど」

そう言って立ち上がる。春佳はと言えば、なんか手を振っていた。

「いてらー」

「「いや、お前もだから」」

おう、思わず箒とハモってしまった。幼なじみなんだからお前も一緒に決まってるだろうに。  
こいつは所々抜けてるからなあ。

「いやあ、けど久しぶりだな箒」

「う、うむ」

「剣道、全国優勝したんだってな。おめでとう」

「な、何故知っている!？」

簾に連れられて屋上に来た俺達はフェンス付近にいた。春佳は喉が  
渴いたらしく自動販売機に行ってる。  
にしても、なんであいつは「ごゆっくり」なんて言ってたんだ？

「いや、新聞で見たからな」

「なんで新聞なんて読むんだ！」

「簾ちゃん、それはちよつと千冬姉並みに理不尽だよ」

「む……」

「おかえり春佳。やけに遅かったな」

「うん、選ぶのに時間がかかってね。でもま、これなら早く決めて  
も良かったかな」

「う……」

肩を疎める春佳と何故か狼狽する簾。なんだなんだ、何かあったの  
か？

「ふふ、でもさ一夏くん、さっきよく箒ちゃんってわかったよね。僕気づかなかったよ?」

「ああ、髪型が変わってなかったからな。忘れるわけないだろ」

「そ、そうか。覚えてくれていたのか」

「当たり前だろ」

「……さすが、と言っべきかな」

「? 何がだよ」

「なんでもないよー。うん、でも久しぶりだね、箒ちゃん」

「ああ、春佳も久しぶりだな。その、最初気づかなかったぞ」

「あはは、僕の見た目はこんなだしね。いらん誤解させちゃったなら謝るよ」

「い、いや、いい。仮にも幼なじみに気づかなかったのだ、私が悪かった」

おお、あの頑固者の箒が大人になってる。どこことなく機嫌もいいけど、何か良いことでもあったのか？

「さて、積もる話もたくさんしたいんだけどー夏くん、僕らは千冬姉に呼ばれてるからそろそろ行かないとだよ？」

「あ、それもそうだな。すまん箒、また今度な」

「ああ、また」

「うん、じゃあね箒ちゃん。いろいろ教えてあげるからね？」

「う、うむ。……助かる」

？ 何を教えるんだ？

「ふふ、今のー夏くんには絶対にわからない話かな。じゃ、行くっか」



「ちよつ、おい、それってなんだよ春佳」

意味ありげに笑って屋上を後にする春佳。いや、そんな中途半端に言うのはやめてくれって、何がなんだか全然わからないぞ。

「おい、春佳ってば、おい。あ、箒、それじゃな」

「ああ」

やっぱりご機嫌な箒に別れを言って、俺は春佳の後を追いかけた。なんだろう、いつもみたいにからかってるだけなのか？

「なあ、どういう意味なんだ？」

「ひみつ」

それから俺は、千冬姉の所に行くまで延々と春佳とこのやり取りを行っていた。

## 壱（後書き）

今回はISサイドのプロローグでした。まあだいたい原作沿いの流れです、はい。

ここから原作沿いかつオリジナルの展開が徐々に広がって行きます。

ただし、あくまで空の境界のみのクロスオーバーなのでType - moon世界とは一切の繋がりがありませんのでそこはあしからず。

では、また次回で！

## 一（前書き）

算を算らしく、一夏を一夏らしく書くのって凄く難しいです。

そんなこんなで第一章、はじまりはじまり

「……ふう、こんなものかな」

自分に宛がわれた部屋を見回して一人で頷く。

言い分は女尊男卑的に残念なモノだったけど、一人で二人部屋を使えるのはなかなか……と言うか、かえって優遇されてるんじゃないかと思う。

僕は、荷物をしまってから部屋にいろいろと”施して”その仕上げを終えたところだった。なるほど、工房を持つ利点ってこういうことだったんだ、と師匠の言葉を思い返す。

確かに、これならよっぽど腕利きの魔術師やこの世にいちやいけなような化物以外なら攻め込まれても惨殺死体にして追い返すくらいはできそうだ。とは言え、人も招くから僕がいる時限定だけど。

「実家通いでも良かったけど、これはこれで助かるね」

そう、僕と一夏くんは最初はしばらく実家から通うはずだったんだけど、それがこうして最初から寮暮らしとなった。まあ、これにはいくつかの理由があるんだ。

「えっと……ちふ　織斑先生、話ってなんですか？」

「ああ、お前達の部屋だ」

「え？」

千冬姉に呼ばれた僕らが職員室へ行くと、山田先生と一緒に待っていた千冬姉から言われたことは、寮のことだった。

「え、でもしばらく実家通いつて……」

「政府からのお達しでな、世界唯一の男のIS操縦者だ、なるべく手元に置きたいのだろう」

「えっと、じゃあ、僕はどうして？」

「お前を含め、メカニックは三人しか入学していない。こちらで政府からのお達しでな、だいたい織斑と同じ理由だ。メカニックとて貴重な人材だからな。では、それぞれ部屋番号を渡す。織斑弟、お前には部屋の鍵もだ」

そう言って千冬姉は僕と一夏くんそれぞれ紙と、僕には鍵も渡してきた。

なるほど、数少ないメカニックと唯一のIS操縦者の男の子だから早いうちから確保しておきたいのか。まあ、そうじゃないといろんないさかいに巻き込まれちゃうしね。

「え、部屋は俺と春佳が一緒じゃないんですか？」

一人思案する僕を、驚き一色に染まった一夏くんの声が現実へと戻した。

そういえば、確かに……

「それが……IS操縦者とただの男は別々にするべきだって言われちゃって……ごめんなさい、織斑くん」

「そんな……」

「別にいいですよ、そういう世の中なんですから」

なんてことはない、ってつもりで言ったんだけど、逆に空気が重くなってしまった。

あれ、なして？

「と、とにかく、僕はいいから。ね？」

このままだとまずい気がするので、一夏くんに笑いかけろ。さあ、誰かなんとかしてください！

「春佳がそう言うなら……」

「なら話は終わりだ。解散  
……すまないな、二人とも」

千冬姉が最後にそう言って締める。こうやって謝ってくれる辺り、やっぱり僕らのお姉ちゃんだよね、千冬姉って。

「織斑先生、言われていたのですが寮に届いたみたいです」

「わかりました、ありがとうございます、蒼崎先生。私が手配しておいた二人の荷物は寮に届いたそうだ。行って荷物を整理しておくように」

「はい」

千冬姉……のちっと後ろにいる眼鏡をかけた女性を軽く睨んでおく。  
ホントに先生としてここにいいのか、あの人は。

「」

「……」

チラリと眼鏡をずらした先にあるのは、いつもの魔術師然とした鋭い瞳。

早く行け。と口パクで言われ、言われなくても。と内心で返して僕は一夏ちゃんと職員室を後にしていた。

「さて、装備確認、と」

千冬姉が手配したカバンとは違う、僕が学園に持ち込んだカバンからいろいろと取り出す。

急いでて適当に詰め込んだからか、あまりちゃんと揃ってはいなかった。

「火のルーンの紙と、聖書が二冊と橙子さん謹製のワンちゃん」とあっておき”だけか……ま、単体でやり合う分には問題はないかな」



そもそも、僕は身体だけならただの人間なんだし、特に心配もないか。

「……で、さつきから隣は何をしてるのかな」

使わない装備をカバンにしまって、聖書一冊と火のルーンの紙をポケットにしまった僕は部屋を開けた。

ちなみに、僕の持つ聖書はポケットにしまえるように小さくしてあるのだ。持ち運びに面倒だと良くないからね。

「……一夏くん？」

女子が一夏くんをたくさん囲んでいて、一夏くんがドアに泣きついていた。

あいや、ホントに泣いてはいないけど。

「あ、織斑弟くんは織斑くんの隣の部屋なんだ」

「しかも一人部屋だよ？」

「へ？」

「これは……織斑くんより狙い目かもしれないわね」

「あ、抜け駆けは許さないんだからね！」

「え、いや……あの……何、これ」

なんだろう、嫌な予感が凄くする。給料日前に事務所に見たことのない骨董品が置かれてる時くらい嫌な予感が。

「ねえねえおりむー二号、お菓子食べる？  
これおいしーよ」

「ほえ？」

ダボダボの着ぐるみらしきものを着た人が僕に棒状のチョコのお菓子を差し出してくる。

甘いものは好きだからとても嬉しいんだけど、えっと……名前が出て来ない。同じクラスにいたよね、確か。

「あ、私の名前は布仏本音（のほとけ　ほんね）だよー。よろしくー」

「え？ あ、はあ……」

今まで会ったことのないタイプの人だ。

人畜無害つてのはこういう人のことを言うのかもしれない。

または癒し系とも。

「箒さん、頼むから開けてもらえないか？

このままだと非常にまずい！」

「……」

お、一夏くんの方も動いたみたいだね。と言うか、箒ちゃんと相部屋だったのか。

「織斑くんて篠ノ之さんと相部屋だったんだ」

「場所は覚えたし、問題なし」

「あ、じゃあね弟くん。今度遊びに来てもいい？」

「あ、ずるーい。私もいい？」

「べ、別にいいけど……」

雪崩か激流か、たくさんいた女子の皆さんがあつという間に流れて消えて行った。

式とか鮮花みたいなのはつか相手にしてたからか、一般的な感性の女の子をよく知らなかった。

……恐るべし、現代女子。

「はい、もしもし」

『ああ、私だ。どうだ、私の教師姿はなかなか様になっていたろうっ?』

「……切っていい?」

一夏くん達と食べるタイミングを逃してしまい仕方なく夕飯を一人で食べた僕は、部屋に入るなり掛かってきた電話の相手に若干声を低くして呟いた。

『ふん、待て待て。それと、そんな声でも私はなんとも思わんぞ。』

いつそ笑い飛ばしてやろうか?』

「あー、わかりましたよ。で、何さ」

舌戦とかの類いで、僕は橙子さんに勝った記憶がない。と言っか、勝てる気がしないのでここらでやめておく。

橙子さんは本気で人の心を折りに行くタイプの人だから、さすがの僕も堪える。

『ああ、忠告だ。気をつけろ、とな』

「? ずいぶん漠然としてるね。何に気をつければいいの? 自惚れじゃないなら、そこそこはやれる自信はあるけど」

『質問に対する答えその一。何に、とはまだ私もわかっていない。警戒はしておけ、と言っことだ。それにIS学園の連中は他の人間よりも優れていることが多い。迂闊なことはするなよ?』

「ん、了解。気をつける」

『ああ。それと質問に対する答えその二。気をつけるのはお前ではなく、お前の周囲だ。確かにお前はそうそう死なないだろうが、周りはお前ほど頑丈でもない。』

人間は焼かれたら焼け死ぬか一酸化炭素中毒で死ぬだろう。そういうことだ』

「いや、それはさすがに僕も死ぬけど」

『知っている。私とて死ぬさ。だが、私達は焼かれる可能性は他より小さい。魔術師だからな』

「……他の生徒を巻き込まないようにってこと？」

「頭の回転が早い弟子で助かる。まあ、巻き込んでも構わないがな、お前はそうではないだろうから忠告しておく」

「なら最初からそう言ってよね。まったくもう……  
そちらも了解しました。やられる前にやるとするよ」

『それでいい。では、またな』

ブツ。と通話が切られ、電子音が右耳に響いた。  
ホント、橙子さんは人が良いのか悪いのかわからない。まあ、悪かったらこうして僕は生きてはいないだろうけど、少なくとも性格は絶対に悪い。あれをいい人と言う幹也はやっぱりどこか狂ってるんだ。

「まあいいや、寝よう」

何かするとしても、もう今日は終わったんだ。だから、明日に備えて寝よう。

「じゃ、おやすみなさい」

机の上に置いた橙子さん謹製の人形に言って、僕は目を閉じたのだ。  
った。

「おはよー、二人とも」

「おう、おはよう春佳」

「……おはよう」

朝起きて、お腹の空くままに食堂に行ったら一夏くんと箒ちゃんを発見したので朝食を手に向かい側に座って挨拶したところ二通り

の反応が返ってきた。うん、篝ちゃんが凄く怖い。えらく不機嫌だ。

「一夏くん、何をしたのさ」

「俺は何もしてな……くはないかなあ」

小声で尋ねたところ、どうやら本人にも心当たりがある様子。  
なかったら篝ちゃんにも聞かなきゃかと思ったけど、一夏くんがわ  
かってるなら大丈夫かな。

「謝ったの？」

「謝ったよ。けど……」

あー、そういえば篝ちゃんは短気な上に一回怒るとしばらくそのま  
まだったつけ。

「はあ、人間って複雑。いただきます」

この二人の場合、一夏くんが原因でも長引くのは篝ちゃんに理由が  
あったりするからなあ。  
むう、結局これは篝ちゃんとも話をしないとダメかな。



「あ、おりむー兄弟だー」

「うん？」

トタトタとゆっくり歩いてやってくるのは昨日の着ぐるみの人、そうそう、布仏さんだ。  
友達らしき女子を二人連れて僕の隣に座った。……やっぱり癒し系だね。

「えっと、座ってもいい？」

「おう」

お友達二人も座って、ちよっと多くなったみんなで朝ごはん再開。

「わ、織斑くんそんなに食べるの？」

「ああ、朝しつかり食べないと力が出ないからな。それと昼と夜は少なめにした方が身体にもいいんだよ」

「ふーん。でも朝からそんなには食べれないかな」

「だよーねー。けど、弟くんは少ないよね」

「ん？ ーん！」

口の中に食べ物が入ってて喋れないので頷いて肯定しておく。  
隣の布仏さんに「わー、リスみたいー」とか言われたけど、そんな溜め込む食べ方はしてないです。たぶん。

「春佳は少食だからなあ。だからそんな小さいんだよ」

「んー、ん」

「……食ってから言えって」

「えっとね、”小さい言わないの、一夏くん”だってー」

「なんで本音が通訳してんのよ。って弟くん頷いてるし」

ナイス布仏さん！      よく通訳できました！

……いや、ホントになんで？

「でもホントに少ないよね」

「……ぷは。うん、すぐにお腹一杯になっちゃうから、けど燃費は悪いからすぐにお腹が減るっていうなんとも困った仕様なんだよね」

式にも、面倒なやつ。なんて言われたっけな、そういえば。たくさん食べれないんだから仕方ないじゃないか。

「俺としては春佳達みたいになんてよく持ってたって思うけどな」

「あはは……女の子にはいろいろあるんだよ、織斑くん」

「そうなのか？」

「いや、僕に聞かれても」

僕は単純にお腹一杯になるだけなんで、いろいろも何もないからわからないよ。

「……ごちそうさま」

「あ、ほう　篠ノ之さん」

叩きつけるかのように箸をお盆に置いて立ち上がる篤ちゃん。

ほら、布仏さん以外の二人と一夏くんがビクビクしてるよ……と言  
うか、一夏くんが篠ノ之さんって呼ばされてるってのは、かなり怒  
ってるのかもしれない。

「先に行くぞ」

「お、おう」

……はあ、仕方ない。お兄ちゃんと幼なじみの為に一肌脱ぐとしま  
すか。

「一夏くん、僕も先に行くね」

「え、春佳もか？」

「うん。ちょっと野暮用」

鈍感な一夏くんにはこれだけ言っておけば問題ないので、いちそうさま。って言って僕も立ち上がる。  
さて、箒ちゃんは、と。

「箒ちゃん」

「……春佳か、どうした？」

「うん、ちょっとお節介しに」

食堂を出てすぐに箒ちゃんは見つかった。さっきまでの不機嫌モードが嘘のように萎れてる。うわぁ、なんか小学生時代を思い出すなあ。

「一夏ちゃんとケンカでもした？」

「喧嘩をしたわけではない。だが……その……」

「えっと、僕には言いづらい感じ？」

「ああ。春佳も男であることには変わりないからな。できれば聞かないでほしい」

「……ちよつと待て、あの兄貴はそんなにまずいことをしたの？」

「い、いや、そうではない！ 事故だと言つのはわかっている。ただ……その、鈍すぎるのだ、あいつは」

「あー、うん。それは昔から治らないからね……  
たぶん、死ななきゃ治らないかな」

「春佳、昔いた時にも思ったがお前は時々かなりの毒を吐くことがあるな」

「あの、篤ちゃんまで一夏くんみたいなこと言わないでよ」

「む、だが事実だ」

「自覚してないから僕にはどうにもならないよ」

それに、式や橙子さんに比べれば僕はマシだと思うしね。  
あの二人はよろしくない。遠慮つてものを覚えるべき。

「で、まだ怒りが収まらないのかな？」

「いや、そういうわけではない。一夏にもちゃんと謝られた」

「けど、素直になれないと。ははあ、相変わらずだねー篝ちゃんも」

「う、うるさい！ ……悪かったな、素直でなくて」

「あはは。うん、それが全部悪いわけじゃないけど、相手があのー  
夏くんだからね。

あまりつつけんどんにし過ぎると勝手に篝ちゃんに怒られてると  
思っちゃうし、挙句嫌われてるかも、とか言い出しちゃうから誤解  
くらいは解いておいた方がいいと思うよ」

「……うむ、善処する」

「うん。ごめんね、鈍すぎる兄貴で」

鈍いくせに人一倍優しくて正義感が強いとか、一体どこの主人公キ

ヤラだよ。とは式の弁。

あー、幹也も近いモノはあるもんね。箒ちゃんと式は案外仲良くなるかも。

「いや、春佳は何も悪くはない。悪いのは一夏だ。それに

それでも、す、好きなのは私だ。だから、これは自分の責任だ。迷惑をかけたな、ありがとう、春佳」

「ふふ、どういたしまして」

恋する女の子って凄いなって、つくづく思った。顔を真っ赤にして手を合わせて俯き加減でこんなことを言う箒ちゃんなんてこれから先見えるかわからないよ、これ。

と言うか、一夏くんはここまで好意を寄せられてるのに気づかないって、もはや才能だよ、才能。起源が「鈍感」なんじゃないのかな、あの人。

「ま、頑張れ、女の子」

なんにせよ、僕は一夏くんに好意を持つ人にはよっぽどの悪人でもない限り平等だからね。邪魔するな。って言わない限りは聞かれたことはできる範囲で答えるし、協力くらいはする。

ましてや箒ちゃんも幼なじみになる人だ。どんな結末になっても、本人の納得する形にはなって欲しいと思う。



「それじゃ、教室へ行きますか」

「そうだな。今日から授業だから気合いを入れていかないと」

「うん。後で一夏くんとちゃんと話すんだよ」

「わ、わかっている。私だってこのまま疎遠になれるのは困る」

「ん、ならオーケーです」

恥ずかしそうにそう言って歩き出す篝ちゃんに苦笑して、僕もその後を歩き出したのだった。

## 二（前書き）

これを書き上げて、とりあえず友人に読んでもらった際の一言。

友人「なんで箒がこんなちゃんと一夏と話してるんだよ、原作だともっとツンデレ拗らせて空気じゃなか」

私「オメーは俺を怒らせた」

春佳「て緩衝材があるからうちの箒ちゃんはわりとヒロインしてると思います。」

- Side 一夏 -

「あれ？」

春佳達に遅れて一人教室に向かう途中、見たことのある格好が目に入った。和服の上に赤いジャケットを羽織るなんて格好、あの人くらいしかない。

「式さん？」

「あ？」

やっぱりそうだ。春佳と同じような髪の毛に、不機嫌そうな、春佳とは逆の中性的な顔。  
あいつのバイト先の先輩である両儀式さんだ。

「お久しぶりです。えっと……俺のこと、わかりますか？」

「ああ、わかってるぜ。春佳の兄貴の一夏だったよな。新聞で見たけど、本当にいるのを見るとこつ、出来の悪い喜劇を見ているみたいだ」

相変わらず難しい言葉回しをする人だ。えっと、褒められてるのか？

「ところで、なんで式さんがここに？」

「仕事だよ、仕事。ここの人間にちょっと呼ばれてな。ったく、こういうパシリ仕事はオレの趣味じゃないってのに、あの女は人使いの荒い……」

「あ、あはは……」

男みtainな口調で憎々しげに言って髪の毛をかきあげる式さん。どういうわけか、この人は男口調で話す。春佳の話では自分の足りないものを補ってるだけで別に男になりたいわけではないらしい。

「そっいや、春佳は一緒じゃないのか？」

「はい。野暮用があるとかで先に教室に行っちゃったんで」

「へえ、野暮用ねえ……あいつ、抜け駆けとかしてたら許さないかな」

ポケットに手をつ突っ込んだ状態でニヤリと笑う式さん。抜け駆け？  
なんのことだろう。

「一夏」

「え？ 簞？」

なんで？ 先に行かなかったか？ しかもめちゃくちや怒ってたよ  
な？

「あ、ああ。……そちらの女性は誰だ？」

「あ、えっと、春佳のバイト先の先輩の両儀式さん」

「どうも。はじめまして」

「は、はじめまして……」

「で、式さん。こっちは幼なじみの篠ノ之簞です」

「ん。と、あまり待たせるとうるさいからオレはもう行くぜ。  
ああそうだ、春佳に伝言頼めるか？ どうせあいつから行くだろ  
うけど、幹也のヤツに頼まれちゃったからな」

「あ、はい。わかりました」

「助かるよ。」

”木を隠すなら森の中” って伝えておいてくれ」

？ 木を隠すなら森の中って、なんだ？

まあいいか、これを春佳に伝えればいいんだよな。

「わかりました」

「ん。じゃあな、色男」

あの人、毎度言うけど俺は色男じゃないと思うんだけど……

「女性に見えたが、男性か？」

「いや、女の人だよ。春佳の話では彼氏もいるらしい」

「そ、そうか……」

ホッとしたように頷く篤。何をそんなに警戒してるんだか……  
確かに式さんは怖い感じがするからその気持ちもわからなくもないけど。

「そつえば、どうしたんだ？」

「え？ あ、ああ。その、な……」

今朝は鬼のように不機嫌だった篤だけど、それが嘘のように大人しい。何と言つか、らしくない。

「すまなかった。部屋のことは故意ではなかったのだし、その……お前が謝ってくれたにも関わらず私も引き摺り過ぎた」

こっちを向いて、顔を少し赤くさせた篤が軽く頭を下げる。  
い、いや、ちょっと待ってくれよ。

「いやいや、だからそれは俺が悪かったんだって。その、さすがにあれは不躰な発言だったし」

年頃の女の子に下着のことを言うなんて、我ながら殺してくれって言ってるようなもんだ。千冬姉辺りが聞いてたら間違はなく三途の川とかをスッ飛ばして地獄に送られる。

「いや、だから私はお前が謝罪したにも関わらず無視してしまった。それを謝りたいんだ」

「だから、それこそ仕方ないだろ。俺の言葉にも問題があったって」

いきなり謝られても、困る。完全に俺に問題があったし、嫌われても仕方ないと思ってたから。そんなわけで、お互い謝り合って両者一步も譲らず。

「……ふふ、あははは」

「ほ、箒？」

「はははは、いや、すまない。昔もよくこんなやり取りをしたな、と思ってな。懐かしくて笑ってしまった。

一夏、ここはお相子と言うことにしておかないか？　こんなことで意地を張り合うのもおかしいし、お、お前と険悪になるのも非常に困る」



「……それもそうだな、じゃあ、お相子ってことで」

せつかく篤が許してくれるって言ってるんだ。それに甘えさせてもらおう。俺だって幼なじみと険悪なままは嫌だしな。

「んじゃ、幼なじみとして、改めてよろしくな、篤」

「……はあ、そう言うと思っていたぞ、お前はそういう男だからな。まあいい、こちらこそよろしく頼む」

「おう」

ため息を吐いて呆れたように言って、それから笑う篤。  
うーん、なんかみんな俺のことを変な風に見てる気がするんだが、気のせいだよな？

「あ、おかえりー」

「おう。あ、そうだ春佳、式さんに会ったぞ」

「式に？」

「ああ。春佳のバイト先の先輩と聞いたが……」

「うん、そだよ。でも、先輩って言うか友達みたいなもんかな。向こうのが年上だけど敬語とか使う気にならないし」

「そっぴやそうだな。で、そんな式さんから伝言。  
”木を隠すなら森の中”だったさ」

「うん？　これまた意味のわからないことを……  
まったく、相変わらず言葉遊びが好きなヤツなんだから。ありがと一夏くん、ちゃんと受け取りました」

ふむふむ。なんて顎に手を添えて探偵みたいに思考に入る春佳。  
こう言っでは悪いが、似合ってない。もの凄く似合ってない。

「……ま、後で謎解きすればいいか。それよりも一夏くん、今日から勉強だよ、大丈夫？」

「……た、たぶん。春佳、お前こそどうなんだよ」

実のところ、あの電話帳もどきは文字通り電話帳と間違えて捨ててしまった。なので予習は全然できてないし、まるで大丈夫じゃないと言っのが本音だ。

「さすがに女子の人に比べれば知識量は足りないし、そもそも経験すらできないんだからダメダメなのは間違いないよ。けど、まあ基礎知識くらいは頭に入ってるかな」

「……くっ、春佳、お前裏切ったな！」

「裏切るも何もないでしょ、一夏くん。と言うか、一夏くんこそ全然勉強しなかったの？」

「そ、それは……えつとだな……そうだ。バイト、バイトだよ。バイトが忙しくて時間がなかったんだ」

「その頃ってバイト、やってたっけ？」

「すみませんでした！」

ああそうさ。くそう、と言うか春佳こそそんな勤勉なやつだったか？

「お前、中学の時そんなに勉強してたっけか？」

「うっん、全然してないよ。だって中学の勉強なんてつまらないし」

「それに関してはまあ同意するけど……お前、よくここ受けたな」

「人間ってのは、楽しそうなことなら勉強できるもんだよ、お兄ちゃん」

「んー……それもそうか。なんかお前が言つと説得力あるな」

中学校時代の春佳は、それはもう酷い成績の持ち主だった。

最下位こそなかったけど、逆から数えた方が早かったのは間違いない。そのくせなんかよくわからないこととかには詳しくかったりして……うん、間違いなく好きなことや楽しいことだけ勉強した結果だよな。

「意外だな、春佳は成績が良さそうなんだが……」

「ふふ、運動が苦手だからって勉強ができるなんてのはフィクションの中だけなんだよ、箒ちゃん。と、先生来たよ？」

「お、ホントだ。じゃ、また後でな」

「うむ。一夏、わからないところはその……後で教えてやるから私に聞け」

「ああ、サンキュ、箒」

さて、前途多難で不安一杯の授業だけど……まあ、やるしかないよな！

- Side 春佳 -

「では、次にISの基礎機構についてです」

ただいま始めての授業中。山田先生がわたたと黒板に文字を書いたり説明をして、僕はそれをまとめると言うもの。

背後にはみんなの千冬お姉さまが控えてらっしゃるので誰もサボったり余所見したりしない。

自殺行為は良くないよね、何事でも。にしても……

「ふう……」

ISってのは予想以上に複雑で難解なモノだった。

しかも僕の場合、自分が操作できるわけじゃないから覚えは他の人より更に悪いと思われる。魔術の勉強をした時は身体が覚えてくれてすんなり記憶できたって経験がある僕が言うんだから間違いない。昔から調べたり、予習はしておいて良かったと思うよ、ホント。

これは、柄にもない猛勉強をしなくてはいけないかもしれない。まず幹也に数式の解き方を聞かないと……あ、それなら鮮花の方がいいか。浅上藤乃と合わせて凄い頭いいみたいだし。

「では、さっきまでのところでわからなかったところがありますか？」

おっと、もう次の单元に行くみたいだ。それはそつか、この内容くらは女子ならここに来るまでに基礎として義務教育でやるんだから。

つまり、僕と一夏くんが置いてけぼりなわけだ。

「織斑くん達は大丈夫ですか？」

「えっと、なんとか……」

うん、なんとかなら大丈夫。全部理解したかって言われたら間違いなく首を横に振るよ。全力で。

「えつと……」

一夏くんは大丈夫だろうか。この電話帳よろしくの厚さを持つ辞典を捨てちゃってるし、さっきのやり取りでもわかるけど予習もしていない。

つまり、間違いなくわかってないはず。あいや、でも一夏くん物覚えも記憶力も良いからもしかすると

「その……」

「その？」

「ぜ、全然わかりません」

溜めに溜めた一夏くんのわからない宣言にクラスのみんなが昔のコメントみたいにコケる。うん、息がぴったりだね、みんな。

「……織斑、辞典はどうした？」

「えっと、電話帳と間違えて捨てました」

とてもいい音がして、一夏くんが頭を抑えて悶絶する。

……千冬姉、名簿の角を脳天に落とすとはさすがです。悪魔ですか、魔王ですか？

そのうち二丁拳銃とか持ち出したりしないだろうね。

「織斑弟、私はどちらかと言えば刀を使う身だ。それと、教師に対して悪魔や魔王とは、お前はなかなかいい度胸をしてるじゃないか」

……なんでバレてんのさ。自分の悪口だけ読心できるとか？

「す、すいません」

「次はないぞ」

橙子さん……僕は魔術を使っても、この人には勝てる気がしませんです……

「織斑、辞典は一週間後に取り寄せる。それと後でお前にはこの一週間授業で使う範囲のページをコピーしてやるから三日で覚えろ」



「み、三日!？」

「そうだ。授業に追いつけるくらいしろ、IS学園にいる以上、勉強していなかったという言い訳はなしだ」

「……」

「今、好きでいるわけではないとも思っただろう。  
ふん、だとしてもお前はここにいて、学ばねばならない。いいな、覚えるよ」

「……はい」

千冬姉による恐怖演説が終わり、僕は人知れずため息を吐いた。  
ま、千冬姉にこうまで言われたら一夏くんも本腰入れて勉強する  
だろうね。一夏くん、頑張れ!

「では、次の単元に入りますね」

つと、いけないいけない。僕も他人事じゃなかった。  
と言うか、一夏くんよりまずいつてのに何を余裕かましていたんだ、  
僕は。

「この單元ではISの」

先ほどの千冬姉の恐怖演説が尾を引いているのか、さっきよりも引き締まった空気の中、授業は淡々と進んで行ったのだった。

## 二（後書き）

とりあえず第二編が終わりました。

次は遂にあのイギリス代表のちよろいさんの登場回となります。

さてさて、肝心の春佳側ヒロインなんですがまだ決まってないという現状。

原作一夏ラバーズから強奪と言う形になるのですが、どのキャラも魅力的かつ一夏にデレデレ過ぎて思わず一夏に爆発しろって言いにくくなるくらいです。せっかく一夏の双子の弟なんだから幼なじみ立ち位置まで食えるようにしたってのに、春佳のキャラには空の境界分が強すぎて合わせられないです（汗）

ぶっちゃけると最初は箒をヒロインにしようかとも思ったんですよ。みんな箒をデイスリやがるんで。でもやっぱり箒は一夏一夏じゃないとダメなんで却下となってしまいました。

さて、どうしよう。

……あなたの一言が世界を変えることもあるかもしれませんよ？（チラッ

まあ、ヒロインが決まったとしても数の比率では一夏<<春佳ってのだけは変えないつもりですけどね。

と、投稿四つ目にして早速壁にぶち当たっちゃってるけど皆さまの時間潰し、またはひとときの楽しみになってくれるならば万々歳です。

では、書いていたら次回あとがきで会いましょう！

### 三

「も、燃え尽きた……」

「あはは……大丈夫？」

「だいじよばねえ……」

うん、それは見てればわかるよ。なんて軽口も言えないくらいぐつたりの一夏くん。

まあ、無理もない。魔術師たる僕ですら頭が痛くなりそうな専門用語と知識によって塗り固められたあの授業は理解できる予備知識のない人にとっては毒でしかない。

「うー、こういう時はウーロン茶でも飲んで頭をクリアにしたいよ……」

「そう言つと思つてたよ、ほら」

我ながらさすが双子。完璧なタイミングで一夏くんにウーロン茶のペットボトルを渡す。

おお、一夏くんがちょっと元気になった。

「さすが春佳！ 助かった！」

と言つてもがぶ飲みをしないのが一夏くん流。とりあえず一口飲んで、それから一度深呼吸。

「ホント、こういう時って凄いと思うよ、双子ってのは」

「あはは、そうだね。以心伝心って言うのかな、確か」

「そうそう」

見た目こそ全然似てないし、性格も嗜好も同じものがない僕ら兄弟だけど、でもこういう時の意思の疎通は完璧だ。

僕は一夏くんがだいたい何がしたいかわかるし、一夏くんは僕がどうしたいかだいたいわかる。それで小学校時代はよく箒ちゃんに幼いながらの嫉妬をされたりしたものだ。春佳ばかりずるい！ ってね。じゃあ一夏くんの妹になる？ って言つて半泣きさせちゃったこともあつたね、確か。今度話してみるかな……いや、やめよう。殴られるのは間違いない。

と、脱線してるけど、僕らはそれくらい以心伝心してるわけ。

一時期僕の根幹である『起源』もわかるんじゃないかって思つて凄く怖かったけど、それは大丈夫でホツとしたこともあるくらいだからね。

「春佳、おーい、春佳」

「んあ？」

「んあ？　じゃないっての。お前、時々どっかにトリップするよな」

「む、失礼な。思考の海に沈んでるだけだよ、僕は」

「大して変わらないだろうが」

「変わります！」

トリップってのはちょっとお花畑に行っちゃってることで、僕の場合は考えてたりするだけだからトリップには当てはまらないと思うんだ。

これ、僕の持論ね。

「はいはい、拗ねるな拗ねるな」

「むう、一夏くんのばか。女たらし」

「おいこら、女たらしとか言うな。自慢にしろくもないが彼女も作ったことないんだからな」

「そんなの知ってるよ。だから女たらしなんじゃないか」

五反田の蘭ちゃんとか篝ちゃんとか、他にもたくさんチャンスはあったってのに気づきすらしないんだから。

「はあ？　なんでそうなるんだよ」

「秘密です。うふふ、そのうちネットの掲示板とかに『一夏爆発しろ』とか書かれるからね、予言するよ」

「意味がわかんねーよ！　暴走すんな！  
はあ、お前……時々凄い意味のわからないこと言うよな」

「うん、今回ばかりは意味がわかることだと思っただ」

篝ちゃんもきつと頷いてくれる。ついでに式も同意してくれそうだ。一夏くんのこと色男って言ってたし。

「わかったわかった。はあ、せつかくの休み時間なのに疲れたくな

いから終わりな」

「むー、けどまあ、それには同意かな」

最後に二人で笑っておしまい。生まれてから、一度も僕らは本気で喧嘩したことないからいつもと同じ、笑っておしまい。

喧嘩しないのかって？ 当たり前でしょ。僕は自分のお兄ちゃんを殺してしまうかもしれない危険なんて侵したくないもの。

「ちょっと、よろしくて？」

「うん？」

突然の声に思考がストップする。そっちに意識を向けて見れば、金髪の子が立っていた。

……ふーあーゆー？

「えっと、誰？」

さすがお兄ちゃん。こんなところもぱっちり同じで、一夏くんの言葉に合わせて僕らは同時に首を傾げた。



「春佳、誰か知ってるか？」

「クラスメートさんだよ」

「それくらいは知ってるっての」

「……あなた達、このわたくしをご存知ない？」

「おう」

わ、顔が真っ赤になった。人の顔が瞬間沸騰するのなんて久々に見たよ。

最近だと……去年の赤い魔術師　　なんとかかんとかアルバとか言うのが橙子さんにボロクソ言われて沸騰したのが一番新しいだろうか。

「まあ、このイギリス代表候補生にして入試首席たるこのわたくし、セシリア・オルコットを知らないと言うのですわね！？」

沸騰した人間の例に漏れず、案の定金髪の人　　オルコットさんも爆発した。おお、金髪が少し浮いてる感じがする。あれって魔術要素じゃないよね。

「……あの、さ」

「なんですの？」

「代表候補生って、何？」

……なんだろう。どこからか、寒い風が吹いた気がした。

「……あのね一夏くん。代表候補生って言うのは言葉通りの意味で、その国の代表の候補生ってわけ。要するに、エリート候補生みたいなものなの」

「おお、そうなのか。で、えっと……オルコットは入試も首席だったと」

「そうですわ！」

鼻高々に胸を張るオルコットさん。良かったね、やっと理解してもらえて。

僕も一夏くんがここまで知らないとは思わなかったよ。

「それで、その代表候補生が何の用だよ」

「まあ、このセシリア・オルコットが話しかけて差し上げたと言うのに何たる言い種ですか！　これだから野蛮な男は」

「……えっと、話を打ち切っていいか？」

「世界唯一の男性操縦者と言うからどの程度かと思えば先ほどの授業では無様の一言に尽きる体たらく。そこでエリートたるこの私が直々に話しかけて差し上げたのですから、感謝なさいな」

「……」

「一夏くん、今キミが思ってることを当ててあげよう。」

「うわー、めんどくせー」でしょ？

要するに、一夏くんを嘲笑いたいのだ、この人は。

「わからないことがあれば、土下座して頼めば、まあ私達と同じ立場にいる者としてお情けくらいの心で教えて差し上げないことはありませんわ」

「あいや、いいや。困ったら春佳と勉強するし」

「なっ……」

こらばか一夏くん！

なんでそこで素直に答えちゃうのさ。そこは適当にあしらえば終わりじゃないか。

ああもう、バカ正直なんだから。

「わ、わたくしは教官を倒しているのですよ？」

「ん？ 教官なら俺も倒したぞ？」

「なんですって！？」

「…………えっと、マジ話？」

「おう」

意外だ。一夏くん、まさか戦うことに才能とかあるのかなあ…………  
あいや、当たり前か。あの千冬姉の弟で、この僕の兄貴なんだから。  
なんかオチがありそうな気がしなくもないけど。

「そ、そんな…………わたくしだけと聞きましたわ」

「女では、じゃないか？」

ガン！ って言葉を言いたくなるくらいがつくりと肩を落とす  
オルコットさん。

あー、プライド折れたかなあ。

「まったく持つて信じられせんわ！  
あなたのような男が教官を倒したなんて。きっと何か汚い手を使っ  
たに違いありませんわ！」

逆上してまた顔が真っ赤なオルコットさんに、一夏くんがたじろぐ。  
そくだよねえ、こういうタイプの女の人って一夏くんは知らないだ  
ろうから、反応に困るよね。

「ま、まあまあ。落ち着いて落ち着いて」

なのでどうどう。と宥めるように二人の間に割って入ることにする。  
別に困るお兄ちゃんを見て楽しむ趣味もないんで、ね。ただ、僕が  
視界に入った瞬間に、オルコットさんの表情が”変わった”。

「っ！ 男がわたくしの視界に入らないでくださります!？」

「え？ うわっ……」

問答無用でどかされた。それもだいぶ力づくでどかされた。  
今は別になんでもないただの人間モードなわけなので、オルコット  
さんより少し背の低い僕は簡単にどかされてしまう。

「春佳！      おい！」

「ISすら扱えない、軟弱で野蛮な猿でしかない男がこのわたくし  
の前に立つなど、おこがましいにもほどがありますわ。  
それなんですその見た目、男の分際で女のような見た目をして、  
気持ち悪い」

反論を許さない。と言ったオーラが滲み出まくってる暴論が僕に向  
けられる。

論破することは可能だ。でも、それはこの世が女尊男卑でなかった  
らの話。

この人みたいな女性は、残念なことたくさんいるしね。

「学園も学園ですわ。ISを使える方ならばともかく、なんでもな  
い男の入学を許可するなんて。

男にISを触られてもなんともない      」

「      謝れよ」

「はい？」

「謝れって言ってんだよ」

まだ続くオルコットさんの暴言に、一夏くんが割り込んだ。

……えっと、怒ってる、ね。

「ふん、何故わたくしが男に謝らなければいけないのです？」

「男とか女とか関係ないだろ。お前は男ってだけで春佳をバカにしがった。そんなガキみたいな理由で春佳をバカにしているわけなんてあるわけないだろ。いや、春佳だけじゃないし、理由が何であれ人をバカにしているわけがあるか。だから春佳に謝れよ」

「なんですって!？」

「わー、もういいから一夏くん。僕は気にしてないからさ、ほら」

さすがにまずそうなんで慌てて止めに入ることにする。

このままだとあまり良いことにはならない気がしたし、何より、こんな理由で一夏くんに怒ってもらいたくない。

「！　ほら、チャイムも鳴ったし」

ふん。と言って行っってしまうオルコットさんを無言で見送って、僕は席に着いた。

一夏くんは、うーん、まだちょっと怒ってるみたい。

「……はあ、春佳、昔から言ってるけど、お前も少しは怒った方がいいぞ。明らかにバカにされたんだからな？」

「いいのいいの。そんな僕を知らない他人の評価なんて興味もないし、僕の代わりに怒ってくれる人がいるから」

「ったく」

とても真面目な話、僕は自分の中にある沸点がとても高い場所にあるらしく怒るってことが全然ないのだ。家族とか、友達に何かされたりとかしたらちよつと許せないけど、自分のことに関しては本気でどうでもよく思ってた。これは、僕が壊れてるのを自覚してるからであり『起源』から来るものである。とは橙子さんの弁。いちいち腹を立てていたらあの両儀式もびっくりの殺人者になってただろうな。って言われて妙に納得してしまったのが悲しかった。

「はい、みんな席に着いてる？ うん、着いてるみたいね。偉い偉い」



ドアを開けて先生が入って来る。赤く長い髪に赤い瞳、眼鏡をかけていて面倒見の良さそうな美人を思わせるけど、その瞳の奥は全然笑ってない、先生が。

「授業を始める前に一つ。はじめまして、皆さん。

私は蒼崎橙子。この度心理カウンセラーとしてIS学園の講師に招かれました。ISという兵器を扱うについて、皆さんの精神の向上に少しでも協力できれば、と思っています。よろしくね」

すっかり人のいいお姉さんを演じる僕の師匠こと橙子さんは、僕らに向かって軽くウインクをしたのだった。

……式がいたら腹を抱えて笑いそうだ。

「では、まず最初にちょっと難しい話をしましょうか。  
あなた方はIS操縦者の候補であると同時に一人の学生です。では、  
あなたに質問」

「は、はい」

僕の斜め後ろの女子が橙子さんに呼ばれて立ち上がった。  
橙子さんは、人柄こそアレだけどモノを教える人間としてはとんで

もないくらい優秀な人だ。

さすがに自分のことを秀才と言っただけあって無駄がなく、徹底して  
る。

「そんな学生……花の女子高生たるあなた達がある程度の技術と実  
力を持っていて、それからISに乗る時、どんな精神状態がいいと  
思います?」

「え? えつと……頑張るぞ! って気持ちでしょうか……」

「うーん、間違っではないけど、ちょっと違うかな。ではその  
あなた」

あ、今度はオルコットさんだ。

「はい。努力を積んでいるのですから、勝って当たり前、ですわ」

「それも違うかな。高慢に近い自信の持ち方も悪くはないのだけれ  
ど、打ち碎かれた時のダメージは非常に大きいのよ?」

オルコットさんの返事に苦笑して、橙子さんはひとまず黒板へ振り  
返る。

……なんか、凄いノリノリだね、あの人。

「根本的なモノなの。作り替えればいいだけの話。うら若き乙女から、一人の武人へとスイッチを切り替えるればいいわけ。

一昔前のアニメや漫画によく「私は女である前に武人だ」って言う女の子がいて、結局男の子に落とされちゃうじゃない？

あれからもわかる通り、武人だろうがなんだろうが女の子は女の子。結局根幹にある性別は揺るがないのよ。ならどうすればいいか、そんなの簡単。

戦う時だけ武人になればいい。直前までとても可愛い女の子でも、戦う時は一人の武人としてあればいい。呼吸、体捌き、そして、そうね……殺してやる。とかそんな感じの勝利への執着。……ああ、殺すだなんて女子高生の前じゃダメだったか」

それはつまり、橙子さんや僕や式 魔術師や殺人者のあり方と同じ。

僕や式のような社会不適合者が、こうして人々の中にいられる理由。

「私は皆さんにそんなスイッチを作っただけ。もちろん、個人差があるから慌てずにね。それと最後に一つ。

技術も努力も伴わない精神論はあるだけ無駄なもの。格上どころか、戦う意味すらないもの。けれど、技術も努力も伴う精神論は格上相手にも勝てるくらいに自分を後押ししてくれるものよ」

ホントにさすがと言うしかない。橙子さんは授業開始早々、みんなの興味を一身に集めていたのだった。

「なんか、放課後までが長かったな」

「だね、お疲れ様」

放課後になって、僕ら兄弟はぐてーとなっていた。  
橙子さんの授業が一番楽だっと思えるくらいハードだった。うん、  
凄いね、IS学園。

「おう」

「なんだ、兄弟揃ってだらしないぞ」

「しょうがないだろ（でしょ）」

篤ちゃんも何も知らない状況で勉強を試してみればわかると思う。  
この気持ち。

「ふふ、まあ……なんだ、お疲れ様」

「おう」

「ありがとう」

「うむ。しかし、蒼崎先生の授業は素晴らしかったな。私の悩みを一気に吹き飛ばしてくれた」

「普段は女の子でも、戦う時は武人に切り替えるってやつ？」

「うむ。ともう一回頷く筈ちゃん。そりゃそうだよな、筈ちゃんは一夏くんに恋する乙女でありながら、剣道全国一位を取るくらい強い剣道家でもあるんだもの、本人にしかわからない悩みもあったらうね。」

「そう考えると、式ってやつぱり変だな。殺人衝動すらあつたくせに乙女心と同居できてたんだから。」

「ああ、蒼崎先生の授業はわかりやすかったしな。なんたる、単なるスポ根じゃなくて理論的なスポ根と言うか、説得力が凄かった」

「だから心理カウンセラーなどができるのだろっつな。ほら、席に着け。ホームルームを始める」

いつの間にか篤ちゃんの隣にいた千冬姉によって、僕らは大人しく席に戻って行く。

今日は珍しく山田先生がいなくて千冬姉が教壇に立っていて、相も変わらず女子からの桃色の視線を集めていた。

「諸君への連絡事項は特にない、が、今日はクラス代表を決めてもらおう」

千冬姉の言葉にクラス中がソワソワし始めた。

ああ、そんなのもあったね、そう言えば。

「春佳、クラス代表って？」

「IS学園はね、クラス対抗戦っていうISの大会みたいのをやるんだけど、それをやる為の各クラスの代表ってこと。クラス委員長みたいなもんだよ」

「おお、なるほどな。そりゃざわめくのも無理はないか。普通のクラス委員長なら願い下げだけどIS学園のクラス委員長なら話は別だろうしなあ。

あ、けど俺はパス。これ以上珍獣扱いはされたくないからな」

「あはは、それを僕に言われても」

でもごめんね。僕ってば一夏くんの名前が出たらもちろんそこに票を入れる気満々なんだ。

申し訳ないけど、兄貴がそいつのをやるってのもなかなか興味があるもの。

「自推、他推は問わん。誰かいらないか？」

ああ、当たり前だが織斑弟は却下だぞ。真面目にな」

さすがにそんなボケを千冬姉にする人はいないんじゃないかと思うよ……

魔術師であることが知られていない以上、僕はただの織斑一夏の弟で、運動の苦手な男の子なんだから。

「まあ、普通に行けばオルコットだろ」

「お、一夏くんもわかってきたね」

「そりゃ、あんなだけ自慢されたら嫌でもわかるっての。それに、強いってのはホントだろうし」

「まあね」

入試首席で代表候補生。ってことはもちろん専用機持ちだろうし、あらゆる意味でアドバンテージが大きい。

それに本人の性格を考慮してもオルコットさんが候補に入るのは間違いない。他推が無ければ自推で、とかでね。

「はいはい、私織斑くんを推薦します！」

あ、もちろんお兄さんの方です」

「なあっ!?!」

「喧しいぞ織斑。では、織斑に一票、と」

「あ、じゃあ私も私も」

「はい、僕も」

「なっ、春佳!?!」

「ふふ、ごめんね一夏くん。せっかくだからお兄ちゃんに頑張って欲しくて」



「う、裏切りやがったな！」

「はは、何を言ってるのさ一夏くん。僕はハナっからキミの味方なんじゃないかったんだよ」

「くそっ……」

「おい、下手なコントはいいから黙っている、織斑兄弟」

「「はい……」」

僕のノリについて来れるってことは意外と余裕があるのかな、一夏くん。

「……恨むからな」

「ふふ、僕が言わなくなっただけの結果になっただよ。だから、僕もそれに従ったんだよ。良いじゃない、せっかくだからやっておきなよ」

オルコットさんも騒がないし、これはもしかするとホントに一夏くんに

「納得がいきませんわ!」

決まらなかった。騒がない? それは僕の思い違いでした。そんなわけで立ち上がるオルコットさん。勢いよく立ち上がったからか金髪が少し揺れてる。

「このような選出は認められません!

だいたい、男がクラス代表なんていい恥さらしですわ。わたくしにこのセシリア・オルコットに一年間そのような屈辱を味わえるとおっしゃるのですか?」

うがーと怒涛の勢いで言葉を並べて行くオルコットさん。

舌を噛まないのか少し心配だ。

「実力からいってクラス代表はわたくしがなるのが必然。それを、物珍しいからと言って極東の猿にされては困ります。わたくしはこのような島国までIS技術の修練に來ているのであって、サーカスをするつもりなど毛頭ございませんわ。いいですか、クラス代表は実力基準で決めるべきであり、つまりそれはわたくしですわ!」

ホントによく舌を噛まないな、と感心してしまった。

あと、よくそこまで言葉が思い浮かぶたってのも。入試首席ってやつぱり違うのだろうか。

「だいたい、文化としても後進的な国で暮らさないといけないこと自体、わたくしに取っては耐え難い苦痛で」

「じゃあお国に帰ればいいだろ。イギリスこそ、世界一不味い料理で何年覇者だよ」

「なっ!？」

「……えっと、一夏くん?　なんでそんなことを言っ、言ってからヤバイ。みたいな顔をしてるのでしょ?」  
あ、もしかして勝手に口から出ちゃったりした?

「あ、あ、あなたねえ!　わたくしの祖国を侮辱しますの!？」

「「いや、あんたがそれを言うか……」」

僕と一夏くんの喧きなんて聞こえているわけもなく、バン!　と机を叩いたオルコットさんは一夏くんの人差し指を向けた。

「決闘ですわ!」

「おう、いいぜ、四の五の言うよりわかりやすい」

売り言葉に買い言葉って言うのだろうか、一夏くんもニヤリと笑ってその言葉を受け入れる。そういえば、一夏くんは結構喧嘩っ早かったっけ……

「もしわざと負けたりしたらわたくしの奴隷か小間使いにしますわよ」

「はっ、真剣勝負で手を抜いたりなんてするかよ」

「そう？　なににせよ、イギリス代表候補生たるこのセシリア・オルコットの實力を示すまたとない機会ですわね」

何かトントン拍子に進んで行くんだけど、大丈夫かなあ。オルコットさん、たんにプライドを着ただけのお嬢様ってわけではないだろうし……強いのは間違いないけど、果たして一夏くんに勝ち目はあるのだろうか。

向こうは代表候補生、つまりISはおるか生身の身体でもそれなり以上に戦えるよう訓練を積んでいるのは確かだ。じっと見るとわかるけど立ち回り方とか、どこか無駄がない。下手すれば生身の状態でも一夏くんより強いかもしれないよ、この人。一夏くん、剣道は中学でやってなかったんだからあまり無理はしない方が

「で、ハンデはどうする？」

「あら、早速ですか？　ま、当然と言えば当然ですわね。いいわ、言ってご覧なさいな」

「いや、違う違う。俺から、お前へのハンデ」

「何を言ってるのこのばかり一夏！」

一夏くんの言葉にクラス中がざわめいた。笑ってたり、驚いてたり、呆れてたり。オルコットさんなんか、信じられないものを見るような目で一夏くんを見てるし。

「おわっ……は、春佳、いきなり大声を出さないでくれよ、驚くから」

「それはこっちのセリフだよ。男が女より強い時代はとっくの昔に終わってるってのに。あいや、生身の状態じゃそうかもしれないけど、これはISの話で、相手は代表候補生。いくらキミが教官倒せたって言っただって経験値が違ってるのにそもそも真剣勝負って言ったのは自分でしょ、なのにハンデの話を出すのはどうなのさ。ちょっとクールダウンして、はい、深呼吸」

「お、おう」

「あら、そちらの弟の方が物わかりがよろしいようですよ？」

「いくら双子って言っても僕は第三者だからね、当事者よりは冷静に見てられるよ。で、はい兄貴、大丈夫？」

他のクラスメートにも言われたのか、熱が下がった一夏くんはさつきよりは冷静になった感じの顔で、ハンデはいい。と言っていた。はあ、熱くなると真っ直ぐ前しか見なくせに女の子への配慮を欠かさないって、なんなんだろうねこの色男は。

「ええ、そうでしょうそうですね。むしろ、わたくしがハンデを付けなくていいのが迷うくらいですわ。ふふ、男が女より強いだなんて、日本の男子はジョークセンスがあるのね」

「あながちジョークでもないけどね」

あからさまに嘲笑するオルコットさんに、思わず呟いてしまった。ああ、やってしまった。こういうのは似なくていいのに……

「あら、ジョークではないと？」

「……えっと、まあね。結局、お互いがいなきゃ何も始まらないし」

困ったな、このまま僕にも矛先が来ないでくれるといいんだけど。  
ただでさえこの人は僕みたいなの”ISの使えない男”を極端に嫌っている節があるし。

「さて、話はまとまったな。ならば勝負は一週間後の月曜日の放課後、第三アリーナで行う。二人はそれまでに準備をしておくようにでは解散」

千冬姉がそう言って教室を出て行くと同時に教室内が喧騒に包まれる。主にクラスメートの皆さんが一夏くんの席に大集合していた。  
一夏くん、そんな目で僕を見ないの。今回は一夏くんが蒔いた種でもあるんだから、僕は助けてあげられないよ、残念ながら。

### 三（後書き）

……セシリアさん、すいません。

なんかただの嫌味なお嬢様になってる……

デレたら挽回させるよう頑張るから許してください。

さてさて、このまま次で一章が終わると思うのですがそろそろクロスさせてる意味を込めてのオリジナルの話や展開も入れていきたいところ。

まあそれでも最大あと二回で一章は終わる予定です。したら鈴ちゃん登場です。予定としてはここからオリジナルもだいぶ入る予定です。

では、今回はひとまずこの辺で。  
また次回のあとがきで会いましょう。

川柳のような追伸。

ヒロインは  
まだ決まらない  
どうしよう



## 四

「はあ、今ごろバシバシやってるのかなあっと」

缶コーヒーをちよびつと飲んで、屋上から見下ろす街の風景に一人  
呟く。

……ダメだ、こういう詩的なのは僕のキャラじゃない。

放課後になって、一夏くんはひとまず箒ちゃんに訓練相手に、と頼  
みに行っていた。

箒ちゃんも頼られて気分を良くしたのか承諾して、二人は今ごろ剣  
道場でバシバシ打ち合ってるだろう。まあ、今のところ一夏くんの  
負けは間違いないだろうけど。

昔は箒ちゃんよりも強かったし、同世代どころか年上相手にも勝つ  
ちゃうくらい強かったけど中学三年間のブランクは大きい。もちろ  
ん、その理由だって僕は知ってるからなんとも思っていないけど。む  
しろ、それを貶す人は許さないかな。

「あ……」

「うん？」

なんと、まさかのオルコットさんが屋上にやって来た。

うーん、今あまり会いたくない人ランキング上位の人なんだけど、  
神様ってのは実に残酷だ。

「ふん」

豪快にそつばを向いてベンチに座るオルコットさん。これまた酷く嫌われてるようなので僕も見なかったことにしておく。  
一夏くんと違って爆発物には手を出さない主義なのだ、僕は。

「……」

「……」

「……あの」

しばらくの沈黙を破ったのは、オルコットさんだった。  
近くにいるのは僕しかないのです、たぶん僕に対して話しかけたんだと思う。

「なになに」

「先ほど言っていた言葉の真意、お聞かせ願えますか？」

「言葉？」

「男が女より強い、と言う言葉がジャパニーズジョークではないと、あなたはおっしゃったでしょう。」

祖国にも、あなた達兄弟ほどわたくしに反論した者がおりませんでしたので、興味がありますわ」

ああ、そういうことか。そうだな、どう説明したらいいんだろうか。一夏くんならここで口説くようにキザったらしいセリフとかを熱血気味にかっこよく言って相手をメロメロにしちゃうんだろうけど、僕にそんなことができるわけないので、とりあえず見たまま、感じたまま言うことにする。

「先に言うけど、これは僕の個人的な意見だからね、それでもいいならってことで。」

んで、解答だけど、この世界には男と女がいる。それだけ」

「……はい？」

「今、確かに世の中では女尊男卑な風潮が広まっていて必要以上に卑屈になる男や、必要以上に高慢になる女がいる。けれど、それでも人は恋をして、結婚をして、家庭を作る。だから、男は女よりも強い面があるし、女が男より強い面もある。一方的な力関係なんじゃないんだよ」

「その根拠は？」

「いくらでもあるよ。例えば、ある家庭では女性が働き、男性が家事をする。さあ、偉いのは、強いのはどちら？」

「そんなの、稼いでいる女性に決まっていますわ」

「その逆だったら？」

「それは……」

「ふふ、まあ、それも外れだけだね。偉いのは両方。家族の為に働く方も、家族の居場所を維持する方も、どっちも偉くて強いものなんだ。今でも女を庇う男がいれば尽くす男もいる、尽くすことが好きな女もいれば、男を守る女だっている。ああ、例外を除き、ね。だから、一方的な力関係なんてありえないんだよ」

「は、何を言うかと思えば……詭弁ですわね。わたくしが言いたいのは、単に戦うことについてですわ」

「それに関してはもっと簡単だよ。下手すると僕にだって勝ち目があるよ？」

「なんですって!？」

「当たり前じゃない。だって、ISに乗ってない時に叩けばいいんだし」

何も間違っちゃいない。ISは凄まじい脅威だけど、それが無ければ人間対人間なんだから。そいつが人間のスペックを遥かに上回ってたらかついで、だいたいそれはないと思うし。

「なっ……そんなの、卑怯ですわ!」

「卑怯なもんか。僕はISに乗れないんだから仕方ないじゃない？なに、そっちはISで完全武装した状態なのに僕は竹刀一本でやり合う状況ってのを正々堂々とも言っのかな。それは知らなかったよ」

これはISが現れてから思ったことの一つなんだけど、女性もISのおかげで自分達まで強くなったって勘違いしてる。そりゃISのおかげで式みたいな身体能力になってたらさすがにどうしようもないけど、それは絶対にありえない。と言うか、ありえてたまるものか。

「良いこと教えてあげる。今のこの世の中はね、女性が強いんじゃないんだよ、ISが強いんだ。あなた達代表候補生は、更にその女性”って個体が強いから代表候補生なんじゃないのかな？」

では質問です。強いのはセシリア・オルコット？ それともその専用機？」

「男のくせにバカになさらないで！ あなたごとき、生身の状態でも完封して差し上げますわ！」

「なら良いじゃない。ま、ただ勘違いして欲しくないだけだよ。オルコットさん、どうにも男の人を低く見すぎてるからさ」

「当たり前ですわ。男なんてみんな卑屈で野蛮で卑しいだけですもの」

「それはオルコットさんの知ってる範囲での話でしょ？ 世界は広いんだから、先入観は良くないよ。現に、こんなヤツはいなかったでしょ？」

「そうですね。詭弁ばかり並べる口先の達者な男は初めてですわ」

「ふふ、そこにひねくれ者と偽善者も追加しとくといいよ。ま、でもそういうこと。一夏くんはどこか楽観的な人だから、代表候補生の凄さをわかってないみたいだからアレだけど、あなたも、あまり

ナメてると足元掬われちゃうよ?」

「ご忠告どうも。そんな可能性、万に一つもありませんわ」

「億に一つはあるかもね」

「っ……ああ言えばこう言う人ですわね、あなたは」

「こういう話は嫌いじゃないからね。ま、僕はまだマシだよ?」  
「夏くんはもつと凄いんだから」

「更にひねくれてると?」

「違う違う。あの人はね、とんでもなく真っ直ぐなんだよ。僕みたいに小細工をしないで、真正面から来るんだ。だから気をつけた方がいいよ?」

試合が終わったなら好きになっちゃいましたとか、ありそうで怖いからね。

「そろそろ時間かな、と」

一夏ちゃんと箒ちゃんと夕飯食べる約束をしてるから二人を迎えに行かないと。僕としては二人きりで食べた方がいいんじゃないかと思うんだけど、箒ちゃん曰く「一夏に対して冷たく当たってしまいそう」とのこと。まあ、一夏くんは恋愛感情一点に置いてのみ非常に鈍感な人だからね……箒ちゃんは短気だから手足が出たりキツイ言葉が出るのも無理はない。むしろ手足ならマジ喧嘩にならない程度ならいい筈なんじゃないかっていう見解が昔の僕と千冬姉の間で定められてるくらいだし。と、脱線しちゃった。

そんなわけでコーヒーの残りを一気に飲んで、ゴミ箱にシュート。うん、完璧。

「それじゃ、オルコットさん。僕はもう行かないとだから。あ、そうそう。最後に一つ、僕らがあなたにも反論したり、卑屈にならないともわかりやすい理由を教えてあげる。

僕らの姉はあの織斑千冬。では、その織斑千冬が僕らに「女性に対して下手に出る」って言いながら育てると思う？」

「……なるほど、それには凄く納得が行きましたわ。織斑先生がそのようなことを言うわけがありませんもの。わたくしに弟がいてもそんなことは絶対に言いませんわ」

たぶん、オルコットさんに弟がいたらこんな男嫌いじゃなかっただろうけどね。

「でしょ？ 千冬姉は武人だからね。僕らもそこういう風に育ててく



れたってこと。まあ、僕は一夏くんに比べればいろいろ歪んでるけど、これは弟だから仕方ないってことで。  
ま、僕から話せるのはこれくらいかな。最初にも言った通りこれは僕個人の意見だしね。では、また明日、あでゅー」

「…………ごきげんよう」

礼儀自体は育ちがいいからかしっかりしてるね、やっぱり。そんなことを思いながら、僕は屋上を後にしたのだった。

- Side 第 -

「わー、手痛くやられたみたいだね、一夏くん？」

「まったくだよ、こりゃ相当鈍ってるな」

剣道場を出てしばらくして、春佳が私達の前に現れた。はい、と私と一夏にそれぞれお茶を渡して来る。

「ありがと、春佳」

「む、すまない」

「いえいえ。で、篝ちゃん、うちの兄貴はどう？」

「話にならん。このままでは善戦すら怪しいぞ」

「う、手厳しい……」

手厳しいも何もあるか。中学の三年間は剣道をやっていなかったと聞くが、それにしても鈍り過ぎている。

「ま、だからこそ箒に頼むんだけどな。箒はホントのことを言ってくれるから、自分がどうなのかはつきりわかる。IS操縦についても俺より詳しいいな」

「あ、当たり前だ。甘やかしたところで何も変わらん」

「ああ。だからビシビシ頼むぜ、先生」

「う、うむ」

だが、こうして……その、好いている男に頼られるのは悪くはない。  
頼まれた以上、私も誠意を持って受けるつもりだ。  
……下心など、欠片もない。これは本当だぞっ！

「ふふ、頑張つてね」

「おう。なんなら春佳も一緒にやるか？」

「バカを言わないでよ。僕は知能派なの。脳筋は千冬姉と一夏くん  
で充分だよ」

「あ、いいやがったなこの。千冬姉に言っちゃまうぞ？」

「そ、それは勘弁願いたいかな」

「ふむ、春佳は相変わらず運動がダメなのか？」

私がこの二人と一緒にいた頃と変わらないのなら、確かに春佳は運動が苦手だった。

確か……兄の一夏に比べ、身体が弱かったからだっただけだ。運動  
とりわけ人対人のものになるとすぐ動悸や目眩に襲われていた  
のを覚えている。

「あいや、身体が大丈夫になったからできなくはないんだけど、やっぱり昔のが抜けなくてね。身体が苦手意識持つてみたいなんだ」

「スポーツテストとか見る限り、春佳の運動神経は決して悪くないつてのにな。もったいない」

「あはは、仕方ないよ、こればかりは」

「なるほど、そうなのか」

「うん。と、着いたみたいだね」

「だな。久々に動いたから腹減っちまったよ」

「あはは、健康的でいいじゃんか」

「まあな」

昔とまったく変わらない、仲の良い一夏と春佳。春佳のことを少し羨ましく思ったりもする。私も、一夏とあれくらい気さくに話した

いと思わなくもないのだ。ずるい、と思ったことも何度もあった。本人には「弟だから許してね」と苦笑されてしまったが。

「わっ……着信？ タイミング悪いなあ。仕方ない、先に食べてよ」

「いいのか？」

「うん。バイト先からだからちよつと長くなるかもしれないし」

不意に着信音が鳴って、携帯電話を見た春佳は小さくため息を吐いて私達に手を合わせた。

それから、一夏にバレないように私に片目を閉じてニヤリと笑った。

「……」

気を使ってくれるのは確かにありがたいが同時に春佳自身も私や一夏で相当に楽しんでいる辺り、抜け目がないと言つか、ずいぶんずる賢いやつだ。

昔は純粹に協力してくれたと言うのに、どうしてこんなになってしまったのだから。

見た目と言い、一夏と違って最初は春佳だとは思わなかったほどだ。

「ごめんね、二人とも。  
はい、もしもし?」

もう一度私達に謝って食堂の扉から離れていく春佳。  
そんな春佳を後にして、私は一夏に促されるまま、食堂に入ったの  
だった。

「そういえば、春佳はどんなアルバイトをしているんだ?」

「確か人形とかぬいぐるみを作ってるらしいぞ。あいつの部屋に自家製のぬいぐるみとかあるけど、凄い出来がいいんだ。料理はできないくせに裁縫とかの才能はあったみたいでな、器用なんだか不器用なんだかよくわからないやつだよ」

「そうか」

食事を始めて、苦し紛れに出した話題はそこそこ一夏が食いつく話題だったようで少しばかりホツとした。

そういえば、春佳は自己紹介でも言っていたな。今度、一夏のぬいぐるみでも頼んでみようか……相場はいくらだろうか。

「はあ、しっかし箒にはボコボコにされちまつたし、立つ瀬がないな、ホント」

「ふん、鈍っているお前が悪い。」

……だ、だがまあ安心しろ。この一週間で使えるようにはしてやる」

「ああ、頼むよ箒。ま、今現在が底辺なら上がるしかないんだし、上しかないんだからな、このままつてのも恥ずかしいし、男として恥ずかしい。やれる限りやるしかないよな」

「……」

「……あの、箒？　どうかしたか？」

「う、うるさい！」

やはり、一夏は変わらない。昔と同じ、真っ直ぐで努力家で、前向きで。

長年会いたいと思っていたこの気持ちを無下にしないで良かったと、私は改めて思っていた。

「”これから先”、みっちり鍛えてやる。覚悟しておけ」

「おう。よろしくな、篤」

「う、うむ、任せておけ」

屈託なく笑う一夏に、私は思わず視線をそらしてしまった。  
こいつは……所々で卑怯だ。突然そんな笑顔をするのは、ずるい。

- Side out -

「はい、もしもし？」

『もすもすひねもすー、はろーハルくん。篠ノ之東さんだよー？』

「……はい？」

蒼崎橙子、と書かれたディスプレイから聞こえて来る快活な声に、  
春佳は思わず固まった。

間違っても彼の師匠はこんな声で話すこともなければ、春佳をハルくんなんて呼ぶこともない。むしろ呼ばれたら春佳はあまりのことに恐怖するだろう。



しかも、その声の主とは長いこと会っていなければ連絡も取っていなかったわけで、春佳はおそろおそろその名前を口にした。

「えっと……束さん？」

『うん！　そうだよ束さんだよ？　久しぶりだねーハルくん。元気にしてた？』

「それは元気だけど……って違う！　なんで束さんが橙子さんの携帯から僕にかけてるの！？」

春佳の中では、電話相手の女性　春佳の幼なじみの一人、篠ノ之箒の姉、束という人は自分の他に、千冬、一夏、春佳、箒の四人しか人間として認識しないような、それはそれは変わった人だったという記憶が強い。そんな束が、まさか橙子の携帯から電話をかけて来るとは思わないだろう。

『だって、この人がハルくんの上司さんなんですよ？

魔術師なんてきょーみのカケラもないけど束さんハルくんの電話番号知らないからこっちから頼む方が早くって』

「……待つて束さん、魔術師って……」

『うん、この人って魔術師なんですよ？

ふっふっふー、束さんはいろいろなことに詳しいんだよ？

知らないとも思った？ハルくんのことだって聞いちゃったもんねー。あ、でもいっくんや篝ちゃんはもちろん、ちーちゃんにも黙っておくから大丈夫だよ？

頼み事を聞いてくれれば』

息継ぎの間など一切ないマシンガントークで春佳へと喋り続ける束。最後の言葉になって、春佳の顔色が変わった。

「頼み事って、なにかな」

『にやはは、ハルくん、なんだか怖いよ？

それが魔術師のハルくんなのかな？』

「正しくはお仕事モードの僕です。だって頼み事を聞かないとみんなに言っちゃうんでしょ？」

『うんうん、ごめんねー脅迫まがいなことしちゃって。

あ、でもそれくらい束さんもテンパってるってことなんだよ？でねでね、そのお願いって言うのはね、いっくんを守ってあげてってこと』

「え？　　一夏くんを？」

『うんうん、いつくんはまだまだだからこれから何かあるかもしれないの。』

だから守ってあげて！      どんな手段を使っても』

「それは、相手を殺してでもって受け取っていいのかな」

自分がなんだか知られてる以上、隠しても無駄だと悟ったのか、春佳はニヤリと口元に笑みを浮かべて尋ねた。

自分でもわかるくらいに冷たくて、悦びを含んだ声に春佳は内心でそんな自分に苦笑した。

『ホントに私の知ってるハルくんかちょっと疑いなくなりそうだったけど、うん、その辺はハルくんの判断に任せるよ。私はいつくんに何かあったら悲しいし、篝ちゃんやちーちゃんを悲しませたくないから。』

だからってそれをハルくんに頼む時点でおかしいんだけどね、いつくんとハルくんは双子で、どっちも私が人と思える数少ない人なのに。だから、ごめんね』

「いいよ、僕も好き好んでやってることだから。それに、一夏くんに何かあるかもしれないって言うならその障害は排除しなきゃだもの。」

任せて、東さん」

『ありがとう、ハルくん。ついでに篝ちゃんの恋路も成功させてあげて欲しいんだけどなあ』

「それは本人達次第かな。僕は一夏くんに恋する人には相当な悪人でもない限り平等に扱いますので」

『うー、酷いよハルくん！　篝ちゃんは幼なじみなんだよ？』

「それはそれです。ま、今のところ篝ちゃんくらいしか猛烈アタッカーがいらないからそれで許してくださいな」

『人の恋路に興味はない。それでだ春佳、私からも仕事の話だ』

「橙子さん？」

『会話が長すぎだ。それとな、私は自分並みに傍若無人なやつは嫌いだ。』

……まあいい。ビジネスの話に戻るぞ、うちの社員よ』

いつになく不機嫌そうなその声に、春佳は苦笑してはい。と返事をした。

突然変わったのには驚いたが、蒼崎橙子の人となりを知る春佳からすれば彼女の言葉は充分に納得がいくものだった。

きつと電話の向こうでは束が悔しそうにしていることだろう。

『幹也からの伝言は行っているな？』

「木を隠すなら　　ってやつ？」

『ああ、それだ。まあ、それに基づく答えに対する証拠が欲しいのだが、次の休みの日にある場所へと行って欲しい』

「とある場所？」

『ああ、いわゆる不良の溜まり場だが、その中にな、ISを倒せると豪語する男がいるらしい』

「……それ、法螺じゃないの？」

『そこはな。だが、そいつに襲われた生徒が結構いる。カウンセリングに来た生徒が何人かいたぞ。』

……ああ、心配するな、貞操までは奪われていないらしい。だが、中には骨を折られたり、教師の間でも問題になっているそうだ。織斑先生が討伐に乗り出そうともしているな』

「それ、たぶんそいつ死ぬよ？」

千冬は、春佳が知る人間の中でもかなり強い部類に入っている。飯にも無敗で世界最強だったのだ、それは当たり前と言ったところだろう。

『そいつが普通の人間で、なおかつこれがただの子供の喧嘩程度ならな』

「どういうこと？」

『異常者だよ、白純理緒と同じタイプの変態だ。起源覚醒者ほどではないが、生身の人間が相手では手に余る。それに、その手の類いのいざこざが殺し合いに発展しやすいのはお前も知ってるだろう』

「まあ、ね。だから、僕が潰せと？」

『できれば今から言うことを聞いてきてくれ。無理そうなら手足を縛るか切り取るかして連れて来い。できそうか？』

「ふふ、誰に言ってるの？」

”私”ができないわけないでしょう？」

『そうだったな。ああ、式は幹也とデートらしくていないぞ、良かったな。』

では当日、アーネンエルベで鮮花から所在を聞いてくれ。詳しくは私も知らないからな』

「ずいぶん適当だね、まったく」

『悪かったな。では、任せたぞ。質問内容はメールで送る。ちょうどいい、それをヒントに伝言の意味を考えてみる』

「はいよ。それじゃ、束さんにもよろしくね。あでゅー」

春佳はパワーボタンを押して通話を切り、携帯を折り畳んでポケットにしまった。

一通りの動作を終えた後、一度ため息を吐いて肩を竦める。

「なんか、面倒なことになってきたね。  
まったく、これだから」

呆れた口調とは裏腹に、少年の口元は笑みの形に歪んでいた。

「これだから、魔術師ってのは面白いんだよ。

ふふ、けどね……もしも一夏くん達に手を出そうって人がいるなら、そいつには死んでもらわなきゃかもしれないなあ」

いつもの会話と変わらぬ、端から見れば何が変わったのかわからないほど自然な声音で呟いて、春佳は食堂の中へと入って行ったのだ。  
った。



#### 四（後書き）

書いてて一つ、思ったことがあります。

……あれ、篝がデレ過ぎてねえ？

どうもこんばんは、御崎マナです。

やりたかっただけの回です。春佳によるセシリアのフラグブレイクや篝視点へのチャレンジや、東さんやら。

正直、すいませんでした！（汗）

最後の電話が一番大事な内容なのに、それ以外が大きくなっちゃったのは反省したいところです。

橙子さんの弟子だからか春佳も難しいことをベラベラ喋るキャラにしちゃったらこんなことになってました。空の境界のキャラは言葉遊びが多すぎて多すぎて。だからかつこよくて面白いんですけど、こうしてISの中に入ると浮きまくりな気がしなくもないです。だからこそ敢えてやろうとか考えたんですけど

まあ、春佳くんは最後の電話で話してるような子です。徐々に明かして行こうと思いますけど、まあ一夏達に比べて相当ぶっ壊れてます。式より酷いです。

さあ、次回は遂に一夏VSセシリア回！

あれ？ 春佳のお仕事は？ って人、それはまた今度に決まっ

てるじゃないですか。

どこまで書けるかわかりませんが、少しでも楽しいと感じて頂ければ幸いです。

では、次回のあとがきで会いましょう。

## 五（前書き）

この回でセシリアと一夏の話は終わる感じだったはずなのに、終わ  
りませんでした。

では、そんなこんなで始まり始まり。

では、始まり始まり。

## 五

「……今日だな」

今日、俺はセシリア・オルコットと試合をすることになった。

先週から一週間、学校で勉強して、放課後は箒と剣道やISの特訓をして、帰って来たら春佳とISの勉強。充実してるかって言われたなら間違いなく充実してるけど、正直死ぬかと思った。けど、おかげで授業にはついて行けるようになったし、貸し出しで使える量産型ISもそこそこ身体に馴染んではいた。

「あ、おはよう織斑くん。今日は篠ノ之さんや弟くんは一緒じゃないんだ」

「おう、おはよう。」

箒はたまには剣道部に出ないって行つてて、春佳はたぶんまだ寝てる」

「ふうん」

だからこうして一人で朝飯を食ってるわけなんだが……一人だとクラスメートやそうじゃない人に囲まれまくるわけで、ちよつと困ったりする。

「あ、そうそう織斑くん、聞いた？」

「？ 何を？」

「最近ちよつと噂になってたワルの軍団がまとめて病院送りになったんで。しかも一昨日の土曜日の話なんだよ？」

「そうなのか？」

そもそも、そのワルの軍団がよくわからないので俺としてはどう反応すればいいか悩んでしまう。  
それを察してくれたのか、いつの間にかいつも春佳が座る席にいたのほほんさんが続けてくれた。

「えつとねー、結構凄かったみたいで、うちの生徒も骨折させられた人とかいたりしたみたいー。」

うちにはいなかったけど、強姦された人もたくさんいるみたいで、そういう集団暴行とかもたくさん繰り返してて、警察も手が出せないくらい酷かったんだってー」

「それは……酷いな」

聞く限り、そいつらは男なんだろうが、それは男としてやっちゃダメだ。

最低の一言に尽きる。

「でも、病院送りにされたのか？」

「らしいよ。全員全治一ヶ月以上で、しかもリーダーっぽいやつなんか、所々骨折だけじゃなくて両手両足の関節が砕かれてたとか。しかも、昨日意識が回復してすぐに自殺しちゃったって」

「……なんか怪談話みたいだな」

「だよな。即死じゃなかったらしいけど、死ぬ直前まで「殺してくれ、もう嫌だ」って言ってたらしいよ」

……毎度思っんだが、こういう怪談みたいな話ってどこが発信源なんだろうな。

最期の言葉なんて普通は聞けないだろう。もしかして、看護師とかが話してたりでもするのか？

「なんかさ、この街ってこういうことちょくちょくあるよね。去年もいろいろなかった？」

「あー、あつたかもな。同じ場所から何人も飛び降りしたり、猟奇殺人事件があつたり」

「なんか怖いよね……きゃ、織斑くん守ってー」

「……怖そうに見えないぞ」

春佳にも凄い言われたよな、物騒だから夜はあまり外に出るなってあんなにしつこい春佳もなかなか珍しかったな。

そついうあいつは夜にバイトが入りまくってた気もするけど。

「世の中、ずいぶん物騒になったよなあ」

「うんうん、おりむーもそつ思つ?」

「さすがにこついつのを聞くと、な」

そついうのから比べれば筈や千冬姉に叩かれて春佳にクスクス笑われてる俺はやっぱり全然マシで、ここはそんな世の中に比べれば安全地帯なのかもしれない。

「さてと、ごちそうさまでした」

「わ、食べるのはやーい」

「男はみんなこんな感じだよ、食べる量は違うけど春佳だって同じくらいの早さで食べるし。それじゃ、お先に」

ま、今はそれよりも目先のことだ。放課後にあるオルコットとの試合と、それより先にある学業。それに神経を向けないとな。またいつ千冬姉にどやされるかわかったもんじゃない。

- Side 春佳 -

「もはや大移動だね……」

明らかにうちのクラスの人数を超える人間がアリーナへ向かっていった。

まあ、非公開じゃないから仕方ないし、その気持ちもわからなくもない。

「なんてったって、世界唯一の男のIS操縦者と入試を首席で突破



した代表候補生の試合なわけだし」

仮に一夏くんが勝っても負けても、代表候補生のISの特性と武装が知れるってのは他のクラスの人にとってメリットが大きい。しかもデメリットはないと来た。せいぜい放課後の時間が少し削れる程度で、それをデメリットと感じる人は、そもそも見に来ない。

「ま、入学して一週間でのこの見せ物はいいい客引きにはなってるよね」

こういうと、戦うあの二人をまるでサーカスか何かの動物に例えるように悪いんだけどさ。

「弟くんはやっぱりお兄ちゃんの応援？」

「に、なるかな。でも、どちらが勝ってもいいかな、とも思ってるんだ」

「え、どうして？」

「だって、クラスメイトだもの。一夏くんが勝ったら面白いし、弟として応援してるけど、オルコットさんの言い分もわからなくないからね。こういうのが実力主義なのは当たり前だし。」

あ、島国の猿、とかはさておきだけど」

だから、とりあえずどちらも応援はしようかなと思う。一夏くんに酷いぞ。って言われたけど、こういう勝負事において、織斑春佳はとても客観的に観戦するのだ。

あまりに実力がかけ離れてたり、片方に入れ込む理由がない限り、僕はどちらにも応援する。

だって、伯仲する勝負ほど見てて面白いものはないからね。

「なるほどなるほど。弟くんってもしかしてお兄ちゃんに冷たい？」

「そんなことはないと思うよ？　僕は兄も姉も大好きなもの。ただ、勝負事を見る側としては一方的な勝負より、接戦してる方が燃えてくるから」

「あ、それはわかるかも！」

「でしょ？　と、ごめんね」

突然の着信にクラスメートの女子に一言謝って携帯を取り出す。相手は……千冬姉？

「はい、もしもし？」

「春佳、今手は空いてるか？」

「空いてますけど……」

「……ああ、今は個人的な頼みだ、いつも通りで構わん。で、だ、確かに手は空いてるんだな？」

「うん。何かあったの？」

千冬姉は先に一夏くと山田先生と篝ちゃんの四人でアリーナへと向かった。何か重要な用事があるみたいだったけど……

「ああ、一夏の専用機が届いたのだが……どうにもセッティングに時間がかかりそうだな。

悪いんだが、オルコットが控えてる方に行ってあいつにそれを伝えてISの点検を頼めるか？

やり方は教わっただろう？」

「教わったけど、僕がやっていいの？」

「監督の先生もいるから大丈夫だ。それに点検は別にISを弄るわ

けでもないからな。違法が無いか見るだけでいい」

「ん、わかった」

「すまないな、頼んだ」

「いえいえ。んじゃ行つて来ます。あ、一夏くんに頑張つてつて言つていて」

「わかった」

それつきり通話を切つて、僕は言われた場所へと駆け出したのだつた。

「オルコットさん」

「あら、どうしました？」

「織斑先生からの伝言です。うちの兄貴の専用機のセッティングに

時間がかかるからしばらく待つて。それに伴ってオルコットさんのISの点検を僕がすることになりました」

ハンガーに着いて、準備万端らしいオルコットさんに千冬姉から聞いたことをそのまま言つと、案の定露骨に嫌な顔をした。  
うん、僕を睨まれても困るってもんだ。

「えつと、監督の先生もいるし、点検するだけだから我慢してもらえるかな」

「……仕方ないですわね。変なことをしたら撃ち抜きますわよ?」

「しないよ、そもそもできないし。それに僕だつてこの勝負は楽しみにしてるんだからそんな野暮なこと、するわけないよ」

「あら、そうなんですの?」

「当たり前です。一夏くんがどこまで食らいつくのか、オルコットさんがどこまで引き離すのか、ISの戦闘を生で見るのも初めてだから余計にね」

授業で教わった通りに点検を進めて行く。僕らメカニックは他の人と違って実施訓練じゃなく、代わりにこうやってISの点検や組み

方、内部構造を習って行く。これは僕の得意分野でもあるから願ったり叶ったりだ。

「ふふ、自分の兄が負けると言っのにずいぶんですわね」

「そうかな？ 足元掬われる展開もありそうだけど？」

「あなたはわたくしを誤解してらっしゃるようですから教えて差し上げましょう。わたくしは子兔も全力で狩りますの。

つまり、本人も望んだ通り、手加減は一切無しですわ。これは高慢でも驕りでもありません、全力で叩くという、わたくしの余裕なのです」

「へえ」

なんだ、戦いの何たるかもわからないただのお嬢様かと思っただけ、なかなかどうして、好感が持てるようなことを言うじゃないか。

強いってことがどういうことなのか、わかつてはいるんだ。だからこそその代表候補生なのかもしれないけど。

「じゃあ、尚更一夏くんには頑張ってもらわないとかな」

「当たり前ですわ。わたくしに啖呵を切った上に、仮にもクラス代

表候補になったのですから、不様は許しません。もつとも、わたくしが強すぎてそうなってしまったら申し訳ありませんが」

「そしたら一夏くんの練習不足だよ」

そして、もし一夏くんがオルコットさんと接戦した場合、オルコットさんはどうあっても一夏くんを意識してしまうことになるわけだ。僕と式みたいに、ね。

自分がどれくらい強いかわかって、かつそれに肉薄して来るんだもん、認めざるを得ないよね。

「そう考えると、これ以上ないくらい僕らしい出会い方ではあったかな、あいつとは」

「？ 何か、おっしゃいました？」

「ううん、こっちの話」

式が目覚めた病院の話を聞いてから、一ヶ月後だっけ？ 実際僕が彼女と遭遇したのは。

会って早々、「こいつは殺さなきゃ」なんて言ったのはあれっきりだったなあ。向こうもみたいだけど。

『オルコット、待たせたな。そちらの準備はいいか？』

「問題ありませんわ」

『わかった。ではこれより始める』

「了解です。では、ごきげんよう」

「ん、まあ頑張つて。それともう一回言っておくね。  
”気をつけて”」

「ふふ、わたくしは油断などしませんわ」

違う違う。一夏くんに惚れ込む可能性があるから気をつけて……つて、言わなきゃわからないか。  
言ってもわからないだろうけど。

「それじゃ、僕も観客席に行かせてもらつよ。あでゅー」

聞こえてたのか、頷きはしていた。けど、その目は確かに驕りなんか一切ない真剣な目だった。  
ああ、これは厳しいよ、一夏くん。この人は間違いなく戦える人だ。



自分が戦えることを、強いことを知ってるくせに手加減とかまったく考えてない目だ。僕みたいに遊ぶ人間とはわけが違う。気をつけて、最初から全力以上で行かなきゃあつという間かもしれないよ？

- side out -

「あら逃げずに来ましたのね」

「はっ、当たり前だろ」

アリーナ中空で、一夏とセシリアはISを展開して向き合っていた。余裕のあるセシリアの笑みに対して、一夏はニヤリと笑ってみせる。

「最後のチャンスをあげますわ」

「チャンス？」

「ええ、このまま行けばわたくしの圧勝は目に見えてますもの。ですから、降参すれば不細工な様を晒さずに済みますわよ？」

「はっ、愚問だそりゃ。そういうのはチャンスって言わないな。それに、そっちにいた春佳から聞いてないか？」

俺はあの千冬姉の弟だぜ？ 敵前逃亡なんかすると思うか？」

「……良いでしょう。今のが最後通告でしたのにね、それでは残念ですが、」

セシリアの顔から笑顔が消える。真っ直ぐに一夏を見据え、まるで射抜くかのような視線で睨み付ける。

（来るッ！）

「お別れですわねッ！」

ISから一夏の脳内に送られる警告。それに合わせて身体を横に移動する一夏。しかしそれよりも速く耳をつんざくような音と、青い閃光が彼へと襲いかかった。

「おわっ……」

直撃こそ避け、一夏の専用機”白式”による自動防御こそ展開されたものの、成形途中だった左肩の装甲が吹き飛び、直後それはダメ

ージとして一夏に降りかかった。

「ぐっ……」

衝撃と神経的な痛み顔に顔を歪めながらも白式から流れる情報で自分へのダメージを把握する一夏。

ブラックアウト防止のシステムがなかったら今の一撃で意識までもが刈り取られかねない威力のそれに、彼は冷や汗を流した。

「くそ、白式の反応に俺がついていけない……っ！」

セシリアは専用IS”ブルーティアーズ”に装備されているメイン武装を一夏に向けて構え直す、再び撃たれる銃撃に対して、一夏は警告よりも先に動いた。

「っと、危ねえっ！」

「あら、よく避けましたわね。猿なりの本能と言っちゃつでしょうか？  
当てるつもりでしたので褒めて差し上げますわ」

「本能って部分是否定できないな」

事実、警告を聞いてからだったらまたどこかしらの部位にぶつかるか、最悪絶対防御を発動し、シールドエネルギーを大幅に削られていただろう。

シールドエネルギーがゼロになったら負けとなるISの試合において、絶対防御は極力避けなければいけないものの一つである。一夏も、それは承知していた。だからこそ必死に避けたのだ。

「まあいいですわ、ならばもつと舞っていただくまで。

さあ、踊りなさい？

わたくし、セシリア・オルコットとブルー・ティアーズの奏でる円舞曲<sup>ワルツ</sup>で！」

直後、凄まじい数のアラートが一夏へと襲いかかる。

同時にレーザー兵器独特の射撃音が彼女の手に持つライフル、”スターライトmk3”から放たれる。一発ではない、何発もの閃光が一夏へ青き光の奔流となって流れ込む。

「おわっ、とっ、とっ……………」

それだけではない。避けた先にはフィン状の自立機動兵器が待ち構えている。

「さあ、休む時間はなくってよ？」

「ぐっ、ざけんな……っ！」

絶え間ないアラートと、放たれる銃撃。その音が重なり、一つの円舞曲として一夏へと容赦なく襲いかかる。

回避しできない一夏は、しかし回避し切れずに被弾する。それは白式のシールドエネルギーを削り、確実に一夏の戦力を削ぎ緒として行った。

（武器……何か武器はないのか？）

距離を取り、一夏は白式の装備一覧を展開した。

……展開して、啞然とした。

「近接用ブレードだけ!?」

冗談だろ、おい。と内心で呟くが、円舞曲の奏者はそんな一夏を待ってはくれない。

自らの曲で踊り手に舞ってもらおうと、遠距離からスターライトを用いて一夏を狂いなく狙撃する。

「のわっ！　くそ、このままじゃどちらにしる八方塞がりなのは変わらないか……」

ええい、ままよッ！」

一覧にあったブレードを選択し、右手に展開する。  
それは、刀の形に近い、しかし間違いなく近接用ブレードだった。

「ふふ、まさか遠距離武装のわたくしに近接武装とは……懐に入れ  
ると思います?」

自立機動兵器を綺麗に等間隔で自身の周囲に展開し、自分も油断な  
くスターライトを一夏へと構える。  
その銃口は全て、一夏を捉えていた。

「……やってやるさ」

自分に言い聞かせるように呟いて、一夏は笑った。

「うおおおおっ!」

「ふん、気迫だけではどうにもなりませんわよ?  
まして直線的な動きなら、尚更ですわ!」

ビットから銃撃が放たれ、一夏の突進はあっけなく止められる。  
慌てて横に飛んで回避するが、それをセシリアが見逃すわけもなく、

「そこですわ！」

「ぐあっ！」

先ほどと同じ左肩に、しかしより胸に近い部位　鎖骨付近を撃ち  
抜かれ、一夏は軽く後退させられた。

「あれが厄介だな……」

「ふふ、そうでしょうそうですね。このブルー・ティアーズの自  
立射撃をそう簡単に避けられると思わないことですわ」

「……？　ブルー・ティアーズ？　それは機体の名前じゃ　」

「ええ。しかし、その名前はこれから取られたものです。自立機  
動兵器”ブルー・ティアーズ”を積んだ実戦投入一号機、だから機  
体の名もそれに”ブルー・ティアーズ”なのです。おわかり？」

「ああ、わざわざ解説どうも」

（ややこしいから以下ビットな）

一夏はニヤリと笑ってブレードを構える。同時に内心でそんなことを言えば、まだそんな余裕があったのか。と更に笑ってしまう。

「あら、まだ笑う余裕がありますのね」

「一杯一杯でいるやつは勝てるもんも勝てないらしくてな。例え不利でも心に余裕は持つようにしてるんだ」

「あら、立派な心がけですこと。けれど、蒼崎先生もおっしゃっていただしょう？

実力の伴わない精神論に意味はないと」

「やって見りゃわかるって。まだ始まってから十分も経ってないんだからさ」

「そうですね。では、次の曲を奏でましょう。せいぜい滑稽に踊りなさい！」

再び奏でられる銃撃に、一夏はとにかく横へと移動した。セシリアの表情は崩れない。

（何か、何かあるはずだ。規則性とか、あいつの手癖とかが）



ビットによる銃撃を避ければ、その先に待つのはセシリア本人による狙撃。  
近接用ブレード一本しかない一夏には、この遠距離ではすることがない。

「くそ、交互に狙いやがって……ん？  
交互に狙ってる……？」

「止まったら蜂の巣ですわよ？」

「うおっ！」

ビット三機による銃撃を回避し、再び移動を始める一夏。

（待てよ、あいつはビットで攻撃して、避けた先にライフルを撃ってくる。

同時に攻撃は　　）

ビットの銃撃が当たるのを我慢し、一夏は避けずに反転、両腕で銃撃を防いでセシリアへと突進した。

「なっ……」

珍しく慌てた様子のセシリアは、ビットをすぐさま自分の手元へ引き寄せ、一夏が進んだだけ後退した。

（来ない！）

両腕の装甲がダメになったが、それに見合う情報が手に入った。

一夏はニヤリと笑い、ブレードを構え直していた。

（しかも、ビットも真正面から撃って来なかった。これには何の意味が……）

「……まさか捨て身とは思いませんでしたが、いささか余裕を持ち過ぎではありませんか？」

「！　しまっ　」

一夏の脳内にISがカバーする背後の視覚が情報として流れ込み、咄嗟に振り返る。

が、それはもう遅く

「撃ちなさい」

背後に回っていたビット二機が一夏を集中放火していた。

「……二十七分、男のくせにこのブルー・ティアーズを初見にしてよく持った方ですね。褒めて差し上げます」

「そりゃどうも」

シールドエネルギーの四割を削られ、実体ダメージは中破。ブレードはかるうじて使える程度。満身創痕の状態で、一夏はまだニヤリと笑う。

セシリアはそんな一夏の笑みも、余裕を持たせているのだろう。と笑って、右手を横に構えた。

「では、そろそろ閉幕<sup>フィナーレ</sup>と行きましょう。ええ、あなたはそこらの男より骨があったことは認めます。なるほど、あなたの弟が言っていたのはこういうことですか」

「？ 春佳が？」

「ええ、せいぜい気をつけろ。と。まあ、これでおしまいです。ブルー・ティアーズ」

セシリアの声を受けて、四機あるビットのうち二機がその姿を消す。  
高速で移動し、一夏へと迫っているのだ。

「……そっか、春佳がそんなことを言ってたのか。なら  
もうちょい気をつけてもらうぜ、セシリア・オルコット」

「悪あがきを……これではあなたは終わりですわ！」

（チャンスは一度きり。失敗したら、間違いなく負ける）

装甲がない部位に攻撃を受ければ、絶対防御により間違いなくシールドエネルギーはゼロになる。しかも、今の一夏の装甲が吹き飛んでいる場所が多く、当たればほぼ確実に絶対防御が発動するだろう。

（このまま逃げてたってどうせ負けちゃうんだ。なら　　）

ISの視覚よりも速く、一夏は背後へと振り返る。  
同時に脳内に情報が入り、視界にビットが二機、現れていた。

「やれることをやった方がいいよなっ！」

銀色一閃。一夏が真横に振られたブレードに手応えを感じた瞬間、二機のビットはそのスラスターを破壊され、地面へと落下していた。

「なっ……」

「ビンゴってか。」

「はっ、やればできるもんだな、俺も」

ブレードを肩に担ぎ、そのままセシリアへと振り返って、ブレード切っ先を彼女へと向ける。

「次はどうしたよ。来ないなら、こっちから行くけど？」

「っ……ブルー・ティアーズ！」

残った二機がセシリアの周囲から姿を消した。

再び一夏は振り返り、先ほどと同じ手順で背後に現れた一機へ一閃。地面へと落下させた。

「一つ、気付いたんだ。お前は、そのライフルとビットを同時には扱えない」

「っ!？」

ここにきて初めてセシリアの表情に変化が入った。ビットを破壊されたこと、そして一夏に見抜かれたことが動揺を誘ったようだった。

「おー、凶星か。それと、もう一つ」

セシリアへ向けて突進を始め      ようとして、一夏は背後へ振り向き様にブレードを振り抜いた。

「こいつを俺の死角に潜り込ませる。いくら全方位をカバーする視覚って言っても、視界は俺の目だけだからな。やっぱり反応は遅れるさ。その隙を狙ったんだろ？」

「凄いよな、そんな精密な制御ができるなんてさ」

「く……よくこの短時間で気づきましたわね」

「まあな。お前の大嫌いな男だつてやるときはやるんだよ。」

さて、こっからは本体同士のぶつかり合いだ。こっちからも行くぞ  
「！」

「……ふん、上等ですわ!      あなたごときわたくしが撃ち抜いて

差し上げます！」

一夏が加速するのと、セシリアが引金を引くのは、ほぼ同時だった。

「ほー、さすがお前の兄にして世界最強の弟か。戦闘のセンスがずば抜けている。いいな、才能があると言うのは」

「でしょ？ 男で唯一ISが乗れるのも頷ける才能だよ。ま、その分身身の戦闘の方は僕が貰っちゃったけど」

セシリアに対し、互角に肉薄する一夏を眺めて春佳はクスクス笑った。隣に座る橙子も、珍しく驚いているらしくふむ。と思索した。

「ならば、お前とアレがくつついていたらISも生身も相当戦える化物が生まれるわけなのか」

「……それはそれでどうなのかな」

本気で言っているのか、真顔でそんなことを言う橙子に、春佳は苦笑いしか浮かべることができなかった。

「はぁー、凄いですねえ、織斑くん」

「……あのバカ、浮かれているな」

千冬達の眺めるモニターの先には、セシリアの狙撃を回避して確実に近づいて行く一夏の姿があった。興奮しているのか、やや顔を赤くして千冬に言う真耶に対して千冬は呆れたように返した。

「え、なんですか？」

「さっきから左手を開いたり閉じたりしているだろう。春佳もだが、あいつらがアレをしている時は調子に乗っている時で、大抵失敗する」

「そうなんですか！？」      さすがご姉弟ですねー、よく見てらっしゃいます」

「ま、まあ……一夏も春佳も私の弟だからな、当たり前のことだ」



「あ、もしかして照れてます?」

「……」

「い、いたたたたたっ！ アイアंकローはダメですって！  
い、痛いっ！  
ご、ごめんなさいいっ！」

ミシミシと頭を締め付けられる真耶の後ろで、箒はただ黙々とモーターを見ていた。  
手で祈るような乙女ではないと、自分でもわかっている。だから、外には出さない。  
心の中で、想い人を応援する。

（……負けるな、一夏）

一人だったら手を組んで見守っていたかもしれないほどの、心配と緊張感を含めて。

「うおおおッ！」

金属音が鳴り響き、ブレードとスターライトが激突する。それは、一夏がセシリアを捉えた、と言うことだった。

「やっと……捕まえた」

「くっ……」

一度距離を置き、再び突撃する一夏。

もうあとは攻撃するだけ。一夏の頭の中はそれだけだった。だから

セシリアの笑みを見た瞬間、彼の背中は冷や水を被ったように凍りついた。

「捉えたのはこちらですわ」

加速は止まらない。全力で駆け出したのだから、止まるわけがない。セシリアのISのスカート状のアーマーの突起が外れ、一夏へと向かった。

「おあいにく様、ブルー・ティアーズは六機あってよ！」

しかも、それは今までのレーザーを撃つ銃器ではなく、  
弾道型”

直後、白い爆発が一夏を包み込んだ。

「いちかつ……！」

モニターを眺めていた篤から悲痛な声が溢れた。大声にならなかつたことに驚くが、そんな場合ではない。

目の前でも真耶が慌てているが、千冬はニヤリと笑って、そんな真耶を一蹴した。

「バカ者が、機体に救われたな」

「「え？」」

爆煙が晴れ、そこに、一夏はいた。

「な……そんな、今まで初期設定だけで戦っていたと言っの！？」

「よくわからないけど、最適化が完了したってことはそうなんだろうな。」

ようやく、俺の機体になったってことなんだろう、これは」

純白に輝く機体はそのままに、一夏も手に持ったブレードを見つめた。

先ほどと違い、日本刀の形に似た形状を持つ近接用ブレード、”雪片式型”。一夏は、それを強く握りしめた。

「まったく……千冬姉には何から何までやってもらってばっかだな。ホント、世界一いい姉を持ったよ」

「は？ あなた、一体何を」

ふと、視線の先に何かが見えた。本来ならば見えるはずのない距離だが、ISによって強化されている視力だからこそ、そこに誰がいるか、一夏にははっきりとわかった。

春佳が、真っ直ぐ一夏を見上げていた。

（あいつ、蒼崎先生と仲良かったんだな）

隣にいた橙子が意外だったのか、思わず笑ってしまう。その様子にセシリアはますます訝しげに一夏を見つめた。

「!」

しかし、春佳を見ていた一夏は気づかず。そして、視線の先にいた春佳は、一夏に向けて右手を上げた。親指を空に向け、サムズアップの形にする。そして、その口元が動いた。

「がんばれ、か。わかってるよ。弟も見てるんだ。恥ずかしい格好のまま終われるかって言うんだ」

「ああもう、意味がわかりませんわ!」

「要するに、とりあえずは春佳と千冬姉の名前を守るってことだよ。俺達は家族、だからな」

ニヤリと笑って、一夏はセシリアへ視線を向けた。睨むのではなく、強い眼差しでセシリアを見つめる。手にした雪片式型の扱い方はイメージできている。姉にも、弟にすら内緒でこっそりと千冬の戦うビデオを何回も何回も何回も見たのだ。イメージできないはずがない。

「っ……」

「ビットはもうない。ミサイルももう簡単にはくらってやらない。」

今度こそ、正真正銘本体同士の一騎討ちだ！  
来ないなら、こっちから行くぞッ！！」

風を切り、ISを除くあらゆる乗り物の限界を超えた速度がセシリアへと迫る。

観覧席にいる人間には、一夏が白い閃光となってセシリアへ突撃するようにはしか見えていないだろう。

春佳が、実に楽しそうにその光景を眺めていた。

「くっ、この……っ！」

セシリアの狙撃は、一夏を捉えることができない。

白い閃光は、青い光を避けて確実にセシリアへと迫っていた。

（後退は……間に合いませんわ。ここは一旦受けて）

「やっとちゃんとその顔を拝めたぜ、セシリア・オルコット！」

「なっ、もう!?!」

セシリアの思考に、一夏はその身を持って割り込む。

この試合で、一番の肉薄に観客席は沸き上がり、一夏は初めて、セシリアの眼前に現れた。

（なんて……強い瞳なんですか？　こんな瞳をする男なんて　）

自分へと攻撃を向ける一夏の目は、真っ直ぐにセシリアの瞳を捉えていた。

そして、それは捉えたまま離さない。

「うおおおおおおおッ！！」

「しまっ……」

咄嗟に構えたスターライトは金属音と共に中空へと弾かれ、一夏が雪片式型を大上段に構えた。

「行けええええッ！！」

このまま振り下ろして、おしまい。セシリアも、自らの敗けを悟り始めた瞬間、それよりも速く、ブザーが鳴り響いていた。

『試合終了となります。勝者、セシリア・オルコット』

「……え？」

目を瞑っていたセシリアの視線の先には、自らの勝利を告げるモニターが広がっていたのだった。



## 五（後書き）

予想以上に戦闘が長引いて、この後の話をここに組み込んだら大変な長さになってしまったので次回に持ち越しとなりました。

細かく書きすぎたかなあ、と少し反省。おかげで投稿しようと思ってた日から二日も経ってました（笑）

そんなこんなで一夏とセシリアの戦いは終わり、次回で一章のラストです。

ではでは、次回のあとがきにて会いましょう！

## 六

「で、さんざん持ち上げておいた結果がこの敗北か、バカ者がいいか、固有武装を入手した時点でまずその特性くらいは把握しろ。それができないほど不利だったわけでもないだろう」

「まったくもって……」

「この敗北を糧にISをもつと理解しろ。白式はもはや完全にお前のものとなっているのだからな。いいな？」

「はい！」

「よろしい。……ゆつくり休んでおけ」

それだけ言っで、千冬は控え室を出て行った。

言うだけ言っですぐに背を向けてしまったから一夏も簾も、そして後ろをついて来る真耶も気づかない。千冬の口元が笑みの形になっていたことに。

「簾も、悪かったな。負けちまった」

「……まったくだ。不甲斐ない」

「ははっ、ぐうの音も出ないよ」

「そうだな。だがまあ……その、なんだ、不利な状況でも立ち向かう様はその、か、か……」

「か？」

「か、かろうじて褒めてやらなくもない」

「うわ、厳しいな」

（な、何を言っているのだ私は！ 素直に格好良かったぞ。と言えば良かったのに）

肩を竦めておどける一夏に、箒は内心で自分の頭をポカポカと叩いた。

「しかし、相手が代表候補生の主席って言っても……やっぱり悔しいな」

そんな筈の内心など知らず、一夏は小さくため息を吐いた。

「あとちよいで届きそうだったのにな。そう思つと、めっちゃくちゃ悔しいよ」

「それが、今のお前と相手の差だろう」

「だな」

「……一夏、お前が悔しく感じるなら、その……特訓、続けてやらないこともない」

「え？」

「だ、だからっ……これからも特訓をするか？　と聞いているんだ！」

「いいのか？」

「お前が望むなら、だ。千冬さんに教わった方がいいとは思つが……」

「いやいや、千冬姉は個人的にそういうのを教えてくれないよ。それに、えこひいきに見られるのも嫌だしな。だから、箒がいいなら、頼むよ」

「う、うむ！　良いだろう。一夏がそこまで言うのなら私が…  
…っ、付き合ってやろう。覚悟しておけよ？」

「おう。」

「……ところで箒、顔が赤いみたいだけど大丈夫か？」

「だ、大丈夫だ、問題ない！」

「ちょっと懐かしく感じるセリフだな、  
まあ……箒が大丈夫ならよろしく頼むよ」

やはり赤い顔の箒を見て、一夏は呟いて箒へと笑いかけたのだった。

「……ふう」

蛇口を閉じて、シャワーから流れる音を止める。  
個室から現れたセシリアは、掛けてあったタオルを手に取って、顔にそつと当てた。

（先ほどの試合　　）

最後の最後、自分に目掛けて斬撃が放たれる直前で一夏のシールドエネルギーがゼロになった。  
理由こそわからないが、あのままだったらセシリアは間違いなく

「負けていましたわ。わたくしは勝ちましたが、それは結果論。間違いない、わたくしは負けていました」

言葉に出して、試合内容を現実として受け入れる。  
けれど、不思議なことに不快感は一切襲って来なかった。

「……織斑、一夏　　」

父親を始め、男なんて全て卑屈で、野蛮だと思っていた彼女にとって、あれほど真っ直ぐで強い瞳をした男は初めてだった。  
あの男の双子の弟は言った。気をつけた方がいいと。それは間違っていないかった。だからこそ、負けてもおかしくない展開になったの

だから。

「おりむら、いちか」

名前を呼ぶ度に左胸の辺りが暖かくなる。

心臓が呼応して、不思議な緊張感をセシリアに与えた。

名家に婿入りし、母への引け目からか卑屈な父を見てきた上に、両親が亡くなつてからは自分へ媚びる男しか見てこなかった彼女は、情けなくない男を自分の伴侶としよう。と心に誓っていた。そして、そのお眼鏡にかかる男が、見つかつてしまった。

「……」

知りたい。あの男のことを、もっとよく知りたい。

けれど、試合は終わったばかり。いくら代表候補生と言え、やはり彼女も一人の少女であり、意識してしまった相手へ簡単に話しかけられるほどの度胸はない。まして、初めてなのだから余計にだ。

「どうしましょう」

どうやって彼のことを知ればいい？

そんなことを考える彼女の脳裏に、一人の少年の姿が浮かんた。

「そうです！　あの人なら間違いありませんわ！」

織斑一夏に似ていないようで、似ているような少年、織斑春佳。彼ならば答えてくれるだろう。ならば、今すぐにでも会いに行かなくては。

そう決めてからのセシリアは早かった。

「ちょ、ちょっと！　お待ちになって！」

「うん？　あ、オルコットさん。さっきはお疲れ様。楽しかったよ、二人の試合」

春佳の姿はすぐに見つかった。シャワー室を出てすぐに校舎のロビーで発見できたのは彼女にとって良かっただろう。春佳は椅子に座って缶コーヒーを飲んでいた。

「それはありがとうございます。……と、そんなことは今は良いのです！」

あなたに用があつて来たのですわ」

「僕に用事？　えっと、なにかな」



「……」

「……」

「……」

「……あの、オルコットさん？」

「ひゃいつ!？」

黙って俯き、両手の人差し指の先をくつつけたままのセシリアに業を煮やした春佳が話しかければ、セシリアは大声で反応して後退する。それを見て、春佳は困ったように笑った。

「いや、用事なら言ってもらえないと答えられないんだけど……」

「そ、そうですね」

笑うと似てるかもしれないわね。なんて思って、そのまま一夏の姿を思い浮かべてしまい再び固まってしまふ。

「 ははーん、なるほどね。読めたよ、オルコットさん」

「 な、なんのことです? 」

「 それはズバリ、一夏くんのことだと思っただけど、どう? 」

掛けてもいないのに眼鏡を掛け直す真似をして、イタズラっぽく笑う春佳。

答えはしなくとも露骨に狼狽えたセシリアの姿を見て、彼は一人頷いた。

「 なるほどねえ……だから言ったでしょ、 ” 気をつけて ” って」

「 え?      それは、試合のことではなかったのですか? 」

「 うん。 気をつけないと、一夏くんに惚れちゃうよ?      ってこと」

「 なっ……そ、そんなことわかるわけないでしょう!      どんな忠告ですか! 」

「だって、素直に言っただって鼻で笑ってたでしょ？  
だから一応と思って」

「……あなた、もしかして面白がってらっしゃいませんか？」

「うん」

ニコニコ笑ったままの春佳をジト目で睨むも、あっさり頷かれてしまふ。

隠す気のまったくない相手に、セシリアは大きくため息を吐いた。

「あなたのような男も初めて見たわ。まったく、兄弟揃って変わってらっしゃるのね」

「褒め言葉として受け取っておくよ。  
で、僕に何を聞こうと？」

「それは……お、織斑一夏のことを詳しく聞こうと」

「はい、ダメー」

「ええ！？　どうしてなの！？」

「そういうのは本人に聞かなきゃダメに決まってるでしょ？好きな人のこと自体は本人から聞きなよ。今日はこれから僕と一夏くんの歓迎会してくれるらしいし、ちょうどいいと思うよ」

「で、ですが……先ほど試合をしていたのですよ？」

「あの人はそういうのを気にしたりしないよ。気軽に「一夏さん」なんて話しかけちゃって平気だよ。弟が言ってるんだから大丈夫」

「それも面白がって、という可能性は？」

「ないよ。人の恋路を邪魔するヤツは馬に蹴られるかバラバラに刻まれて死ねって言うじゃない？」

僕は一夏くんに恋する人には悪人でもない限り平等だからね。からかったりしたとしても、困らせる気はないよ」

言って、春佳は立ち上がる。何が嬉しいのか、その表情はニコニコ笑顔のままだ。

「だから大丈夫。ま、騙されたと思って話しかけてみなよ」

「例えが少し残酷過ぎる気がします……そうすわね、わかりました。あなたを信じましょう」

「ふふ、ありがとう」

「いえ、それと……気持ち悪いなどとあなたを口汚く罵ったりして申し訳ありませんでしたわ。わたくしとしたことが、感情的になりすぎていたみたいですわ」

「あはは、気にしてないからいいよ。ま、これからはクラスメートでお友達ってことでよろしくね」

「ええ、織斑……一夏さんのことも含めてよろしくお願いしますわ、春佳さん」

「はいはい。こちらこそよろしくね、セシリアさん？」

セシリアの言葉に頷いて、春佳はコーヒを一気に飲み干した。その間も変わらない笑顔に、セシリアは首を傾げる。

「ところで、先ほどからずっと笑っていますが、何か嬉しいことでも？」

「うん。一夏くんが想像以上に強かったことと、それとは別に、胸のつつかえを取ることができたことが嬉しくて嬉しくて」

またからかわれるかもしれない、なんて内心で警戒していたセシリアだが、春佳はとても嬉しそうにセシリアへと話した。  
自分のことではないことに心の内でホッとして、それから

「胸のつつかえですか？」

「そ。僕の周りには言葉遊びが好きな人が多すぎて良くないね。僕はそこまで理解力がある方じゃないってのに。だから嬉しいんだ、言葉の意味がわかったことが」

「そうですか」

「そうですね。と、そろそろ始まるね。一応主賓扱いしてもらえるみたいなので僕はもう行くね？」  
じゃ、セシリアさん”も”頑張ってね」

缶コーヒーをゴミ箱に捨てて、春佳はロビーを後にして行く。  
その姿を見送って、セシリアは椅子から立ち上がった。

「セシリアさん”も”？」

嫌な響きを含むその言葉に、少しばかりの不安と疑問を抱きながら。

- Side 春佳 -

『織斑一夏くん！ 春佳くん！ IS学園へいらっしやい！』

クラスメートの皆さんからの声に、僕と一夏くんは困ったように笑ってありがとう。と返した。

実のところ、僕はたぶん一夏くん以上に困ってて、恥ずかしがってと思う。だって僕はIS操縦者でもないし、メカニク粋なら僕以外の男だって入学することはできるんだから。ほとんどいないだろうけど。

だから僕も主賓って部分はやりわりとお断りしたんだけど、そのお断りをお断りされちゃったのだ。だからさっきセシリアさんには軽く言っただけ、なかなか困ってる。

「おりむー二号、顔が真っ赤だよ？  
もしかして、照れてる？」

布仏さん改めのほほんさん（一夏くん命名）が僕の真横にいつの間

にか立っていて、僕の頬をプニプニと人差し指で押してくる。

く……この手の状況は初めてだから対応ができない。どうすれば

「ふ、からかう側の人間がからかわれると弱いと言っのは本当らしいな」

「ほ、篝ちゃん？」

「あ、本音の言う通りだー！

弟くんってばそうするとほとんど女の子みたいだよ？

かわいいー」

「わっ、あ、あの……」

い、一夏くんまで笑ってやがる……これは何かの間違いだ。くそう

……

とか思ってたら、一夏くんもクラスメートの女子の並みに流されていた。しかも僕より遥かに大きい波だ。

「うわー、モテる男は辛そうだね、篝ちゃん？」

「……………」



「あいたつ！ 殴るのは一夏くんだけじゃないの！？」

「最近気づいたのだが、別に今のお前は病弱なわけでもないわけだ。つまり、春佳を叩いても問題はないわけだろう？」

「む、弱者を叩くの？」

「心に思ってもないことを言っな。それにからかつお前が悪い」

「だって、箒ちゃんがあまりにもいじらしいんだもん」

「……何か言ったか？」

「い、いえ、何も……」

やっぱりさ、今の世の中だからとかISだからとか関係なく、女の人って必要以上に怖いと思うんだ、僕。

「あー、でも遂に箒ちゃんの暴力が僕にまで向かって来るかぁ……」

「自業自得だ。私は悪くないぞ」

「うん、一夏くんじゃないんだからさすがにそれはわかってるよ」

「どうだかな。似てないと思ってるのはお前達自身だけで、二人はやはり双子だ。と言えるくらいは似ているぞ？」

「……それでも一夏くんほど鈍感じゃないと思うな」

「ふふ、果たしてどうだか」

む、なんだろう、篝ちゃんに舌戦で押され気味だ。  
まずい、魔術師たる僕が舌戦で押されてちゃ話にならない。

「ホントだよ？」

「一夏も自分に向けられる感情以外には敏感だぞ？」

……言い返せない。それがわかるから言い返せない。  
いや、でも僕は自分に向けられる殺気とかには敏感だからたぶん大丈夫、のはず。

「変わったかと思ってたが、根幹は相変わらずか」

「どういうこと？」

「昔と同じで、あまり変わってないと言うことだ」

「む、そんなことは「ええっ!」？」

なんか勝ち誇ったように笑う篤ちゃんに僕が何か反論しようとするより速く、一夏くんの大声が響いた。

一体、どうしたんだろ。僕らの視線が一夏くんに向けられる。そこには、セシリアさんと確か……新聞部の人がいた。

「どうして俺がクラス代表になってるんだよ！」

「それはわたくしが辞退したからですわ」

「辞退!？」

「ええ、クラス代表は実戦の機会が多く、ISの経験をそれだけ積める。つまり、一夏さんが成長する機会がそれだけ増えるわけですよ」

「だ、だけど……」

「いやあ、なんだかんだでわかってるじゃないセシリアは」

「やっぱり世界で唯一のIS操縦ができる男子なんだから盛り上げないとよね！」

「織斑くんは貴重な経験が積める、私達は情報（と写真）が売れる。ほら、一石二鳥じゃない？」

「それはそうかもしれないけど、って商売すんなよ！」

本人には聞こえてないかもしれないけど、写真も売る気なんだね……  
…あはは、女の子ってホントに怖いや。僕、IS操縦できなくて良かった……

「そんなわけで、織斑くんがクラス代表でいいと思う人！」

『はい！』

僕を含むみんなの声が響いて、一夏くんのクラス代表は決定した。  
一夏くんから恨むような視線を向けられてしまった……

「春佳、お前まで……」

「ごめんね、一夏くん。数の暴力には屈するしかなかったんだ……」

面白そうかも、なんてちょっと思ってるけど、一夏くんに怒られるのでくれぐれも言わないでおく。  
数の暴力に屈したのも嘘じゃないし。さすがにあればフォローできないよ、お兄ちゃん。

「そ、それでなのですが一夏さん、わたくしのように優秀でエレガント、華麗にしてパーフェクトな人間がIS操縦を指導すれば間違いないくあなたはみるみる技術を」

「生憎だが」

ちよつと頬を染めて、偉そうな感じで胸を張って一夏くんにアピールしようとするセシリアさんに、横から声がかかった。  
つて、箒ちゃん？ あれ？ さっきまで僕の真横にいたよね？

「一夏の教官は私で事が足りている。」

”私が” 直接頼まれたからな

これから殺し合いでも始める気かってくらいの殺気を振り撒いて、まるでヤクザのようなドスの効いた声で言ってセシリアさんを睨む  
箒ちゃん。

すっごい怖いんだけど…… 箒ちゃん、あんなに怖かったっけ？

「あら、あなたはIS適性Cランクの篠ノ之箒さんではないですか。  
その篠ノ之さんがAランクのわたくしを差し置いて、教官をする  
と？」

「ラ、ランクは関係ない！  
そうだ、頼まれたのは私だ。一夏がどうしても懇願するのでな」

「いや、懇願はしてないけど……」

ギロ。と殺気を直撃させられた一夏くんが黙り込む。  
おお、これがいわる修羅場ってやつか。初めて見るかもしれない  
けど、その中心が双子の兄貴ってのは、どうなんだろう。喜ぶべき  
なのかな、やっぱり。

「あー、言い合いは後にしてよ。これじゃツーショット写真は難し  
そうだし、仕方ないか……」

ほら、並んで並んで、写真撮らせてもらっから！」

新聞部の先輩が何かをブツブツ言ったかと思うと、カメラを持って僕らに大声で移動を促した。

一夏くんの両隣は当然篤ちゃんとかセシリアさんで、更にみんな周囲をガッチリ囲んで包囲していた。

「うわー……」

あまりの連携に、思わずドン引きしてしまう僕。  
写真は加わらなくてもいいかな

「ほらほら、おりむーも行こうよー」

「わっ……」

離れようとしたらのほんさんに手を捕まれ、否応なしに一夏くん包囲の一人に加えられてしまう。

位置は一夏くんの少し下で、セシリアさん寄りだ。

「……なあ春佳、俺ってさ」

「世界一運の良い男だと思うよ?」

「……」

女の子に囲まれて写真だなんて、弾くんが見たら間違いなく発狂する。

だけど、一夏くんは僕の返答が不満だったのかちょっとムツとして僕を見てて、それから諦めたようにため息を吐いた。

「いいじゃない、これも学生時代の思い出だよ」

「……それもそうだな、いい思い出だよ、ホント」

「はい、行きまーす。」

$35 \times 51 \div 24$  はー？」

「え？      えつと、2？」

「ぶー、 $74 \cdot 375$  でした」

直後、フラッシュがした。いや、そんな計算咄嗟にできないから、普通は。



「うん、ちょっと違ったけどいい絵が撮れました。それじゃ、ありがとね」

そう言つて去つて行く新聞部の人。いろいろ聞かれまくつたのか、一夏くんはホッとしたように深呼吸をしていた。

「大丈夫？」

「正直、女子パワーを侮つてた」

「あ、それはわかるかも」

女の子って、こんなに元気なのか……と思う。式とか橙子さんはこの手のタイプですらないし、中学時代はここまで賑やかではなかったと思う。

ああ、そっか、ここ女子校だから当たり前か。

「「一夏（さん）！」」

「おわっ！？　　な、なんだよ二人とも」

「いいから！」

「来てもらいますわ！」

ドナドナよろしく、篝ちゃんとセシリアさんに手を引かれて連れ去られる一夏くん。

悲しそうに僕を見るけど、僕に助ける手段はありません。あっても怖くてできないので、僕は苦笑して見送ったのだった。

「学生時代の思い出、か」

あんなに乗り気じゃなかったのに、今はこうして楽しんでるんだから、僕も現金だなあと思う。

まあ、お仕事もちゃんとこなすけどね。

「まずは、この学園に潜んでる誰かさんを見つけなきゃね」

両脇に篝ちゃんとセシリアさんをセットされていろいろ言われる一夏くんを見ながら僕は小さく呟いたのだった。

## 六（後書き）

これにて一章は終わりとなります。

書き終わって思ったけど、これでまだ原作の一卷の半分くらいなんですよね……

長く書きすぎだよ自分！

一体どれくらい書くつもりなんだろう……自分でもびっくりしてます。

でも書いてて楽しいんで頑張って書きまわります。なので、これからも付き合ってくださいと感謝感謝でございます。

次は二章で、言わずもがな、あの子の登場回になるのですがその前にちょっと話を挟みます。

いわゆる挿話ってやつです。一夏とセシリアの試合前の土曜日の話をやろうかなと。

空の境界色も二章から増えて行くので、その前振りみたいなものです。

そんなわけで、これから御崎共々よろしく願います。

ではでは、次回のあとがきで！

## 魔術師のおしごと（前書き）

最初に、今回の話は暴力的な描写や表現が入っております。

苦手な方は注意をされるか、戻るを選択してください。

では、始まり始まり。

## 魔術師のおしごと

「で、その溜まり場を私に聞けって橙子さんに言われてきたと」

土曜日、一般的に休日となったこの日、春佳は街にある喫茶店”アーネンエルベ”に顔を出していた。

IS学園の制服ではなく、猫耳のついた黒いパーカーにジーンズと、私服だ。

向かい側にはシスターを思わせる制服の少女が二人。うち一人は春佳を半目で流し見てコップの紅茶を飲んでいた。もう一人はどうすればいいかわからないのか、無言で二人のやり取りを眺めている。

「そついうこと。ああ、行くのは僕一人だからね」

「当たり前です。私はこの後この子と買い物に行くんだから。ね、藤乃」

「え？ ええ、そうですね」

名前を呼ばれた女性、浅上藤乃は曖昧に返して笑った。春佳がそれを見て、それから目の前の少女へ向き直る。

「そつか。で、鮮花、場所はわかるの？」

「噂に聞いた場所ならね。一応メモに書いておいたから」

「ん、ありがとう」

「いえいえ、くれぐれも気をつけて」

「はは、大丈夫だよ」

「あのね、誰が春佳の心配をしてるって言ったのよ。相手の心配よ、相手の」

「大丈夫だって、僕だって我慢できるんだから」

「……まあいいわ。でさ、IS学園ってどうなの？  
やっぱり女の園？」

「まあ、そうなんだろうね。僕もタジタジになることがあるし……  
僕より一夏くん 兄貴のが大変そうだけどね。  
明後日の月曜日にクラスの代表候補生っていうエリートと試合しな  
きゃだし」

「うわあ、それはご愁傷様。唯一の男性操縦者も大変ねえ、珍獣扱いされてない？」

「ううん、むしろモテモテ？」

「へえ、やるじゃない、春佳のお兄さん」

「どこもお兄さんてのはモテるんじゃないのかな」

「あー、否定できないかも。幹也も変なのにモテるし」

「式とか式とか式とかね」

「うー、その名前を連呼するなあ！」

「ふふ」

「藤乃も笑わない！」

もう、ちよつとお花を摘みに行くから」

「あー、はいはい。いつてらっしゃい」

藤乃と春佳に笑顔で手を振られ、鮮花はムツとしたままトイレへと歩いて行った。

それから、春佳は藤乃に視線を向ける。

「それ、完全に見えなくなっちゃったのかな？」

「え？」

「いや、人づてにしか聞いてなかったから一応気にしててさ。透視までできてたって式から聞いてたから完全に見えないのかなって思ってた」

「……あなたは、やっぱり、あの時の中学生の人、ですね？」

「うん、そう。両儀式の知り合いだよ。」

ああ、警戒しないで、僕はもうキミにどうこうするつもりはないし、する気もないから。あと、鮮花も無関係だから、安心して」

「そう、ですか」



「うん。で、見えてるの？」

「輪郭や、おおよその外觀などは一応……  
歪曲<sup>ま</sup>げることも可能です」

「ん、なんだ、ずいぶん力を上手く扱えてるじゃない。  
精神的に成長でもしたか、悟りでも開いたかな」

「コーヒーを飲んで、藤乃の目を見つめる春佳。  
藤乃はその視線から逃げるように俯いた。

「そんな、私はまだ怖いです。また、いつあんなことになるか……」

「大丈夫だよ。キミは人を殺す楽しみを覚える前に止められたから。  
またあんなことにでも巻き込まれない限り、大丈夫だよ」

「でも……」

「平気平気。あの式だって、人は殺さないって言ってるんだから、  
あいつより日向にいるキミがそうなることはないよ。  
それになったとして、それはそれ。その時はそうだね  
”私”が殺してあげるから、それでいいかしら？」

「!？」

突如変わった声に、藤乃は目の前の少年のはずの輪郭を見つめた。髪も長く、先ほどの声は間違いなく女のもの。中性的な声でもあったが、この少年は実は少女だったのか、と考えてしまう。

「あ、ごめんね。びっくりした？」

「二重人格か何か、ですか？　それとも、本当に女の子？　でも、さっきはIS学園に男子としてって言ってましたよね？」

「ふふ、僕は二重人格でもなければ、正真正銘男だよ」

「では、今は……」

「キミの”眼”みたいなものだよ。と言ってもこれは僕が意図的に生み出した異常性なんだけどね。僕はさ、式やあの時のキミ以上に破壊や殺害に対する渴望が強いバケモノの。この身一つじゃいつか理性ある殺戮者に成れ果てるだろう。って言われたくらいには」

「……」

「ああ、今は大丈夫だよ？  
だって、その為に用意されたのが私なんだもの」

「！　　また声が……」

「壊れない為に、壊れたモノを用意する。そしてその空っぽの容量にその渴望を注ぎ込むの。ほら、二面性ってあるでしょ？  
私は織斑春佳に用意されたその二面性。織斑春佳であって、織斑春佳でない為にいる存在。だから女という、織斑春佳が絶対になれない存在の形を取らなくてはならないの。けど、僕達の本質は同じ」

中性的な声と女の声が代わる代わる藤乃に向けられる。

藤乃は目の前の少年に驚き、小さく息を吐いた。

「壊れてますね、あなたも」

「うん、自覚してる。なんせ、生まれてからずっと、僕は自分の根幹と向き合わされてるんだからね。ね、だから大丈夫だよ。  
僕達に比べれば、キミはまだまだまっとうな人間だから」

「ふふ、そうかもしれませんね。ありがとうございます」

「いえいえ」

「あれ、どうしたの二人とも。もう意気投合とかしちゃったの？」

「そんなとこかな。じゃ、僕はもう行くから、ありがとね、鮮花」

「気にしないの。可愛い後輩の頼み事だしね、聞いてやらないと先輩らしくないじゃない？」

「いつからキミの後輩になったのか、記憶にないんだけど」

「年下なんだから後輩でいいのよ」

「はいはい。じゃ、お先にね。」

浅上さんも、お元気で」

「はい、織斑さんも」

小さく笑って、春佳は自分の頼んだコーヒー代を置いてアーネンエールベを出て行く。

その姿がドアに隠れて消えるまで見送っていた鮮花は、藤乃へと視線を向けた。

「あいつ、式くらい変わってるし、自分で偽善者だ。とか言ってるけど、そこまで悪いやつじゃないんだよね。なんて言つか、背伸びする子供みたい」

「それは      なんとなくわかります」

「でしょ？」

それから、友人二人の語り合いはしばらく続いていたのだった。

「おい、こっちの女も気絶しちゃったぞ」

「んだよ、まだ全然やり足りねえぞ。仕方ねえ、こいつ叩き起こしてまたやるか？」

路地裏の少し開けた場所に、男が数人集まっていた。  
一人が、固まりから外れて倒れている全裸の女性を軽く足で小突いた。

「そうすつか。ってかき、片山さん、いい加減IS学園のヤツもヤ  
つちまいせん？」

その男に賛同するように下品な笑いを浮かべた男が、固まりから外  
れて後ろに座る男へ振り返った。そこにいたのは、ニット帽を被つ  
た男だった。肩幅が広く、腕や足、腹の肉厚もこの集団では間違い  
なくトップクラスの体格で、太っていると言っよりも筋肉質と言っ  
た方が正しい。

片山と呼ばれた男はくわえていたタバコ三本を投げ捨て、首を横に  
振った。

「バックについてるヤツにIS学園のヤツはやるなって言われてる  
って言ったる。

安心しろよ、お許しが出りやすぐに取っ捕まえて来てやつからよ」

「へへ、さすがだぜ、片山さんは」

「当たり前だろうが。と、俺も楽しむとすつか、おい、そいつ起こ  
せ」

「了解っす。さて、どう起こす      ん？」

目の前で倒れる女性に下卑た笑みを浮かべて手を伸ばそうとする男

の視界に、何かが映る。  
それは、路地からこちらへ歩いて来る猫耳フードを被った誰か、だった。

「おい、誰か来たぞ」

「ホントだ。おい、オメー何モンだよ」

「……」

フードの誰か　織斑春佳は言葉に答えずに、フードの中から男の足元に横たわる女性と、もう一つの男の集団の中心に横たわる女性に視線を向けた。それから小さくため息を吐き、ギリ。と歯が軋むほど強く口を力を入れた。

「おいおい、だんまりかよ」

「ここはテメーみてえなガキの来る場所じゃねえぞおい！」

集団の余裕か、男達は春佳に罵声を浴びせては笑い声をあげる。

春佳はそれにも答えず、今度は奥にいる男　片山へ視線を向ける。

「もしかして可愛い子ちゃんかあ？　なら可愛がってやろうか？

こいつみたいによお！」

「ぎやははは、やっべ、それいんじゃないね？

けど男だったらどうするよ」

「したらボコって身ぐるみ剥いで終わりでいいじゃないの？　な

あ、片山さん。

……片山さん？」

片山も答えず、ただ真っ直ぐに春佳を睨んでいた。

不意に、タバコを二本出して口にくわえ、それに火をつけてニヤリと笑った。

「……IS学園及び、ここらで暴行を働いてる集団みたいだけど、間違いない？」

「自分の身体でわかつからんなこと聞かなくてもへーきだぜ、おチビちゃん？」

再びたくさんの笑い声が路地裏に響く。



が、それは男達より高い笑い声に掻き消された。男達がその声の主に視線をやれば、フードから覗く口元が、笑みの形に避けていた。

「　　はは、あはは、あつはははっ！

まさかここまでとは思わなかった。うん、傑作だよ、傑作。

ロクでもない連中とは思ってたけど、こんな生ゴミ集団だとは思いませんでした」

何が面白いのか、言いたいことを言ってまた笑う春佳。

男達の雰囲気は剣呑なモノになっても変わらず、嘲笑うように笑い声をあげていた。

「　……おい、てめえ、死にてえのか？」

「死ぬ？　　はは、それはそれは。

いいねいいねえ、そういうバカみたいな発言大好きだよ？

そんなことできやしないのに、勢いでやっちゃうやつ。ホント、絵に描いたようなゴミだね、キミら。あ、ちなみにリーダーっぽいのはその帽子被ったゴリラ？」

「こいつ、片山さんに……」

「あのさ、一個だけ先に聞いておくよ。

その異常腕力、誰から貰った？」

「！ テメー、何モンだ？」

「うーん、正義の味方っぽく見えるかもしれないけど、地獄からの使者、かな」

「……ボコレ」

「ういっす。……へへ、じゃあ俺らと遊ぼうぜ、地獄の使者さんよ  
お！」

「五体満足で帰れると思ってんじゃねえぞクソガキが！」

大声で春佳を罵倒する男達を余所に、春佳は人数を数えていた。その数は片山を除いて七人。

”それだけ”しかないことに、春佳は小さくため息を吐いた。

「あーあ、つまんなそ」

「あ？ 何言ってん」

春佳の一番近くにいた男が、言葉の途中で倒れる。  
何が起きたかわからない他の男達は、春佳が倒れた男の背中を踏んだところでその原因に気づき、怒りを爆発させた。

「やっちまえ！　殺せ！」

「……だからさあ」

一人が角材を持って春佳に殴りかかる。が春佳はその角材を避け、そのまま走りかかってきた男の右膝に蹴りを放った。

直後、何かが割れる音が男の膝から響き、男は叫び声を上げて地面に倒れる。そして膝を触るうとして、自分の顔面に迫った靴の裏を見た瞬間、意識を失った。

「はい、あと五人」

顔をぐりぐりとカカトで捻り、それから足を持ち上げる。

鼻が折れたのだろう、男の鼻は歪な形になっており、鼻血を流していた。

「正直さ、かなり頭に来てるんだよね。

いくら壊れてるからって言っても、こんな光景を見せられちゃ、ねえ」

一人は、顔を捕まれて尋常ではない腕力で後頭部から地面に叩きつけられ、意識を失った。

「なるべく殺さないようにって方針にしてるから必死に我慢してるけど、やっぱり殺っちゃおうかなって、思っちゃってるんだからね？」

一人は意識を失うまで右手で喉元を絞め上げられ、一人は金的を蹴り上げられた後に首に後ろ回し蹴りを受けて昏倒した。

「な、なんだよこいつ……」

「片山さんみてえな腕力してるぞ……」

「ホント、僕の鋼の理性に感謝してよね。四分の一殺しくらいで許してやるからさ」

一人は殴りかかろうとした瞬間に股関節に蹴りを入れられ、その関節を外され倒れてしまう。

そして、痛みを感じるより早く、後頭部に鈍い衝撃を受けて意識を失った。

「しかも、ちゃんと意識を失わせてやるって特典付き。泣いて喜べよ、屑共」

最後の一人は鳩尾みぞおちに膝蹴りを受けて前屈みになったところへ、首にカカトを落とされて倒れた。  
残るは、奥にいる片山のみ。春佳はフードを被ったまま、身体ごと片山へと振り向いた。

「……てめえ、俺と同じなのか？」

「同じ？」

「ヤツから潜在能力とか言うのを解放してもらったんだろ、ちげえのか？」

「……なに、もしかして起源すら知ってないの？」

「きげん？　なんだそりゃ、ご機嫌か何かかよ」

「　　は、これは酷いね。いいよ、教えてあげる。

僕はお前みたいな紛い物と違ってね、生まれつきこっぴどい感じなの」

「んだと？」

春佳はポケットから聖書を取り出し、それを無造作に開いた。そして中にあるページを二ページほど手に取り破る。

「A z z i d o l t h」

そして何かを小さく呟けば手に持った聖書のページは二本の鉄の棒へと変化し、春佳の手に収まっていた。両手でそれらをクルクルと回し、少年はフード越しにっこり笑う。

「な……んだよ、それ」

「キミを叩く正義の鉄槌。聞きたいことがあるからさ、なるべく早く倒れてね？」

「……ざけんなよクソガキ！  
てめえこそ、んだけ大口叩いたんだから楽に死ねると思うんじゃないぞー！」

半袖から露出する片山の腕が目に見えて赤くなり、肥大化する。血管が浮き出て、筋肉が張り詰めるのすら視認できるほどだった。

「それがキミの異常性、ね。なるほど、調べた通りの腕力なわけだ」

「うつせえ！　ブチ殺すぞガキッ！」

片山は、目の前の獲物へと駆け出した。  
それを見て、春佳は笑みを更に深く刻む。

「おいで、死にたくなるほど生きてることを刻んであげるから」

斜に構えたまま、両手をだらりと下げた姿からは両手が極端に弛緩しているのがわかる。

その構えのまま、春佳は自分に殴りかかる片山を見上げたのだった。

「はい、それじゃ質問。つて、あの、生きてる？」

それから五分も経たないうちに、春佳は目の前で壁に背を預け座り込む片山の顔を覗き込んだ。

片山の鼻は折れ、口から見える歯ほとんど折られたのか見えない。  
目も晴れており、先ほどまでの原型は留めていなかった。

「お、おま、え……」

「ちなみに、答えなかった場合は」

直後、片山の左足から何かが碎かれる音が響き、そのまま流れ込む  
激痛に片山は大声で叫んだ。

「あはははははッ！　痛い？　痛いよねえ？　激痛に気絶  
もできないから辛いでしょう？

よく噛みしめておきなよ？　それがお前がやってきたことの対  
価なんだからさ。じゃ、質問ね。まず一つ、お前に力を与えた相手  
は男だった、女だった？」

「……くたばれ、化物」

「ふーん、まだ頑張るんだ。しかも僕が悪役みたいな言い方だし……  
いいよ、じゃ、ペナルティ入るから」

春佳が右足を振り上げ、片山の右足へと勢いよく踏みつけた。  
直後に響く片山の叫び声に、春佳は顔を少ししかめた。

「ほら、次は時間制限ペナルティもつけるからね？」



で、男？　女？」

「お、女……」

「ふむふむ、じゃあ次の質問です。その女と会った場所は？」

「そ、それは……」

「……」

「ま、待て、言う！　言うから」

二発、片山の両腕に鉄の棒が放たれ、骨の碎ける音が鳴った。

「化物に片足突っ込んでるからさ、ただ痛いだけでしょ？」

僕ね、滅多に怒らないけど、今回はかなり頭に來てるって言ったよね。だから普段はこんなことしないんだけど、今回はやっちゃうの。しかも、ここからはホントに地獄だからね？　あのさ、

死んだ方がマシって、思いたい？」

底冷えするような声に、片山は必死で首を横に振った。  
よろしい、と春佳は片山から離れる。

「ば、場所はIS学園の近くだった!」

「はいはい、じゃ、次の質問ね」

- Side 春佳 -

「じゃ、最後の質問。

相手はIS学園の制服を着ていた?」

「き、着てた……着てたから……お願いだ……もう、殺してくれ……」

「やだよ、もう少し絶望してなよ。あ、けどうるさいと嫌だから寝てて」

こめかみ部分を蹴っ飛ばして、片山とか呼ばれてた男の意識を刈り取る。

別に拷問癖とかないし、サディストでもないからこんなの楽しくもなんともないんだけど、まあ情報の為だし仕方ないよね。

……言い訳してるのに良心の呵責とかがまったくない自分に笑って

しまう。でも、倒れてる女の人達を見て怒った自分もいるわけで、やっぱり僕は一部がぶっ壊れてるだけで済んだんだ。って、そう思うと凄くホッとした。

「もしもし、橙子さん？」

『ああ、どうした？』

「お仕事完了したよ。質問の答えはメールで送るから」

『了解した。なんだ、全部できたのか？』

「うん。まあ、拷問とかはやっぱ僕には向いてないみたいだから次は大人しく橙子さんに引き渡すことにするよ」

『ふん、まるで私が拷問好きみたいな言い方だな、訂正しろ』

「はいよ。あ、それと救急車呼んでおいてね。場所もメールに入れておくから」

『わかった。では仕事は終わりだ。後でボーナス分は口座に入れておく』

「ありがとう、じゃ、あでゅー」

通話を終えて、僕はおそらく女の人達の着てた服だろうものを持って、それをそれぞれ倒れてる女の人にかけておいた。さすがに全裸で見つかるのは可哀想だ。

「……きつと、良いことあるから、負けないでね」

小さく呟いて、ここを後にする。道すがら橙子さんにメールを送信して、大通りに出てから僕は大きく両手を空に伸ばした。

「さて、今日は一夏くんも戻るって言ってたし、実家に帰るかな。自分の装備もちゃんと欲しいしね」

晴れた空を見上げて、ついでに式と幹也に会えば冷やかしてやろう。なんて思いながら僕は歩き出したのだった。

## 魔術師のおしごと（後書き）

以上、休みの日にあった、ちょっと普通じゃない出来事でした。

春佳のことやこれからのことなど、それらを隠しつつ書かなきゃだから細かい戦闘描写などが全然書けませんでした。

藤乃に関しては、御崎がType-moonで一番好きなキャラだからゲスト出演しただけだったり……すみませんでした！

空の境界も原作と違って起きる事件の間隔が凄く短かったりしてます。

式が目覚めます事件以外……藤乃の事件の時から白純先輩の事件まで、春佳が中学三年の時に起きてます。

あまりこの小説本編には関係ないのですがもし違和感などを感じた方がいたら申し訳ないです。

さてさて、次回は鈴音ちゃん登場。そしてオリジナルがもっと増える予定です。

益々暗躍する春佳と、頑張る一夏達をよろしくお願いします。

では、次回のあとがきで会いましょう！

「ばーかばーか！」

「つく、ばかじゃないもん！」

夕焼けに染まる教室の中で、少女はかつての自分を見つめていた。男子三人に囲まれ、心無い罵声を浴びせられていた。小学五年とは言え、転校して来たばかりであり、身の回りに親しい人などいるはずもなく、故に彼女は一人であり、だからこそ目をつけられたのだ。

（我慢、できてるわけないわよね）

泣くのを我慢して、懸命に言い返す自分に少女はクスリと笑った。今と変わらぬツインテールが、笑う度に揺れる。

「何をやってるの？」

そこに、一人の乱入者がいた。少女も忘れることはない。何故なら、これが彼女が彼とのファーストコンタクトであり、この光景を今も見ることだからだ。少女は、これが夢だと気づいていた。

「なんだよ、弱っちい方の織斑かよ」

「お前には関係ないだろ！」

「そつだそつだ！　体育もできない弱虫は引っ込んでろー！」

「っ……」

乱入者、教室に入ってきた少年は肩より少し上まである髪をバラバラに切り揃えており、幼い少女を苛める少年達からの罵声に息を飲んでいた。右手の拳を強く握っていたのは夢だからではない。本当だったと少女は覚えている。

「……また、苛めてるの？　良くないよ、そついつの」

「なんだと？　弱虫のくせに生意気だぞ」

「そつだそつだ！」

「……もう、いい」

それだけ言っで、少年は幼い少女の所へ歩いて行き、その手を掴んだ。

「行こ」

それだけ言っで、少年はそのまま手を引いて歩き出す。

少年達による妨害よりも、少女が何かを言うよりも、早く。

「よくよく考えれば、この頃から結構強引だったわけよね、あいつ。あたし、まだ何も言っでないのに」

教室から出て行く幼い自分達を見送ったところで、少女は目を覚ました。

目的地に向かうバスの中で、どうやらもうそろそろ着くらしい。バス内にそれを知らせるアナウンスが流れていた。

「寝ちゃっでたか……でも……ふふ、やっと帰って来たんだ」

これから向かう場所には一人、小学校からの付き合いのある友人がいる。それに会うと考えて、少女は小さく笑った。

「いつも二人でいるのを見てたから一人の姿を見たら違和感バリバリかもね」



世界で唯一ISの使える男、彼は自分を見たら驚くだろう。少女はそう確信している。

何せ、そういう男なのだから、と。

「また誰かしらを無自覚に口説いてそうよね、一夏は。あいつは……どうなんだろう。すぐに会えたりできるのかな」

会えるといいな。とは言わず、少女はバスから見える町並みに視線を向けた。

夢に出た少年は、ISを使えない。つまり、IS学園にいることは、ありえない。

「一夏くんがいるから！      とかいつもの常套句も無理だしね」

すぐに会えなくても、休みになったら会いに行こう。

そう決めて、少女は目の前に聳える目的地      IS学園を見つめたのだった。

「織斑くん、おはよう」

「おう、おはよう」

昨日の騒ぎもどこへやら。今日もいつも通り箒、春佳と登校した俺は自分の席に着いて授業道具をしまっていた。

置き勉？ お前、千冬姉が担任のクラスでそんなことをしてみる。即処刑だぞ。

「一夏くん、僕はちよつと飲み物買ってくるね」

「ん、遅刻しないようにな」

「ふふ、千冬姉相手に僕がそんなことをすると思うっ？」

「……ないな」

さすがは俺の弟。俺共々千冬姉にすっかり教育されてきてる。つまり、姉に勝てる弟なんて絶対にいないってことだ。兄より優れた弟はいるかもしれないけど。

「グッモーニンですね、一夏さん」

「おう、おはようセシリア」

さすがセシリア、英語の発音が凄く綺麗でなめらかだ。

セシリアは何故か昨日の試合以降、やたらフレンドリーだ。まあ敵対とかするよりは遥かにいいので大歓迎なんだが、何があったんだろっ。

「そういえば聞きました、一夏さん。二組に転校生が来たらしいのですが」

「転校生？　今の時期にか？」

「ええ」

「それならば私も聞いたぞ。入学式に合わせて来なかったのは疑問だな」

「うおっ、筈？」

「……なんだ、その幽霊を見たかのような反応は」

「いや、いきなり隣にいたから」

さっきまで自分の席に座ってたよな？

って、うわ……なんかまたセシリアと睨み合ってるよ。

なんだかあの二人、ライバル心みたいのでもあるのか昨日から急に張り合ってるんだよな。まあ、仲は悪くないみたいだからいいんだけどさ。

「こほん。それで、ですが……その転校生がクラス代表もやるそうですわ」

「そうなのか？」

「ええ。ですから一応情報を、と思いましたが。まあ、一夏さんには専用機と、この優秀な指導官となるわたくし、セシリア・オルコットがついておりますから大丈夫でしょうけど」

「おい、一夏の教官は私だぞ」

「教えるのは篠ノ之さんでも、指導するのはわたくしの仕事ですわ。篠ノ之さん、あなたは専用機を持っていないではありませんか」

「うぐ……」

「ま、まあまあ……学食デザートフリーパスが欲しいのはわかったから、俺も頑張るし言い合いはやめようぜ」

「……わかってないぞ、朴念人が」

「織斑先生に叩かれ過ぎて頭がダメになってしまってるのでしょうか」

え、なんで？      なんで仲裁した俺がこんな言葉の暴力をくらってるんだ？

だって、クラス代表によるクラス対抗戦に勝てば学食のデザート年間フリーパスが貰えるんだろ？

女の子ならそれが欲しいもんじゃないのか普通は。

「……まあ、あながち間違いではありませんので妥協しましょう。一夏さんも、暴力的な女性は嫌いでしょうし、ね」

「な、なんでそこで私を見る！      ……ところで一夏、クラス対抗戦、大丈夫なのだろうな？」

「相手次第だけど、まあ基本的には不利だろうな。」

知識と経験の量が違うし」

そもそもスタート地点が違うんだ。みんなある程度走り始めたところから俺は走り出した。白式はその俺につけられたブースターみたいなものって言われたら俺はそれに対して思い切り頷いてやってもいい。

「だからこそ、頑張らなきゃな」

「うむ、当たり前だ」

「そうですわ」

「おう、やれるだけやるさ」

「む、それではダメですわ。一夏さんには勝っていただきませんと」

「そうだぞ、男子たるもの、そんなに弱気でどうするんだ」

……えっと、頑張るのは当たり前で、しかも勝つ気満々で行けと。おいおい、俺はまだまだ経験値の足りないヒヨッコだったのを忘れてないか、この二人。

「それに専用機持ちのクラス代表は一組と四組だけと聞きましたわ。ですから一夏さんの努力次第では優勝も夢ではありませんの。わかりただけまして？」

「お、おう。わかつ」

「その情報、古いよ？」

セシリアに頷こうとして、それは突然入った声に止められた。

ドアの所には、なんだか見覚えのある女の子がやけに格好つけて立っていた。それが知らない人なら、まあ様になってるんじゃないかと思えたかもしれないけど、あれは間違いなく……

「二組も専用機持ちがクラス代表になったから。そう簡単には優勝できないし、させないから」

「……お前、鈴か？」

「そうよ。本日転校してきた中国代表候補生、凰鈴音よ。改めてよろしく、一夏？」

ふつと、笑って、ツインテールを揺らしながらこっちを見る鈴。  
…ダメだ。

「ぷっ……お前、何を格好つけてるんだ？  
すげえ似合わないぞ」

笑いを堪えられず、必死に指摘する。いかん、鈴がこんなキャラをしても素の状態を知ってるからか、似合わないのがわかりすぎて笑いが止まらない。

「んなっ！　こ、こら笑うな！　何を言ってくれてんのよアン  
タは！」

「いや、だって似合わすぎて……っつか軽く引いたぞ」

「ぐっ、言いたい放題言ってくれるわね」

お、そろそろ鈴が怒りそうだ。こついつ時は春佳に……って、おお！

「ナイスタイミング！」

鈴がいるのとは逆のドアから入って来る春佳に思わずサムズアップ。



さすが、タイミングばっちりだな、我が弟よ。

「いきなり意味がわからないよ、それ」

困ったように笑う春佳に、俺は鈴を指差した。鈴の位置からも春佳が見えず、春佳も鈴が見えてないからか、春佳は少し早歩きでこつちへ歩いて来て、それから鈴の方へと振り返った。瞬間、鈴が目に見えて狼狽した。よし、計画通り。

「あれ、鈴ちゃん？　なんでここに？」

「転校生だつてさ」

「あ、そうなんだ。と、そういえば、おはようセシリアさん」

「おはようございます、春佳さん。ところで、どちらに？」

「コーヒー飲んだんだよ」

「本当にコーヒー好きなのですね」

「まあね。で、鈴ちゃん、久しぶり」

「……な、ななな……」

「な？」

「な、なんでアンタがここにいるのよ！」

「えっと、メカニック枠ってあるでしょ？  
あれで入学したんだよ」

「ならあたしに教えなさいよ、バカ！」

「ええっ！？ さすがにそれは理不尽だよ鈴ちゃん」

「うるさいうるさいうるさーい。」

「……いるなんて思ってなかったから、こんなの完全な不意打ちじゃない。うう……」

春佳は鈴のテンションについていけないのか首を傾げていた。  
そんな鈴もやっぱり春佳の登場にテンパってるからか、背後の千冬姉に気づいているわけでもなく、すぐに鬼教官の名簿による鉄槌で

教室を追い払われたのだった。

千冬姉が苦手なものも相変わらずなんだな、鈴。

「一夏、先ほどの女子との関係なのだが」

「と言うより、春佳さんとの関係と言った方が正しいかもしれませ  
んが……」

昼休みになって、俺はすぐに箒とセシリアに囲まれていた。

……とりあえず、昼飯を食いながら行きたい。もちろん春佳も誘う  
ぞ。今回は鈴対策も兼ねて、だ。

そんなわけで、その旨を二人に伝えたところ、何故か上から目線で  
了承された。

「春佳、昼飯行くぞ」

「はいはい。うん、お腹減ったよ」

「はは、たくさん食って頑張って身長伸ばすんだな、弟よ」

「いや、それはキツいかも」

「諦めるなって」

そんな話をしてるうちに学食に到着。案の定、鈴は入り口に立っていた。朝みたいになかったつけた立ち方じゃなくて、昔みたいな鈴らしい仁王立ちで、だ。

「よ、とりあえず中に入ろうぜ。積もる話は昼飯食いながらで」

「あ、ち、ちょっと一夏！ 勝手に決めるなあっ！」

最近学習したんだ。あまり立ち話をすると俺にとってよろしくない状況が絶対に展開されるって。だから、俺はとっと中に避難する。自分から好んで苦行はしたくないからな。

「さて、と。改めて久しぶりだな、鈴。一年ぶりか？」

「そ、そうね」

「元気そうで良かったよ」

鈴の隣に座った春佳が俺の言葉を引き継いでにつこり笑った。  
途端にしおらしくなる鈴に笑って、俺は両脇に座ってる（即座に座られた）箒とセシリアに鈴を紹介することにした。

「えっと、こっちは凰鈴音。箒が引越した次の年に転校してきた俺達のセカンド幼なじみ。で、鈴。こっちは篠ノ之箒。お前が来るより前にいた俺達のファースト幼なじみ」

「ふうん、あなたが篠ノ之さんね。よろしく」

「あ、ああ」

「あれ、警戒されてるわね。……ああ、そっか。大丈夫大丈夫、あたしはアンタ達の障害にはならないわよ」

やや睨み気味の箒から何故か俺を見て、それから鈴はあの痛そうな八重歯を見せて笑った。

「そ、そうなのか。うむ、すまなかった。これからよろしく頼む」

急に鈴と親しげに話す箒。あれ？　今の会話に何かあったのか？

確かに障害とか言ってたけど…… IS 関連の話だろうか。

「わたくしはイギリス代表候補生のセシリア・オルコットですわ、同じ代表候補生として、よろしく願いしますわ」

「こちらこそ、鳳鈴音よ」

セシリアに至っては俺が紹介するより早く自己紹介をしていた。それで、春佳はと言つと……

「またコーヒーかよ」

「デスクワーカーはカフェイン中毒になりやすいものなんだよ、お兄ちゃん」

いや、と言つかお前はまず鈴から向けられる視線に気づくべきだ。お前は俺を朴念人とか言っけど春佳の方が間違いなく鈍いだろ。こんなに露骨なのに気づかないんだぞ、こいつ。

「けど、まさか春佳もいたなんてね……一夏くんがいるからって感じ?」

「うん。まあそんなとこだよ。せつかくだからと思って」

「……春佳のブラコン度を読み違えてたあたしのミスね、これは」

「？ 何が？」

「なんでもないっ！」

今にも噛みつきそうな様子で春佳に言う鈴に、俺は苦笑した。

鈴は昔からそうで、最初は俺も話したりとかしなかったな。ただ、あの頃は大人しかった春佳が珍しく自分から話しかけてたり俺と春佳がお世話になってた中華料理屋の娘が鈴だったこともあって、話す機会が増えて自然と今のような関係になっていた。

まあ、俺は更に鈴から協力を要請されてたりしてるんだけどな。

「ね、ねえ春佳、その……あたしが居なくて寂しかったりした？」

「うん？ そうだね。鈴ちゃんがいなくて賑やかじゃなかったりして、寂しかったこともあったよ。鈴ちゃん、いつも元気で明るいから」

「そ、そうよね。うん、安心しなさい、これからあたしもここにいるんだから」

「ふふ、うん。よろしくね」

「じ、じつちこそよ」

……鈴、もうちょい直接行かないと春佳は鈍いから気づかないぞー。

「……なあ、一夏」

「……あの、一夏さん」

鈴の様子を見守る俺に、両脇から小声が聞こえた。言わずもがな、  
箒とセシリアだ。

「もしかして、凰さんは」

「春佳のことが……？」

鈴の様子を見て気づいたんだろう。俺は二人に頷くと、鈴にバレないように小声で答えた。



「そうだよ。春佳のやつ、小五からずっと想われてるってのにまるで気づく気配がないんだよ。」

あいつ、俺のこと朴念人とか言うくせに自分がこれなんだから酷いよなあ。どっちが鈍いんだって話だよ」

鈴の意を汲んで言っただけなのに、それが悔やまれるよ、ホント。時折皮肉ってやるか、春佳の方が鈍いってことを。

「自分がああなのに、よく俺のことを言えるよ、あいつ。……って、なんだよ二人とも、そんなジト目で」

「いや、な……」

「一夏さんも春佳さんもさすが双子、と思ひまして」

「？ 何がだよ、俺はあいつほど鈍くないぞ。少なくとも人の神経にはやや早い自信があるぞ」

「……知らないことも罪だぞ、一夏」

「そうですね、一夏さん」

「だから、どういことだよ！」

セシリアも箒も俺の言葉には答えず、あろうことか睨んでくる。  
どういことなんだってんだ。俺は弟の鈍感を嘆いてたつてのに。

「……ダメだな」

「ダメですわね」

箒とセシリアは昼飯を終えて話すだけの春佳と鈴を見て、それから  
また俺に向いてため息を吐きながら、呆れたように言ったのだった。

## 一（後書き）

はい、そんなわけで鈴音ちゃん登場です！

一夏と鈴のカップリングが好きな人は申し訳ありません。ここでは春佳に向いちゃってます。

とりあえず導入編みたいな感じなので、物語はまだ動きません。今後の皆さんの活躍にご期待あれ（笑）

ではでは、次回のあとがきでまた会いましょう！

## 二（前書き）

気がついたらPVが三万を超えていました。

いろんな人に読んでもらえて、とても嬉しいです。

これから頑張ろう！　って気持ちになってモチベーションも凄  
い上がりますね。

何はともあれ、ありがとうございます！

では、始まり始まり。

放課後になって、僕は鈴ちゃんとアリーナへ向かっていた。

一夏くんが箒ちゃんやセシリアさんと特訓するらしく、今回は僕もそれに付き合うこととなったのだ。

「じゃあ、一夏は箒と相部屋なわけ？」

「うん。毎回揉めてはどっちかが愚痴に来るから結構忙しいんだよね」

「ふうん……ところでさ、春佳はその……誰と相部屋なの？」

「僕？　僕は一人だよ」

「え？」

「メカニック枠で入学したただの男だから迂闊にIS操縦者と相部屋にさせるわけにはいかないらしいよ。双子の兄である、一夏くんともね」

「……なによそれ、そんなのないわよ」

「仕方ないよ、現状僕はただの男なんだから。それに二人部屋を一人で占拠できてるのはなかなか美味しいもの。それにみんな僕にも仲良くしてくれるし、別に困ってないからいいんだ」

「……そう言われたら返せないじゃない」

「にはは、ごめん、あとありがとね。鈴ちゃん」

「わ、わかってるならいいわよ、別に。それに、一人部屋なら気軽に遊びに行けるしね」

「うん、いらっしやい。お菓子と紅茶とコーヒーでお迎えするから」

「ん、それじゃ近いうちに行かせてもらっから」

こういう話をしていると、まるで中学生時代に戻ったみたいだ。あの頃も僕に一夏くんに弾くん、蘭ちゃん、そして鈴ちゃんの五人で遊んでたことがたくさんあったから。

懐かしい感じがして、なんだか笑顔になってくる。

「またみんなで遊んだりしたいね。ゲームとかいろいろやってさ」

「そうね。五反田兄妹にも会いたいし」

「うん」

こういう日常的なことが何より楽しくて、嬉しい。そう考えると、やっぱり”彼女”に崩壊した部分を分けたのは正解だったって思える。じゃなかったら人間であることに固執する僕は、きっと壊れていたから。

「と、ここだね」

「第二アリーナだから……そうね。あ、ほら二人ともいるわよ」

アリーナの中には白式に乗る一夏くん、ブルー・ティアーズに乗るセシリアさん、そしてIS学園が所有する量産型IS”打鉄”に乗る篝ちゃん。

既に修羅場が形成されてる辺り、さすが一夏くん。

「これを見てさすがって思えるのはどうかとも思っけど」

「あれが一夏の専用機？　ふーん、なんか真っ白ね」

「白式って名前なんだよ。ところで、鈴ちゃんの専用機ってどんな感じなの？」

「それはまだ秘密よ。いくら幼なじみって言ってもあたしと春佳は違うクラスなわけだし、敵に情報は渡せないわよ」

「むむ、しっかりしてるね」

「当たり前」

ちよつと残念とか思いながら、僕と鈴ちゃんは一夏くん達の所へと歩いて行った。

えつと……状況がよく飲み込めない。

「だから何度言ったらわかるんだ。こう、ぐいっとなってズバツと抜く感じだ」

「篠ノ之さんは抽象的過ぎるのですわ！

一夏さん、入射角はここから」

「一夏くん、これは一体……って、大丈夫なの？」



「…………死ぬかと思った」

聞けば、一夏くんの実戦訓練の為に打鉄を借りてきた箒ちゃんとセシリアさんが”何故か”戦い始めて、その矛先が一夏くんに向かった結果、二対一でボッコボコにされた拳句二人からいろいろ指導されてるらしい。

「…………まあ、一夏くんにもツツコミしたいところはあるけど」

僕が半目でそちらを見ると、箒ちゃんとセシリアさんは「う……………」と視線をそらしてそっぽを向いた。なんともまあ、わかりやすいことこの上ない。

「で、どんな話をしてたの？」

「ああ、それがさ、空を上手く飛べないんだ。箒やセシリアは気軽に飛んでるんだけど、イメージができなくて」

それでさっきの箒ちゃんの超フィーリングな説明やセシリアさんの理論的過ぎる説明に行き着いたわけなのかな。  
なるほど、飛ぶ……………かあ。

「個人個人の感覚なんだろうね、きっと。篝ちゃんもセシリアさんもそれで飛べてるから、そう説明するんだ」

「だろうけど……ちなみにさ、もし春佳が飛ぶとしたらどんな感じなのか？」

「そうだね……酷く尊大で、傲慢かな。

墜落する心配がないから、まるで空に立つようにすると思う。

視界として認識できる範囲外から墜落の恐怖もなく俯瞰することができるんだよ？

人が無意識に憧れる場所に立てるんだ、地面と大して変わらないよ、きっと」

去年の巫条ビルの人 巫条霧絵もISの適性があれば違ったかもね、なんて思ってた僕は苦笑した。

アレはアレで満足いく死に方をしたんだろう、詳しく聞いてない僕が余計な妄想で荒らすもんじゃないか。

「少なくとも、僕には永遠に理解できないことかな」

式みたいに生きてる実感がないわけじゃない。むしろ逆で、生きてるからこそ壊したいのが僕だ。

でも、だからこそやっぱり僕には飛行する魅力がわからない。いいんだよ、足で走って、手を伸ばして届く範囲のモノだけ壊せれば。

こんな空なんて、式の”眼”をしたって殺せないものなんだから、そんなものになんも魅力はないもの。守るか壊すかしたいのに、どっちもできないんだから、そんなのいらないよ。

「なるほど……なんか、難しいな」

「僕のは飛べない人間の言葉遊びだから気にしないでいいよ。  
結局、一夏くんが一番楽な方法を見つけるのが一番早いと思うよ」

「そうだな、うん。なんか春佳のはグって来るものがあつたよ。ありがとな」

「ふふ、どういたしまして」

……はっ、殺気!?

「「春佳(さん)?」」

この殺気の持ち主は、間違いなく篝ちゃんとセシリアさんだ……

「な、なんでしょ……」

僕を見る二人の目が語っていた。邪魔をするな、と。

……うん、あれは絶対殺される。意味のわからない理不尽でボッコボコにされる。なんだか絶対に勝てる気がしない、相手にしちゃいけないタイプの目だ。

「す、すいませんでした……」

一方的にやるのもやられるのも勘弁な僕なので、僕は大人しく身を引いたのだった。

「さて、と」

鈴ちゃんにも一夏くんのコーチを頼んで、僕はひと足先にアリーナを出ていた。二時間後に学食で合流だから、時間はまだじっくりある。

「まず、一つ目」

中庭の少し奥、木に囲まれた場所は、酷い違和感が存在していた。一般人には決してわからない、けれど、僕ら魔術師からすれば燃や

すことしかできない鮮花ですら気づくような造りの粗い、探知魔術。

「余裕があつてわざとこうしてるのか、それともたんに下手なのか……ま、橙子さんがいるから警戒はしてるだろうけどね」

聖書のページを一枚破つて、違和感の中心にヒラヒラと落とす。魔術に侵食したのを確認して、僕は小さく始動の言葉を紡いだ。

「A z z i d o l t h」

パキリ、と何も変化がないこの場所に亀裂の入る音がして、何かが砕ける音が響く。

いくら聖書を使つてるとは言え、僕くらいのやつでも破れるってことは大したことはないのかな？

「あまり自分を過小評価するな、って言われてもね」

魔術師として、僕はたまたま魔術回路がそれなりにあつたからなれたんだ。戦うことならまだしも、僕自身は魔術師としては三流だと自覚してる。そもそも、魔術を戦闘の手段として優先してる時点でおかしいんだから。

「ま、僕は『もアカシックレコードとやらにも興味はないから

ね。魔法使いにも会いたいとすら思わないし、辿り着きたいとも考  
えない。  
ある種、人ではないのも間違いじゃないし手段として使えばいい  
んだよね」

何を探知する気だったのか気にはなるけどそれよりもとかく、こ  
れで学園内に魔術師がいるのは確定した。土曜日の片山とか言う不  
良を異常者にしたのもおそらくこいつだろう。

「こいつがとんでもない化物じゃないことを祈るかな」

そんなこと、思ってもないくせに、バカね。

「うるさいよ、まだ死ねないって思ってるのはホントだもの。それ  
なら千冬姉や一夏くんに嫌われなきゃ。荒耶宗蓮とのいざこざであ  
の赤い服の人とやり合った時に負った怪我だってかなり心配され  
たんだから」

”彼女”に苦笑して、僕は回収した魔術の残滓から情報を引っ張る  
ことにした。

あの時はホントに酷かった。荒耶にくつついてた橙子さんと同期の  
魔術師、かなり優秀だったらしいそいつは酷く橙子さんにコンプレ  
ックスを抱いていたらしく、弟子の立場である僕を殺そうとしたわ  
けだ。その結果、僕は肋骨を三本と左手、右足を骨折してしまった。

「ま、それでも左腕をぶった斬って撃退できた辺り、”僕ら”も戦うだけならかなりできるんじゃないかと思うけど」

根幹に身を委ねず、理性と共に戦って撃退したんだから勲章モノだろう。

……荒耶自体を殺した『両儀式』や、あの赤い人を簡単に惨殺した橙子さんのトランクちゃんには嫉妬を隠せないけど。

「……で、こいつがこの魔術に張ってあるトラップかな？  
ずいぶん稚拙なおもちやだこと」

残滓を一定の位置まで探ったところで、聖書のページが破れて燃えた。

その火が一ヶ所に集まり、そしてまるで犬のような形になっていく。

「そうね、今日は特別に私が相手をしてあげる。  
あまり人に見られたくないけど、人払いの結界はできないし」

「個体を”見る（みる）”限り、使い魔ですらない……せいぜい本体に破られたことを知らせる為に作られたモノだろう。

でも、誰に見られるかわからないので、僕は彼女に身を委ねた。ミシリ。と握った拳が音を出す。本能の強い動物の形をしているのは向こうなのに、殺人衝動の強さは遥かにこちらが上なことに、思わず笑ってしまう。

「フリスビーはないけど、じゃれ合うくらいはしてあげる。  
だから、せいぜい飛びかかって来なよ」

ポケットに入っている純銀のナイフを右手に持って、僕はゆっくりと戦闘体勢に入って行った。

- Side out -

「ふふ、いいね……やっぱり僕の周りはどうでなきゃ」

春佳は右手に持ったナイフを回して逆手に持ち、斜に構えた。  
そして、だんだんと少年の体勢が前のめりになっていく。前傾姿勢から、更に前へと倒れていく。

「式風に言えば、キミみたいなのはえつと……そうだ、魔的なんだ。  
だから、そんなものは 殺さなくっちゃねえッ！」

前に出した左足を曲げ、地面と春佳の上半身が平行になるほどに前のめりになり、春佳は笑顔で叫んだ。  
同時に左手を地面につけて、その体勢を維持したまま右足に力を込



める。

そして、一瞬の間を置いて

春佳は、矢のようにその場から飛び出した。

「っはぁッ！」

犬らしく唸り、口を開けて春佳へと向かおうとする異形は、構えた瞬間に春佳を横に認識した。

同時に、自身の脇腹に斬撃を受ける。造られ存在故に痛みも何も感じず、ただダメージとして残ったソレに目も向けず、認識した気配の方向へと振り返る。

「あー、あんま強くない感じかな？」

なんだ、ちよっと期待してたのに残念ね。強化魔術使ったつてのに」

女性の声が、異形へとかけられる。自我を持たない異形には理解も返答もできないが無論少年もそれを理解している。

春佳は戦う相手と話すことが趣味の一つとして成り立ってしまっているのだ、それに則りいつも通り話しているだけなのだ。

「ま、今はいいか。人に勘づかれる前に始末しちゃおう。じゃ、行くよ。見様見真似な模倣技だけど勘弁してね」

先ほどと違い、異形は獲物を狩る四足歩行の動物のソレと遜色ない

動きで春佳へと駆け出した。

そして、少年の細い身体を噛み千切ろうと大口を開けて、そして、そこに銀の一閃を受けていた。口元を大きく裂けられ、その大口が広がる。

それでも噛み千切ろうと、広がり過ぎた口を、春佳を喰らおうと、閉じるように力を込める。そこへ、切り上げが上顎を真つ二つに切り裂いた。返す刀で下顎に斜めから切り下げられ、口が口の役割を失ったのを確認して、春佳はその勢いのまま懐へと飛び込んだ。そして、斬る。

四肢を、腹を、背を、その中身を。あれば間違いなく急所となる場所を、臓器のある場所を。

「これで、お仕舞い」

最後に下顎を蹴り上げ、腹を自分の眼前に見えるようにして、春佳は尾の部分から腹を経由し、頭の方まで斬り上げた。

魔の物に対し有効とされる、一点の曇りもない純銀のナイフで。それは目の前の異形にも有効でないわけがなく、トドメとなって放たれた。

「  
かさねしょうろう  
重ね鐘楼。確かこんな感じだったよね、式」

火の粉となって霧散する異形を見つめて、春佳はポケットからナイフのホルスターを取り出して、ナイフをそこに納めポケットにしまった。

それから肩に降りかかる火の粉を右手で払い、深呼吸。それだけで、

少年から放たれていた殺気は霧散した。

「あんまり騒ぎになりそうなことは困るから今日のところはここまでにしておくかな。」

場所が場所だったから戦えたけど、人がもつといたらまずいし」

火の粉が完全に消滅したのを確認して、春佳は顎に右手を当ててひとりごちた。

「なんであれ、宣戦布告は完了した。後手に回つてると全部壊しちゃうからね、魔術師さん？」

「……誰かいるの？」

「っ！？」

思考に力を注ぎ過ぎたからか、春佳は聞こえてきた声に少し大きく反応した。

それから周囲を見回し、何も痕跡がないのを確認して、声のした方向へとゆっくり振り向いた。

「あれ、こんなところに一人で何をやってるのかな？」

「……散歩してたんです。入学したてでまだ地理を把握してなくてしたら迷ってしまっただけ」

春佳の目の前に現れた人間は首を傾げて春佳に問えば、春佳も当たり障りのない言葉で返答する。

リボンの色から察するに、先輩であることは間違いなかった。

「なるほどなるほど。それじゃあおねーさんが案内してあげようかねえ、織斑春佳くん？」

「っ！」

「あれ、なんで知ってるかって顔だね。」

ふふ、キミ達双子は私達の学年でも有名なんだよ？

なんせあの織斑先生の弟で、貴重な男の子なんだから」

「そう、ですか」

「そうそう。ふふ、何をそんなに警戒しているのかな？」

「いや、先輩こそ、どうしてこんな場所へ来たのかな、と思いますまして」

春佳はその言葉を暗に魔術師かどうかを探る為にわざと挑発的に放った。

しかし、相手の上級生はうーん。と首を捻るのみだ。

「キミの姿が見えたから、じゃ変かな？

ここ、結構中庭から見えるんだよ？」

「！  
そうですか」

（つまり、見てたってこと？ いや、けど注意はしてた。”彼女

”の方が強く出てたんだから気づかないはずがない）

「こんなところで立ち話もアレだし、とりあえず出ない？」

上級生は手に持った扇子を勢いよく開き、笑顔で春佳に問いかける。その扇子には「安全第一」と書かれており思わず春佳は内心で首を傾げた。

「はい。……あ、先輩」

「うん、どうしたのかな？」

「先輩は、悪い人ですか？」

「……ぷっ、あははっ！　なかなかユーモアのある質問をするね、キミは。」

おねーさんはこの学園の生徒の味方だよ？

男のキミにとっても悪い人ではないと思うんだけど、どうかな？」

閉じて開かれた扇子には「勸善懲悪」の四文字。いつの間に？  
なんて内心でツツコミながら、春佳はそこでやっと笑顔を浮かべた。

「先輩の言葉を信じますよ。僕みたいな肩身の狭い人にも味方になってくれるなら」

「なるに決まってるじゃない。キミ、悪い人じゃなさげだし」

「ふふ、ありがとうございます」

「あらあら、ずいぶん可愛い笑顔だね。」

それじゃ、行こっか。校舎まで歩けば大丈夫でしょう？」

「はい」

二人は笑って、木々の中を進み始める。

校舎への道を先導する上級生の少し後ろ、先ほどの異形を滅多斬りした距離と同じ感覚を空けて、春佳は右手にポケットを入れたまま歩き続けていた。

## 二（後書き）

チラッとあのおねーさんが登場したり、春佳の戦闘回だったりした今回ですが、どうだったでしょうか？

ぶっちゃけると、鈴の矢印が春佳に向いているせいか、原作そのままに進めるとこの二章が凄まじく短い内容になってしまっていて、オリジナルも入れていく予定だったのも合わせて、思い切って春佳にはそこそこ派手に戦ってもらいました。

純銀ナイフや春佳の戦い方などは話が進むにつれてどんどん明かしていくつもりなので皆さんのお楽しみの一つにでもしておいてもらえると幸いです。

しかし、春佳ちゃんと春佳ちゃんの使い分けをもっとはっきり書けるようにしたい……

戦つてるとあまり一人称を言わないから口調で分けようかと思ったけど、口調は全然変わらないからちらちら入れ替わってるのを見せる程度になっちゃってる気がする。

いや、まあ春佳ちゃんも春佳くんだからあまり意味がないかもしれませんが……難しいです（汗）

さて、次回もまたオリジナルしつつストーリーを進めていくつもりです。皆さんの通勤、通学の時間潰し、暇な時間を埋めるお手伝いになれば幸いで、面白いなんて思っていただけなら感激です。

では、次回のあとがきでまた会いましょう！



### 三（前書き）

投稿が遅くなってすいませんでした！

大学が始まって忙しかったです、はい。

落ち着いて来たのでまたガンガン行きたいと思います。

では、始まり始まり。

「この辺で大丈夫かな？」

「はい、ありがとうございます」

「いえいえ、困った時はお互い様だよ？」

ペコリとお辞儀をして、春佳は校舎へと歩いて行く。

しばらく歩いて再度振り返り、彼はもう一度少女へとお辞儀をした。

「ふふ、意外と礼儀正しい子ね。それとも単純に、警戒しまくってるのかな？」

後ろ姿を見送った少女は、自分の携帯電話を取り出し、データフォルダを開いた。

そこには、先ほどの春佳と異形の戦闘が映されている。

「こういうのを人智を超えてるって言うのかな。さすがにおねーさんもこんなの相手じゃ生身の身体で勝てる気がしないぞ、織斑春佳くん。」

魔術師ってのはみんなこんなものなの？」

広げた扇子には”要警戒”の三文字。そして少女はそれで自分を扇ぎながら、携帯を耳に当てた。

「もしもし、私です。うん、やっぱり織斑春佳は要観察。蒼崎橙子先生も同じくね。

蒼崎橙子はともかく、織斑春佳は魔術師なんて言う得体の知れない相手だから、くれぐれも気をつけて。たぶん殺しはしないと思うけど、なかなか好戦的みたいだから」

それじゃ。と通話を切って、少女は校舎を見上げた。

「できれば面倒なことは勘弁だよ、魔術師くん」

その呟きは、誰にも聞こえることなく夕焼けの空へと溶け込んで行った。

- Side 春佳 -

「……ま、いいか」

あの先輩が知っていようがいまいが、現状僕に何もデメリットはない。

魔術師だって吹聴したところで、僕がそうだと信じる人間が何人いるか。ゼロに決まってる。これでも見た目は一生徒として成り立ってるつもりだ。そんなことを疑われるキャラでもないし、問題ないと思う。

「アレが本体なら話は別だけどね」

視たわけでもないし、僕自身が魔力や魔術に対して敏感なわけでもないのに、残念ながらそれはわからない。

でもまあ、ちよつと変わった感じの人だったし、橙子さんが気づくだろうからそこも樂觀視していいかな。僕は、来られたら潰すことだけ考えてればいい。

「ふふ、一夏くんや千冬姉を脳筋とか言えないね、これじゃ」

やっぱりあの二人の弟だなあ。なんて思うとちよつと嬉しい。家族と一緒にするのは、やっぱりどんなことでも嬉しいから。

「と、いたいた。おーい！」

アリーナから歩いて出て来る四人に手を振って、僕は小走りでそこへ向かったのだった。

「はーるかー！　遊びに来たわよー」

「ふえ？　あ、鈴ちゃん」

あの後みんなで早めの夕飯を食べて、僕はちょっとした用事で自分の部屋にいた。

そんな部屋のドアが開いて、鈴ちゃんが勢いよく入って来る。入って来て、何故かその表情が凍りついた……気がした。

「……ちょっと、これどういうこと？」

うん、見間違いないみたいだ。鈴ちゃんは僕を睨んで、それから部屋に備わってる机とは別の、僕が持ち込んだテーブルに視線を向けた。

そこにはコーヒーの入ったカップお菓子と作りかけの人形が置いてあるだけで、少なくとも鈴ちゃんが睨むようなものは置いてないと思うんだけど……

「えっと、人形とお菓子とコーヒーだよ」

「わかってるわよ！　そうじゃなくて、  
なんでこんなに人がいるのよ！」

「織斑くん、お知り合い？」

「ああ、うん。小学校中学校が同じだった凰鈴音ちゃん。中国の代表候補生でもあるんだよ？  
それで鈴ちゃん、こっちが」

クラスメートに鈴ちゃんを紹介して、同じように鈴ちゃんにクラスメートを紹介していく。その最中も、鈴ちゃん是不機嫌そうに僕を見ていた。

……僕、何かしたかなあ。

「……で、何をしてるわけ？」

「それはね、人形の作り方講座だよ。道具が全然ないから簡単なぬいぐるみとかしか教えてあげられないんだけど……」

「ううん、でも凄い丁寧に教えてもらってるし、こんなに可愛いのが作れたんだから充分ありがたいよ」

「そう言ってもらえると僕も嬉しいな」

完成間近のぬいぐるみを持ち上げてにつこり笑ってもらえると、僕としても講座をした甲斐があるってもんだ。

まあ、僕自身もまだまだ橙子さんの足元にも及ばないダメダメなんだけどね。

さすがに自分そっくりの人形とか、完全な人に限りなく近い人形とかは作れない。あれは橙子さんだからできることで、だからこそあの人は封印指定とか言うのに指定されてるんだから。式の腕や僕が目みたいなのも作れるしね。

「……」

鈴ちゃんはそんなクラスメートをちよつと睨み気味に一瞥して、それから空いてる椅子に座った。良かった、椅子も備え付けが二つしかなかったから持ち込んでおいで正解だったね。

「鳳鈴音よ。よろしくね」

一度深呼吸して、それからいつもの鈴ちゃんに戻って笑って挨拶をする鈴ちゃん。

さっきのは一体なんだったんだろう。

「鳳さんは織斑くんと付き合い長いんだ」

「そうね。あたしと春佳はいわゆる”幼なじみ”ってやつだから」

ふふん。なんて今にも言いそうなくらい胸を張って、やたら幼なじみを強調するように言う鈴ちゃん。

小五からでも確かに付き合いは長いけど、それも幼なじみでいいのかな。一夏くんはセカンド幼なじみとか言ってたけど。

「……あ、もしかして鳳さん、そういうことなの？」

「ど、どついつことよ」

「え、言っちゃっていいの？」

「っ！ 春佳！ あたしもコーヒーもらっていい？」

「え？ あ、うん、いいよ。砂糖はどれくらい？」

「春佳と一緒にいい」

「わかった。じゃあちょっと待っててね」



こういう時の鈴ちゃんには迂闊な事を言わない方がいいと、昔馴染の勘が僕に告げていた。

一夏くんが話しかけて殴られてるのを見たことあるしね。

…… 篝ちゃんもだけど、どうにも僕らの幼なじみらしい人達は手が早い気がする。やっぱり女性って恐ろしいね。

「よし、こんなもんかな」

ミルクを入れるかはわからないのでそれはちっちゃいコップに入れて、コーヒーの入ったカップと両手にそれぞれ持ってみんながいる所へと向かう。

「じ、じゃあ大丈夫なのね？」

「うん。私的には気軽に話せる友達って感じだし。どっちかって言うとお兄さんの方が好みだから」

「そ、そっか」

「…… 私は、凰さんにも負けないから」

「むっ…… の、望むところよー!」

何やら女子の皆さんは盛り上がってるようだった。

鈴ちゃんと、僕の向かいに座ってる鈴木さんが何やら睨み合ってるみたいだけど、もしま

「あの、喧嘩とかはダメだからね？」

「ひゃわっ！？　は、春佳！？」

「うん。はい、どうぞ」

「あ、ありがと……じゃなくてっ！  
いきなり出て来ないでよ！」

「そんな理不尽な。そもそもそんな肝試しとかしてるわけじゃないでしょうに」

「う……と、とにかく、女子にはいろいろあるんだから気をつけなさいよね！」

「それ、男子の部屋でするの間違ってないかな」

「うわ……さすが兄弟、ベクトルは違っても地雷を踏むタイミングは兄同様外さないのね」

え？ どういう

「っ！？」

「春佳、何か言った？」

……まずい。何かわからないけどこの鈴ちゃんはまずい。  
初めて式と会った時並みにまずい。

「い、いえ……何も言ってますん」

「……そ、ならいいんだけど」

鈴ちゃんの口から覗く八重歯が、僕には悪魔の牙にしか見えなかった。

セシリアさんも一夏くん絡みになるとこれくらい怖くなる時があるんだけど、これが代表候補生の力なのかな。

……はっ！ それじゃあ、篝ちゃんも実は代表候補生クラスの實力が……？

「春佳、今あたしのこと化物か何かと同じような扱いしてなかった？」

「と、とんでもない。そこまでは思っていないよ」

「……………」 “そこまで” ？ 「」

「あ……………」

本気でしまった。と思ったのは、クラスメートの皆さんが僕に向けて合掌したのとまったく同じタイミングだった。

「……………」 酷い目に遭った 「」

「自業自得って言葉、知ってる？      アンタの国の言葉なんだけど」

「知ってるけど絶対使うタイミング違うと思う……………」

テーブルに突っ伏す僕に、鈴ちゃんがまだ不機嫌そうな表情のままそんなことを言ってきた。

何があったか、それは僕の尊厳の為に省略しておくことにする。

「そういえば、鈴ちゃんはまだ帰らなくていいの？」

「あたし？　あたしは別に平気よ。  
だって、その……泊まるし」

「？　泊まるって、どこに？」

「ここに」

……ぱーどん、みー？

「だ、だから、あたしは今日は春佳の部屋に泊まるって言ってるの  
！」

読唇術を行った上で、鈴ちゃんはどうもないことを言い出した。  
と言っか、

「僕聞いてないんだけど……」

「だって、今言っただけ」

「そ、そっか……で、その心は？」

「べ、別に……久々に幼なじみに会ったわけだし、一人部屋みたいだから泊まるうかなって思っただけよ。他意はないわ！それにほら、そんなのみんなやってるじゃない？」

「それはそうだけど……」

「……嫌、なの？」

「うっん、全然平気だよ」

まあ、僕も式の部屋に泊まったこととかあるし、ベッドも余ってるわけだし問題はないかな。  
ただまあ……

「よく男子の部屋に泊まるうなんて思えるよね」

「うん？　なんで？」

ま、まさか襲ったりとかする気？」

「あのね、友達にそんなことは絶対しません。そもそも無理矢理つてのが好きじゃないんだ。ただまあ、理由とかはそんな感じかな」

鈴ちゃんの言葉に即答すると、どこか落胆した様子で鈴ちゃんは「そうよね……」と呟いた。  
トリードマークのツインテールも萎れ気味で……え、今のに落胆する場所あった？

「……まあいいわよ。その質問の答えは簡単。あたし、強いから」

「へ？」

「あ、信じてないわね？　じゃあほら、それ投げてよ。思いっきり」

鈴ちゃんが指を差すのは僕の消しゴム。いや、思いっきり投げろって言われても。さすがに女の子相手にそれはちょっと……

「大丈夫だから、ほらほら」

余裕の笑顔で僕に消しゴムの投擲を促す鈴ちゃん。

……仕方ない、ちよつとだけ。

「えいつ」

「よつと、いい球投げるじゃない！」

さすがに本気で投げるのは気が引けたから加減はして、でも手首のスナップを効かせてサイドスローで投げる。

いくら加減しても僕と鈴ちゃんの距離は五メートルもない。野球でもやってないと男でも取れるかわからないような速さのそれを、鈴ちゃんはいとも簡単に掴み取っていた。

「……」

「どう、わかった？」

……生身の身体、だよな。強化の魔術とか使うわけないし。

つまり、鈴ちゃんはそれくらい反射神経と動体視力がいいわけでおそらく、相応に強い。



「うん。代表候補生って凄いんだね」

「あつたりまえよ。あたしなんて短期間でかなり詰め込まれたんだから」

きつと、恐ろしいまでのセンスの高さがそれを可能にしたんだろうなあ。

鈴ちゃん、運動神経良かったから。けど、もしかすると代表候補生ってみんな生身でもこれくらいはやれるようになってるのかな。セシリアさんも前に生身でも僕に勝てるって言ってたし。

「だからヘーキよ。わかった？」

「ふふ、わかりました。どうぞ、泊まってってください」

「わかったならいいのよ。じゃ、着替え持ってきて来るから」

「ん、了解」

慌ただしく部屋を出て行く鈴ちゃんを見送って、僕は一人、笑い声を出した。

「　　はは、さすがに兵器運用されるものだよね。少し侮ってたよ。ふふ、同年代だからって余裕かましてたら死ぬのは僕になっちゃうかな？」

式のようなタイプでない限り、相手が人間ってくくりの中にいるなら勝てる自信はあるし、勝算もある。けど、だからって余裕は持てないね。僕の魔術による攻撃がISに通るかはわからないし、生身であれだけ動けるのがデフォルトなら加減はしない方がいいことになる。

「相手の魔術師だって、IS適性があるんだろうし、これは油断ならないねえ」

夜の帳が降りた外のせいで、部屋の光を反射して鏡になった状態の窓には、酷く歪んだ笑みを浮かべる僕が立っていた。

「シャワーお先ー」

「はいはい」

「春佳はまだいいの？」

「もう少ししたらかな。シャワーは寝る前にとって決めてるから」

あれから一時間として、鈴ちゃんは着替えを持って戻って来てそれから二人で話したりして、今はシャワーを浴びて戻って来た鈴ちゃんが目の前にいた。

いつもツインテールの鈴ちゃんを見るからか髪をそのまま垂らしてる鈴ちゃんはなかなか新鮮だ。

「……何よ」

「いや、なんかツインテールじゃない鈴ちゃんて新鮮だなあって」

「そ、そう」

「うん」

それに、声に出して言ったら殴られるのは間違いないから言わないけど、確かに色っぽい気がする。

何がって？ 以前弾くんが「プールや風呂上がりで髪を何の手も加えてなく、かつちよつと濡れてる姿は色っぽいんだ！」って僕と一夏くんが軽く引くくらい熱弁してたんだけど、確かにわかるような気がする。

式のそういう姿を見ても何とも思わなかったから迷信かと思ってたけど、違う。あいつは僕にとってもはや女の人じゃないってだけなんだろ。まあ、親友ってのはそういうもんか。

それに鈴ちゃんは殺人やらに関連するイメージがないし、元々可愛いって評判な人だったしね。それを言えば篝ちゃんもそうだったけど。たぶんセシリアさんもそういう評価を受けてそうだし……あれ？  
と言うか、IS学園の美少女率高くない？

「春佳！」

「おわっ！？　り、鈴ちゃん？」

「り、鈴ちゃん？　じゃない！　また考え事してたの？」

「え？　あ、うん」

気がつくと目の前には鈴ちゃんの顔があった。

不機嫌そうにジト目で僕を見て、それから顔が近いのに気づいたのか顔を赤らめてちょっと離れた。うん、顔が近いってなんか恥ずかしいよね。わかるわかる。

「まったく……相変わらず考え事するとすぐ自分の世界に閉じ籠るんだから。」

ホント、その集中力をもっと違う場所で使えばいいのに」

「む、好きなことことにしか集中できないんだから仕方ないでしょ。それに必要な時はそれなりに集中してるからいいの」

「はいはい。けど今それは禁止よ。」

「……………せっかく二人でゆっくり話せるんだから」

「うん？　なんか言った？」

「言ってない！　とにかく禁止！」

「わかった！？　わかったら返事！」

「は、はいっ！」

凄まじいまでの独裁政治だけど、怖いんで大人しく従うことにする。基本的に普段の僕は強い力に屈する弱者なのだ。

ま、時と場合によるけどね。

「はあ……………それにしても、まだアルバイト続けてるの？」

「うん。融通が利くし、一応就職先にも考えてたから」

と言うか、ここに入学したのもそのアルバイトの一つ……なんて口が裂けても言えないよね。いろいろまずい。

「ふうん……」

鈴ちゃんは僕の作りかけの人形を見て、それから僕を見た。変なバイト。と中学時代にも言われたし、今でもそう思ってるのかもしれない。

「ずいぶん可愛い人形ね」

「あまり禍々しかったりリアル過ぎるのもどうかと思って。そういうのはうちの所長の分野だし」

「確か、有名な人形造りなんだっけ？」

「その筋ではね。アレとか」

そう言つて机に置いてある橙子さんお手製の人形を指差す。  
そこには、ネコのような生物<sup>ナマモノ</sup>が置いてあった。

「……あれがリアル？」

「いや、アレは何か血迷って造ったらしいよ。だから貰ったの。普通に造った作品なら僕でも買わなきゃいけないよ」

「そうなんだ……まあ、確かに出来は凄そうね。今にも動きそう」

「やめてよ。あんなのが動き出しでもしたらちよっと怖いって」

もし動き出しでもしたら全力でバラしにかかる自信がある。じゃなきゃなんかこつちが大変なことになりそうだ。うん、なんか確信を持って言える。

「あははっ。アレが動いたら怖いって、春佳そんなに臆病だったっけ？」

「いや、そういう怖いじゃなくて……なんて言えばいいのかな。キヤラ崩壊の予感がする感じ？」

「よくわからないわよ、それ」

「ん、そっか」

いや、まあ僕もよくわからないんだけど。  
少なくとも、動き出したアレは間違いなく僕に害を及ぼすだろう。

「ま、イフの話だしね」

そんなこと、あるわけない。

……あっちゃいけないんです。

- Side out -

「それじゃ、シャワー浴びてくるね」

「ん、いつてらっしゃーい」

二人はそれからいろいろな話を話していた。鈴音がいなくなっ  
てからの二人の共通の友人ことや一夏とセシリアの間にあった試合の  
ことなど。

しばらくして、就寝時間が近いのか春佳は立ち上がりタオルを片手  
にシャワールームへと入って行った。



「……なんか、男子の部屋に泊まってるって気がしないなあ」

春佳を見送った鈴音は自分が寝る予定のベッドに仰向けに横になって天井を眺めた。

そう思うのは春佳の容姿が女にも見える中性的な容姿だからか、それとも春佳が鈍感だからか、そんなことを考えて鈴音は一人苦笑した。

「いいもん、またこうやっていられるんだから。今度こそ絶対に振り向いてもらうわよ、春佳」

天井に向けて手を伸ばし、握り拳を作る。

幸い、春佳には箒やセシリアのような積極的にアタックする女子はいない。やはりと言うか、一夏の方が男らしいせいか人気が高いのは先ほどの女子達との会話でも窺えた。一人、ライバルになりそうな女子がいるが鈴音は気にしていなかった。箒やセシリアに比べれば、春佳の周りは全然平和だからだ。唯一危険視していた彼の友人を名乗る和服の女性も、本当にただの友人であつたわけで、危険視する相手もない。

「今度こそ、絶対に」

鈴音が一人呟いたと同時に、春佳の机から着信音が鳴り響いた。

驚き上体を起こす鈴音だったが、彼女の視線の先　机の上には春

佳の携帯電話が置いてあった。

「電話……？」

さすがに勝手に携帯を開いて見るわけにはいかないが、やはり好意を持つ相手への着信は気になるもの。

ベッドから身を起こした鈴音は、そっと机の上の春佳の携帯のサブディスプレイを覗いた。

「黒桐幹也……？ そんなクラスメイトいたっけ？」

知らない名前に鈴音は首を傾げ、再びベッドへ戻る。

着信音はしばらく鳴ってから収まり、再び鳴ることは無かった。

「……ま、いつか。あまり詮索する女は嫌われるし」

ベッドに横になり、一度ため息を吐いた。それから隣の部屋へ視線を向ける。

「そう言えば一夏は隣の部屋なんだっけ？」

確か篠ノ之箒と相部屋、だったはずよね。ふふ、あつちはあつちで苦労してるんだろっなあ。一夏、春佳よりそういうのは鈍いし変な勘違いすることがあるから」

それに比べれば私はまだマシかな？　と一人呟いたところへ、シヤワーを終えた春佳が出てきた。タオルを首にかけ、半袖にジャージ姿で自分のベッドへと腰かける。

「おかえり」

「ただいま」

ドライヤーを手に取り髪の毛を乾かしていく春佳。

その姿を見ながら、鈴音は先ほどの着信のことを告げようと上体を起こした。

「そういえば、さっき携帯鳴ってたわよ」

「ホント？」

「嘘ついてどうするのよ」

「あはは、そっだよね。ありがと」

髪の毛を乾かし終えたのか、ドライヤーを元の位置へ戻した春佳はその足で机の上の携帯を手についた。それから携帯を開き、着信の相手を確認する。

「幹也……？」

珍しいな、あいつがこんな時間に電話するなんて」

「知り合い？」

「バイト先の社員さんだよ。ついでに言えば式の彼氏みたいな人」

「式って、あの和服の人？」

「うん。あの変わり者」

「ふうん……」

「まあ、僕が言えたもんじゃないけどね。とりあえずこれは明日掛け直せばいいか」

携帯を再び机に置いた春佳は、そのまま背中からベッドにダイブする。

子供のようなその動きに、鈴音は思わず声に出して笑っていた。

「……なにさ」

「あははっ、いや、アンタってたまに凄い子供っぽいところあるな  
って思ってる」

「む……そうかな」

「今の行動がそれを物語ってるわよ」

「う……い、いいじゃんか別に。電気消すよ」

恥ずかしかったのか、春佳は誤魔化すように言って部屋の電気を消した。

暗くなっただけのはず部屋は、時計の針の音が聞こえるほどに静かだった。

「なんか、こうやって二人で話したりするのって、実は凄く久しぶりじゃない？」

「そうかな」

「そうよ。気がついたらあたしは一夏や弾とも話すようになって、それで、クラスの間なども仲良くなって、したら春佳と話したりするにも必ず誰かいたじゃない」

「あはは、主に一夏くんとかね」

「そうそう。……でね、春佳。あたし、あの時のこと、まだ感謝してるよ」

お互いに背を向けた状態だから、お互いの表情はわからない。  
春佳は瞳を閉じて口元に笑みを浮かべ、鈴音は頬を紅潮させ、少し恥ずかしそうにしていた。

「別に感謝されるようなことした記憶はないよ」

「それはアンタの記憶力がないだけよ。  
春佳のおかげであたしは学校生活に馴染めたんだから。本人が言ってるんだから間違いないわよ」

「……そっか」

「うん。だ、だから……その、」

そこで言葉を切って、鈴音は大きく息を吸った。

「もし春佳に何かあったりしたら、あたしが守ってあげる」

「鈴ちゃんが？」

「そう、あたしが。言ったでしょ、あたし強いって。だから、あたしが春佳のこと、守ってあげる」

「……」

背を向けているからこそ、鈴音には沈黙が長く感じられた。  
どう受け取ったのかと不安になりだした瞬間、春佳は声に出して笑った。

「ぷっ……あはは、あはははは！」

「な、何よっ！」

「あはは……うつん、守ってもらっか。  
うんまさかこんなこと言われるなんて思ってなかったから。ありが  
とね、鈴ちゃん」

「べ、別にいいわよ。と言うか、いきなり笑うのは失礼じゃない？」

「ふふ、守るなんて久々に言われたから。これでも嬉しいんだよ？」

「……なんかムカつく」

「いめんめん。でも、ホントにありがとね」

「だからいって。その……こ、好意はありがたく受け取るときな  
さいよ」

「ん、じゃい”厚意”に甘えるよ」

「よろしい。じゃね、おやすみ」

「うつん、おやすみ、鈴ちゃん」



互いに背を向けたまま、けれど同じように笑顔を浮かべ、二人は自分に向かって来る睡魔に身を委ねたのだった。

### 三（後書き）

みんな鈴のことを二組だから、とか空気だとか言いやがるのでちょっと気合い入れて書いてみました。

完全オリジナルな今回の話、どうでしたでしょうか。

鈴がデレ過ぎ？      はい、すみません（汗）

あまりツンツンしてるキャラって書くのが苦手なので第共々今後の課題です。 もっと一夏も春佳もボコられるべきなんで

さて、二章ももう折り返し地点に到達しました。 次回から二章の終わりに向けて行きます。

クラス対抗戦やら、オリジナル展開やらいろいろと。

式やまだ名前しか出番のない幹也などの出番もそろそろ欲しいところですね。 幹也より藤乃が先に出るとはこれ如何に。

今回はクラス対抗戦の前哨になります。 相変わらずの一夏や暗躍する春佳達にご期待ください。

ではでは、皆さんの通勤、通学のお供にでもなれば幸いです。ごぞいませ。

そんなわけで、次回のあとがきでお会いしましょう。

## 四

「春佳、帰ろうぜ」

目の前の小さな僕は、同じく小さな一夏くんに声をかけられて立ち上がった。

それから、その頃の”いつも”と違って、一夏くんの後をついて行かずに自分からとある席へ向かった。

「あ、おい春佳？」

「……………帰る？」

あの時、一夏くんが驚いてたのをよく覚えてる。それはそうだろう、だって、能動的に行動をしなかった僕が自分から人に、ましてや女の子に声をかけたんだから。

「え？」

「だから、帰る？」

「な、なんであたしが……………」

自分でもどうしてかわからなかった。たぶん、同じ人にいじめられてたから、とかだったはず。

あの頃の僕は普通とはちよつと違う理由でいじめに苦しんでたけど、それを自覚するのはまだ後だし、鈴ちゃんも同じ苦しみがあるんじゃないかと思つたんだろ。我ながら単純なヤツだ。

「えっと、確か転校生だよな？」

「……誰よ」

「僕のお兄ちゃんの一夏。一夏、こっちは凰鈴音ちゃん」

「や、知ってるからな、それ」

一夏くんが苦笑して、僕と鈴ちゃんを交互に見つめて、それから何か言おうと口を開いたところで、僕の視界は鈴ちゃんに埋められていた。

「……おはよう？」

「お、おはよ、春佳」

やっぱりあれは夢で、今僕は目を覚ましたらしい。

「で、鈴ちゃんは何故僕の目の前にいるのかな」

「べ、別になんでもいいでしょ！」

「いや……さすがに寝顔を覗かれるのは恥ずかしいかな」

そうだそうだ、昨日は鈴ちゃんが泊まりに来てたんだ。だからあんな懐かしい夢でも見たのかな。

「……ふふ」

「何よ、いきなり笑って」

「ちょっと昔のことを思い出してたんだ。鈴ちゃんと一夏くん、最初は喧嘩ばっかしてたなあって」

「む、仕方ないでしょ。あの頃の一夏ってなんか春佳に対して過保護だったし。」

春佳こそ、昔は一夏って呼び捨てにしてたのにいつからくん付けて  
呼ぶようになったのよ」

「えっと、たぶん中学一年だと思う」

小六の時に、僕は橙子さんと出会ってしまった。ずっと僕が抱えて  
いた爆弾が何かわかる人と。

それで、僕は自分がそれまでの……流されて怯えるままの弱い僕で  
いることを許容できなくて、僕自身を変えようとした。大胆不敵に、  
常に余裕のある僕へと。

一夏を一夏くんって呼ぶようになったのもその辺りだと思う。

「人生の分岐点で、僕は間違いなく正解を選んで、その結果こうな  
ったんだよ」

じゃなかったら、今ごろ僕は知り合いにすらならない式にでも殺さ  
れてるか、それか快樂殺人者にでも成り果ててただろう。  
そう考えると、ゾッとする。

「人生の分岐点って、大げさすぎない？」

「そんなことないよ。実際、僕の身体は中一を境に良くなったでし  
よ?。」

「あー、確かに」

「つまりそういうこと。あ、鈴ちゃん、僕着替えるからちよつと外してもらっていいかな」

「え？　あ、う、うん」

僕の言葉に頷いて、鈴ちゃんは

「えっと……」

「な、何よ。ちゃんと見てないでしょ」

「それは……まあ……」

だからって、背を向けるだけってのはどうなんでしょうが。

「……ま、いつか」

そんなこと言ってる暇があるなら早く着替えよう。

すぐに思考を切り替えた僕は、上着を脱いでベッドに放り出していたのだった。

- セシリア Side -

「あ、おはようセシリアさん」

「おはようございますわ、春佳さん。」

あら、一夏さん達とはご一緒していないのですか？」

「一夏くん達なら後ろから来るよ。ちょっと早く歩き過ぎたみたい」

あはは。などと笑いながら後ろ髪を掻き、春佳さんは背後へ振り返った。

確かに一夏さん達がこちらへ向かって歩いている。隣にいる篠ノ之さんを見て、すぐにでも一夏さんの隣へ駆け出したかったのですがそんなはしたないことをこのわたくしがするわけにもいきませんので、春佳さんと優雅に待つことにしましょう。

「そつえば、クラス対抗戦の発表がそろそろですわね」



「ね、まだ入学して一週間とちよつとだつて言つのに。来週だつて？」

「ええ。一夏さんには是非とも勝つて頂きたいものですわ」

「そこで教官殿の出番じゃない？」

「ええ。このわたくし、セシリア・オルコットが一夏さんを優勝へ導きますわ。そして、そして」

わたくしは一夏さんと……と、あら？　となると春佳さんはわたくしの義理の弟になるのではないでしょうか？

「春佳さん、わたくしのことを義姉さんと呼んでもよろしくてよ？」

「いや、気が早すぎだから。せめて一夏くんと恋仲になってから言いなよそれ」

「む……つまらない人ですわね」

「つまらなくありません。セシリアさんこそ妄想だけでそんなじゃここから先大変になっちゃうよ？」

「それは……まあ、そうですね」

篠ノ之さんと比較しても、わたくしは幼なじみでない以上そこで遅れているわけですから、違う方向からアプローチをかけなくてはなりませんわ。

一夏さんが鈍いのでその分余裕がありますが、それがわたくしにも跳ね返って来るのは問題ですね。

「よ、セシリア。春佳、二人して何の話をしてたんだ？」

「秘密。と言ったただの世間話だよ」

「おはようございます、一夏さん。では、行きませんか？」

「だな。と、あれ、春佳。あれって」

遅れて来た一夏さん、篠ノ之さん、凰さんの三人も合流して、わたくし達は学園へと歩き出そうと振り返ると、こちらに手を振る男の人と、日本の昔の衣装の和服を着た女の人？ が歩いていました。一夏さんは何やら知っている人のようですが……

「よ、一週間ぶりだな、色男」

「こら式、いきなり人に向かってそういうことを言うもんじゃないよ」

「……なに、今日はセツト？」

和服の人は、とても美人でした。いわゆるヤマトナデシコと言うものでしょうか。

口調が男のような口調ですが、それでも外観を損なっておりません。男性の方はなんでしょう……子犬？

「そんなファーストフードの品目みたいな言い方しないでよ、春佳。と言つか、電話」

「あ、ごめん忘れてた。掛け直そうとは思ってたんだけど」

春佳さんが両手を合わせて男性に謝っていました。

えっと、一夏さんよりも春佳さんの方が親しい間柄のようですね。

「ああ、紹介して無かったよね。式は……セシリアさんが会ったことなかったか。」

この和服の男女は両儀式。で、こっちの眼鏡くんは黒桐幹也。二人

とも僕のバイト先の先輩みたいな人なんだ」

「友達、の方がしっくり来るけどね。はじめまして、黒桐幹也です」

コクトーミキヤ？　　なんだかフランスの詩人にでもいそうなファ  
ミリーネームですわね。

「で、幹也、こっちが僕の双子の兄貴の一夏くんと、幼なじみの篠  
ノ之箒ちゃんと凰鈴音ちゃん。で、更にクラスメートのセシリア・  
オルコットさん」

「ああ、うん。はじめまして。キミが春佳のお兄さんなんだね」

「はじめまして。織斑一夏です。弟がお世話になってます」

「あはは、実は僕の方がお世話になってるんだ。僕は社員だけど、  
入ったのは春佳の少し後だから」

「あ、そうなんですか？」

「うん」

一夏さんと黒桐さんは男同士だからか、話が合ったみたいですね。  
一方で、春佳さんと言うと……

「春佳、お前、この間抜け駆けしたんだってな」

「勝手にデート行つてたのはキミでしょ。僕のは仕事なんだから仕方ないじゃん」

「……」

「睨んでも変わらないよ、両儀さん？」

「うるさい、わかつてるよオリムラ」

な、なんでしょう。なんだか殺伐としていますが……  
この二人、見た目も少し似てる気がしますが、春佳さんもこんなぶつきらばつに話すことってあるのですね。

「な、なあ一夏、あの二人は本当に友人同士なのか？」

「そうですね、陰悪　または殺伐とした空気を感じるのですが」

「あー、俺もたくさん会ったことあるわけじゃないから知らないけど、あの二人は会うといつもあんな感じだぞ」

「一夏くんの言ってる通りだよ。あの二人はホントにお互いに遠慮がないからね。」

そのくせしつかり親友だ。なんて言うもんだから笑っちゃうよ。親友ってあそこまで遠慮ないもんかなって」

確かに黒桐さんのおっしゃる通りですわ。わたくしが知る親友と言う間柄が醸し出す雰囲気にはとても見えませんもの。

「まったく、そんなだからあの怪物僧侶に遅れを取るんだよ」

「はっ、名前も知らないヤツにボコボコにされたヤツに言われたくないけどな」

「うつさい。本気でやってりゃミンチだよミンチ。それにちゃんと撃退したから」

……ホントに親友なのでしょうか。

「はいはいやめやめ。春佳も、お兄さんや級友の皆さんが引いてるよ。」

式もそんなムキにならない」

「だって幹也、こいつが」

「言い訳は聞けません」

シンクロ率もやけに高いですわね……実は両儀さんも含めて三つ子とかではないのでしょうか……？」

「それで、すまないんだけど春佳を少し借りてもいいかな」

「うん？ 昨日の電話のこと？」

「そういうこと。平気？」

「遅刻しなければ平気だよ。ごめん、先に行つてて」

「おう、わかった」

両手を合わせてわたくし達に謝る春佳さんに、一夏さんが頷いてわたくし達は先に学園へと向かったのです。

「しっかしやつぱりあやってみると違和感バリバリよね。春佳ってあたし達相手にあんな風な言い方しないじゃない？」

「春佳曰く、人を選んでるらしいぞ。そもそも俺達はそういう対象じゃないんだと。」

式さんとは初対面が最悪だったらしくて、そのまま引き摺ってああいう感じに収まったとかって言ってたな」

初対面が最悪とは……わたくしと一夏さんのような感じでしょうか。なるほど、それならわたくしにあのような言葉を言うのも頷けますわ。

「なににせよ、春佳は謎が多いな。」

……ところで一夏、来週遂にクラス対抗戦の対戦相手が発表されるのだが」

「……おう。ちゃんと知ってるぞ」



「相手が誰であれ、気合いを入れて行くように。その、教官なら私がいくらでもしてやるからな」

……なんですって？

「ちょっとお待ちになって、篠ノ之さん。一夏さんの指導はこのセシリアが承っておりますのよ？」

「知らん。言っただけだ、私は一夏に頼まれて受けたのだと」

「なら、篠ノ之さんの意思はないわけですよね？  
それなら一夏さん、やはり専用機のあるわたくしと訓練した方がいいですよ？」

「なっ、い、一夏は私と特訓するのだからお前は必要ない！」

「それは一夏さんが決めることですわ」

わたくしと篠ノ之さんが同時に一夏さんを見て、一夏さんが狼狽する。

……もう、こういうところははっきりしない方ですわね。普段はあんなにも凛々しいと言っのに。

「あははっ、モテモテね一夏」

「これのどこがモテモテなんだよ！」

「……」

こんな時ばかり、わたくしと篠ノ之さんは目を合わせてため息を吐いた。

基本的にわたくし達はライバルですが、ええ、こういう時は何も言わずとも互いの気持ちがわかると思うものです。一夏さんの朴念人とお互い苦労しますわね、と。

「織斑兄弟の鈍さはホント折り紙つきだから洒落にならないのよね……」

「いやいや、俺は春佳ほど鈍くないって」

「春佳も同じこと言うわよ、それ。ほら、遅刻したくないから行くわよ」

盛大なため息を吐いてわたくし達を先行する凰さん。彼女も春佳さんのことではいろいろ苦労してるのですね……ああ、いつか愚痴など

をいろいろ話したいですわ。

「……行くぞ、一夏」

「おわつ、ほ、箒!？」

一夏さんに腕を絡ませて引っ張って行く篠ノ之さん。  
まずい、出遅れましたわ!

「そうですね、遅刻したくありませんもの」

「せ、セシリアまで……」

負けないように、空いてる腕にわたくしの腕を絡ませて一夏さんを  
引っ張る。

……幼なじみが相手でも、簡単には負けませんわ。

- Side out -

「で、何かな。遅刻すると千冬姉の名簿が落ちるからできれば最速

でお願い」

一夏達を見送って、春佳は幹也へと振り返った。

先ほどまでの年相応な少年の雰囲気が消えて、代わりに口元には笑み、その瞳には何かを探るような雰囲気が宿っていた。

「うん。まあ、調べ物をいろいろした結果の話なんだけど、やっぱりと言うか……魔術師はこの学園の中にいる。それは春佳も知ってるよね」

幹也は片方の目を隠すかのように伸ばされた前髪が邪魔だったのか、手で少し動かしながら春佳へと答えた。  
それに、春佳は頷いて先を促す。

「それでなんだけど、亡国企業って言う集団は知ってる？」

「名前くらいなら、かな。IS関連のテロリストみたいなヤツらでしょ？」

「まあ、そんなところ。厄介なことだね、その魔術師と亡国企業に繋がりがああるかもしれないんだ」

「トウコは異形やら奇妙な技の使い手がいるって前に言ってただろ？」

そこに魔術師も追加ってわけだ」

「……わー、びっくり人間サーカスか何かかな、そこ」

「知るか」

「話を戻すよ。だから、気をつけてって言おうと思ってたんだ。学園内で変な話を聞いたりしたら、その可能性が高いから」

「例えば？」

「人が死んだり、何か暗い話だよ。幽霊やら悪魔が出る話とかね」

「普通なら鼻で笑って切り捨てるような話だけだね」

「春佳や式がそんなことでできないって知ってるから言ってるんだよ。なんだかんだ言ってたって春佳、キミはまだ子供なんだから」

「ふふ、僕を子供扱いする人なんて幹也か千冬姉くらいしかいないよ。」

「ありがと、極力気をつけるよ。それと、できれば静かに片付ける。人が相手の場合はわからないけど　化物なら、殺すしかないから

ね。騒ぎにはならないようにする」

殺す。という言葉に幹也は顔を少ししかめるが春佳が素直に頷き、その言葉に嘘がないと信じたのか、幹也はよろしい。と笑った。

「じゃあ、僕達は行くから。また何か情報が入ったら連絡するよ」

「うん、ありがとう」

「じゃあな、さすがに中はオレの範囲外だからお前に譲ってやる。ま、幹也に繋がらなければオレに連絡しろよ。取り次ぎくらいはしてやる」

「ん、わかった。それじゃ、またね」

「うん、気をつけて」

「せいぜい死ぬなよな」

軽く手をあげて、春佳は二人に背を向けて歩き出した。真剣な表情で先ほどの幹也の話を脳内に反芻させながら。

「亡国企業とやらに加担する魔術師、か。  
ま、魔術だけで食える世の中でもないから仕方ないけどね。ISっ  
てのはそれほどの兵器だし」

はあ……とため息を吐けば、春佳は一度立ち止まって校舎を見上げる。

時計を見れば、予鈴の時間が間近に迫っていた。

「……ま、いいけどね。ISテロリストも関わってるってことは、  
僕個人だけの理由でもなくなるし」

やがて、その口元が笑みの形に変わっていく。

春佳はそれを見られないように、口元を手で覆った。

「ふふ、もしも一夏くん達にも害をもたらすって言うなら問答無用  
でブチ殺すから気をつけた方がいいよ？」

誰に言うでもなく、春佳は校舎を見ながらひとりごちる。

口元を覆っていた手をどかせば、その口は微笑の形になっており、  
少年は校舎へと歩いて行くのだった。

#### 四（後書き）

はい、そんなわけでガンガン投稿します。

どうも、御崎マナです。

今回もオリジナルですが、式と幹也を出すチャンスだったので一気に出しました。

この回はこれから先に必要な展開で、これは決して式と幹也、そしてセシリアの視点の為に書いたわけではありません！

さてさて、二章はあとだいたい二、三回ほどで終わります。

春佳に関する情報が少ない！とリアルの友人から言われましたがあの子はよく喋る子なんでこれから先橙子さんとベラベラしゃべってくれる予定です。

ではでは、次回のあとがきでまた会いましょう！



## 五

「はい、では織斑くん、この部位の構成はどの物質で成り立っていますか？」

「えっと」

三人しかいない教室で、僕は山田先生に聞かれた答えをノートから見つけて答えていた。  
お察しの通り、ただいま授業中である。難なく、と言うわけではないけど答えることができたので僕は着席した。

「はい、正解です。ではそろそろ実践してみましよう。ちょっと待っていてくださいね、今打鉄を一機借りて来ますので」

慌ただしく出て行く山田先生を見送って、僕は窓からチラッと校庭を覗いた。  
ちなみに、この授業の時は僕は絶対に窓際にいたりする。だって、見学したいし。

「織斑くん、ノートちょっと見せてくれない？」

「ん、いいよ。はい」

「ありがとうー！」

僕の近くに座ってる二組のフェリスさんにノートを渡して、僕はまた校庭をチラッと見た。一夏くんが篝ちゃんとセシリアさんに両脇を固められているいつもの展開だ。

相変わらずと言うか……今日はクラス対抗戦の組み合わせ発表だったのに。

ま、らしいって言えばらしいけどね。

「いいなあ、私もIS乗りたかったなあ」

もう一人、こちらも二組の八代さんが僕の方へ視線を向けて呟いた。そう、この教室にいるのはメカニック枠で入学した三人で、一組と二組の合同授業の時は僕らは別の教室でISのメカニックの知識を勉強するのだ。

僕はもちろん、フェリスさんも八代さんもIS適性が非常に低いらしく、ISを動かしても文字通り動かせるだけで、とてもじゃないけど戦えたりはしないそうだ。

「あはは、別にいいじゃない、乗れなくても」

「そうは言ってもやっぱりISって女にとって彼氏と並ぶくらいのステータスなのよ？」

より優れた女になりたいならやっぱりISは乗りたいもんよ。  
……無理だからメカニック枠で入ったんだけどね」

おそらく、僕の知る中で一番の現代っ子である八代さんはため息を吐いて本当に残念そうに言った。

まあ、ISに乗れた方が有利ではあると思うけど。

「そんなもんかなあ」

「そんなもんよ」

「私は単純にロボットが大好きだからだけだね。ありがと、織斑くん」

「どういたしまして。……ロボット？」

フェリスさんからノートを受け取って、僕は彼女の口から出た言葉を繰り返した。

えっと、ロボット？

「うん。私ね、日本のロボットアニメがすごく好きでね、でも、私自身はすごいトロイからロボットのパイロットはやっぱり無理で、だからロボットのメカニックになれたらいいなって小さい頃から」

らずっと思ってたの」

「そ、そうなんだ」

「うん。でも、八代さんの言いたいこともわかるの。私もパイロットになれば良かったなってまだ思ったりするから。それで必殺技とか叫んでみたいよね。竜巻斬艦刀！ とか」

「「……」」

マイペースでゆっくりな話し方をして、どこかのほんさんを思わせる感じのフェリスさんだったけど、まさかこんな感じの人だったのか、と僕と八代さんは本気で沈黙していた。

だって、今の部分めっちゃめっちゃ早口で言ってたんだよ？ 技名もばっちり叫んでて。

「織斑くんも男の子ならそういう願望なかった？」

「いや、僕はなかったかな……」

と言うかそんな熱血は絶対に僕のキャラじゃない。そういうのは一夏くんの役目。

「はい、お待たせしましたあ」

僕が苦笑気味に言ったところでドアが開いて、打鉄の腕パーツを持った山田先生が入って来た。  
あれで実際にISを弄ってみよう。ってことらしい。

「ふふ、こつというのは僕の本領だね」

橙子さん仕込みの造り手の腕を見せてやろうじゃないか！

- Side - 一夏 -

「はー、疲れた」

「ふふ、お疲れ様、お兄ちゃん」

「おう、そつちもお疲れ。メカニックはなんかやったりしたのか？」

「えっと、これから本格的にISを弄ったりするみたいだよ。」

今日打鉄の腕パーツを弄ったんだけどダメだね。内部構造をだいた  
い把握してたつてのに全然上手くいかなかった。人形とかみたい  
にはいけないね、やっぱり」

授業が終わり、教室に帰った俺は同じく教室にいた春佳と話をし  
ていた。

教室はまだあまり人がいなくて、さすが女子は着替えに時間がか  
かるんだなと再認識させられた。

「そりゃ、さすがにそうはいかないだろ。でもま、春佳は手先が器  
用だし大丈夫だって」

「ん、ありがとう」

頭をポンポン叩いてやると春佳は片目を閉じて笑った。  
昔からこうすると春佳は笑うもんだから、今じゃ手癖の一つみたい  
なもんだ。

「次は蒼崎先生の授業か……癒しの時間だよな、ホント」

「まあね、言うことは間違っていないし勉強にもなるしね」

「おっ」

と、そう言えばセシリアと戦った時、春佳は蒼崎先生と試合を見てたよな……？

「なあ、春佳」

「うん？」

「セシリアとの試合のとき、お前蒼崎先生と一緒にいなかったか？  
仲良いんだな」

「え？　ああ、うん。仲良いと言うか、座った席が隣だったから  
ご一緒してただけだよ」

なるほど。まあ接点とか特にないもんな。

「そうなのか」

「そうなの。と、チャイム鳴ったね、じゃあまた」

「  
」  
おっ

とか言っても春佳は後ろの席だから、別にこんなやり取りする必要はない気がする。

あれか、挨拶みたいなもんだよな、これ。

「はい、では始めますね」

蒼崎先生がいつものようにズレたらしい眼鏡の位置を直す仕草をしてにっこりと笑った。  
同じ眼鏡キャラに山田先生がいるってのにこの差はなんなんだろうか。

「今日の放課後はクラス対抗戦の対戦組み合わせの発表ですね、織斑くん、頑張つてね」

「は、はい」

……忘れてたとは言えない。そうだった、俺がクラス代表なんだっ  
た。



「それが終わるとゴールデンウィークね。国民的休日とか言われるあれ。遊ぶのはいいいけど不純異性交遊とかハメを外しすぎるのはダメよ？」

では、授業に入ります」

そう言つて、蒼崎先生は黒板に文字を書いていった。

一瞬、後ろから息を呑む声が聞こえたような気がしなくてもないけど……気のせいだよな。

「今日はちょっとオカルトな話をしましょうか。いつも難しい話ばかりだと知恵熱が出ちゃうかもしれないしね。

では、そうね……篠ノ之さん、都市伝説はご存知？」

「え？ あ、はい」

「では、例えば何があるかしら？」

「えっと……口裂け女とか、でしょうか」

「うん、これ以上ないくらいに有名でわかりやすい話を出してくれてありがとう。」

これを踏まえて、怪談話の”システム”を話してみようと思つんだけど、どう、気にならない？」

「怪談話のシステム、ですか？」

クラスメートの誰かの呟きに、蒼崎先生は頷いて答えた。

「例えばその口裂け女だけど、私が昔に聞いた話ではその誕生は整形手術中に、担当医師が付けていたポマードを嫌がって顔を動かしてしまった結果、口が耳まで裂けてしまい、それに絶望して自殺した女性の怨念の姿と言うのが始まりと言われているの」

同じ女として何か思うところでもあったのか、クラスの中が少し騒がしくなる。

箒辺りはバカバカしいかと思ってるかななんて予想して見てみたら、意外にも真面目に聞いていた。

「それが都市伝説、または怪談話として広まった頃はね、今ある口裂け女の”性能”は一切存在していなかったの。

例えば、百メートルを五秒で走るとか。口裂け女がどうしてもそのような性能を持ったかわかる？

では……布仏さん」

「ふえ？ えつとお……その方が怖いからとか、ですか？」

「うーん、正解だけどちよつと違うかな。単純な話でね、クラスの

足の速い生徒とかが口裂け女が出ても、「俺の方が速いから怖くない」って言ったのよ。そこで出て来たのが口裂け女の異常な俊敏性。そうすればどんなに足が速くても逃げられないもの」

なるほど、確かに百メートルを五秒とかで走られちゃ逃げるのは間違いない無理だ。

世界記録保持者だって無理だろう。

「でも、そうすると今度は絶対に逃げれない。だからそこで生まれたのがあの有名な合言葉のポマードやべっこう飴なの。

口裂け女は逃げて速いから捕まる。でもポマードと三回唱えるかべっこう飴を渡すと帰るってあれね。どう？ 怖い話って結構綿密なシステムから為ってるのよ。

日本の怪談話は他の国と違って残酷だったり絶望的なものが多いけど、ちゃんと逃げ道を用意してるのよ。まあ、中には逃げ道のない絶望的なものもあるけれど」

そこまで言って区切ったのか、蒼崎先生は一息ついてにっこり笑った。

……これを授業って言っているのか気になるけど、ま、いいか。

「たまには息抜きも大事だからね、今日は怪談話でもしましょうか。逃げ道のあるものも、無いもの、ね。みんなもただ聞くだけじゃダメよ？

聞いて、対処法なんかを考えるの。話を終えたらみんなに対処法とか聞いたりしますからね。じゃ、始めましょ」

女子が数人ピクリと動いて、それを楽しそうに見た蒼崎先生は、心の底から楽しそうに笑ったのだった。  
この人、サドっ気がある人なのか……なんか意外だな。

「では、これで終わります。みんなお疲れ様でした」

チャイムと同時にこれ以上ないほどのいい笑顔で蒼崎先生が教室を出て行った。  
教室内はと言うと……本気で沈んでいた。

「蒼崎先生……怖すぎ」

「どうしよう、あたし今夜一人でトイレ行けないよお……」

あの後、蒼崎先生は男子の俺も背筋がゾツとするような話を出して来たりして、クラスメートのみんなを怖がらせていた。

「なんて言うか、やりたい放題だったね」

「だな。春佳は平気だったのか？」

「ん、まあね。今さらそんなので怖がる年齢でもないでしょ」

……この見た目のやつにそんなことを言われてもな。

「一夏くん、今失礼なことを考えてなかったかな？」

「い、いや……」

おお、遂に弟まで千冬姉同様の読心術を体得し始めたか。  
俺ってそんなに考えてることが顔に出やすいのだろうか。

「「一夏（さん）」」

「おう、箒、セシリア」

気がつけば両脇には箒とセシリアがいた。  
そう言えば、この二人は大丈夫……そうではないな。箒はともかく、  
セシリアはビビってるのが顔に出てる。

「セシリアさん、大丈夫？」

「だ、大丈夫なものですか！      日本の怪談とはあんなにも凄惨な  
んですの？」

「まあ、お岩さんとかはね……」

「あー、あれは確かに怖いよな。 箒は大丈夫なのか？」

「当たり前だろう。 あのと程度で怖がるわけがない」

「のわりに結構リアクションしてたよね」

「っ……」

直後、スパン！      と小気味のいい音が春佳の頭から響いた。 箒が  
手に持っていた大学ノートで春佳を叩いたらしい。  
春佳にまで手が出るのが早くなったか、箒よ……

「いたっ！      暴力反対だよ箒ちゃん！」

「自業自得だ！」

「むー……」

「あの、一夏さん」

春佳と箒の漫才を眺めていた俺にセシリアから声がかかった。  
まだ怖いのか、頬が少し赤い。……あれ、怖い時は顔は青ざめるんじゃないかったか？  
もしかすると違うのかもしれない。

「なんだ？」

「その、怖いので今夜お部屋にお邪魔してもいいでしょうか？」

「別にいいけど……」

「いいわけあるか！      自分のルームメイトと怖がっていればいいだろう」

おおっ、箒、この距離でその声量はビビるからやめてくれ。

そしてそのヤクザさんからの眼力で睨むのもやめてくれ。怪談話より怖い。

「なつ、篠ノさんには関係ないことでしてよ」

「関係あるに決まっているだろう。」私が「一夏のルームメートなのだからな」

「ぐっ……」

「ふむふむ、今日は箒ちゃんが有利かな」

「春佳、何を言ってるんだ？」

「一夏くんには当分わからないことだよ」

「なんだそりゃ」

それから俺と春佳は、千冬姉が入って来るまで睨み合う箒とセシリアを見ていたのだった。



「それじゃ、行こっか一夏くん？」

ホームルーム終了後、後方を春佳に、そして両脇を箒とセシリアに固められて俺はため息を吐いた。

「別に逃げたりしないっての。腹もくくってるしな。行こっぜ」

「その必要はないわ」

立ち上がってクラス対抗戦の対戦表が貼られてるだろう掲示板に向かおうとしたところで、教室の前に何かが立っていた。

何かって言うのは悪いな、鈴だ。鈴が仁王立ちしていた。

「どしたの、鈴ちゃん。そんなつい最近最終回を迎えたアニメのキヤラみたいなセリフを言っちゃって」

「……えっと、突っ込みどころ満載過ぎて困るけど、とにかく見に行く必要はないわよ、一夏」

俺もよく意味のわからない春佳の言葉に困惑した鈴は、ブンブンと

首を横に振ってそれをスルー。そして俺に人差し指を勢いよく向けた。

「こらこら、人を指差すなって言われなかったか？」

「で、なんでだ？」

「これを見なさい」

差し出されたのは鈴の携帯。そこには、

”一回戦、織斑一夏、凰鈴音”と書かれた写真が映ってる。まさか……

「一回戦の相手って……鈴か？」

「そういうこと。ふふん、なんか宿命の対決になりそうね、一夏」

「なんだよそれ」

しかし、一回戦から鈴が相手か……見知ったやつとは言え実力も機体も未知数だからやや不安だな。

「一夏、いくら顔見知りだからと言っても手加減などではダメだ

からな？」

「当たり前だろ。んなことしたら俺が鈴に怒られる」

「そういうこと」

「むしろチャンスですわ一夏さん。これに勝てれば専用機持ちを一人潰せるわけですから優勝に一気に近づきますわ！  
一回戦からついてますわね」

あ、こらセシリア、そんな挑発的なことを言ったら鈴が……って、あれ？

鈴が、怒ってない？

「ふむ……一夏くん、友達だからとか幼なじみだからってのはダメだからね？」

鈴ちゃん、強いと思うから」

「わかってるって」

「ホントに？ 全力全開だよ？」

「当たり前だろ」

春佳まで何を言い出すかと思えば、俺だって千冬姉の弟だぞ？

「むしろこういうことはお前よりわかってるつもりだぞ、春佳」

「そっか。ならいいけど」

そう言つてにつこり笑う春佳。これで終わってればまあいつも通りだったんだけど、そんな春佳の後ろには……なんか引きつった表情の鈴がいた。

「春佳、あたしには？」

「え？ いや、さすがに鈴ちゃんには何も言えないよ。セシリアさんの時は同じクラスだったから大丈夫だったけど、鈴ちゃんは違うクラスでしょ？」

鈴ちゃんも言つてたじゃない、敵でもあるから自分のISは見せれないって。それと同じだよ」

問いに答えた春佳の言葉を聞いた瞬間、鈴の表情が固まった。漫画風に言つなら”ピシッ”て音が入りそうなくらいの勢いで。

「……正論だけど、正論だけどなんか納得がいかない……」

……なんか、嫌な予感がする。いや、これは俺じゃなくて春佳の方にかもしれないけど、とにかく嫌な予感がする。

「その気持ち、わかりますわ鳳さん」

「この兄弟はどうしてこう……人の気持ちをもっと学ぶべきだ」

「え、俺も!？」

「「無論だ(ですわ)」」

気がつけば箒とセシリアも敵に回っていたらしい。  
なんだ、どういうことだ? 意味がわからん。

「……春佳!」

「は、はいっ!?!」

鈴に大声で名前を呼ばれ、人差し指を向けられてビビり気味に返事をする春佳。

だから人を指差すなって……

「あたしが一夏に勝つたら一日付き合いなさい！」

……鈴が、俺に勝つたら？

あれ、なんで俺に勝つたらなんだ？

「え？ あ、うん。別にいいけど」

「おい春佳！？」

お前も何を了承してるんだ！？

なんでお前と鈴のやり取りに俺が入ってるんだよ。

「ちゃんと聞いたからね？

……ふふ、一夏、覚悟しておきなさいよ。マジでやりに行くんだから」

「……」

今、やりに行くのやるは間違いない殺るだったぞ。あいつ、俺を殺す気だぞ。

「ふ、望むところだ」

「一夏さんは簡単にはやらせませんわよ？  
何故なら、このイギリス代表候補生たるセシリアが指導するのですから」

「……まだ言うか」

「あなたこそ、まだ自分が教官などと宣のたまうつもりなのですか？」

「ふふん、あたしだって簡単にはやらせないわよ。  
そうと決まればここにはいられないわね。覚悟しときなさいよ、一夏、春佳！」

いつもの言い合いを始める幕とセシリアに廊下を全力ダッシュで去って行く（校則違反。千冬姉に見つかったら名簿制裁）鈴。  
……なんだ、この混沌空間は。

「ま、何はともあれ頑張ってね一夏くん。  
けど、なして鈴ちゃんに僕にあんな条件を付けて来たんだろっ」

一人、俺を笑顔で励ましてから真面目に悩む春佳。

……こいつは。

「たぶん、お前には当分わからないと思うぞ、それは」

だから、いつか言われた言葉を苦笑いと共に返してやった。  
まったく、ホントに鈍感なやつだ。兄として嘆かわしいぞ、まったく。



## 五（後書き）

そんなわけで二章最後の日常風景でした。  
次回からクラス対抗戦に入っ て行こうと思います。

そういえば、地元のゲームセンターにISのカードケースがUFO  
キャッチャーの景品に入っ てたので鈴のを確保しておきました。  
さっ そく某流行りの格ゲーのカードなどを入れて使っ ております。

## 閑話休題

残りのヒロインですが、もうどんな感じにするかもだいぶ固まっ て  
きました。

まだ一卷の六割ほどしか進んでないと言っ ちゃうゆっくり展開ですが、読  
んでいただけたら幸い、面白いと感じていただけたら至福です。

では、次回のあとがきでお会いしましょう！

## 六

「……また破壊されたなんて」

少女は自室にある地図に標示された点の減少に唇を噛んだ。

地図にはIS学園の敷地が描かれており、現在は三ヶ所に赤い点が浮いていた。

「蒼崎橙子は私が直接監視しているから枠外のはず。ならば、誰？」

魔術を扱う者として、人形師たる蒼崎橙子は並の魔術師より遥かに有名だ。

少女もその存在を確認した時は自分の目を疑ったほどだった。だから、要警戒対象として蒼崎橙子は監視されていると”気づかれる”ように監視した。

結果、彼女はほとんど動いていない。普通に講師として授業を行うのみだ。

「いくら粗造りとは言え、使い魔も用意しているし、そもそも一般人にはわかるわけもないはず」

ならば、相手は間違いなく魔術師。そこまで推測して、少女は小さくため息を吐いていた。

「なににせよ、早くしないと。何か、いいタイミングでもあれば…」

不意に開いたドアに言葉を切り、少女は振り返る。

一般人にはバレないからと展開した術式をそのままに、少女は入って来た生徒に笑いかけた。一緒に行こうと約束をしていたからか、それは誰かわかっていた。

「クラス対抗戦始まるみたいだよ。うちの兄貴が第一回戦だからね、気合い入れて応援しないと」

「うん。けどいいの？ 鳳さんも友達なんでしょ？」

「それとこれとは話が別だよ」

「そっか。じゃあ、行く？」

「うん。気合い入れて応援しないとね」

世界唯一のIS操縦者を兄に持ち、自身もメカニックとして入学した男子生徒の少年は微笑んだ。そして少女は少年に好意を寄せており、だからこそ選択肢を狭め、視野が狭くなってしまう。

故に少女は気づかない。少年　織斑春佳の視線が自分の真後ろにある術式に向けられていたことに。

- Side 一夏 -

「……鈴のやつ、すげえやる気だな」

あれはやっぱり殺る気だろ。絶対に俺を殺す気だ。

「大丈夫ですわ、一夏さん。一夏さんだっていたずらに日々を過ごしていたわけではありませんもの」

「そつだぞ、一夏。男子たる者、覚悟を決めて気合いを入れて行け」

「わかってるつての。……うし、行つて来る」

覚悟完了　つてな。余裕を持って、俺は鈴と相対した。飛行の感覚も以前よりずっと楽だし、大丈夫だ。戦える。

「ふーん、いつもみたいにヘタレてるのかと思ったけど、ずい

ぶんやる気じゃない？」

「まあな。お前ほどじゃないけど、男ならやる時はやらないとな」

「いいわね、上等よ。ボツコボコにしてやるから覚悟しなさい」

「……鈴、なんでそんな殺る気に満ち溢れてるんだ？」

「うっさいわよ。……春佳のやつ、あの女子と一緒に見てるなんて……」

「あー……」

なるほど、春佳関連か。あいつは……いたいた。クラスメートの鈴木さんと座ってこっちを見てるな。つまり、憂さ晴らしかこいつ。

「鈴」

「なによ」

「憂さ晴らしとか八つ当たりのつもりでやる気なら、俺は倒せないからな？」

「！」

「これでこっちはかなり真剣なんだ。そんなつもりならボッコボコになるのはお前の方だぞ」

鈴の表情から不機嫌が消えて行く。よし、これでいい。  
せつかくの真剣勝負なんだからお互いしっかりやりたいし、何よりそんな理由で戦って欲しくない。

「……そうね。春佳はこれが終わってから話を聞けばいいし。まずは目先の相手に集中しなきゃね」

「そういうこと。うし、ならやろつぜ」

「いいわよ。勝っても負けても恨みつこなしだからね、一夏！」

鈴の言葉と同時にブザーが鳴って、俺は鈴を見据えたのだった。

- Side out -

「鈴のISの名前は……えっと、甲龍？  
シェンロンって読むのか？　なんか違うのが出てくるんだけど…  
…」

白式から流れて来る情報に首を傾げ、一夏は目の前の鈴音を眺めた。  
甲龍に身を包んだ鈴音は右手に大型の青竜刀”双天牙月”を持って  
真正面から一夏と対峙していた。

「……ややこしいから”こつりゆう”で」

「なにを一人でブツブツ言ってるのよ！  
来ないならこつちから行くわよ！」

「っ！」

勢い良く飛び出した鈴音は、一夏の目の前で青竜刀を振り上げた。  
頂点に振り上げた瞬間、左手を柄尻に添えて一夏へとまっすぐに振  
り下ろす。

「おわっ！」

咄嗟に形成した雪片式型で迎えるも、金属音と共に弾かれ後退する一夏。

一息をつかせる間もなく、鈴音は一夏へと追撃を放って行った。

「このっ……最初からトップギアかよ！」

「当たり前でしょ！」

言っただじゃない、一夏のこと、ボッコボコにしてやるって！」

「そうかよっ！」

金属音が何回も鳴り響き、その度に火花が散り、一夏と鈴音が斬り結ぶ。

自身の経験、箒からの指導や千冬の影響などから剣道に重きを置いた一夏の剣術に対して、鈴音のそれは単純な接近戦。

双天牙月に頼り切るでもなく、しかし必要な斬撃を要所要所で放って行く。そして、同時に放たれる拳打も一夏を簡単に攻めさせない要因の一つだった。

「ふーん、案外やるじゃない。伊達に剣道やってたわけじゃないのね」



「まあな。お前こそ、どこでそんな戦い方を覚えてきたんだよ」

「言っただしょ、一年で詰め込んだって」

「……お前、化物だな」

「失礼ね、言うならせめて天才って言いなさい……よっ！」

「っと、させるか！」

先ほどの比にならない火花と金属音に、二人はお互いの衝撃で弾かれて後退した。

一夏は呼吸を整えると雪片式型を真正面　正眼に構え、鈴音は左手にもう一つの双天牙月を形成した。

「それ、二刀流かよ」

「ふふん、違う違う。この双天牙月はね、こういう使い方もあるのよ！」

鈴音は柄と柄を合わせ、双刀と化した双天牙月を水平に構え一夏に投擲する。

飛んで来たそれを回避した一夏の右肩に、凄まじい衝撃が襲いかかっていた。

「一夏!？」

「今の一体……何が」

「鳳のIS、甲龍の固有武装だな。龍砲と呼ばれる衝撃砲だ」

モニタールームには、甲龍の機体情報が浮かんでいた。  
千冬は腕を組み、それを眺める。

「砲身、砲弾が不可視の上に角度の限界がないか、なるほど、なかなかに強力だな」

「白式の単一仕様能力である零落白夜も迂闊には使えませんし……」  
ワンオフ・アビリティ

「ふふ、まだ大丈夫ですよ」

「ほう、オルコット、その根拠は？」

「わたくし自身が経験しましたので。一夏さんにはまだ余裕がありますもの。だからきつと何かあるはずですよ」

「なるほどな。では、それを期待しておくでしょう」

千冬がそこで言葉を切り、モニターへと視線を戻した。  
戦況は 今も変わらず。

「接近戦主体かと思ったら砲撃かよ……  
龍砲だっけか？ 不可視つてのは汚いな」

「そういう機体だから仕方ないじゃない。卑怯とか言わないでよね？  
ISってこういうもんでしょ？」

「当たり前だよ。」

だから、お前もこれから起こることに卑怯だとか言つなよな」

「は？」

双刀となった双天牙月を構える鈴音に、一夏はニヤリと笑って精神を集中させた。

その効果は、瞬く間に白式に現れる。

雪片式型はエネルギーを纏った刃になり、そのエネルギーはうつすらと一夏を覆う。

「ワンオフ 単一仕様……アビリティ 能力……？」

「零落白夜ってんだ。ま、当たれば痛いから気をつけてくれよ！」

瞬間的に加速させ、一度の瞬きの間に一夏は鈴音との距離を詰めた。そして、そのまま胴へと横薙ぎを払う。

対する鈴音もそれに反応して、防ぎ切れなかったのか左腕で防いだ。

「！ シールドエネルギーが四割も！？」

しかも左腕の部位は全滅って、どうということよこれ！」

「文字通り、エネルギー消滅能力だよ」

「くっ……汚いのはどっちよー！」

鈴音は至近距離から龍砲を放ち、一夏から距離を離れた。  
一夏も追撃はせず、零落白夜を解除した。

「さっきの発動とその前の龍砲でこっちは残り半分か……向こうは四割減ったって言うてるし、とりあえずは良しとするか」

「ずいぶん余裕じゃない。もうさっきみたいな奇襲はさせないわよ？」

「なら真正面から行ってやるよ」

「上等！ かかって来なさい！」

（とは言ったものの、あの龍砲が厄介なんだよな。真正面からしか来ないけど、見えない分セシリアのビットよりやりづらい。法則も何もないからな）

「ま、考えるのはもう少し後だな。とりあえず今は前に進むか！」

言って、再び加速させようと意識を集中させたと同時に、対峙する二人の真ん中に閃光が放たれていた。

「織斑先生！　アリーナのシールドが破られました。そこから未確認のISが接近しています！」

「なに？　それは……」

アラートが鳴った時にはもう遅く、一夏と鈴音の間に閃光が走っていた。

そこには、ISらしさの一切感じられない、無骨な機械が一機、佇んでいた。

「……なんだ、あれは……山田先生！　至急他の先生方へ連絡をしてアリーナへ」

「それが、ハッキングされているようでアリーナへ入れません！」

「なに！？　……仕方ない。アリーナの観客席を閉鎖。生徒を避難させる。その間に私達はアリーナへ入れるようにするぞ。ハンガー部分ならばセキュリティが緩いはずだ。最悪、破壊する」

「はい」

「ち、ちょっと待ってください。一夏さん達はどうしますの?」

「少しの間逃げていてもらう」

「そんなっ……」

セシリアの悲痛な声を無視して、千冬は右手を強く握りモニターへと振り返ったのだった。

「……ったく、なんなのかな、これは」

人の雪崩から抜け出した春佳は、アリーナへ振り返ってため息を吐いた。

隣に座っていた少女もいなく、一人立ち尽くす。

「コーヒーでも買って飲むかな。まったくもう、意味がわからないよ、僕は」

不機嫌そうに呟いて歩き始めた彼のポケットが小さく揺れて、春佳はそこに入っていた携帯を取り出した。  
着信だ、相手は蒼崎橙子。

「もしもし？」

「春佳か。今は大丈夫だな？」

「まあね。で、なにかな？」

「仕事だ。IS学園のシステム中枢に侵入者だそうだ」

「へえ、これはまたいいタイミングで」

「警備員は皆倒されている。命に別状は無いが、聞いた話から考えても、相手は間違いなく魔術師だ」

「……」

「私も後から向かう。お前は先に向かい、その魔術師と対峙しろ」



「ん、了解。で、そいつは殺すの？」

「いや、できれば捕縛したいそうだ。よって半殺しまで。いいな？」

「わかった。すぐに向かうよ」

携帯を閉じてポケットにしまい、春佳は小さくため息を吐いた。そして、その口元を笑みの形に歪ませた。

「ふふ、タイミングが悪かったわね、侵入者さん。

”私達”が不機嫌な時に入って来るなんて。できれば予想が外れて欲しいけど、当たっても容赦は一切しないから」

直後、春佳は矢のように駆け出した。  
相対するべき”敵”へ向かって。

「一夏、聞いた？」

「ああ、聞いてるよ」

上空で、一夏と鈴音は並んで目の前に浮く機体を睨みつけた。  
先ほど千冬から受けた通信では、アリーナに先生達が入れず、その  
為の時間稼ぎをしてくれとのことだった。

「けど、あの機体さ……」

「ああ、生体反応が無いんだよな。つまりは」

「無人機、ね」

距離を取り、互いの顔を確認せずに会話する。  
視線は、目の前の機体から外さない。

「ならさ、俺らに勝算はあるわけだ」

「は？」

「俺の単一仕様能力……零落白夜って言うんだけどさ。あれ、エネ  
ルギーを消滅させるのはわかったよな」

「そうね。……まさか、一夏」

「ああ。人が乗ってないなら怪我させる心配もしなくていいからな。遠慮なくぶった斬れる」

「なるほどね……いいわ、それ乗ってあげる。で、あたしは何をするの？」

「サポートを頼む」

「ん。ポカるんじゃないわよ、一夏」

「鈴こそ」

そこで二人は初めてお互いを見て、ニヤリと笑ったのだった。

「セキュリティでがんじがらめのはずのここが全部開いてるってことは、まあホントに侵入者がいるみたいだね」

無人の廊下を、春佳は一人歩いていた。

奥にある扉の前まで歩くと、彼はその扉をゆっくりと開いた。

「……や、奇遇だね」

「誰？」

奥にいた少女は振り向き、そして春佳の姿を見て絶句した。

「やっぱり魔術師はキミだったわけだ、鈴木さん？」

「織斑、くん……」

「うん」

右ポケットから銀色のナイフを出した春佳は、にっこり笑って頷いたのだった。

## 六（後書き）

やっと原作一卷も終わりに近づき、二章も終わりに向かい始めています。

次回は初の魔術師戦。気合いを入れて頑張らないとですね。

では、簡略ですが今日はこの辺で。また次回のあとがきでお会いしましょう。

## 七（前）

「織斑先生！　ここはわたくしが　」

「黙っているオルコット。そもそもアリーナに入れないと言っている。今はとにかく待っている」

「しかし……」

「今のお前に何ができる。あまり騒ぐようならば追い出すぞ」

「……っ！」

「おい！　……失礼します」

「オルコットさん！　篠ノ之さん！」

モニタールームから出て行く筈とセシリアを見て、真耶は慌てて千冬へ振り返った。  
しかし、千冬はコーヒーに砂糖を入れており、それをかき混ぜていた。

「織斑先生！」

「山田先生、私達が慌ててどうする。キミもコーヒーを飲んで落ち着くといい。」

砂糖はどれくらいだ？」

「……あの、織斑先生。それは砂糖じゃなくて塩です」

「……」

「……やっぱり、心配ですよね」

真耶の言葉には答えず、千冬は塩と書かれた瓶の中身を全てコーヒーカップに注いでいた。

「あ、あの……織斑先生？」

「さあ、飲むといい」

「え？ い、いや……今はそいつの場合では……」

「……」

もしも真耶が目の前の塩たつぷりコーヒーに怯えていなければ、やや紅潮した頬の千冬が見れたかも……しれなかった。

「なんで、織斑くんが……？」

「なんでって、そちらの意向に反した理由だよ。侵入者がキミなら、僕は門番。  
キミが配置した探知魔術と同じ」

「……なんのことかな」

「あはは、まだとぼけるんだ？  
いいよ、なら決定的な言葉をあげる。僕は学園から要請されてここに来てるの。つまりキミは侵入者以外にあり得ない。それに部屋にあつたじゃない？

探知魔術の駆動式が」

右手でナイフを玩<sup>もてあそ</sup>んで、春佳は鈴木へと笑いかけた。対する鈴木は



春佳から視線を外さず……そして、ため息を吐いた。

「そっか。つまり、私の不注意だったわけね。  
なんだ、恋は盲目って言うけど……まさかこんな形で仇になるなんてね」

「恋？                    なんだ、好きな人でもいたんだ。ま、なんにせよ残念だったね」

「……ホントに兄弟揃って鈍感なんだから救えないね。まあいいや。そうだよ、私がああ探知魔術を張っていた魔術師。ってことは、あれを壊していたのは織斑くんで間違いないかな？」

「間違いないよ。僕があれを破壊してた。毎回毎回つまらない猫ちゃんを殺したりして結構疲れたんだよね」

「あはは、それはごめんね。ところで、蒼崎橙子とも知り合いなのかな？」

「そだよ。師弟って言うのかな。そのうち来るけど、それまで喋ってる？」

「冗談。さすがにあんなの相手にやる気はないよ」

「そつか。じゃ、最後の質問。不良軍団の片山って男に異能の力を与えたのはお前なのかな？」

途端、春佳の表情から熱が引いた。相対した鈴木には、春佳からは冷気しか感じられない。

それほどに冷たい視線を向けて、春佳は口元を少しだけ吊り上げた。

「さあ、それは知らないな。うん、ホントに知らないよ」

「……そ。ならいいや、もうおしまい」

「やる気……みたいだね」

「愚問かな。キミは侵入者で僕は門番って言ったでしょ。ああ、降参する？」

「それこそ愚問だよ。私は魔術師で、仕事を任された以上はやり遂げる。」

織斑くんには悪いけど、最悪侵入者に見つかって不運にも殺された生徒になってもらうことになるかな」

「あははっ、いいよ別に。せっかくの魔術師戦なんだからせいぜい楽しみたいし。死んでも化けて出ないでよね」

「そっちこそ。」

あ、それとね織斑くん。あの人形、ありがたく貰っておくから」

「どうぞどうぞ。そういえば、人形造りを教える生徒が一人減っちゃうのか。それも残念かな」

とてもそうは思えない口調で、春佳は左ポケットから左手に聖書を出して構える。

それが、合図だった。

「A z z i d o l t h」

春佳はナイフを持った手で器用に聖書のページを破り、魔術始動の言葉を唱える。

そして、破ったページを鈴木へと投げた。

ヒラヒラと舞う聖書のページは、先端の尖った杭となって少女へと襲いかかった。

「っ！ 聖書の物質化！？」

「その通り。ほら、協会の埋葬機関の……何位だか忘れたけど。その黒鍵の使い手だつて黒鍵を聖書のページを使って刃を形成してるって話でしょ？  
だからそれをモデルにやってみたんだよ」

「蒼崎橙子は人形師って聞いたけど？」

「僕はあんな化物を造れないよ」

「そっか……」

鈴木が手を横に向ければ、野球の球ほどの大きさの火の玉が数個、酸素を燃やして現れる。

春佳を見据えて、少女は横に向けた手を春佳へ向けた。

「じゃあ、狙うのは織斑くんだけだね！」

轟音と共に火球が春佳へと放たれた。  
最初の一つを横つ飛びで回避した春佳は、残りをそのまま床を転がって避けてその勢いのまま飛び起き、そこへ向けられた最後の火球をナイフで切り裂いた。

「当たったら火傷じゃ済まないかな。ずいぶんな火力だね」

「ありがと。私ね、火の魔術が得意なの。それにそっちこそ、ただのナイフに切れるほど私の魔術は安っぽくないつもりなんだけど。概念武装か何か？」

「そんな凄いいもんじゃないよ。刃から柄まで純銀でできてるナイフを聖女の涙から作られた聖水に一年間浸してただけ。ま、おかげでなかなか神聖なモノになってくれてね。並の魔ならバツサリいっちゃうよ？」

「なるほど。準備はしっかりしてるか、やっぱり」

「当たり前だよ。最悪、ISを相手に戦うことだって頭に入れてるんだから。ふふ、けど良かった。鈴木さん、強そうで」

「? どうして？」

「一方的なのって、するのもされるのも嫌いなもの。やっぱり拮抗してる方が楽しいでしょ？」

「こういつ、殺し合いじみたことなら特にさ」

左手を床につけて、春佳は低い体勢で構えた。  
次に鈴木が瞬きをした瞬間、床を砕くほどの脚力で蹴り出し、少年は相対する魔術師へと飛びかかった。

「速いつ……強化魔術!？」

「ふふ、そんなこと聞く余裕あんの？」

「くっ……」

振られたナイフは鈴木 of 左肩を浅く切り、少女は後退を余儀なくされる。すぐさま火球を構え、春佳へと向けるが春佳は鈴木を流し目で見て、口元を酷い愉悦の笑みに歪ませた。

「あははははっ!　そう、ちゃんと反撃してよね。  
僕の根幹はそうしなきゃ満たされないんだからさあッ!」

高らかに笑って、春佳は火球を一つ切り裂いた。  
そして、あるうことか鈴木へと駆け出したのだった。

「なっ!？」

「こんなの、当たりそんなモノだけぶった斬ればいいだけでしょ？  
不可視で、視られたらネジのように歪<sup>ま</sup>げられるようなシロモノでもないんだ、怖がるだけ無駄だよね」

低姿勢を保ち、顔面に迫る火球のみを切り裂いて走る春佳。  
その瞳は真っ直ぐに、ただ相手を見つめていた。

「びつくりするくらい戦闘狂なんだね、織斑くんは」

「うん。生まれつきの病気なんだよね」

「そう……じゃあ、私との相性は凄くいいみたい」

鈴木まで二歩ほどと間合いを詰めた春佳の足元が赤く光る。  
春佳が鈴木の口元に浮かんだ笑みに気付いた瞬間、足元から炎が沸き上がっていた。

「っ……設置式の魔術かな。まんまとやられたよ」

制服の左足部位が黒く焦げ、春佳はその足で数回床を踏んで苦笑した。  
それだけではない。彼の制服は至るところが黒く焦げており、頬や手の甲にも小さいが火傷ができていた。

「強化の魔術込みなら動けるけど、まあ痛いよね。ちょっと警戒が足らなかったよ」

「うん。ホントに警戒が足りないよね。  
だって、織斑くん……私に捕まっちゃったよ？」

「？ それはどういうことかな。一応、まだ動いてるし何も  
ないんだけど……」

「そう思うなら動けば？  
さ、続きをしようよ、織斑くん」

自分の言葉に首を傾げる春佳が面白かったのか、魔術師の少女は笑みを浮かべて火球を周囲に召喚した。  
対峙する少年も思考を停止させ、少女へと意識を集中させる。

「それじゃ……第二ラウンド、始め！」

少女によって振り下ろされた手に合わせて放たれる火球と、少年が床を蹴って弾かれたように駆け出すのは、まったく同じタイミングだった。



「……一夏、文句言っていい？」

「やめてくれ、何言いたいかはだいたいわかってる。  
あいつがあんな強いってのは誤算だった」

春佳みたいに計算して、とかはやっぱり俺のキャラじゃなかったか。  
とか思ってた俺に向けてレーザーが飛んできた。  
くそ、反応が良すぎだ！

「無人機なんだからISから来る情報もCPUで処理してるってわけね。」

反応が人間の比じゃないのも当たり前か。どうすんのよ、あたしの龍砲を避けるは一夏の奇襲は捌くわ、駆け引きが一切ない相手との戦い方なんてあたしは知らないんだから」

「俺だって知るかよ。くそ、敵として認識されてる俺らじゃ奇襲すら意味がないってのか。」

さすがにじり貧だな、これは……」

俺のシールドエネルギーは残り三割。鈴のシールドエネルギーは残り四割。

何かしらを絶対防御が発動する場所に受けたら俺達のISはシールドエネルギーを失って、攻撃が直接届くようになる。そうなれば、最悪死ぬ。

「……ダメだ。ネガティブになるな」

どうにかしてあいつの弱点を探すしかないんだ。  
機械なら”機械らしい”パターンや癖があるはずだ。そこを見つけて叩くしかない。

「ホントは第三者が予想外の攻撃とか加えてくれると助かるんだけどな」

言っても始まらない。隣で鈴が双天牙月を構えた。  
……来る。

「一夏」

「おう。気をつけろよ」

「そっちこそ」

白式からアラートが伝わった瞬間に、俺と鈴は左右にそれぞれ飛行した。

せめて的を分散させようって考えてのことだ。

向こうが多方面照準攻撃でも持つてない限り、攻撃はどちらか一方になる。マルチロックだから、こうして例えば俺にあいつが飛んで来れば

「そこっ！」

鈴の龍砲が無人机に当たる。向こうにダメージは通ってるから、完全は無傷ってわけではない。

けど、それでも鈴の龍砲に反応してかすり傷程度のダメージしか負わないんだから機械つてのは卑怯だ。

「おおおおおッ！」

シールドエネルギーの残量的にも零落白夜はまだ使えない。

だから、ここはあいつの背中に一太刀入れて後退しておくことにする。

「ホント、じり貧ね」

「ああ。けど、さっきよりはダメージが通ってる」

完全に詰みってわけじゃない。なら、やれるまでやるしかないよな。

「一夏、単一仕様能力はまだ使わないでよね」  
「ンオファビリティ」

「わかってる。使っのはトドメの時だ」

言って、俺は雪片式型を構えたのだった。

- Side out -

「……」

「ふふ、お喋りがなくなっちゃったけど、大丈夫なの？」

床に片膝を付けて、春佳は小さく舌打ちをした。  
目の前に立つ魔術師はポニーテールを靡かせて、自身の周囲へ火球を召喚する。

「どう？ 私の結界は。暗視ゴーグルでも見えない不可視の魔力線。」

どう張り巡らされてるかもわからないから迂闊には動けないよね？」

春佳の制服は所々が切り裂け、その下から血が滲み出ており白いＩＳ学園の制服を赤く染めていた。

傷自体は浅くとも、その数は多くそこから流れる血が数滴、床に垂れた。

「けど、動かないと消し炭だよ」

春佳へ向けられた手と、放たれる火球。

それは鈴木の意のままに動き、春佳へと四方から襲いかかる。

「っ……」

数個はナイフで切り裂くが、残りは少女の手によって更に球筋が変化し、左右から、背後から襲いかかる。

たまらず左手を床につけて横っ飛びをした春佳は、背中に鋭い痛みを感じてそこで動きを止めた。

鈴木の言っていた魔力線に引っかかったらしい。

「ああもう、めんどくさいなあ。」

穿て」

破り捨てた聖書のページを杭へと変え、鈴木へと射出する。  
しかし、彼女の火球と魔力線により空いてしまった距離が、その威力を、強力性を低下させる。

少女は身軽に横へ動き、その杭を回避していた。

「ふふ、この分厚い壁を貫通するなんて、凄い威力だけど……当たらなきゃ意味がないよね」

「ごもつともだよ。まったく……」

「ねえ織斑くん。降参しない？」

この勝負は私の勝ちで、織斑くんは蒼崎橙子に私を逃がしたって言えばいい。

そうすれば私達はまた明日からクラスメートで、何も関係なくなる」

「……」

「魔術師って言うても、私だってやっぱり人間なもの。情くらいはあるよ。」

だから、もう止めにしない？」

鈴木の間いかけに、春佳は答えない。

しばらくして、深呼吸と共に、春佳は少女を見上げた。

これ以上ないくらいに、歪んだ笑顔を浮かべて。

「……ダメ、みたいだね」

「そうね。あなたのその気持ちはわからなくもないけど、残念。  
”私”とあなたは敵なの。わかる？」

女性のような春佳の声音と口調に鈴木の様子が驚きに染まった。

「女の子……？」

「否。織斑春佳はまっとうな男だよ。けどまあ……うん、ちょっとね。」

さすがに無様過ぎるよね、これは。式に笑われちゃうや。ここらをぶっ壊すわけにはいかないけど、でも……ちよつとマジで殺しに行くことにするよ。

”僕達”がね」

「なるほどね、二重人格者ってわけだったんだ」

「それも違うよ。そうだね、意図的な人格変換でところ。  
片割れたる”男の人格”を亡くした女の人を見て、それに気付いた

んだ。

自分の殺人衝動をどう追いやるか、自分の根幹たる闘争本能をどう消すか、ね。

それで生まれたのが私ってこと」

女性然とした口調と笑みで言って、春佳は聖書のページを二枚ほど破いた。

それを更に細かく千切り、辺りへとばら蒔く。

「第三小節、聖弾。ふふ、こうやって聖なるモノばかり扱っていると埋葬機関の代行者みたいね」

千切れたページの全てが弾丸に変化し、春佳の周囲に浮き上がる。

「私もクラスメートに対する遠慮があったみたいでね。それを無くして行くからヨロシク。」

せいぜい蜂の巣にならないでね？」

パチン。と指を鳴らし、弾丸が全て同時に射出される。

鈴木はすぐさま床から火の柱を吹き出し、それを防御した。

（あんなことを言っておいて、こんなに簡単に防がせるわけない。本命は……別！）



炎を扱う彼女は、並んで熱の探知にも優れる。  
春佳の体温を探し、そこへ火球を打ち込んだ。  
案の定、春佳はそれを回避し、魔力線へと当たったのか切傷を増やしていた。

「惜しかったね。確かにそこは魔力線のないところ。  
けど、私は炎が得意って言ったでしょ？  
熱でわかるんだよ」

「……鮮花の強化版みたいな人ね。  
橙子さんめ、熱探知の対処の仕方なんて知らないぞ、僕は」

ため息を吐いて、春佳はナイフを持って拳の形にしている右手で右目全体を覆うように当てた。  
何がおかしいのか、肩を震わせて笑っている。

「ずいぶん余裕だね」

「一夏からの教えでね、相手がどんなに強くても余裕を持ってるって。  
ま……こんなに傷ついておいてアレだけど鈴木さんの攻略法、見つけちゃったし。  
と言っか、出し惜しみしなければ良かったって後悔中、かな」

「……なにを言ってるの？」

「気にしないで、ただ……やっと話の流れが変わりそうただけだから」

一通り笑い終えて、春佳は右手を顔から離した。その顔を、瞳を見て鈴木は絶句する。何故なら

「　　はは、あははははっ！

視える視える。よく視えるよ鈴木さん。お前が張り巡らせた魔力線が、どこにどうあるかバッチリ。やっぱり最初からこうしておけば良かったよ」

黒いはずの右目を橙色に染めた春佳が、部屋の中を見回して再び楽しそうに笑っていたのだから

## 七（前）（後書き）

鈴木さんが想像以上に粘ってくれたせいでキリのいいところでひとまず中断となりました。

春佳の能力説明回のはずが気がつけばガチ戦闘……

一夏達の方も同時進行しなきゃなのに、あちらはアニメや原作でもすんなり行っちゃったせいが見せ場が……見せ場があ……

次回頑張りますよ、ええ！

二章でチラツとしか出て来なかった鈴木さんがここまで頑張るとは誰が予想していただろうか！

ではでは、次回のあとがきでまたお会いしましょう！

## 七（後）

「だああああッ！」

金属音が鳴り響き、鈴音と無人機が互いに距離を取る。  
すかさず一夏が斬りかかり、鈴音はすぐに龍砲へと意識を向けた。

「一夏！」

「おう！」

掛け声と同時に鏢迫り合いとなっていた一夏が右へ回避した。  
同時に、龍砲による不可視の砲弾が無人機へ直撃した。

「……あれを防ぐのかよ」

「……さすがにあたしもびっくりよ」

展開されたシールドが、龍砲の直撃を無効化したことを伝えていた。  
並ぶ二人はその光景に呆れ、驚く他なかった。

（……まずいな、シールドエネルギーも、俺達も。このままじゃ）

前方より、敵レーザー確認

「え？」

敵を目前に思考へ没頭する。それは、戦いにおいてどれほど致命的なことか。

ISからの警告に一夏が意識を正面へ戻すとそこには一夏へと銃口を向ける無人機の姿があった。

「まずっ……」

先ほどから放たれている閃光の色に銃口が染まるのと、一夏の声が出るのは同じタイミングだった。

予想外の出来事に、人は一瞬でも硬直するようにできている。

そして、それは一夏も例外ではなく

閃光は、一夏へと放たれた。

「その目……魔眼？」

「まあ、一応ね。って言ってもこれは人工的に付加されたモノで、天然の産物でもないんだけどね」

「どういうこと？」

「義眼つてやつだよ。僕ね、橙子さんとの付き合いはなかなか長いんだけど、あの人と出会った時にちよつと事件に巻き込まれちゃってさ、その際に右目をなくしちゃったんだよね。で、橙子さんが僕にくれたのがこれ。当時再設計中だった使い魔用の眼だからかなりの優れモノでね、たった一つの欠陥が無ければたぶん僕にくれなかったと思うよ」

「欠陥？」

鈴木の問いに、春佳はうん。と頷いて右目を指差した。

「この瞳の色だよ。あの人はホントに……呪われてるんじゃないかってくらい橙色に縁があってね。それが気に食わないから廃棄する予定だったらしいんだけど、ちょうど僕に出会ったからくれたそうだよ。左右一対の魔眼の右目でね、気配や感覚を視覚化させるのが左目で、魔術や概念を視覚化させるのがこの右目の役目。だから、魔術による不可視なら僕には見えるわけ。

それも僕が理解すればした分だけ見えるって性能だから、僕に理解

し得るなら固有結界だつて視てみせるよ」

春佳はゆつくりと真横にナイフを振るう。

そこには本来鈴木にしか見えない魔力線があり、それは……ナイフによつていとも簡単に切れて消えた。

「不具合があるとすれば、この眼は僕本来の視力に関係なく1・0あるってことくらいかな。最近左目の視力が低下しててちよつと乱視気味でさ。ま、両目が見えてるだけマシなのかもしれないけど」

「……化物だね、織斑くん」

「うん。けど、魔術師なんてみんなそんなもんだよ」

「できれば一緒にしないで欲しいな」

二人が動いたのは同時だった。破り捨てられた聖書は弾丸となり、火球が現れた場所へと撃ち込まれる。

鈴木が驚くいた瞬間、春佳は魔力線を切り裂いて走り出した。

「くっ……」

「魔術の形成位置がわかれば先に撃ち込むことも可能だよね？  
さ、こっから逆転させてもらおうかな」

床と平行になるのではないかと思うほどに身体を倒し、その体勢から矢のように駆け出す春佳。

同時に、目の前にある魔力線を切り裂き、鈴木までの最短ルートを駆け抜ける。左右にある魔力線が肩や腕を傷つけるが気にしない。視るのは目の前の”敵”のみ。

「かつ  
」

「てない！ 二度も通用すると思わないでよね！」

先ほどまで全力疾走をしていた春佳が、鈴木の前まで来て横へ弾けたように跳んでいた。

丁寧に真横の魔力線を切り裂き、鈴木の目の前で火柱が吹き出したのを見て、ニヤリと笑った。

「学習能力は高い方なのね、私」

「くっ……」

咄嗟に形成される火球が、その構成段階で銀のナイフに貫かれ、そ



のまま鈴木へと向かう。  
慌てて回避するも、それは鈴木 of 脇腹を掠め、少女は痛みに顔を歪めた。

「今度はこっちが捕まえたよ」

「っ!？」

「  
おやすみなさい、いい夢を」

顔を上げた少女が見たものは、自分を見下ろす少年の顔。  
そして吸い込まれそうな程に純度の高い、濁りのない橙色の瞳だった。

その瞳を見つめて、直後少女の視界は暗転した。

- Side 春佳 -

「はぁ……疲れた。いたた、大丈夫かなって慢心が招いた結果がこれかぁ」

集中の糸が途切れ、僕は全身に広がる火傷と切傷の痛みで顔をしか

めた。戦ってる時は気にならないけど終わると痛いね、やっぱり。

「これはまた……ずいぶん荒らしたな」

「遅いよ、橙子さん」

今更入って来た所長に苦笑して、僕は右目に繋がっていた魔術回路を切った。鈴木さんが意識を失ったことで霧散し、漂っている魔力線の魔力が僕の視界から消滅する。

同時に目眩を覚えて、僕は壁に背中を預けた。

う……背中が切傷が痛い……

「眼を使えばその反動は疲労として返る。か……久々だからちょっとキツいかな」

人工的なモノで、しかも式の腕と違って視神経と繋がっているせいか、魔力を使うと神経への疲労も凄く溜まるらしい。

まあ、魔力や概念を視れるんだからこれくらいの対価は当たり前かな。

「なんだ、お前にしてはずいぶんやられたな」

「予想以上に相手が強かったただけだよ。それと僕の判断ミスが重な

っただけ。

……次は出し惜しみしないよ。何かあった時はすぐに眼を使っても倒すから」

久しぶりのまともな戦闘で、余裕と慢心を履き違えてたみたいだ。別に強者であるなんて自惚れてない。僕は所詮人間だしね。これは……ちょっと自己嫌悪かな。

「反省しているようで何より。後始末はこつちがしよう。お前は怪我を治療して来るといい。」

ああ、保健室には織斑兄達がいるからくれぐれも気をつけるように」

「一夏くん達が？」

「ああ。向こうも終わったようだな、全員無傷だ。ただし、織斑一夏は敵との衝突で意識を失っているらしい。」

外傷も中身への傷も無いそうだから安心していいぞ」

「そっか……」

良かった。向こうも終わって、みんな無事で。

一夏くんの意識がないのはちょっと不安だけど、まあいいかな。

「橙子さん、その人はどうするの？」

「さあな。事情徴収の結果によるよ」

「ん、わかった」

「なんだ、助命でもするのかと思ったが」

「彼女も覚悟の上でしょ。まあ、また会えたらいいかなとは思っけど」

願わくば、橙子さんの質問にちゃんと答えてくれることを祈ろう。そこらは僕も式と同じでシビアなんだ。一度殺した　または倒した相手に興味はない。向こうがりベンジにでも来るってなら話は別だけど、それでもないなら死のうが生きようがどうでもいい。クラスメートとしてなら、嫌いではないのは確かだから、また人形を造ったりとかしたいけどね。

「さて、それじゃ行くかな」

壁に刺さったナイフを抜いて聖書とそれぞれ左右のポケットにしまつて、僕は小さく伸びをした。  
うん、いろいろ痛い。

「待て、バカ者。その姿で言ったらさすがに疑問に思われるだろうが」

橙子さんはそんな僕を引き止めて、僕に手を向けて何かを呟いた。するとみるみるうちに僕の制服は戦う前と変わらない姿に戻っていた。

これなら傷も頬と手の甲以外の傷は露見しないで済むだろう。

「報酬の先払いみたいなものだ、受け取っておけ。金は後で払うかな」

「ん、ありがと、橙子さん」

「構わないよ。弟子が一人で魔術師を倒せるくらいには成長してくれて多少は嬉しくてな」

「あはは、一応赤い人を追っ払ったりしてるんだけどね」

「赤い人……？ ああ、アルバか。そう言えばそうだったな。だがまあ、撃退と撃破は違う。そういうことだ」

「えっと、どういふこと？」

「着実に成長している。と言うことだよ」

「……もしかして、褒められてる？  
褒められてる……よね？」

「ふふ、そっか。なら良かった。  
それじゃ、僕は行くね。後始末はよろしくお願いします、  
師匠<sup>せんせい</sup>」

「ああ。お疲れ様」

認めて欲しい人に褒めてもらえれば、それはやっぱり嬉しい。  
僕はヒラヒラを手を振る橙子さんに笑って部屋を後にしたのだった。

- Side 一夏 -

「一夏っ！」

「だ、大丈夫だ。くらってない」

紙一重だった。あと少し反応が遅れてれば直撃して、俺はシールドエネルギーをゼロにして下に墜ちていただろう。

「気のせいかな、箒の声がしたんだが」

「……気のせいじゃないみたいよ、ほら」

「え？ なっ……」

鈴の指差す場所には、制服姿の箒が立っていた。やっぱりさっきの「避ける、一夏！」って声は幻聴じゃなかったのか。って、違う！

「箒！ なんでこんな所に……」

「一夏！ 気を緩めるな！」

「バカッ！ 大声を出すな！」

くそ、無人機が箒に気づきやがった！

ああもっ、こうなったらもうヤケクソだ！

「ちよっ、一夏！？」

無人機より先に箒の目の前へ行つて、箒を両手で抱き上げて回収する。

それから岩場まで運んで、俺は息を思いきり吸った。

「箒、危ないだろ！ お前は生身なんだからな！」

「うっ……だ、だが……」

「だがもしかかもしれない。お前が傷ついたら俺は悲しいぞ。ったく」

「そ、そうか……悲しいのか」

「当たり前だろ。って、どうしたんだ、顔が赤いぞ？」

やっぱりあんなとこにいたんだ。変に興奮状態になつててもおかしくない。

大丈夫かな、箒のやつ。



「なんでもないっ！　　そ、それにだな、私はただいたずらにここへ来たのではない」

そう言って箒は無人機を指差した。

正確には、無人機の遙か上空に浮遊する、ブルー・ティアーズを展開したセシリアを。

「……なるほど。ありがとな、箒。けど、もうこんな真似はするなよ？」

「う、うむ……善処する。一夏が悲しむのだからな」

「そういうこと。うし、んじゃ行って来るからちょっと隠れてろ」

「わかった。」

……くれぐれも、気をつけるようにな、一夏」

「わかってる」

箒に笑って、俺は鈴の隣へと移動した。

幸い、無人機からの攻撃は来なかった。おかげで作戦もばっちりだ。あとは俺がセシリアを信頼するだけ。そしてそれはもうクリアして

る。

「鈴、行くぞ」

「ちょっと、いきなり何よ」

「勝算があるんだよ。説明してる余裕がないから一気に行くぞ。俺が合図したら龍砲を頼む」

「ちょっと一夏!？」

ああもうっ！ わかったわよ！ その変わりへマすんじゃないわよ！」

鈴の高い声を背に、俺は雪片式型を握りしめて無人機へと突撃した。陽動だけど、そんなつもりを一切捨てて、斬り捨てるつもりで横薙ぎへと払う。

これで拮抗すれば、チャンスは広がる。負けるなよ、俺！

「おおおおおッ！」

零落白夜はまだ早い。腕でガードされたけど、まだ発動には早い！今は考えた通りに動くんた。

「鈴！　　今だ！」

「はぁ！？　　一夏、それじゃアンタも当たるわよ！？」

「いいから、早く撃て！」

「　　っ！　　もうどうなっても知らないからねっ！」

龍砲の発射音と同時に、俺は真横へ避けていた。

ここまではさっきと同じ、おそらく、防いで来る。そして、

「一夏！　　前！」

目の前にいる俺へ反撃に出て来る。そう、ここまでは予想通り。

「大丈夫だよ、鈴」

「どこがよ！　　早く避けなさい！」

「いいや、平気だよ。だって　　」

確か、プライベートチャネルってのは頭の右奥で会話する感じだったよな。

それを、セシリアに向けて聞く。

「信頼してるからな。期待していいんだろ、セシリア」

「え？」

『もちろんですわ』

ふ。と笑う声が聞こえた気がした。

直後、目の前の無人機に青い閃光が直撃した。  
期待通り、完璧だ。

「さすがだな。じゃあ、これでおしまいにするかつ！」

全神経を雪片式型に集中して、俺は単一仕様能力を展開した。  
零落白夜　自分のシールドエネルギーを糧に、相手のシールドエネルギーを無理矢理消滅させる白式の力。千冬姉の暮桜と同じ、力。

「うおおおおおッ！」

零落白夜展開時の刃に変わった雪片式型を両手に、大上段に構えた俺はそれを無人機へと力一杯叩き付けていた。

「やった……？」

「たぶん。手応えはかなりあつたぞ」

零落白夜で全力で斬ったんだ、むしろなかったら困る。  
シールドエネルギーは残り一割か……ギリギリだったな。

「一夏さん、鳳さん、無事ですね？」

「なんとかね。一夏も大丈夫？」

「おう。助かったよ、セシリア」

「ふふ、このセシリア・オルコットにかかればちよろいもんですわ」

胸を張ってどこか嬉しそうに笑うセシリアに俺と鈴も笑った。  
とにかく、これで一件落ちや

「!？」

「一夏さん？」

敵IS反応、再確認？ 攻撃警戒？

白式から流れて来る情報に振り返れば、土煙の中からあの無人機の腕が見えた。

手のひらについている銃口がレーザーを撃とうとしている。

「あいつっ……」

このままじゃ鈴とセシリアも危ない。そう思った時には身体が動いていた。  
零落白夜を発動、残り少しか持たないのを確認して俺は無人機へと加速した。

「一夏っ……!」

「一夏さん!」

第とセシリアの声に反応する余裕なんてない。

少し加速したところでアラートが鳴り、俺を光が包んでいた。雪片式型を真正面に構えてその光を相殺しつつ、本体の所まで突っ込んで行く。

「これで、今度こそ……」

零落白夜使用不可まで、あと数秒。けど、ここまで来ればっ！

「終わりだ！」

振り下ろした雪片式型は確かに無人機へと食い込み、同時に俺のシールドエネルギーがゼロになった。

そして、目の前の無人機が光り爆発したところで、俺は意識を失っていた。

- Side out -

「やつほー、みんな生きてる？」

「春佳？　って、どうしたのよその怪我」

「ああ、うん。アリーナから避難する時にいろいろあって転んじゃって。」

聞けば一夏くん達もいるから治療ついでに見に来たんだ」

春佳は箒とセシリアの前に横になる一夏に視線を向けて、それから微笑を浮かべて救急箱から包帯を取り出した。

「ったくもう、いつも無茶ばっかして。心配する弟の身にもなってみろっての。  
うりうり」

それから一夏の横に立つと、頬を人差し指で何回もつついた。  
やがて、一夏の表情が歪む。

「う、ん……やめろ、くすぐりたい」

「「一夏(さん)！」」「」

「やめません、ちょっとは反省するようにね、バカ兄貴」

「春佳……?」



「そだよ。まあちょっと怪我しちゃったから来たんだ。で、体調はどう？」

「……すげえ疲れた」

「あはは、なるほどそれは確かに」

一夏の言葉に、春佳は声に出して笑った。頬をつついていた手で、そのまま頭を撫でて、にっこりと笑う。

「なにはともあれ、お疲れ様」

「おう」

「……やはりと言うか、最大の敵は」

「春佳さんの気がしますわ……」

「？ 何が？」

「何でもない！」

「何でもありませんわ！」

「？　　ならいいんだけど」

「そこは相変わらずの織斑兄弟よね……  
はあ、クラス対抗戦も中止みたいだし、約束も無くなっちゃったわね」

「あ、それだけどさ、鈴ちゃん。別に休日付き合っくらい全然いいよ」

「……え？」

「一夏くんを助けてくれたこともあるし、そのお礼も兼ねて。買い物くらいならいくらでもどうぞ」

ポンポンと一夏の頭を軽く叩いて、首を傾げさせて鈴音へと笑いかける春佳に、鈴音の顔が瞬間沸騰した。

「そ、そそそれって……」

……デートの誘い、みたいなもんよね」

「どうかな、平気？」

「だ、大丈夫に決まってるじゃない！  
大丈夫じゃないわけないでしょ！」

「あ、う、うん」

予想以上の食い付きに少し引き気味の春佳だが、鈴音はそれに気づいた素振りを見せず背中にした拳を握った。  
内心で飛び跳ねてると理解できたのは筈とセシリアくらいだろう。

「はぁ……羨ましいですわ」

「まっただな」

「？　　なんだ、二人とも買い物に行きたいのか？」

「そうですわね」

「一夏が連れてってくれると言っなら行かないこともないぞ」

「うーん、別にいいけど？」

「「え？」」

ベッドから上体を起こし、ハイテンションを隠しきれない鈴音と、そのハイテンションの理由に気づかない春佳に一度笑って、そのまま箒とセシリアに視線を向けた。

「春佳じゃないけど、お礼みたいなもんだよ。ゴールデンウィーク中でいいか？」

「か、構わないぞ。そうだな、一夏がそこまで言っなら……行くしがあるまい」

「いいに決まってますわ！」

（一夏と……二人きりで……）

（デートだなんて……）

「「夢のようだ（ですわ）」」

「何が夢なんだよ」

一夏のツツコミには答えず、少女二人もどこか別の場所へと意識が行ってしまったようだった。

「……えっとさ、一夏くん」

「おう、春佳」

「「女（の人）って、やっぱりよくわからないね（な）」」

ぴったりのタイミングで言い合って、二人は笑った。

それから春佳は左手を、一夏は右手を挙げてハイタッチをしたのだった。

- Side 春佳 -

「えへへ、二回目のお泊まりね」

「何にもない部屋だけどね、いらっしやい鈴ちゃん」

「ん、お邪魔します」

夜になって、鈴ちゃんは僕の部屋にまた泊まりに来ていた。

今日はもう寝る準備は完璧みたいで寝間着にツインテールもほどこしてある。

そついう僕も今日は疲れてたりするのでもうシャワーも済ませていて、あとは寝るだけだったりする。身体の怪我はちゃんと自室で手当てしましたとも。

「はあ、つつかれたー」

ばふ。と音を立てて鈴ちゃんが隣のベッドに飛び込んだ。

そつ言う表情は笑顔で、ちょっと疲れてるようには見えないのが不思議だ。

「セシリアは反省文十枚だつて。アリーナの扉を勝手に壊したからホントならもつとたくさん書かされるらしいんだけど蒼崎先生が仲裁してくれたって話よ。セシリアの介入がなかったら危なかったのも事実だし」

「そうなんだ」

あの人、眼鏡モードの時は人の良いおばさんだからなあ。

まあ、セシリアさんの活躍もあったみたいだから良いのかもしれないけど。

「ふああ……日陰者は辛いね」

「なんか言っただ？」

「ううん。なんか淒く眠いなって思っただけ」

「あ、それはわかるかも」

「でしょ？」

言っただけ、僕は電気を消した。時計の針が静寂を破って耳に入ってくる。

しばらく、僕らは無言だった。

「……ね、春佳。あたしがなんで中国に帰ったか言わなかったよね」

「うん、聞いてないよ」

中学三年になって、唐突に鈴ちゃんは帰ってしまった。  
理由は僕も一夏くんも、弾くんだって知らなかったはずだ。

「あのね、あたしの両親……離婚しちゃってさ」

「え？」

「だから、その都合で帰ることになっちゃって」

「そっか……」

なんて返せばいいかわからなかった。僕や一夏くんは物心ついた時にはもう両親なんていなかったし、千冬姉が姉で親だったから、鈴ちゃんの気持ちは僕にはわかることはできなかった。

「代表候補生になれば、みんなに会えるかなってのもあったのよ。  
一夏がIS操縦者になったってニュースを見て、もしかしたらって。  
まさか、春佳までいるとは思わなかったけどね」



「あはは、たまにはやる気を見せてみました」

「いつもやる気を見せなさいよ、もう。」

けど、その……嬉しかった。春佳もここにいて」

「そっか。」

ね、鈴ちゃん」

「なに？」

「とりあえず三年間だけだし、僕らはみんな一緒だよ。この学園に  
いられる間は。だから、大丈夫」

何が大丈夫かは自分でもわからない。眠気に負けてボケてるのかも  
しれない。

けど、鈴ちゃんはそんな僕の言葉に、声に出して笑っていた。

「あははっ。うん、ありがとね、春佳」

「どういたしまして。差し当たり、ゴールデンウィーク中にどこに  
行くか決めておいてね」

「もちろん。一日中引っかけ回してやるんだから」

「ふふ、お手柔らかに。それじゃ、おやすみ、鈴ちゃん」

「ん、おやすみ、春佳」

今度こそ会話が途切れ、僕はゆっくり目を閉じた。

真っ暗になった視界の中、僕の意識がその中に溶け込むまでに大した時間はかからなかった。

## 七（後）（後書き）

はい、二章終了です！

鈴にスポット当ててたら一夏達があんまり出て来なかったかなと、ちよつと反省してます。

今回は魔術師対魔術師や春佳の右目など、いろいろこれから先使うことを明かしたりと一章以上に書いてて始まりな感じがありました。ちなみに、春佳の右目は一番最初に決まった設定の一つで、やつぱりType-moonなら魔眼だろ！とか言う謎の理論により出来上がりました

最初はまんま式と酷似した、虚無を起源に持つ直死の魔眼持ちだったんですがそれだと一夏と双子の意味がないので全部却下となり、現在の春佳となりました。

右目の件はどんないきさつで？とかはこれから先をご期待ください  
（笑）

さて、次回からはみんな大好きなあの二キャラが登場です。

ヒロイン梓、実は感想でいろいろ貰ってる癖に結構悩んだり。

シャルでもラウラでも話を進められるように二つずつ考えてたら更に迷うはめに……

なんとか決めていききたいと思います。

では、次回三章でまたお会いしましょう！

## 一（前書き）

いくら構成が纏まってるからって言ってもホントに更新のペースが早くなってってちょっとびっくりです……

内容もちゃんと詰まったものになるようそちらももっと頑張らないと。

では、三章の始まり始まり。

「はあ、だいぶ暑くなってきたな」

「だね、湿気も強いし、そろそろ梅雨の季節かな」

「……お前ら、人の家でそんな日常会話をするなよ」

六月上旬、みんなもう私服が半袖になり始めた頃、僕らは昔からの友達である五反田弾くんの家にいた。

久々に家に帰ったついでにお宅訪問をしたのだ。

「で、どうよ二人とも」

「で、ってなんだよ」

「主語がないと伝わらないよ？」

「ISS学園のことだよ」

弾くんが格ゲーをしながらこちらに視線を向けた。

あ、画面見てないと……ほら、一撃必殺くらってるよ。これで一夏くんの二連勝。一夏くん、昔から無駄にゲームが上手いんだよね。弾くんからコントローラーを受け取って、キャラ選択画面に入った。

「どうつて、なあ」

「うん。肩身狭いよね、一夏くんは」

「お前だって意外と肩身狭い思いしてるだろ。みんな見た目に騙されてなかったぞ」

「……それは、まあ」

僕はISを動かせるわけでもないから相手にされないかと思ったんだけど、どういうことかみんな僕のこと構ってくれる。嬉しいけど、着せ替え人形とかにするのは勘弁願いたいかなあ。

「何が肩身が狭いだよ二人とも！  
お前から来るメールを見る限り絶対幸せだろ、楽園だろ、パラダイスだろ！」

「うるさいよ（ぞ）、弾（くん）」

「……この双子は……」

「第三者だから良く見えるかもしれないけど、実際女の園なんて名ばかりだよ。

寮の中なんて特にね。想像してみなよ、みんな楽で際どい格好の室内着を着てるんだからさ」

「いや、それ役得じゃね？」

「男子が僕ら二人で、それ以外女子じゃなかったらそうだったかもね。

万に一つ変な誤解をされてみなよ。女子全員が敵になるんだから」

まあ、僕はそういうことに興味ないし。一夏くんも鈍いからあまり被害は出ないだろうけど、それでも事故は起きたりする。

……「ゴールデンウィーク中のアレなんて正に地獄だったよ。双天牙月を片手に持って走って来る鈴ちゃんとか怖すぎてもうね。しかも両脇にはブルー・ティアーズ。マジで死ぬかと思った。

「ま、僕らには僕らの苦勞もあるってことだよ」

「ふーん、そんなもんか」

「うん、そんなもん」

「だな、そんなもんだ」

僕の使用キャラが倒されて、また一夏くんの勝ち。  
……ホントに強いよね、一夏くん。

「お兄、お昼ご飯」

「あ、蘭ちゃんだ、久しぶり」

「お、久しぶり、蘭」

弾くんにコントローラーを渡したタイミングでドアが開いて、蘭ちゃんが入ってきた。

僕と一夏くんは双子よろしく、まったく同じタイミングで手をあげて蘭ちゃんに挨拶をする。

すると、蘭ちゃんの顔が一瞬で沸騰した。主に一夏くんを見て。

「い、一夏さん……いらっしやってたんですか？  
春佳さんまで……」



「うん。今日は寮から外出しててね」

「ついでに寄ろうってなって寄ったんだ」

しかしまあ、蘭ちゃんの格好を見てずいぶんラフな格好だなー。なんて思えるくらいには女子のああいふ格好に耐性がついてしまったらしい。

おそらく一夏くんもだろう。慣れって怖いよね。

「なあ春佳」

「うん？」

「お前、よく女の子をちゃん付けして呼べるよな。篤しかり、鈴しかり。セシリアは違うみたいだけど」

「昔からそう呼んでたからね。セシリアさんは単純に知り合ったのが最近なのと、セシリアちゃんってなんか変じゃない？　ってだけ」

「なるほど。俺には恥ずかしくてとてもできそうにないな」

「いいんじゃない？　双子だからって何もかも似せる必要ないし。と言っか、そもそも僕ら見た目が似てないし」

「そうだな」

二人して笑って、僕らは五反田兄妹に視線を向けた。

……ほのぼのとした僕らとは逆に、こっちは殺伐としていた。

「……なんで言ってくれなかったのよ」

「い、いや……言ってなかったっけ？」

「……」

凄いいね、あの視線だけで弾くんを殺そうとしてる女の子、お嬢様学校の中等部生徒会長なんだよ？

「……まあいいや。」

お二人もお昼食べて行かれますよね？」

「いいのか？」

「は、はい」

「じゃあ、お願いするね」

「はい！」

では。と蘭ちゃん慌ただしく部屋を出て行った。  
それを見送って、一夏くんはバツが悪そうに襟足を掻いた。

「なんかさ、蘭て春佳には凄いなついてるけど俺にはよそよそしいよな。」

嫌われてるのかなあ」

「「……」」

……この男は、相変わらずの鈍感ぶりを披露してくれるなまったく……

「なあ春佳、たまに一夏のこれはわざとやってるんじゃないかって思うんだが」

「残念ながら本気なんだよ、弾くん。このバカ兄貴は本気でそう思ってるんだ」

「……なんだよ、二人して」

僕と弾くんは揃って息を吐いた。

わかってると思うけど、蘭ちゃんは一夏くんが好きなのわけで、だからああいう反応をしているわけで、それに気づかない一夏くんはさすがと言っかなんと言っか……

ちなみに、僕と蘭ちゃんは今仲が良いとは自分でも思うんだけど、蘭ちゃん曰く僕は女から見て尊敬できる先輩だかららしい。

ちょっと意味がわからないけど、蘭ちゃんはいいい子なので僕も仲良くさせてもらってる次第です。

「ま、これは死ななきゃ治らない可能性もあるから今はお昼食べない？」

僕、お腹減っちゃった」

「だな。行こうぜ」

「おい、なんか酷くないか!？」

朴念人は一夏くんを後ろに、僕は弾くんについて五反田食堂へと向

かったのだった。

- Side 一夏 -

「あれ、蘭？」

「はい」

「あ、着替えたんだ」

「どっか出かけるのか？ あ、まさかデートとか？」

「違います!」

「……今日いつもより冴えてるね」

「は、春佳さんもいちいち煽らなくていいですから！  
ほ、ほらお兄も座って、早く!」

弾にだけやたら強く言つて蘭は俺達を席へ座らせた。  
相変わらずの妹政権に春佳と二人して苦笑する。どこの家も妹や姉  
が強いよな、よくわかる。

「おう、残さず食えよ」

「ゴチになります!」

「いただきます」

五反田食堂の頂点にして大将である五反田蔵さんに合掌して、俺達  
は昼飯に手を伸ばした。  
と言うか春佳よ、ゴチになりますはないだろ、ゴチになりますは。

「……む、食べづらい」

勢いよく野菜炒めを食べ始めた春佳は、少しして自分の口元に寄っ  
てくる髪の毛に顔をしかめた。

「そついや、だいぶ長くなつたよな」

「切つてないからね。そろそろ切るうかとは思っているんだけど」

普段いつもいるから気づかないけど、改めて見ると入学した時よりも伸びてないか？

前は肩くらいまでしか無かった気がするののに今は鎖骨くらいまで伸びてるぞ。

「ホント、春佳さんが羨ましいです。肌も白いし髪も綺麗だし」

「それ、男に言う言葉じゃないかな。

まあ、そうなるようにしてはいるから褒め言葉になるんだけど」

「え、そうなのか？」

「そ。別にそういう性癖とか趣味はないけど、せつかく女にも見えるような見た目なんだから活用したくなるじゃない？  
式みたいなのもいるしさ」

確かに、式さんも美人だけど男らしさがあると言つか、かつこいい所がある。

「つまるところ、僕とあいつはそういうのが対極なんだけだね。  
性別に始まり、失ったモノや得たモノ、全部ね。

だから僕らは似てるのに近親憎悪を抱き合うこともない。まあ、出

会いは最悪だったけど」

手首にしていた赤いゴムを髪の毛にして、ポニーテールにした春佳は口元だけ笑わせて野菜炒めをまた頬張った。

たまに凄く難しい言葉をするんだよな、こいつ。

実は千冬姉より頭良いんじゃないかと邪推して、一度千冬姉に頭を叩かれた。やっぱり姉より優れる弟はいないらしい。

「……」

改めて、双子の弟を見してみる。目元なんかは似てるらしく、よくそう言われる。春佳も俺も千冬姉と違ってそこまでつり目ではないからこれはホントなんだろう。

髪の毛とかになった途端、俺とこいつは一気に双子らしからぬ違いが生まれる。

まずそもそもの身長が違う。俺は同年代男子と比較しても平均的な身長だと思っけど春佳は間違いなく平均よりは小さい。箒と鈴の真ん中に立たせるとちょうどいいくらいの身長だ。

髪の毛もさつき言ってたように春佳は鎖骨くらいまで伸びていて、前髪も目にかかるくらいには長い。全部毛先はバラバラに切り揃えてあって、その辺は式さんによく似てる。

肌は昔から病気がちで俺と違って比較的家の中にいて、今でもその傾向にあるせいか結構白い。だから恥ずかしくて赤くなったりするとすぐわかるから表情に出なくとも実は全然問題なかったりする。

春佳は気づいてないから言っていないけどな。



「……なにさ一夏くん、人のことジロジロ見て」

「あ、すまん。特に意味はないぞ」

「意味ありげに見られても困るからそこは別にいいよ。けど気をつけなよ？」

今の箒ちゃんとかだったなら絶対不機嫌になってるから」

「……だな、気をつける」

「ん、そういやさ、その箒ってのが俺らに会うより前の幼なじみなんだっけか？」

「そだよ。ちなみにどういう状態かは言わずもがな」

どういう状態って、別に箒は健康そのものだと思うけど。

ああいうのを美丈夫って言っただろうか、箒が風邪を引くイメージとかあまりしないな。鈴もだけど。

「ま、同じ部屋にもなってたのに何もしなかった箒ちゃんも弄らしいけどね」

「ええっ!？」

「ど、どうしたんだ蘭」

春佳の言葉を聞いて、蘭が突然大声と共に立ち上がった。

弾は「あちゃー」なんて額に手を当てて困ったような顔をして、春佳はにこにこ笑顔だ。

蔵さんも女の子の蘭には優しいから、何も言わない。

「い、一夏さん、それじゃあ女子と寝食をと、共にしてたんですか!？」

「そんなかしこまるようなもんでもないけど、まあ。

あ、けど今は部屋をちゃんと移して、俺は一人部屋だからな。春佳の部屋の左隣だ」

つまり、筈の部屋とは春佳の部屋を挟んで隣にあるわけだ。

部屋移動の時も楽だったな、うん。

春佳の方は相変わらず一人部屋で、この一ヶ月はわりと鈴が泊まりに行ったりしてたみたいだけど全然何もないと鈴が嘆いていた。

まあ、鈍感な春佳相手だからもうちょっと積極的に行かないと気づきすらしないだろうけど。

「そ、それでも一ヶ月は同せ 同居してたわけですよね！」

……お兄、知ってたの？」

「う、そ、それは……」

出た、あの視線。蘭と弾の権力関係がすぐにわかるあの目。やくざモードの箒といい勝負の希気迫だ。

「知ってたんだ。ふーん。」

お兄、後で話があります」

「お、俺これから二人と出かけるからちょっと厳しいかな」

「では、夜に」

口論にすらならない一方的な試合展開で二人の会話は終わり、弾は机に突っ伏した。

「……呪ってやる、一夏」

「なんでだよ」

そこで俺に八つ当たりをするな。するならせめて原因が俺にある時にしてくれ。

さすがに文句を言われる理由がないのに呪われるのはご免だ。

「……ま、いつか。僕も疲れるし」

そんなやり取りを一人黙々と眺めてた春佳は食べるのを中断していた野菜炒めに箸を伸ばして、パクリとまた食べたのだった。

「……決めました」

それからしばらくみんなで談笑しながら食べてると、静かになっていた蘭が急に呟いた。

俺、春佳、弾の三人の視線が同時に蘭へと集まる。

「決めたって、なにを？」

「私、IS学園を受験します」

「ぶっ！」

「きたねえぞ、弾！」

いい音が響いて弾の頭に調理用のおたまが直撃した。  
さすが、弾には厳しいぜ、厳さん。

「ずいぶん唐突だね、蘭ちゃん」

「はい。けど、アドバンテージが少なすぎて……  
それに、ちょっと待っててくださいね。ごちそうさまでした」

手を合わせて空になった食器を洗い場へ運んで行き、蘭の姿が家の方へ消えた。  
ああいう所のマナーの良さや気遣いがお嬢様学校の生徒だって思わせるよな、うん。

「……一夏」

「おう、なんだよ」

「来年までに彼女を作れ！ つーか今すぐ作れ！」

「はあ！？」

「女子がたくさんいるし選り取り緑だろ。とにかく作れよ。男子の憧れだろ、彼女ってさ」

「……いや、今はそういう気、ないし」

ISも満足に乗れてないし、正直恋だのなんだのって言うてる余裕もない。

そんなこと言ってる暇があるならISを少しでも上手く乗らないとな。千冬姉にも迷惑がかかるし。

「なんだよそれ、お前は枯れきった年寄りかい。いいな、すぐ彼女作れよ。絶対だからな」

「あの……弾くん」

「なんだよ。そうだ、春佳からも言ってくれよ」

「いや、それは別にいいけど……とりあえず黙祷しておいた方がいいかな」

「は？」

「……おにい？」

ビクツと、弾が動きを止めた。春佳もやや引きつった笑顔で蘭におかえり。なんて言つて、それから蘭を見なくなった。

俺？　とりあえず収まるまで見ないことにする。怖いもの見たさで後悔はしたくないんだ。

「ら、蘭……戻るの、早かったな」

「ええ。机の上に置いていただけなので。で、何か弁明は？」

「えっと、俺ってほら、案外シスコンだからさ」

「死ね」

……その後、弾の姿を見た者は誰もいなかった。

「それで、あの、一夏さん。これ」

「お、おう」

弾の死体（ちゃんと生きてる）を尻目に、蘭は俺に一枚の紙を渡してきた。

なんだこれ、ISの適性検査の結果？

「あー、そつか。メカニクは最終的に整備科行きだから関係ないけど普通に受験するら必要だね」

確か、ISを動かす為の適性を政府がタダで受けさせてくれるんだよな。蘭も受けてたのか。確かにこれが低いと落とされるらしいかな。逆に言えば、これが高ければ勉強がちょっとダメでも受かることがあるのかなんとか。

「で、蘭ちゃんの適性はっと……おお！」

俺の手から紙を奪った春佳がそれを見て目を見開いた。なんだなんだ、何を書いてあったんだよ。

「どれどれ……って、Aランク!？」

「なあにいつ!？」



あ、弾が復活した。けどまた弾に向けて容赦ないおたまが突き刺さる。

痛そうだな、あれ……痛いよな、絶対。

「筆記もA判定だったしこのままなら楽勝です。だから、その……  
一夏さん」

「ん、どうした？」

「もし私が入学したらご指導をお願いしてもいいでしょうか？」

「ああ、別にいいぞ。大したことは教えられないだろうけど、力にはなれると思う」

「あ、ありがとうございますっ！」

ペコリと頭を下げて、なんかスキップでもしそうな勢いで蘭は食堂を出て行った。

厳さんはそんな蘭を笑顔で見送って、弾と蘭のお母さんもこれまた笑顔で蘭を見送っていた。

「まあ、一夏くんなら大丈夫よね。」

「一夏くん、春佳くん、娘が入学したらよろしくね。」

「あ、はい。」

「え、僕も？」

「当たり前だろ。可愛い後輩だとか自分でも言ってたじゃんか。」

「あ、いや……まあね。うん、ま、協力くらいはしますか。ごちそうさまで、厳さん。」

「おう。春佳は細っちょろいからな、もっと食って大きくなれよ。」

「あはは、さすがにこれ以上食べるのは辛いかもです。」

「……一夏。」

「どうした、弾。」

「この後、エアホッケーで勝負な。」

「別にいいけど、お前エアホッケーは苦手じゃなかったか？」

「いいんだよ！ 中学時代とは違うところを見せてやる！  
俺は絶対に認めないからなあああっ！」

「うるせえ！」

巖さんの一喝で静かになった弾は、それから黙々とご飯を食べていた。

そして、エアホッケー戦も特に昔と変わりはなく、俺の連勝記録は通算で十六となったのだった。

## 一（後書き）

とりあえず原作二巻通りまずは五反田兄妹との日常から入ってみました。

ゴールデンウィークについては、まあ後々にでも短編で書こうかなと。

ちなみに、御崎的には蘭は室内着のラフな格好の方が好みです。

そんなこんなで、次回はあの二人がホントにホントの登場となりますので、そちらでもよろしくお願いします。

では、次回のあとがきでお会いしましょう。あでゅー！

## 二（前書き）

気づいたらPVが十万を超えてて思わず我が目を疑いました。

読んでくれてるみなさま、ありがとうございますm（――）m

これからも頑張りますのでよろしくお願いします！

## 二

「うん、今日も快晴快晴」

寮から出た僕は、大きく伸びをして笑顔になった。

晴れの日はいい。雨の日はいろいろ面倒で疲れるから、晴れの方が助かる。

「あれ、今日は一人なんだ。さっきお兄さんが沈み気味で出てったのに」

「まあね、僕はちょっと寝坊しちゃったから先に行ってって言ったんだ。沈み気味だった理由は知らないけど」

「ふうん」

後ろから聞こえる声は、この一ヶ月でたぶん一番僕に対する反応が変わった人。

現状、この学園内で僕の正体を唯一知る人で、僕と同じ人種の人。

「そうそう、おはよう鈴木さん」

「ええ、おはよう」

クラスメートの鈴木さんはわりと大人しい感じの人だったけど、魔術師の鈴木さんは凛々しい感じた。

と、まず彼女についてだけど、具体的に言えば、まあ橙子さん……  
と言うか学園側が買収した。

彼女に仕事を依頼した相手もわからず、挙句他にいる魔術師もわからない。ならば、と学園側がそれ以上の金額を出したらしく鈴木さんは今のところ”味方”って扱いにはなっている。

本人も殺されると思ってたのか、寛大過ぎる処置に頭が上がらない  
そうだ。

「途中報告ね。今のところ、目立って動いてるのはいないかな。  
けど、魔術回路の解放は探知に引かかるからいるのは間違いない  
よ」

「ん、そっか。一体あと何人紛れてるんだか」

「さてね。良かったじゃない、織斑くんの大好きな殺し合いができる  
かもよ?」

「だといいけどね。けど、ホントよく頑張るね。僕の出番がなくな  
りそうだよ」

「私は仕事はちゃんとやる女なの。こんな恩まで売られて仕事を頼まれたんだから断れないし、やるしかないじゃない」

「裏切る気はない感じだね」

「私はそこまで魔術に入れ込んでないからいいの。それに……裏切ったら、今度は殺すでしょ？」

「うん。次はあんな失態を犯さないように最初から眼を使って、徹底的に、油断も慢心もなく殺す。」

僕ね、嘘は許容できるけど裏切りは絶対に許せないんだ」

「あはは、ホントに大丈夫だよ。私に裏切るとか、そういう気はないから」

「ん、なら良かった」

お互い笑い合って、僕らは学園へと歩き出したのだった。途中、挨拶すれば鈴木さんはいつもの大人しい挨拶で返して、女性の演技力にちょっとだけ恐怖心を持ったのは僕だけの秘密にする。



「おはよ、一夏くん」

「おう。間に合ったんだな」

「まあね」

教室に着くと、何がどうしてこうなったのか、一夏くんは鈴木さんの言う通りちょっと沈み気味で、女子は何故か一纏まりになってひそひそ話をしていた。

……なんだ、これ。

「一夏くん、これなに？」

「よくは俺も知らないんだけど、学年別個人トーナメントが関わってるのは確かだ。  
さっき聞こえた」

「ちなみに、一夏くんが沈み気味な理由もそれ？」

「おう」

「はーるかつ！」

「おわっ！？　　鈴ちゃん？」

「おはよう春佳。突然だけど、あたし絶対に学年別トーナメント優勝するから今度は応援よろしくね」

「え？　　あ、うん。わかったけど……」

いきなりなんだってんだろう。と言つか鈴ちゃん、あの輪の中にいたのか。

「約束よ？　　じゃね」

やけに軽い足取りで教室を出て行く鈴ちゃんに、僕と一夏くんは首を傾げた。

……その女子の皆さん。なんで僕らを眺めてるんでしょうか。入学当初よりなんか酷いよ、扱いが。

「お前達、席に着け。ホームルームを始める」

結局、千冬姉の介入により何があったのかわからない僕らは、やつ

ぱり顔を見合わせて首を傾げたのだった。

- Side 一夏 -

教室の後ろに立つ千冬姉と、教壇に立った山田先生。山田先生の後ろには生徒が二人立っていた。

まさか……もしかして、

「えっと、今日は皆さんに新しいお友達を紹介したいと思います。さ、デュノアくん、どうぞ」

「あ、はい。フランス代表候補生のシャルル・デュノアです。その……男です。こちらにも僕と同じ人がいるとのこと、よろしくさせてもらえば嬉しいかなと思っています。以後、よろしく願います」

えっと、男子!?

「マジか……」

俺の呟きは、直後の爆音に掻き消された。

教室が爆発したんじゃないかってくらいの爆音の正体が女子の歓声だった気づくの少しの時間を要した。

「男の子よ！ 三人目！」

「織斑くんよりは春佳くんみたいな美少年系！ 守ってあげたくなっちゃっ！」

「ああ、春佳ちゃんとデュノアくんの二人を持ち帰って抱き枕にしたい！」

「ちょっと待って！ 最後の誰！？」

振り向けば本気で焦り気味の春佳の声も周りには届いておらず、春佳は渋々正面……つまり俺の方を向いた。

「ねえ一夏くん、僕、貞操の危機かな」

「いや、大丈夫だろ、たぶん」

たぶん、だけど。自信をもって否定はできないけど。むしろ肯定した方が正しそうな気さえするけど。

「うるさい、静かにしろ」

千冬姉の一言でざわめきが一瞬で消えてなくなる。  
うわー……さすがみんなの千冬お姉さま。しっかり躡られてるなあ。

「そ、それじゃあお願いしますね」

「……」

もう一人の方は腕を組んだまま微動だにしなかった。

白に近い銀髪に、かなり白いと思ってた春佳よりも白い肌、身長は低いけど、その表情はあからさまに俺達を見下すような、そんな雰囲気があった。何より左目の眼帯がツツコミを入れられるような雰囲気がないくらいガチ過ぎて余計にそういう印象を与えた。

「あ、あの……」

「……」

あー、このままだと山田先生が泣いちゃうんじゃないだろうか。  
千冬姉、さすがに助けた方が……

「……はあ。ラウラ、挨拶をしろ」

「は、織斑教官」

反応がもろに軍人だった。と言うか、千冬姉を教官と呼んで、しかも軍人てことはもしかして、ドイツの人か？

「ラウラ・ボーデヴィツヒだ」

「……ドイツの人っぽいね。千冬姉の知り合いみたい」

「だな」

後ろから聞こえる春佳の声に、俺も言葉だけを返した。

心なしか声が低いのはたぶん気のせいじゃないだろう。だって、ドイツは俺達の千冬姉への負い目を感じさせる一つの単語だから……

「織斑兄弟、私語は慎め」

「「はい」」

千冬姉、あの距離でよく聞こえるな。

「えっと、以上ですか？」

「以上だ」

ずいぶん簡潔な挨拶だなあ。周りも俺の時みたいな反応をしない辺り、ボーデヴィツヒのキャラを掴んではいるみたいだった。冷たい軍人。たぶんこれに尽きるだろう。

「……」

そんなことを考えていたからだろうか、不意にボーデヴィツヒと視線が合った。

向こうは俺を赤い右目で睨み、俺の方へ歩いて来た。

「貴様が……」

「え？」

パン。

乾いた音が俺の耳元に響いた。真横には後ろから伸びた……春佳の手？

「人の兄貴にいきなりビンタとは、ドイツはずいぶん過激な挨拶をするんだね」

「……何の真似だ」

椅子から立って俺の左頬に右手を伸ばしていた春佳は、それでボーデヴィツヒの左手を掴んでいた。

そうじゃなかったら俺はこいつにビンタされていただろう。よく動けたな、春佳のやつ。

「握手だよ、握手。日本の挨拶なんだけど知らないかな。ま、握る手はおかしいけど」

「……なんだ、貴様は」

乱暴に春佳の手を振り払って、ボーデヴィツヒは春佳を睨み付けた。対する春佳はバカにするように笑って肩を竦めた。……おお、あの春佳が怒ってる。



「織斑春佳です、以後お見知りおきを。

お前が崇拜する織斑教官のもう一人の弟だよ。要するにお前が憎む一人ってワケ。

ま、どうでもいいけど。人ん家の家庭の事情に首を突っ込むのはよろしくないよね、ドイツ人」

ちよつと待て、かなり本気で怒ってないか春佳のやつ。

春佳が人のことをお前って呼ぶのは初めて聞くぞ。

「……認めん」

「あ？」

「私は認めない。貴様が、貴様らがあの人の弟であることなど」

「知るか。なら血液全部入れ替えてもさせてよね」

つまらなそうに言っつて、それから春佳は席に座った。

直後、千冬姉のバツの悪そうな、わざとらしい咳き込みが聞こえた。

「あー……これでホームルームは終わりにする。これからISの実践訓練を行うからすぐにアリーナへ集合するように。メカニックもだ」

手を二回叩いて、千冬姉はホーミングを終わらせた。  
春佳はと言うと、これ以上ないくらいに不機嫌な顔で窓の外を眺めていた。

「織斑、デュノアの面倒を見てやれ。同じ男だからな」

「あ、はい」

最後にそう言つて、千冬姉は教室を出て行つた。

教室は少し静かだったが、やがていつもの喧騒を取り戻していく。

「春佳、お前も更衣室まで来いよ」

「うん、そだね」

素っ気なく返された。

やばい、春佳がここまで怒ってるのは初めてだから対処の仕方がわからん。

どうすればいいんだ？　くそ、こんなことなら普段からもっと怒つてくれよ。

「えっと、よろしくね」

「あ、おう。俺は織斑一夏だ、これからよろしくな。えっと……」

「シャルルでいいよ。よろしくね、一夏。で、キミは……」

「織斑春佳だよ、よろしくね、シャルルくん」

「くん付けなんてしなくていいよ。僕も一夏、春佳って呼ぶから。さっきはびっくりしたけど、よろしくね」

「こちらこそ」

さすがの社交性と言うか、シャルルに右手を出された春佳はそれを握り返してシャルルに笑いかけた。  
このまま怒りも収まってくれればいいんだけど……

「確か、日本の挨拶なんだよね？」

「そ。まあ、他の国もするでしょ？」

「うん、まあね」

おお、女っぽい美少年が二人とも握手をして笑ってる。  
もちろん、うちのクラスのやつらが反応しないわけなく

「……やっぱりお持ち帰りしたい」

「どっちが攻めかな」

「敢えて二人で織斑くんを責めるとか」

「あ、いいかもそれ。さっきの春佳くん、結構口調強かったし」

「……二人とも、早く更衣室に行こうぜ」

ここにいたらなんかまずい気がしたんで俺は二人の手を引いて逃げるように教室を後にしたのだった。

「見て、織斑兄弟と転校生のデユノアくんよ！」

「三人とも手を繋いでるわ!」

「織斑くんが両方と手を繋いでるってことはやっぱりあの二人が責め!?!」

「だあっ!      なんなんだこれはあっ!」

「うー……なんで僕まで巻き込まれてるのかな」

「お前も男だからだっつの。ほらこっち」

廊下に出た瞬間、女子が武家屋敷よろしくぞろぞろ沸いてきた。さすがにいろいろ困るんで逃走を始めたらやたら数が増えていた。

「えっと、大変だねえ」

「「シャルルもだから!」」

「ほえ?」

「いや、シャルルだって男でしょ？　こういつ目に遭わなかった？  
あ、けど僕は最近遭うようになったんだけどね。なんか一夏くんへ  
集まってたはずの被害が飛び火するようになって」

そら、見た目はともかくお前も男子なことには変わらないからな、  
春佳。

「あ、う、うん。そうだね」

「話はいいから走る！」

「「はい！」」

俺は脇目も振らず、二人の手を引いてアリーナへ走ったのだった。

- Side 春佳 -

「……はあ、散々な目にあった」

一夏くんの言う珍獣を見るイメージってのがわかった気がする。

ありや確かに観客だ。僕らを観る観客だよ間違いない。

僕は更衣室にいる理由がないので一足先にアリーナで待機していた。二組合同かつ女子は着替えが早いのかもうちらほら集合していた。

みんな新品のISスーツの話で盛り上がってる。

スクール水着にしか見えないのは気のせいだね。一夏くんのは競泳水着みたいでかつこ良かったけど。

「……あ」

あの人ももういた。銀髪眼帯のドイツ人、確か……ラウラ・ボーデヴィツヒ。式ほどではないにせよ、あまり良くない初対面を迎えた人。

タイミングが悪かった。ドイツ人っぽいってことで”あの事”を思い出してたところに一夏くんへのアレだ。思わず本気で動いてしまった。しかも怒りの沸点を軽く超えてしまった。

……あの時はああするしかなかったんだ。一夏くんを助ける手段が他にはなかったんだから。それに、責任は僕にある。

あの時、躊躇うつもりの無かった千冬姉を脅したのは僕なんだから。

「……無様ね、私。一夏を誘拐したやつらは……見つけたらさすがに殺してしまおうかしら」

「何をそんな怖いこと言ってるの。その殺気にボーデヴィツヒさんが反応して探してるよ?」

「ああ、鈴木さん」

「どう、似合う？」

僕の隣に立った鈴木さんがISスーツを見せて笑った。  
言われてたことが気になったので込み上げる殺意を殺して、僕は頷いた。

「似合ってるんじゃないかな」

「なら良かった。じゃ、友達が待ってるからまたね。あまり殺気を撒かないように」

僕に手を振って、それからいつもの鈴木さんに変わって女子の輪に入っていく。

ホント、女優にでもなった方がいいんじゃないだろうか、あの人は。

「あ、一夏くん達も来た。……ま、とりあえず忘れよう」

今は、今を謳歌するしかない。僕は笑顔を浮かべて一夏くんとシャルルを迎えたのだった。



「ホント、シャルルが羨ましいよ。その早着替えテクニックを教え  
て欲しいぜ」

「な、慣れだよ慣れ」

わたたと手を振るシャルル。うん、僕が言うのもアレけどなん  
だか男に見えないくらいには可愛い。

「ふふ、なんだかシャルル、女の子みたいな反応だね」

「えっ？　そ、そうかな……そんなことないよ、うん。春佳の気  
のせいだよ！」

おおう、過剰に反応されてしまった。

もしかして気にしてるのかな。僕と違って案外コンプレックスなの  
かもしれない。

「そっか。うん、そうだね」

なら触れてやらないのが一番。僕はシャルルの言葉に頷いてその話を流すことにしたのだった。

- Side out -

「……気のせいかな？」

ラウラは周囲へと向けていた警戒を幾ばくか緩め、一人呟いた。彼女は軍人だ。だから自分に向けられたモノでなくとも、殺気くらい感じ取ることは可能で、先ほど明確な殺意を持った気を感じた為に彼女は周囲を警戒していた。しかし、いつの間にかそれは消え失せ、ラウラは周りを見回した。

「……ふん」

彼女には到底理解のできない会話ばかりをして、兵器を扱うと言うことに対する気概を持たない女子ばかり。彼女は露骨に嫌悪の声を出して自らの手を見つめた。

私は、あの人のようになればいい。

拳の形に握り、彼女は再び周りを見た。見下すような視線ではなく、言葉通りに自分以外の生徒を見下して。

「あ、あの、ボーデヴィツヒさん」

「……」

不意に、横から話しかけられたラウラはそちらへ視線だけに向けた。大人しそうなポニーテールの少女が自分を見つめ、少し緊張しているのか頬を紅潮させて愛想よく笑いかけた。

「あ、私、同じクラスの鈴木って言うの。よろしくね」

「……」

「それで……何か探してたの？」

「……貴様には関係のないことだ」

ラウラはそれつきり会話をしないつもりなのか、鈴木に背を向けて歩き去った。

自分から離れて行く少女を見送って、鈴木はため息を吐いた。

「はあ、まるで純粹培養の軍人ね。果たして箱入り娘のお嬢様とどっちが面倒なのか気になるけど。ま、いっか。ラウラ・ボーデヴィツヒが魔術師の可能性は今のところ無し、と」

呟いて、少女は右手に隠し持っていた槲を誰にもわからないように燃やして消したのだった。

「この中に制服で紛れるのってなかなか嫌だね……」

整列し始めた中で、春佳は小さくため息を吐いた。先ほど話した二人のメカニックは一応ISSスーツを着用しており、実際にISSに乗れるとのことだいが喜んでいた。

春佳はそういうわけにはいかないの、一人制服の自分を見て苦笑をした。

「ま、あんなことになるよりはいいけど」

肩を竦めて見た先では、一夏がラファール・リヴァイヴを乗っていた真耶に体当たりされ、なんとか白式を展開こしたもののその胸に手を触れてしまうなどと言う事態に陥っていた。

セシリアがスターライトの照準を一夏に定め、箒は今にも飛び出しそうな勢いで一夏を睨み付けていた。

「フラグからやって来る辺り、さすが一夏くんだよね」

「まあ、春佳はそういうことないしね。その辺はやっぱり一夏よりマシよね」

「？      なんのことかな、鈴ちゃん」

「べつに」

「……はあ、山田先生、早く織斑から離れるように。  
そして鳳、オルコットは前に」

「え、あたしも？」

「当たり前だ、専用機持ちだろう」

千冬の声に、鈴はせっかくの春佳の隣という場所から離れるのを未練に思いながらもため息を吐いて離れた。

彼女のやる気ゲージはだいぶ下がったのは間違いない。

「今から二人には山田先生との模擬戦闘を行ってもらう。いいな？」

「……はい」

「はい……」

「まったく、お前らは……」

……「ここで良いところを見せればあの二人の見る目も変わるんじゃないのか？」

「「！！」」

千冬の弦きを聞いた途端に二人の表情が変わった。

あまりの変わり身の早さに言った本人である千冬は額を手で抑え、呆れたようにため息を吐く。

「そうよ、そうよね……」

「ここは腕の見せどころですわね。して、先生。どちらからやればいいのですか？」

「ああ、二人同時だ」

「「は？」」

「だから、二人同時だ。安心しろ、山田先生はかつて日本代表にま  
でなっている。お前達程度ならば余裕で負けるだろう」

「そ、そんな……でも候補生止まりですから」

「だとしても、経験が違う。いい機会だからIS学園の教師の実力  
を知ってもらおう」

「……いいですね、そこまで言うなら」

「二対一でも全力で行きますからっ！」

「よかるう。では、始め」

千冬の声に反応して、三人の駆る三機のISは空へと浮き上がった  
のだった。

## 二（後書き）

キリが良かった（？）のでその二はここまでとなります。

鈴木さんは単純に退場させるには惜しいかなって思ったのと、まだ人がいなくなるには御崎的には早いと感じたせいか味方になってもらいました。

と言っても扱いは鈴木さんのままですが

典型的な魔術師のイメージで、雰囲気的なモデルはF a t eの遠坂だったりします。

あれよりもっと徹底して普段のキャラを演技してたり、でもわりと人間っぽいと言つか情とかが強くて魔術師らしくないっていう不思議な人です。

まあ、本編にはあまり深く関わらせる予定のない人なんで挿話や短編での出番でもご期待ください（笑）

ではでは、次回のあとがきでお会いしましょう！



### 三（前書き）

後輩の方から春佳のイラストをいただき、投稿方法も把握したので  
近々春佳のイラストを載せたいと思います。

では、始まり始まり。

### 三

「デュノア、山田先生の機体について説明してみる」

空中で鈴ちゃん達三人が高速戦闘をしている中、僕ら地上組はそれを見上げていた。

突然聞こえた千冬姉の声に、僕は視線をそちらへと向けた。

「はい。山田先生の使用する機体は」

頷いて解説するシャルル。その内容は完璧の一言だった。もちろん僕だって勉強してる身だから答えられないこともないけど、さすがにあそこまで詳しくはない。

さすが男子の代表候補生と言ったところだろうか。一夏くんも理解してるみたいだしなんか仲間外れみたいで少し悔しい。

「そこで一端止めていい。終わったぞ」

「え？」

千冬姉がシャルルを制して、直後何かが二つ、校庭に落下した。隕石とかじゃなく、鈴ちゃんとセシリアさんの二人だ。

「ちょっとセシリア！ 足引つ張らないでよね！」

「それはこちらのセリフですわ！」

鈴ちゃんとセシリアさんの二人はタッグを組むと相性があまり良くないのかガミガミと何か言い合いながら立ち上がった。

僕が式と組む時わりとお互いに文句を言い合ったりするけど、あの二人ほどではないかなあ。と言うか、僕らの場合今のは無駄な動きがどうのって文句が多いからちよつと違つかも。そんなことばっか言い合ってるから殺戮馬鹿とか言われるのかな。

人は殺してないんだからそれくらいいいとも思っただけど。

「これでお前達もIS学園の教員の力はわかっただろう。以後、あまりふざけたことを考えないように。では、授業を始める」

千冬姉の言葉で、僕らの授業は始まった。

鈴ちゃんもセシリアさんもあれだけ勢いよく突撃しておいて無傷か

……

ふむ、じゃあやっぱりあまり物理による攻撃は期待できないかな。

絶対防御の発動条件を狙うなら、毎回顔面にナイフを刺してやればシールドエネルギーは削れそうだけど……うん、それは”殺人”をするって言う最後の手段。殺すならそれでいいけど今は鎮圧する方法を考えないといけない。

「やっぱり魔術による直接攻撃、かな」

橙子さんの作品みたいな得体の知れないモノならダメージが通るかもしれない。

あとは直に爆発させたりとか、僕の聖書シリーズも多少はあの装甲に効く可能性はあるかもしれない。

「ま、不利なのは変わらないか。むしろ、アレらと戦える手段があるだけマシって考えるべきかな」

攻略する為に用いる手段と、それに払う対価の割合がまるで噛み合わない。

しかも、その手段だって「かもしれない」が最後につくようなギャンブル要素満載のやや崖っぷち。まったくもって酷い話だ。

「まあ、そういう賭けは嫌いじゃないけど。」

ただ、僕ばかり命懸けつてのはちょっと納得いかないかな」

なるほど、魔術師の僕がここまで悩むくらいなんだから普通の男じやどうにもならないわけだ。そりゃ女の人も偉そうにしたいくなるよね。確かにISは反則な強さだよ。

直死の魔眼並みにずるい。

「けど……やる気も出て来た。ちょっと頑張ろうかな」

目指せ、IS攻略ってね。

「で、僕は何をすればいいのでしょうか」

数分後、早速暇になりました。今はみんな一夏くん、セシリアさん、鈴ちゃん、シャルル、ボーデヴィツヒさんの五人の班に別れてそれぞれISの搭乗練習をやっていて、僕は一人それを眺めていた。ちなみに、その班決めの時もなかなか混沌とした事態に陥ったりして、例えば、

「織斑くん、私織斑くんがいつて決めてました!」

「お、おう」

「……一夏?」

「うお、ほ、第?」

とかで箒ちゃんが怒ったり、

『第一印象から決めてました!』

とか言つて女子数人がシャルルに手を伸ばしていたり。あの光景を生で見たのは初めてだけど世代的にネタがわかるのかは果たして怪しいところだ。

ちなみに、何故か僕にもお声がかかったが僕はマジでISを動かせないのでもやんわりと断つておいた。邪魔になりたくもなかったしね。結局千冬姉の一声で班は決まり、こうして搭乗訓練をしているわけなんだけど、

「あ、あれが伝説のお姫様抱っこ……」

「篠ノ之さんずるい!」

一夏くんが王子様役をやっていた。現在箒ちゃんをお姫様抱っこでISに乗つけていろいろやつてる。

うわあ、箒ちゃん凄い嬉しそう。あ、けど周りからの空気はしつかり読んでISを立たせたまま降りちゃった。千冬姉に見つかったら名簿確定なのに……まあ、一夏くんにお姫様抱っこしてもらえるメリットがあるもんね。

「で、やっぱり暇なんだけど……」

どうしたもんかな。僕はここで立ち見してるだけでいいんでしょうか。

「織斑」

「はい？」

「ちょうど良かった、お前に聞きたいことがある」

突然真横に現れた千冬姉は、相変わらずの表情で腕を組んで一夏く  
ん達を見ていた。

僕に……聞きたいこと？

「一ヶ月前のクラス対抗戦の事件の時のことだ」

ああ、僕と鈴木さんがやり合ってた時の話かな。  
なんだろう、一般人からの事情徴収？

「春佳……お前、あの時どこにいた？」

「……」

冷水をかけられたって、こういうことなのかな。僕を春佳と呼ぶ辺り、千冬姉は本気だ。個人的に聞いているのも間違いない。

まあ、当たり前だけど。僕の実在は橙子さんとこの学園の学園長クラスの人、それと鈴木さんしか知らないんだから。

「どこって、避難する時に転んで怪我しちゃったけど医務室に行こうにも行けなかったから自室待機してただけだよ。

何かあったの？」

我ながら白々しい。けど、隠すならこれくらいの大胆さが必要だよ  
ね。

いくら家族でも、これだけは知られるわけにはいかないから。

「……いや、何もない。

それともう一つ。お前、私や一夏に隠し事をしてはいないな？」

「隠す事がないからね。僕はここにいて僕が全てだよ」

嘘と真実を重ねて、僕は千冬姉に笑いかけた。  
ホント

千冬姉が僕を何かしらで疑ってるみたいだけど……どうして？

あの日、僕は誰にも見つかってないはずなんだけど。鈴木さん……は言わないだろうし。一体どうということなんだろう……



- Side out -

「ふう……」

「お疲れ様です、織斑先生、山田先生。コーヒーでいいですか？」

「あ、すいません、蒼崎先生」

「私の分は構いませんよ」

「一人分も二人分も一緒です」

やんわりと断る千冬だが、橙子は人の良さそうな笑みを浮かべてコーヒーメーカーの近くにカップを二つ置いていた。

諦めたようにため息を吐いて、ありがとうございます。と苦笑する。

「ところで織斑先生、とても無礼な事を聞いてもいいですか？」

「……？ 答えるかはともかく、どうぞ」

自分から無礼と言う辺り、本当にそのような内容の話なのだろう。少し警戒するように言って、千冬は橙子へ視線を向けた。

「IS学園に、過去に訓練中の事故などで亡くなった生徒とかはいますか？」

「亡くなった生徒？ いや、いないと思いますが。それが？」

「ああ、その、私は生徒のカウンセリングもやっているのですがどうにも不可解な話をする子が多くて」

「不可解な話？」

「心霊現象です。ラップ現象やポルターガイスト、果ては実体まで見た子も。」

その見た目もみんな同じ姿をしていたと聞きます。学園に流れる噂では、過去に訓練中で亡くなった生徒の霊だとか」

「そんな……」

「バカバカしい。の一言で片付けられそうな問題ではなさそうですね」

「ええ、残念ながら十人以上の生徒から同じ相談を聞いています。ちよつと笑つて切るには重いかと」

「ふむ……私が在任してから、そして聞く限りではそのような生徒がいないのは確かです」

「嫌な噂ですね……」

「はい。変なことをお聞きしてすみませんでした」

「いえ、こちらでも調べてみます。蒼崎先生も何かわかつたらまたよろしく願います」

「はい」

千冬達に頷いて、橙子は自分のコーヒーを淹れるべく二人に背を向けた。

ふと眼鏡をずらして鋭い眼差しで窓から見える景色を眺める。

「ふん、ずいぶん狙ったかのようにいろいろ起きるじゃないか。荒耶のような輩とはそう何度も関わりたくないんだが。」

まあ、こと殺すことにおいてはあの二人以上の適任はいないだろうし、ヤツらにやらせるとするか」

煙草でも吸おうか。と内心で呟いて、それから職員室内が禁煙であることを思い出して、彼女は残念そうにため息を吐いたのだった。

- Side 春佳 -

「で、僕が調べろって？」

「そ。織斑くんの眼ってそういうのに向いてるでしょ？それに、更に凄いのがいるとも聞いたんだけど？」

「いるよ。こと殺すことにおいて、僕も絶対に敵わないような化物が一人だけ、ね。いくらたくさんの手段を用いたって、あの”直死の魔眼”には絶対に敵わない。無い物ねだりだけど、アレはホントに羨ましく思うよ」

「直死の魔眼って……」

絶句する鈴木さんに、僕は知ってたのかと苦笑を浮かべた。  
まあ、魔眼の中でもとんでもない代物なのは間違いないからね。

「その人、頭とか大丈夫なの？」

「大丈夫だよ。いろいろと作りが普通の人と違うからね。強化魔術を使ってる僕と同じくらい動くし」

「それ、ホントに人間なの？」

「一応ね。それにまあ、初対面で殺し合いをした僕もこうして五体満足で生きてるから」

「……呆れて何も言えないよ。とにかく、伝えたからね。私は魔術師探しを継続するから。あ、けど探知魔術くらいなら張ってあげるから、なんか見つけたらよろしく」

「ん、わかった。まああれだね、幽霊退治もたまにはいいかな」

「私は勘弁。それでも女の子なんだから」

じゃ。と立ち上がった鈴木さんはさっきまでの雰囲気から一点。いつもの雰囲気に戻って食堂の生徒の中へと紛れて行った。

「にしても、いるはずのない幽霊、か」

なかなか不思議な話だ。この学園で亡くなった生徒はいないってのにこの学園の生徒の霊が出る。  
意味がわからないけど、うん、やっぱりこういうのは僕向けの仕事だ。

「さっそく今夜にでも出現ポイントを回ってみるとするかな」

その幽霊は見つけ次第殺す方針でいいのだろうか。

……いいんだよね。話を通じるとも思えない。

「幽霊を殺す、か。式じゃないんだから」

もともと、僕の場合は式みたいな、死を視て殺すんじゃないかという手段を用いて殺すって話だけ。

「……春佳」

「ん？　　おわ、箒ちゃん？」

「……座っていいか？」

僕が答えるより早く、なんか異常に沈んだ雰囲気を出す箒ちゃんは僕の向かい側に座った。

量に定評のある和風特定食を用意してるけど、食べれるのかな……

「……はあ」

「あの、箒ちゃん？」

ダメだ、反応がない。何かあったのかな。

……まさか、

「一夏くんが誰かといたとか？」

「それだったらどれだけ良かったか」

「？　　どういこと？」

一夏くんの名前に反応したのか、篝ちゃんは両手の人差し指の先をつんつんさせて俯きながら呟いた。

……篝ちゃんが乙女だ。

「今、不快なことを考えなかったか？」

「い、いえ……滅相もない」

なんでバレたんだろ。そういうのって一夏くんが担当してるんじゃないの？

「……まあいい。春佳も無関係ではないからな」

「僕も？」

「ああ。……これから話すことは他言するなよ。特にセシリアには」

「……わかった」

なんか篝ちゃんからマジな気配を感じたので、僕は頷いてコップの水を少しばかり飲んだのだった。



「実は……その、今度のトーナメントで優勝したら付き合えと言っ  
たんだ」

……わっつ？

「それは、誰が、誰に？」

「っ……」

「あの、箒ちゃん？」

「……が、……にだ」

「あの、聞こえないです」

「わ、私が、一夏にだ！」

顔を真っ赤にしてやけくそ気味に言う箒ちゃん。うん、周りに人が  
いなくて良かったね。結構な大声だったよ、今の。

「って、別に付き合いくらい……」

……うん？ 待てよ。その付き合ってもしかして

「男女交際的な付き合いか」

目に見えて狼狽する篤ちゃんに、僕はやっぱりか。と笑みを浮かべた。たぶん、引きつってる。

「い、一夏はそれを承諾したんだぞ！」

だろうね。だって一夏くん、たぶん買い物か何かだと思ってるだろうし。

とは言えない。今の篤ちゃんにはとも言えない。

「それが……今日学園に行けば何故か周りに広まっていたんだ。

トーナメントに優勝できれば一夏と春佳のどちらかと付き合えると」

「は？」

一夏くんのはまあ、甘んじて許容するでしょう。けど、僕まで？

「いやいやいや、さすがにそれは飛躍し過ぎだよ。僕の名前は間違いか、せいぜい一夏くんの付録でしょ。あり得ないって。むしろ千冬姉のがしっくり来るね」

そもそもそういうのに僕の名前があがるわけがないんだから。第ちゃんも人が悪いなあ、もう。

「わかつてはいたが……まさか一夏とは違う方向でここまで鈍いは。」

春佳、お前は金輪際一夏に朴念人とは言わない方がいいかもしれん」

「え、なんで？」

一夏くんが朴念人なのは間違いないと思うんだけど。

「とにかく、これは一体どうしたことなんだ！」

「あいや、僕に言われましても……」

「……む、すまん。だが、これは私だけの約束のはずだったのに……」

なるほどね、だから箒ちゃんは沈んだのか。  
ホント、心底一夏くんに惚れてるんだね。

「じゃ、箒ちゃんが優勝するしかないんじゃないかな」

「なっ？」

「IS適性がCランクだからとか、専用機がないからとか言ってる  
れないでしょ。」

「気合いだよ、気合い。一夏くん（うちの兄貴）、欲しいんでしょ？」

「そ、それは……」

「大丈夫大丈夫、剣道で全国優勝してるんだから頑張ればどうに  
もなるよ」

「……剣道は、関係ない」

途端、狼狽えていた箒ちゃんの表情が厳しいものになった。  
……もしかして、剣道は地雷なのかな。

「そっか。でも、どうするの？」

「……現状、お前が言う方法しかないな。

そもそもトーナメントを優勝しなければ一夏の約束は果たされない。だから全力で向かう気だったのだからそのまま行こう。すまないな春佳、結局ただ愚痴を言うだけになってしまった」

「いいよ別に。幼なじみでクラスメートだしね」

「ありがとう、感謝するよ」

やっと気持ちが浮いて来たのか、さっきよりも全然元気そうな篤ちやんの姿にホッとして、僕は食べるのを止めていた夕飯に手を出した。

……鈴木さんと話してた時から手をつけてなかったせいか、冷めていたのは言っまでもなかった。

### 三（後書き）

その三になってやっとちよつとずれた日常パート。

モブ魔術師の鈴木さんの使い勝手の良さに甘えてしまいそうだからちよつと気をつけないと……

キャラが二人一気に入ったり今後の展開とかをチラチラやって行くと思うっているところなんで三章は結構長くなりそうです。

そして前にもあとがきで書いたけどシャルラウラの二人をどうヒロイン分担させるか悩み中……

いろいろと考えてたら春佳がラウラにフラグ立てることも可能だったんですよ！

そんなわけでいろいろと葛藤中でした。更にそれとは別に過去編とかも考えてはいるんですがそれはゴールデンウィークとかの話と同じで短編の中に入れようかなとも思ってまして、ああもう！

なんか頭の中でいろいろと浮かぶのにまとまらなくて歯痒いです（汗）

うん、その辺はおいおい考えて行くとして今は本編を進めよう。

ではでは、次回のあとがきでお会いしましょう！

## 四

夜中、唐突に目が覚めた。別に飛び起きるような悪夢を見たわけでもない。

朝起きるように自然に、それが普通だと言わんばかりに目が覚めた。

「……なるほどね」

部屋の中に違和感を感じて、僕は眼のスイッチを入れた。右目から頭へと何かが繋がる感覚がして、部屋の中の違和感を僕の視界に映し出す。

「……は、あははっ。なに、自分から来てくれたわけ？」

その違和感は、知らない女の子だ。足が床についてなく、白いワンピースと僕よりも更に白い肌は幽霊を思わせる。僕はそっとナイフを手にとって笑った。

「探し回っていなかったのに、どうしたのさ」

「……な」

「うん？」

「邪魔を……するな……」

その幽霊の一言に僕は声に出して笑うのを堪えて、代わりにナイフを投げてやった。

幽霊でもわかるのか、そいつはナイフが当たる瞬間に消えていなくなった。眼に移らないんだからいないのは間違いない。

「ま、これはお前みたいなのは効果絶対だからねえ」

そちらがよっぽどに強い魔性を秘めてなければ、ただどね。

「……ふああ、ねむ。うん、寝直そ」

スイッチを切つて、眼を元に戻す。一瞬の目眩と共に眠気が襲って来たので、僕はそれに意識を吞まれることにした。

「ふああ……」



「うわ、大きいあくびだね。寝不足？」

「じゃないと思うんだけど……どっちかと言うと寝すぎかな」

朝、最近定番となりつつある一夏くと僕とシャルルの三人組で食堂へと向かって行く。

僕は左の目を擦って、もう一度あくびをした。うう、まぶたが重い。右目はあくまで義眼なのでこの手の眠気や眼精疲労も感じたりしないんだけど、左目だけ疲れたり眠くなるのはなかなか変な感じで気持ちが悪。いい気はしないかな。

「寝すぎって、何時に寝たんだよ」

「えっと、とりあえずかなり早かったことは覚えてる」

ホントは嘘だ。昨日寝たのはいつも通りの時間で、僕は夜に件の幽霊が出る場所を歩き回っていた。でも、それを言うわけにもいかない。

「もしかして疲れてるのか？ あんまり無茶はするなよ？」

「うん、大丈夫だよ」

心配そうに僕を見る一夏くんに笑って、内心で謝ることにする。  
はあ、身内が身近にいるって案外やりづらいな。優しい人達だから、  
尚更に。

「「「あ……」」」

食堂に入ると、すぐ近くの席によく見知った三人が座っていた。  
この三人、確かに一緒にいることは多いけど朝から一緒にいるのは  
珍しい。

「おはよう、箒、鈴、セシリア」

「おはよ」

「三人とも、おはよう」

一夏くん、僕、シャルルの順番で挨拶をして、僕らは三人の反応を  
待った。

「うむ、おはよう」

篤ちゃん、なんかおじいさんばいよ、それは。  
そしてまだ一夏くん相手にテンパってるのか。乙女モード継続中  
みたいだ。

「おはようございます」

セシリアさんはいつも通りだ。しっかり洋食を食べてる辺り、さすがイギリス人。  
ちなみにこの間、

「……本国の料理より日本の洋食の方が美味しいだなんて」と愚痴っていた。まあ、日本は美味しいご飯でも有名だからね。あから始まる電気街以外にも見所はあるのです。

「おはよ、三人とも」

鈴ちゃんも相変わらずな感じで僕らに手招きをした。  
一緒に食べようってことみたいだ。

「食べ物取って来ちゃうから、ちょっと待ってて」

いちいち荷物を置くのも無駄なので、僕らはひとまず食べ物を頼みに並んだ。  
相変わらず周りからの視線が凄い。主に一夏くんとシャルルに向け

てだけど、やっぱり男がいると違うもんなのかな。

「おばさん、フレンチトースト」

「はいよ」

自分の朝ご飯を持って鈴ちゃん達の所へ戻って行く。

一夏くんが既に箸ちゃんとセシリアさんに挟み撃ちにされていて、シャルルは向かい側に座っていた。なるほど、席を変えたんだね。で、何故向かい側に座る鈴ちゃんとシャルルの席が真ん中を空けているのだろうか。まさか、二人って仲悪い？

いや、そんなまさかね。

「あ、春佳、ちょっと待ってね」

シャルルがどいて、僕へ席を譲る。これで僕も鈴ちゃんとシャルルに挟まれた。

いや、だからなんだって話だけど。

「では、一夏さん、いいですわね？」

「くれぐれも忘れるなよ」

「お、おう、わかった」

「……？」

「あのね、お昼ご飯と一緒に取ろって話だよ」

「ふむふむ、なるほど」

シャルルの言葉に僕は頷いて相づちを打った。

ふふ、やっぱりなんだかんだで頑張ってるよね、この二人。ホントに将来どっちかをお義姉さんと呼ぶことになるのかな。なんてね。

「ち、ちなみに春佳はお昼の予定、あつたりするの？」

「ううん、まだ決めてないよ」

「じ、じゃあ春佳も一夏達と一緒に来なさいよ」

「え、でも邪魔にならないかな」

「ならないっ！　いいから来なさい！」

「は、はいっ！」

篝ちゃんとセシリアさんの邪魔にならないか気にしたら鈴ちゃんに八重歯を見せられて威嚇されたので、僕は大人しく屈することにした。

鈴ちゃん、実は吸血鬼か何かじゃないのかな。

「……あんだ、今あたしのことまた化物みたいに思わなかった？」

「お、思ってますん」

なんだろう、最近僕もよく心を読まれる気がする。

双子だからってこんなところは似なくてもいいと思うんだけど。

「と、とにかく来るのよ。いいわね？」

「うん。了解しました」

それだけ言っただけで僕から視線をそらして牛乳を飲む鈴ちゃんに笑って、僕は頷いたのだった。

「よし」

昼休み、あたしは授業が終わるとすぐにカバンから二つの箱を出して教室を出た。

いつもは楽しく感じる蒼崎先生の授業だけど今日はちょっとごめんなさい。それよりも優先しなきゃいけないことがあるのよ。

そう、それは

「春佳に、あたしの手作りの料理を食べてもらうこと」

自分で言って、ほっぺの部分が赤くなるのを感じた。

きつと、箒とセシリアも今頃あたしと同じ感じなんだろうなって思うと、気恥ずかしい感じが薄れた。あたしや箒やセシリアだって現代女子だから、そういう感情は当たり前のようにあるし、同じ感覚を共有できる人がいるのは心強い。

箒とセシリアの場合、仲間であると同時にお互いが強力なライバルだからそこは複雑だけど、でも本気でいがみ合うこともないからホッとして見てられる。

「……もし」

もし、あたしも一夏が好きだったりしたらあの二人と一緒に一喜一憂していたのかもしれない。

なんてイフの想像をして、あたしは苦笑した。よく考えたら今でも充分一喜一憂してるじゃない。春佳だって一夏並みに鈍いんだから。

「大丈夫、よね」

春佳、好き嫌いないって前に言ってたし。酢豚くらい食べれるわよね。

「食べれなかったら食べれるようにすればいいのよ、よし、大丈夫！」

自分でも意味のわからないポジティブ思考で不安を完結させて、あたしは屋上まで急いだ。

できれば、まだ春佳にはいないで欲しいとか思いながら。

「あれ、もういたんだ」



「前の授業がIS訓練でしたので」

屋上に行くと、箒とセシリアがもうシートに座って準備していた。箒は弁当、セシリアもサンドイッチが入ったバスケットを用意している。

「で、肝心の二人は？」

「飲み物を買ってから来るそうだ。春佳がパンを買おうとしたから何も買わないように言っておいたぞ」

「あ、ありがとう……」

「春佳さんもちゃんと言わないと察しない人ですから、気をつけな  
いとすわね」

「一夏の場合、ちゃんと言っても察しないがな」

「確かに……」

そう言って、一夏に恋する二人はため息を吐いた。

鈍いやつが相手だとホント大変よね。

「一夏も春佳もそれぞれ違う方向に鈍感だからお互い困るのよね。春佳ってば、自分が男だってことを忘れてるんじゃないかってまに思うし。」

あいつ、自分が”そういう”対象に見られることがないって信じきってるわよ、絶対」

「一夏さんは一夏さんで全然気づかないですし……」

「障害は大きいな、まったく」

三人であの双子についてため息を吐いてると、屋上の重いドアが開く音がした。

続いて聞こえる声に、あたし達は少し固まった。

「あ、いたいた。遅れちゃってごめん」

「春佳のコーヒー選びが長くって」

「む、シャルルだってミルクティーかレモンティーで悩んでたじゃんか」

「そ、それは……」

「ほらほら、二人とも」

あう。と男が疑いたくなるような反応のシャルル・デュノアとそれを見てニヤリと笑う春佳。二人の後ろにいた一夏が仲裁して三人はあたし達の方へとやってきた。

さすがに三人しかいない男子だからか、もうすっかり仲良くなってるみたい。

「春佳さん、またコーヒーですよ?」

「うん。こっ、なんかコーヒー飲むとやる気が出ると言うか」

「聞ってる限り、春佳は完全にカフェイン中毒だと思うんだけど」

「別に身体に害がないからいいの」

そう言って、三人はあたし達と同じシートに座った。

「あの、僕までお邪魔しちゃってホントにいいの?」

「大丈夫だ、問題ない」

「……箒、お前それハマってるだろ」

「な、なんのことだ！」

お、珍しく一夏が箒をジト目で見てる。

話の内容はあたしにもよくわからないけどなかなか見れない光景なので狼狽える箒をちよつと観察。

……あ、睨まれた。

「で、昼飯を食うにしても俺と春佳はお前らに買って来るなど言われたわけなんだけど……どうすればいいんだ？」

「一夏くん、本気で言ってる？」

「お、おう。なんだよ春佳、そんなバカを見るような目で見て」

「わかってるじゃん。そのままの意味だからね」

「いやいや、そこまでバカじゃないぞ、俺だって。むしろお前には言われたくないんだが」

いや、バカよバカ。春佳ですら気づいてるって言うのに気づかないとか鈍すぎよ！

「……まあ、いい。」

い、一夏。その、弁当を作って来たのだが食べるか？」

「あつ！　わ、わたくしもサンドイッチを作って来ましたの！  
一夏さん、お召し上がりになってくださいな」

早速一夏へとアプローチをかける筈とセシリアの二人に、春佳はここに笑顔でそれを眺めていた。  
うわー、すごい他人事ね、あいつ。

「一夏、モテモテだねえ」

「そういう人だからね、うちの兄貴は。ついでに言えば千冬姉もやたら同性からモテるよ」

「あ、それはわかる気がする。じゃあ、春佳は？」

「残念ながら僕はちょっと、ね。変なヤツとの縁はあるんだけどあ  
あいうフラグはないかな」

……あたしの目の前でそれを言うか。よりによってあたしの前で。  
ったく、もう

「はい、春佳」

「ほえ？　　鈴ちゃん？」

缶を開けようとした春佳の目の前に、あたしは持っていた弁当箱の  
片方を出した。

ちよつと作戦とは違うけど……ここからが本番。相手は強敵、負け  
るなあたし！

「ち、ちよつと作り過ぎちゃったから、ついでにと思って。  
か、勘違いしないでよね。作り過ぎちゃっただけなんだから！」

……どこからか「テンプレ乙」なんて言葉が聞こえた気がするけど、  
この際気にしない。

春佳は弁当箱をしばらく眺めていたけど、不意にあたしへ視線を向  
けると、嬉しそうに笑った。

「ありがと鈴ちゃん。それじゃ、せっかくだからいただくね？」

「ど、どーぞ」

見れば、箒にセシリア、一夏までこっちを見ていた。

……って、なんでアンタ達までこっちを見てるのよ！ 早く一夏にアプローチしなさいよ！

「あむっ……ん、美味しいね、これ。鈴ちゃん手作り？」

今、美味しいって言ったわよね……？  
春佳、美味しいって言ったわよね！？

「……あの、鈴ちゃん？」

「へっ？ あ、えっと、そ、そうよ。あたしの手作りだけど？」

「凄いいね……僕はその辺の才能は全部そのお兄ちゃんに奪われちゃってるから羨ましいよ」

パクリと酢豚を食べて、春佳はまた美味しいと笑った。その瞬間、

あたしの心臓が大きく跳ねた気がする。

……心臓が握られた感じって言うの？ いや、握られたことなん

かないからよくはわからないけど。とにかくそんな感じ。

ああもう、どうしようもないなあって内心であたし自身に苦笑した。

「みんな器用で羨ましいよ、ホント」

「春佳はそんなに料理が苦手なの？」

「自分でも比較的なんでもできる器用貧乏って感じを自負してるんだけど、こればかりはね。絶望的だよ」

「どんなに集中しても絶対にどこか間違えるもんな。醤油とソースとか」

「いいの、僕は食べる側の人間だから」

拗ねる春佳と、それに笑う一夏とシャルル・デュノア。

そんな男子三人を余所に、あたしは照れ隠しの意味も込めて二人を見た。あ、でも睨んだって言った方が正しいかも。

「「う……」」



そう。あたしがこの眼力に込めた言葉は単純明快。

「アンタ達もやんなさいよ」だ。凄い嬉しかったけど、同じくらい恥ずかしかったんだから！

「……い、一夏さん。サンドイッチを作って来たのですが、よろしかったら食べてくださいな」

おっかなびっくりバスケットを開いて、セシリアは一夏にサンドイッチを差し出していた。  
見たところ、普通のサンドイッチみたいだけど……

「んじゃ、いただきます」

一口食べた瞬間、一夏の顔が歪んだ。

なんて言うか、痛い！　って叫びそうな感じの顔。

セシリア……一体サンドイッチに何を挟んだのよ。そんな顔を赤らめてても目の前の一夏は苦しんでるだけよ。

「ど、どうでしたか？」

「あ、えっと……個性的な味だったぞ」

「……一夏くん、男らしい」

「いや、本人の為にも言っただけだよ今は」

春佳にツツコミを入れて、それからあたしはやたら気合いの入ってる箒の弁当に視線を移した。  
手作りでこれだって言っただから箒もなかなかよね。

「い、一夏」

箒は持っていた割り箸を、そっと隠した。  
……まさか、こいつ

「あ、あーん」

唐揚げを一つ箸で摘まんで、箒はそれを丁寧にそれを左手まで添えて一夏の眼前に差し出した。  
瞬間、おそらくあたしとセシリアは同じことを思ったはず。  
……やれば良かった、って。

「え？ えつと……箒？」

「い、いいから黙って口を開け！」

顔を真っ赤にして箸はやや怒鳴り気味に一夏に言って、一夏も恥ずかしいのか少し躊躇ってから口を開いた。その中に、そつと唐揚げが放り込まれる。

「お、美味い」

「ほ、本当か!?!」

「おう。箸って料理上手だったんだな」

「ま、まあ、な。私にかかればこれくらいどうと言っことはしないぞ」

うわぁ、超有頂天。わっかなりやすいくらい嬉しそうな箸はそのまま自分も唐揚げを食べていた。……つまり、

「間接キス？」

「しー！ シャルル、それはしー！」

あ、箒が噎せた。

春佳が慌てて置いてあつた箒のお茶を差し出して、シャルル・デュノアが申し訳なさそうに謝る。

一夏は……気づいてない。この朴念人め。

けど、なるほど。そういう手もあつたわよね。いいものが見れたわ見れば、セシリアも悔しそうに箒を見ていた。

今回は箒の作戦勝ち、かな？ あたしも次から「あーん」で食べさせよつと。

- Side out -

「はあ、ちよつと遅れちゃつたな」

放課後、シャルルはアリーナへ向かつて中庭の林の中を歩いていた。これから一夏達と訓練するのだが、シャルルは転校したばかりでまだいろいろと忙しかつたりするのだ。

「ま、篠ノ之さんとオルコットさんにはいいかもしれないけど」

昼間の様子を思い出して、シャルルは一人笑つた。

同時に彼女らを少し羨ましく思い、シャルルは首を横に振つた。

「……行こう」

「おい、ホントにここでいいのかよ」

「とりあえずは、ね。今から探すんだからちょっと待っててよ」

「うん？」

早歩きでその場を離れようとして、シャルルは聞こえてきた声に止まった。

片方の声に聞き覚えがあったのだ。

「春佳……？」

声のした方を見れば、そこには春佳が和服の女性と立っていた。中庭の外れにある林の、更に深い場所に二人は立っている。

「春佳と、誰？」

「と言うか、まずつら若き乙女が夜にここを通るのが間違いだと思っ  
うぜ、オレは」

「それは同意するよ。ま、でも目撃情報が手に入るんだからいいじゃん」

シャルルは息を潜めて二人の様子を観察していた。

代表候補生となった時の訓練と、”それとは別の仕事”の為に気配を消す訓練を積んだ彼女は、ここなら大丈夫だろうと、一本の木に背中を寄せた。

「……どうだ？」

「いない」ね。外れか、外出中か」

右目に手を当てて離れた春佳は、チラチラと辺りを見回した。

視力の悪くないシャルルだが、さすがに春佳の瞳の色までは見ることができない。

だから気づかない、彼の右目の色に。

「はっ、せっかく出向いてこれか」

「ごめんね、向こうから宣戦布告してきたから何か変わるかと思っただけだ」

「いいよ別に。何も変わらなくてもどうせ何か起こるだろ」

「さてね、起きてもいいけど、ここの生徒に害をもたらすことは許さないよ」

「そこは別にオレはどうでもいいけど」

「僕は良くないの。だから……アレは見つけ次第最速で 殺す」

「っ!」

再び右目に手を当てて言った春佳に、シャルルは息を呑んだ。  
自分が知る春佳ではない、本気で何かを殺す気の春佳に、シャルルは無意識に拳を握っていた。得体の知れない悪寒に、シャルルは小さく呼吸を繰り返した。

「幽霊殺しか、一年ぶりだな」

「だね。アレは生き霊の類이었다けど、既に死んでるかもしれないものを殺すってのはなかなか不思議な感じだよ」

（幽霊殺し……?）

「なら言い方を変えるか？」

もう二度と現世に留まれないように成仏させてやるってな」

「ふふ、まるでエクソシストだね」

「自分でもそんなこと思っうんちくてないくせによく言う。トウコに聞かれ  
たらまた長い蘊蓄聞かされるぞ」

「はは、まあね、だいたい僕らは被うんじゃなくて殺す側の人間だ  
し。とりわけキミの眼や僕の根幹はそれに特化してるし」

「まったくもってな。いい加減人間やめたらどうだ、お前」

「キミにそのまま返すよ、式。根幹と起源は違っ？って言わなかった  
」

「さてな。と、行かなくていいのか？  
自分の兄貴の練習を見るんだろ？」

「うん。も一人男の操縦者が転校してきてさ、その子にも教わるみ  
たい」



「へえ、実は人類初じゃなかったのか？」

「さあ。大人の事情に興味はないよ」

シャルルや一夏の前では見せない、やたら冷めた声。

シャルルがその声の主の普段との差に気を抜かしていると、二人は歩き始めた。

「ま、何かわかったら連絡するよ」

「ん。先走るなよ」

「わかってる」

（まずっ……）

二人の足音がシャルルに近づき、シャルルは慌ててその場を離れたのだった。

「おー、やってるやってる」

数分後、春佳はアリーナの一角にいる一夏達の元にいた。シャルルも既にISを装着しており、箒も打鉄を使って一夏に指導をしていた。

「あ、春佳……」

「や、シャルル」

「う、うん」

先ほどの姿とはまるで違う、人懐っこい笑顔を浮かべて春佳はISを纏うシャルルの隣に立った。

「？      どしたの？      なんか反応悪いけど、風邪？」

「え？      あ、えっと、違うよ。そういうのじゃないから」

「じゃあどうしたのさ。僕で良かったら相談に乗るよ？」

「……うん、ありがとう、春佳。大丈夫だから」

「ホントに？　まあ、無理して聞くことでもないしね。けど辛かったらすぐに僕や一夏くんにも言うように。友達なんだからさ」

「大丈夫だよ。ありがとう、春佳」

「何もしてないんだからありがたがらなくていいよ」

「気持ちがありがたいから言うんだよ」

「あ、そっか」

アリーナのベンチに腰かけて笑う春佳に、シャルルも思わず笑った。こうしていると、あの時の春佳の姿がまるで嘘のように見え、シャルルは自分が何か勘違いをしてるのではないかとすら思っていた。

「うーむ……」

「あ、お疲れ一夏くん」

「おう。しかし、よくまあバンバン撃ち込まれるなあ。我ながら情けない」

「うーん、一夏のイグニッションブーストは間違いなく相当速いんだけど、けど直線的な動きだからね。  
見切れなくても読まれちゃうんだと思うんだ」

「なるほどな……」

「じゃああれだね、一夏くんは相手の射撃武器の呼吸を読んで、それを回避と同時に攻め込まないとだね」

「うん、そんなところかな」

「なるほど。そこまで考えてなかったな」

「……だからいつもそうだと言っていただろう」

「わたくしはてつきりそれを知っててあの特攻をしているのかと  
思っていましたわ」

「……あいつら」

「あ、あはは……で、そこでなんだけど、一夏、銃器を使ってみない？」

「え？　　けど白式にそんな容量はないぞ」

「違う違う。僕のアサルトライフル貸すから試しに撃ってみなよ」

「いいのか？」

「うん。前にも言ったけど、僕はたくさん武装を用意してるし、せつかなんだから撃ってみた方が一夏の練習にもなるから」

「お、おう。さんきゅ、シャルル」

アサルトライフルを手に一夏は射撃訓練用の的を出して、それを構えた。

「……ねえ春佳、横の二人がぶつぶつうるさいんだけど」

「僕は何も聞いてないし見てないよ」

「……見て見ぬ振りね、アンタ」

「おわっ、なんか変な感じだな」

「最初は慣れだからね。あ、もっと脇をしめて」

「おう」

「ふふ、銃器つても難しいよねえ。移動する標的と固定してある標的で狙いかなり変わるし」

「だな、全然上手く行かないぞ」

「そんな最初から上手く撃たれたらわたくしの立つ瀬がありませんわ」

「それもそっか」

「そういうこと。そういえば、昔漫画で読んだけどね、固定標的に当てるのは単純な訓練なんだってさ。最終的に誰でもできるようになる。んで、移動標的に当てるのはそこから先の、頭の戦いなんだって。チェスとか将棋みたいな、ね」

「そうなのか？」

「僕にはよくわからないし、漫画の知識だけどね。

相手の動く先とか読んで、癖とか見極めた上で狙撃するものらしいよ。ね、セシリアさん」

「ええ。けど、それは極端な話で、理想的な話ですけどね。毎回それができるようなら苦労しませんわ」

「あはは、それもそっか。その漫画にも書いてあったよ、訓練するに越したことはないってね」

「やっぱり最後はそこだよな、うし」

一夏は一人頷いて、再び的に視線を戻していた。  
箒とセシリアがその横につき、シャルルは苦笑して鈴音と春佳の隣へと戻って行く。

「あ、そういえば春佳」

「なにかな、鈴ちゃん」

「さっき春佳のバイト先の人……えっと、式さんだっけ？  
あの人を見ただけど……」

「ああ、うん。」 仕事 ” じゃないかな。ここ最近よく来てるしね」

「ふーん、そうなんだ」

「うん。いつもああいうのは僕の仕事だったんだけどね。ま、たまにはあいつがやるんでもいいかなって」

「？ 二人とも、何の話？」

「僕の親友の話だよ」

首を傾げるシャルルに、春佳はニヤリと笑ったのだった。



#### 四（後書き）

気がついたら過去最長になっていた今回、脱線したりしなかったり。終盤で春佳が引き合いに出した漫画、何かわかる人がいたら御崎的には嬉しいです。

同時に何歳か把握されそうですが

今回もまたキリがいい場所で終わりにしました。

そろそろ話も中盤になっていきます。

三章が終わったらちよつと短編でもやろうかと悩み中……

まあやつても挿話程度にでも。

短編集は短編集で作るんで春佳の過去話とかゴールデンウィークとかはそちらに掲載したいなあと思ってます。

今回は遂に春佳と式の共闘が…… あればいいなあ。

では、次回のあとがきでお会いしましょう！

## 五（前書き）

今さらですが、キャラ視点の変更以外にも場面変更には を中間に挟むようにしてみました。

見づらい！ とかがないようならこれからは場面変更の時にはこ  
うしと を挟もうと思います。

では、始まり始まり。

## 五

「春佳の親友？」

「そ。僕が唯一悪態をつく相手かな」

「それって親友って言うの？」

引きつった笑いを浮かべるシャルルに、僕は笑顔で頷いた。

「お互いにそう思ってるんだからいいんだよ。趣味嗜好も似てるし」

似てるけど、絶対に同じじゃない。だからこそ僕らは親友でいられる。

これで僕と式が同じ人間なら、どちらかは今ここにいないだろうか  
ら。まあ……

『両儀式』によって、僕が消されて終わりだろうけど。ずるいよね、  
お互い通常のままならいい勝負なのに、奥の手の強さが違い過ぎる。  
ま、本人も気づいてるかは怪しいからいいんだけど。

「なんか、あっちが賑やかな」

「みたいだね。 あれって、まさか」

鈴ちゃんの声にシャルルが反応して、そこでやっと僕も二人の会話に出てきたあっちを見ることにする。  
あれは……

「ドイツの、第三世代機……？」

「だと思っよ」

乗ってるのがあのラウラ・ボーデヴィツヒだし、あれが専用機なんだろう。

彼女は周りの声には目も耳も向けず、ただ一点を……一夏くんを見  
ていた。

「嫌な予感がする」

「春佳？」

「いきなり何を言ってるのよ」

「……当たらないといいんだけどさ」

シャルルと鈴ちゃんの言葉に答えず、僕はボーデヴィツヒさんを見た。

彼女は一夏くんをしばらく睨んで、それから自分の機体に付いている砲台のようなものに視線を向けた。

……光ってる。まさかつ！

「一夏くんっ！」

僕が声に出すのと、シャルルが一夏くんの目の前でシールドを構えるのがほぼ同時だった。

直後、シャルルのシールドから爆音が響いてシャルルが後ろに下がる。

「っ……いきなり攻撃とは、ずいぶんな挨拶だね、ドイツって言うのは」

「シャルル……？」

状況が飲み込めず、ボーデヴィツヒさんを睨むシャルルに一夏くんが首を傾げた。

一夏くんや篝ちゃん、セシリアさんは本気で射撃訓練に集中してたんだ、あんな位置からの攻撃じゃわかるわけがない。

今ごろやっとアラートの意味を認識するくらいだろう。

「ふん、今の攻撃も避けられないか」

「……お前」

「それが貴様の専用機か、いい機会だ、私と戦え」

「は？」

あまりに一方通行で、理不尽な会話。キョトンとする一夏くんに、ボーデヴィツヒさんはイラついたように舌打ちをした。  
……舌打ちしたいのはこっちだよ。

「私と戦えと言っている。日本人は日本語が通じないのか？」

「いや、いきなりそんなことを言われてもな。俺はお前とやる理由がないし、やる気はないぞ」

一夏くんは何事もなく、当たり前かのようにその挑発を受け流した。うん、それこそが一夏くん。さすがと言つか……この時ばかりは一夏くんが強気とかじゃなくて良かったよ。

「……ふん、逃げるのか」

「いや、なんでそうなるんだよ」

「いいだろう、ならば戦いたくなるようにしてやる」

「話を聞けよ……」

一夏くんがげんなりして、ボーデヴィツヒさんはまた一夏くんにあの砲身を向けた。

「やめなつて、周りには他にも人いるんだしさ」

さすがにまずいかなあ、なんて思って、僕は沸き上がる少しばかりの怒りを我慢して声を出した。

「貴様……」

「織斑春佳だよ、名前はちゃんと覚えよつか。で、このアリーナには僕みたいな一般生徒がたくさんいるんでキミらみたいなびっくり人間がドンパチやるとちょっと恐ろしいことになるんだよね、わか

る？」

「……ならば去ればいいだろう。弱者に興味はない」

ああもう、あの時のセシリアさんより面倒だぞこの人！

「だから、私闘とかはどつか別の場所でやれって言うてんの。なに、脳内まで筋肉でできてんの？」

たぶん、僕は相当にイラついていたんだと思う。

じゃなかったら、こんなくだらない挑発もしないし、もっと穏便に済ませたはずだ。

「ふん、噛みつく牙すら持ち得ない弱者が吠えるな。……貴様は、その男よりも重罪だ」

砲身が、銃口が僕に向けられる。

侮蔑と憎悪に固められた視線も、全て僕に向けられた。

……こいつは凄い。まるで橙子さんに会った直後の僕みたいだ。

「お前っ！」



「ははっ、人ん家の家庭の事情に首を突っ込んで、僕は重罪人か。……否定はしないけどさ、”他人”にそれを言われるのはいい気がしないかな」

さて、撃たれるとして……どうしよう。  
光ったら真横に全力でダッシュかな。

「だいたい何が言いたいかは知ってるよ。モンド・グロツソの件でしょ？  
けどね……一夏くんを、僕を責めていい人間がいるなら、それは千冬姉だけだ」

それは一夏くんにも知り得ないこと。僕が一瞬でも、千冬姉を”他人”にした、忌々しい時間のこと。それが引金だったなら、間違いなく責任は僕にある。けど、それを責めるのは千冬姉であって、

「お前じゃない。お前は千冬姉じゃないんだから」

「っ!!」

僕の言葉が彼女の逆鱗に触れたのか、銃身が光り出す。  
咄嗟に僕は体勢を低くして、いつでも真横に動けるようにした。

「……生身の人間に何をやってんのよ、あんた」

「!?!」

ガン。とボーデヴィッヒさんの機体に衝撃が響き、ボーデヴィッヒさんは軽くよろけた。

今の、甲龍の龍砲……？

「考えなさいよ、そんなの生身の人間に当たったら消し炭よ？」

「……」

『そこ、何をやっている!』

睨み合う鈴ちゃんとボーデヴィッヒさん。そこに騒ぎを聞き付けたのか先生の声が入って来て、ボーデヴィッヒさんは僕と一夏くんを鼻で笑ってからアリーナを去って行った。  
一難去った、かな。

「……ふんっ!」

「あいた!」

甲龍を解除した鈴ちゃんに、思いっきりっばい拳骨を振るわれた。  
え、なんで？

「何をわけがわからないって顔してんのよこのバカ春佳！  
アンタ生身の身体でESに銃口向けられてるってのに余裕かましち  
やって、死んだらどうするのよ！」

「あ、えっと……ごめん」

まったく考えてなかった。とは言えない。一夏くん、箒ちゃん、セ  
シリアさん、シャルルがみんな鈴ちゃんみたいな目で僕を睨んでる  
から。

「まったくだ。春佳、お前にも譲れないものはあるのだろうが、さ  
すがあの無茶は精神的に良くない」

「そうですねよ。……さすがは一夏さんの弟と言つか、でもあのよ  
うな無茶はとても賞賛できませんわね」

「みんなの言う通りだよ、春佳。あんな無茶は二度とダメ」

「……ってことだ。けど、ありがとな。」

ちよっとすつきりしたよ。だからってもう二度とやるなよな」

「……うん、ごめん」

最後に一夏くんにポンポンと頭を叩かれ、僕は自分でもびっくりするくらい素直に謝っていた。

いつも危険な時は式や橙子さんといったからか、心配なんていう珍しいものをされたからかもしれない。

できる限り気をつけよう。そう思えるくらいには、嬉しかった。

「……はあ、我ながらムキになっちゃったよなあ」

訓練後、着替えるみんなと別れて僕は先にアリーナを出ていた。

何が嫌だったんだろう。別に僕はああいふ態度にはイライラしない人間のはずだ。家庭の事情に首を突っ込まれたこと？

自分でもよくわからない。

「……力の使い方、かな」

殺す人間には殺す人間の美学がある。ってのが僕の持論だ。

一年前の浅上藤乃のような理由のない殺人は殺戮であり、僕や式のような殺人者にはとても許容ができない。

ボーデヴィツヒさんのあれは、その暴走に近い……気がする。あの力は、こういう為に使われるものじゃないだろうから。

「要するにやっぱり家庭の事情に首を突っ込まれてイライラしてるのかな、僕は」

一人呟いて苦笑して、僕は自分の右目をなぞった。

瞳孔を触ってるってのに、触られてる感触がまるでない。初めて触ったけど、不思議な感じた。

魔術回路で繋げてるそうだから仕方ないのかもしれないけど。

「……うん？」

何か声が聞こえる。

あれは……千冬姉とボーデヴィツヒさん？

「盗み聞きは趣味じゃないんだけどね」

言いながらも、僕は近くの木に背を預けていた。  
気にならないと言ったら、嘘になるしね。

「教官、今すぐにも我が祖国へ」

「……」

「この学園の生徒はISを扱うことを何とも思ってもいない者ばかり。  
そのようなやつらに教官がご指導をする必要があるとは思えません  
！」

話はずいぶん佳境みたいだ。

あのボーデヴィツヒさんが感情的になって話してる。まあ、凄く尊敬してるみたいだし当たり前か。

「教官！ 今すぐにも祖国へ来るべきです」

「……私に意見するとは、ずいぶん偉くなったな、ボーデヴィツヒ」

「っ……！」

「私は織斑”先生”だ。ここは私の仕事場であり、あいつらは私の生徒だ。」

あのお前と変わらん。だから、私の生徒をこれ以上悪く言うようなら私も黙ってはいられんな。話は以上か？ ならば寮へ帰れ」

反論を許さない、千冬姉の絶対的な言葉がボーデヴィツヒさんを容赦なく突き放していた。

「……失礼、します」

「ああ」

肩を震わせて去って行くボーデヴィツヒさんを見て、僕はふむ。と一人思考した。

あそこまで千冬姉に依存する人も珍しい。僕ら兄弟はともかくとして、だ。

……ま、詮索することでもないか。

「盗み聞きはあまりいい趣味とは言えないな、織斑」

「!?!」

気づかれてたみたいだ。名前まで特定されてるし、逃げるわけにはいかない、かな。

ちょうどいい、聞きたかったことを聞くことにしよう。ちょっと、聞けなかったことを。

「千冬姉」

「織斑先生と呼べ、馬鹿者」

「残念ながら、僕が聞きたいことは織斑先生にはないんだ。千冬姉じゃないと、たぶん意味がない」

「……なんだ」

「あのさ、後悔してる？      あの時のこと」

「……」

あの時とは、言わなくても千冬姉ならわかるだろう。

二回目のモンド・グロッソの決勝戦の日のことだ。千冬姉なら二連覇は間違いないとまで言われていたのに、不戦敗で優勝を逃してしまった、あの日のこと。

あの日、一夏くんは何者かに誘拐された。あの時既に魔術師であった僕は、けど人間としてはただの学生だったから、結局千冬姉に連絡することしかできなかった。

しかも相当テンパって、相当イラついて、相当焦ってたんだろう。反応がちよっと遅かっただけの千冬姉に、僕はかなり辛く当たった。



「よくよく考えれば、あのままドイツ軍にお願いすることもできたんだ。」

千冬姉が二連覇を逃す必要はなかった。もしかすると千冬姉はそれを考えてたのかもしれない。だから、僕はちよつと後悔してるし、申し訳ないって思ってる。あんな酷い言葉を言ったりして」

「……それは、ボーデヴィツヒに言われたのか？」

「ううん。ずっと思ってたことの一つ。千冬姉から世界最強を奪ったのは、たぶん僕だからね」

「そうか」

しばらく沈黙して、ふ。と千冬姉の笑う声が聞こえた。

「調子に乗るなよ、若造。」

お前は間違っではないなさ。それに、そうしたら今度は私が”弟の危険と引き替えに二連覇を達成した”と言う負い目を感じていただろうな。それに、もう一人の弟も私と疎遠になっていただろう。

そもそも、お前が負い目を感じる必要はない。私にとって、世界最強よりも大事な家族はお前と一夏だ。お前の家族が一夏と私であるようにな」

だから、お前が気にする必要はない。と言った千冬姉に、僕は少ししてから笑みを浮かべた。

あはは、やっぱり敵わないなあ。これが弟に対する思いやりから出た言葉じゃなくて本心だってわかってしまうから、余計に。

「ありがと、僕はそう言ってもらいたかったのかもしれない。

それじゃ、僕は寮へ戻りますね、織斑先生」

「ああ、夕飯は早めに済ませよ、織斑弟」

「はい」

千冬姉に背を向けて、僕は寮へと歩いて行く。

心なしか、足が軽く感じたのは気のせいじゃないかもしれない。

そんな自分に結局のところ魔術師だのなんだの言いながらも、やっぱり中身は人間だよねって改めて思わされたのだった。

- Side out -

「……はあ」

シャルル・デュノアは夜の中庭を一人歩いていた。  
今ごろ寮ではルームメートの織斑一夏がシャワーを浴びている頃だ  
ろう。

「早くしろ、か」

携帯で実家へと途中経過を話して、返って来たのは催促の言葉。  
あれらを家族と認めずとも、シャルルに広げられている選択肢は現  
状一つ。だからそれ以外の選択肢は、選べない。

「……ごめんね、一夏。こんな、裏切るような真似をして」

表も裏もなく、自分に友人として話しかけてくれるルームメートを  
思い出して、シャルルは一人ため息を吐いた。  
それほどまでに沈んだ気配だったから、シャルルは気づかない。  
中庭の木の葉の音に紛れて響く、女性の笑い声に。

「……気味が悪いね、早く行こう」

木の葉のざわめきに薄気味悪さを感じて、シャルルは早足で歩き出  
した。

途端に、木の葉のざわめきが消え、中庭から一切の音が消える。

「な、なに……？」

突然途切れた周りの音に、シャルルは立ち止まって周囲を見回したが、それがいけなかった。見回してしまったが故に、シャルルは見てしまった。

宙に浮く、少女の姿を。

『あはっ……あはっ……あははははハハはハはッ！』

鼓膜にまで響く奇声のような笑い声に、シャルルは驚くより先に耳を塞いだ。

『魔術師がいる、間に合わない。だから、強行。からだ、ちょうだい？』

まずい、と思った時には身体が走り出していた。目的地も何も考えず、シャルルはひたすらに走った。後ろから聞こえる笑い声も無視して。

「な、なん、なの……あれ」

得体の知れない、けれど人間でないことは理解できる。代表候補生として、人並み以上の冷静さと思惑能力を持つシャルル

は走りながら考えた。そして、その思考から暗闇であることすら排除してしまったシャルルは足元の木の枝に足を引っかけ、転んでしまう。

「っ……」

振り返った先には、IS学園の制服を着た宙に浮く少女。目は虚ろにシャルルを見下ろし、口元は凄惨な笑みに歪み、裂けるようにつり上がっている。

『身体、からだ、カラダ、ちょうだい？』

「っ！ や、やめて……来ないで！」

叫ぶシャルルの声に反応せず、ソレはゆっくりとシャルルへと向かって行く。

そして、シャルルの喉元に手を伸ばして、

その腕は、何かに斬られて切断していた。

『|||||||!~!』

人には考えられない絶叫をあげ、ソレはシャルルから距離を取った。何が起こったかと、現状を理解しきれないシャルルはゆっくり周りを

を見て、自分の近く立つ和服の女性に視線を奪われた。

「はっ、ずいぶん懐かしいもんが二つくっついたようなカタチで出やがって。

来いよ、殺してやる」

女性はシャルルに目もくれず、ソレを睨んで笑った。

そしてすぐ隣に、フードを被った者も現れそちらはシャルルへとその見えない顔を向けた。

「……早く逃げて、危ないから」

どこか聞き覚えのある、自分を気遣う声。

そして、見覚えのある和服の女性。シャルルはフードの言葉に答えず、代わりに違う言葉を呟いた。

「……春佳、だよな？」

瞬間、フードが一瞬震えたのがシャルルにもわかった。

和服の女性は何がおかしいのか、ニヤリと笑ってフードに視線を向け、それから右手に持っていたナイフの柄でそのフードの頭を軽く小突き、口を開いた。

「その根拠は？」

「あなたと一緒にいるのを見ました」

「あー、まあオレはあいつのバイト先の先輩ってことになってるかな」

「……式」

「おいおい、これに関してオレは一切悪くないぜ。昼間だつてのに人払いをしなかったお前が悪い。それにさ、あつちは待つてくれる気ないんだからあまりグダグダやつてる時間はないぞ」

式の視線の先には、片腕を無くした幽霊が浮遊していた。

気がつけばその周囲にはうつすらと、シャルルにもわかるくらいの白いモヤが漂い、だんだんとカタチを成していく。

「はっ、ずいぶん既視感のある光景だな。お前、人を墜落死させる知り合いか人の身体を乗っ取ろうとする知り合いがいたりしなかったか？」

右手に光るナイフを一度振り、邪魔だったのか髪の毛をかきあげるようにして式は問いかける。  
相対するソレらは一切に答えず、モヤは実体となって三人の目の前に現れた。

「な、いい加減諦めろって」

「……はあ、わかったよ。シャルル、大丈夫？」

諦めたように呟いて、もう一人はゆっくりとフードを下げて行く。  
そして、そこから素顔を覗かせた春佳は苦笑いを浮かべ、シャルルへと問いかけた。

「う、うん。あの、春佳。これはどういうことなの？」

「えっと、ごめん。僕もまだ調べてるところなんだ。」

「ま、こいつらにはここで消えてもらうけど」

右のポケットから、柄まで銀色のナイフを取り出して、春佳は笑った。

「シャルルや裸眼の僕にも見えてるってことは、かなり濃密にでき



てるみたいだね。じゃ、普通に行くのでいいかな」

「そこらはお前の判断に任せる。オレには関係ないしな」

「ん。まあ、こいつらはちょっと今の僕じゃ理解できないから意味ないってだけなんだけどね。  
にしても、一年前のビルのアレもこんな感じだったの？」

「数とかは違うけど、雰囲気的にはな。  
結構魔的だろ？」

「そうだね、だいぶ魔的だ。うん、こっついのはあまり良くないかな」

「ああ、まったくもって良くないな。だから」

「うん。こんなものは」

「「ここで殺さないとなあっ！」」

シャルルの視界に入った式の目が、蒼く染まった。  
その瞳を引き込まれるように見つめ、唐突にシャルルは死を連想し

た。

「シャルル、下がってて」

「春佳!？」

「いいから!」

渋々と、シャルルは春佳の言葉に頷いた。それを見届けて、春佳は式へと振り返る。

「ひー、ふー、みー……っと、十体か。どうするか？」

「早いもん勝ちでいいでしょ。最速で」

「ん。オレのが多くても文句言っなよ」

「そっちこそ」

同じような笑みを浮かべ、二人はそれぞれ駆け出した。

「A z z i d o l t h」

春佳の眩きと共に、その肉体は更に加速する。

強化の魔術によって、常識では考えられない速度で幽霊の一つの真横に現れた。

「ふふ、みんな同じ顔なのに衣装は違うんだね。変なの」

幽霊の胸元に、一つの銀閃が入った。

そこから幽霊は裂け、二つに分かれたところで霧散した。

「お前、確か僕の部屋に出たヤツだよ。だから一番最初ね」

霧散するソレを春佳は笑顔で見つめ、そのまま逆手に持ち変えたナイフを背後に振るった。

春佳へと手を伸ばしていたIS学園の制服を着た幽霊のこめかみに突き刺さり、霧散させた。

「二匹目と」

「悪いな、もう三つ目だ」

「ん、じゃあ四つ目までやるかな」

二人は互いへと駆け出し、春佳は式の、式は春佳の顔へナイフを突き出した。

同時にナイフを避け、同時に背後の幽霊の顔面をそれぞれ一突きし、霧散させる。

春佳は更に真横にいる幽霊を斬り捨て、更に一体を消滅させた。

「これくらいのヤツ相手なら僕のナイフもキミの魔眼並みの効力なんだけどね」

「部位を選らばないと、この気持ち悪い線が視えてない分オレのより便利かもな。」

ああ、けど程度が限られてるのは問題か」

「まあね。あまりに強い魔や神秘に対しては全然役に立たないから、また違う手段を使わなきゃなんだよ」

「難儀だな、お前も」

「キミほどでもないよ。って、人の友達に何をしようとしてんのさ」

冷たい声音と共に春佳が投げたナイフはシャルルに迫ろうとしていた幽霊を貫通し、そのまま木へ突き刺さった。  
直後、真後ろで式が最後の一体を切り裂き霧散させていた。

「なんだ、結局は半分かよ」

「そんなもんだよ。ふう、シャルル。改めて、大丈夫？」

「う、うん」

「なら良かった。事情はちゃんと話すからちょっと待っててね」

ナイフを木から引き抜き、春佳はシャルルへと笑いかけたのだった。

「じゃ、オレはあいつに報告して帰るぞ。今回は運が悪かったな、春佳」

「そうだね、まったくもって。  
キミが仕事でこの時間までここにいたことが一番の問題だったよ。  
じゃあね、式」

「ん。せいぜいお前の師匠せんせいみたいなうっかりを何回もするなよな、春佳」

「うるさいよ」

寮への道を歩きながら、春佳は式を拗ねたように睨んだ。  
それを鼻で笑ってあしらって、式は春佳とシャルルに背を向けて歩き始めた。春佳もしばらく見送って、シャルルに再び行こつかと歩き始める。

「……あ、あのさ、春佳」

「うん？」

「一夏や織斑先生も、春佳みたいな……その、ああいうのと戦ったりするの？」

「ううん。あの二人は何も知らないよ。知られちゃいけない秘密みたいなもんだし。」

だから、さっきのこと、それとこれから話すことはシャルルは絶対に誰にも言わないようにね」

「……もし言ったりしたら?。」

「まあ、誰も信じてはくれないだろうからいいんだけど……記憶を消すかな」

「え?。」

「僕はできないんだけど、僕の魔術の先生ならそれができるだろうからね。今日あったことは忘れてもらうよ」

「……わかった。言わないよ、絶対に」

「うん、ありがとう」

嬉しそうに笑って、春佳は何から話そうかな。とひとりごちた。

チラとシャルルを見れば、ジャージを握って真剣な表情で春佳を見上げていた。

「ふふ、そんなに固くならないで。シャルルからすれば、ずいぶんファンタジーな内容だからさ」

「そ、そうなの？」

「そうだよ。ISよりも更に不思議で信じがたいモノだからね。シャルル、僕は魔術師なんだよ」

春佳は肩を竦め、おどけたように笑ってウインクをしたのだった。

- Side 春佳 -

「じゃあ、春佳はその……仕事で入学したの？」

「最初はね。僕はISを扱えないし、僕まで学校に行くこともないと思ってたから。」

「今じゃ本気で学校生活を楽しんでるけど」

シャルルに僕がどういう人種なのか、それからここに在る主な理由を話した僕は、彼の言葉に頷いて答えた。

「仕事内容も退屈しなくて済むしね」



「それは、ああいうのと戦うこと？」

「うん。一年前は見てるだけって言われてたから深くは関わらなかつただけど、今回は僕も主役だからね。公私共にああいうヤツには容赦しないよ」

まさか、もうこんな手段に出て来るとは思わなかった。

式が橙子さんに報告をしてると思うし、僕も今まで以上に警戒はしておこうと思う。

「さすがに、友達に手を出したんだ。殺されたって文句は言わせないかな」

僕の怒りの沸点の低い部分に触れたのはあっちだ。

少なくとも、許す気はない。

「殺されたって……まさか、その……殺しちゃうの？」

「人間なら、わからない。人間じゃないなら……十中八九殺すよ」

シャルルの息を呑む声が聞こえた。まあ、貴公子さんだし、殺すなんて言葉は滅多に聞かないんだろうね。

「一夏には、言っていないんだよね」

「うん。双子の弟がこんなだなんて、知られたくないから」

「じゃあ、どうしてそんな風に……」

「ふふ、二律背反だよ」

「にりつはいはん？」

「そ。論理学上において互いに矛盾し、対立しあう命題を同じように主張すること。だったかな。」

僕は本質的な根幹で殺人衝動を抱えているけれど、同時に人として日々を普通にも暮らしたい。戦いたくて、殺したくて仕方ない一方で、みんなとわいわいする普段の日常が楽しくて仕方ない。非日常と日常の両方が欲しいってのは、酷く矛盾した話だからね。少なくとも、どちらかが終わらないとどちらかを求めることはないだろうし」

「む、難しい話だね」

「そうかな」

「とりあえず、僕にはよくわからない話だったよ。」

躊躇いなく殺すとか殺人とか言う春佳はちよつと怖いけど、でもやつぱりいつもの春佳だし。

春佳は、僕達には優しいんだよね？」

「当たり前です。裏切るのはこの部分だけでいいよ。それ以外は一切裏切らない。」

僕は一夏くん達と一緒にいてホントに楽しいよ。だからこそ、こうして仕事に熱も入ってるわけだし。

ただやれるってだけじゃこんなにやる気にならないもの」

「そっか」

僕の話に満足したのか、シャルルは笑顔になった。

……この事実に関わられてなかったみたいでホントに良かった。

仕方なく話したけど、言った通り僕は日常も愛しくて仕方ないんだ。だから、友達をこんな理由で失いたくはない。……バレちゃった人間の言うことじゃないけど。

「僕にも何か手伝えることってないの？」

「うーん、そうだね……じゃあ、何か聞いたりしたら教えてもらえるかな。」

あとは、うちの兄貴をこれからもよろしくってことで」

「あ、うん」

一瞬、シャルルの表情が沈んだ気がした。  
えっと、僕、変なことは言っていないよね。大丈夫だよな？

「シャルル？」

「え？」

「いや、なんか落ち込んでる感じに見えたんだけど、大丈夫？」

「うん、大丈夫だよ。それに僕は落ち込んでなんかいないよ？」

「そう？　ならいいんだけど……」

……まあ、落ち込んでたとしても、シャルルにはシャルルなりの事情があるんだろうね。僕だってこっという事情を抱えているわけだし、無理に詮索するのも野暮かな。

一方的に秘密を知られたって言って話させることもできるけど、僕のこれはちよっと自業自得だ。橙子さんのこと、あまり言えないね、

まったく。

「ま、シャルルも何かあったら僕を頼ってね」

「うん。ありがとう、春佳」

「いえいえ。それじゃ行こっか」

「そうだね、あんまり遅いと織斑先生に見つかった時が怖いよ」

「ふふ、間違いないね」

僕達は軽く笑い合って、それから二人並んで寮へと歩き始めたのだ。  
った。

## 五（後書き）

……うん、今回もめちゃくちゃ長かった。

そんなに長引かせようなんて思ってたわけではないのですが……まあいつか

もう三章折り返しなノリで書いてたのですが、今回はわりとシリアスなシーンが多かったんじゃないかなーと思います。

と言ってもそんな重々しいほどではありませんが、普段よりは静かだったかな、と。

……待て、今回一夏達冒頭部分にしか出てない！？

なんて言うか、登場人物を上手く出すのって難しいです。

もっと精進せねば！

さて、今回は”原作”の本編も進みます。

寄り道もほどほどに、ちゃんと進まないとダメですからね（笑）

ではでは、次回のあとがきでまたお会いしましょう！

## 六（前書き）

はい、そんなわけで三章その六です。

三章もあとは佳境ですね、頑張っていきたいと思います。

それと、パソコンが使えるようになったのでいろいろやってみました。ルビって素晴らしい！

では、始まり始まり。

## 六

「はぁ……」

「ふふ、ため息は幸せが逃げてくよ？」

「そう言うなよ、あと一週間で個人トーナメントだぞ？  
今回は第やセシリアだって相手になるんだからな、気も重くなるっ  
てもんだ」

「ずいぶんと弱気だね」

一週間が経って、個人トーナメントももう残りわずかとなったある  
日曜日。僕と一夏くんは食堂にいた。

この日は午後からみんなでアリーナで特訓だそうで、僕も見学に行  
くつもりだ。でも一夏くんはもう今から特訓を始めるそうで僕も微  
力ながらお手伝いしようかなと。

ため息とかつくわりにはやる気だよね、一夏くん。

あの幽霊はあれからナリを潜めていて、目撃情報も聞かなくなった。  
もしかするとあの時に僕と式が殺し尽くしたのかもしれないけど、  
警戒はしておかなきゃいけない。だって、アレは本来いるはずのな  
い幽霊だから。



「ごちそうさま、と。俺は先に行くぞ」

「うん。僕は後から行くよ。そついえばシャルルは？」

「実家に電話してるみたいだぞ。偉いやつだよな、ホント。ほら、来たぞ」

「あ、おはよーシャルル」

「うん、おはよう春佳。あれ、一夏はもう行くの？」

「おう。二人はゆっくり来てくれよ」

「ん、わかった。じゃあ一夏くん、また後でね」

僕は食堂を後にする一夏くんの手を振って朝御飯のフレンチトーストを一口食べた。

うん、美味しい。

「そついえば、春佳」

一夏くんがいなくなったのを確認して、シャルルはちょっと周りを見てから口を開いた。

「あの幽霊、あれから出たりしてるの？」

「ううん。残念ながら全然だよ。

まあ、あの時僕らはあれを撃退したんじゃないかって文字通り殺したからね。復活とかは望めないと思うよ。だから逆に困るんだけどね。あれを作ったやつを探すのに骨が折れそうかな」

「作った……？」

「そ。だってねシャルル、この学園、幽霊になるような死者はいないって話なんだ。

おかしいでしょ、幽霊になるような話の元の死者がいないのに幽霊がいるなんて。つまり、誰かに造られた幽霊ってわけ」

「なるほど……じゃあ、」

「うん。その手の人間か、魔術師か、化物のどれかが潜んでるんだよ。

だから、早々に見つけて 叩く」

「叩くって……その、殺したりするの？」

「それはわからないかな。そいつが化物なら迷いなくやるけど、人間だった場合は出方による。人間ならできれば殺したくはないけどね」

「そう、なんだ」

殺したくはないって発言にホッとしたのかシャルルは少し嬉しそうにそう言った。

うん、それが普通の反応だよな。

「まあ、できればけどね。相手だってそれくらい覚悟してるだろうし」

言って、フレンチトーストの残りにパクついた。

たまにいるんだよね、人に凄い害をもたらすクセに自分が危機に陥ると発狂しかけるヤツ。僕にはとても理解できないよ。

この世の中は因果応報で、やったことは必ず返って来るんだから。

「なんだか嫌だな、そういうの」

「そっか」

「うん」

シャルルはあれ以来ちゃんと誰にも言わないでいてくれるみたいなんだけど、なんだかやたらこういうことを聞いて来るのでちょっと困る。

好奇心でヤツかな。確かに気になるのはわかるけど、巻き込まないようにしないと。

「はい、それじゃこの話はこれでもうおしまい。シャルル、あまりこつちには踏み込まないように。」

僕は正義の味方でも最強のヒーローでもないんだから助けられないからね？」

大丈夫だろうけど、念のために言っておくことにする。

冗談抜きで僕にはそういうのは向いていないからね。そういうのは一夏くんの立ち位置だ。

「勘違いしないように言うけど、悪意からとかじゃないからね？  
友達として、シャルルには死んで欲しくないから言ってるの。いい？」

「う、うん。わかった、気をつけるよ」

「気をつける、じゃなくて一切関わらないでくれるとありがたいんだけどなあ」

「そういつわけにもいかないよ。春佳だって危ないんでしょ？  
僕だって、友達の春佳が危ない目に遭うのは嫌だよ」

「むー、平行線だなあ」

「そこだけは譲らないよ」

「……あー、もう、わかりました。じゃ、シャルルの力が必要になったら借りますから、それでいい？」

「うん」

はあ、なんだかここ最近ホントに舌戦はボコボコにされてる気がする。

だって、こんな僕でも心配してくれるってやっぱり嬉しいし……ずるいよね、みんなしてさ。

「ホント……汚いよね、みんな」

「え、何か言った？」

「なんでもないよ。それじゃ、僕は一回部屋に戻るから。ごちそうさま」

「あ、うん。また後で」

シャルルに片手を挙げて、僕は自分の部屋へ戻ることにした。はあ、迂闊な自分を本気で恨むよ、僕は。

「あれ、売り切れ？」

シャルルと別れて一旦部屋に戻った僕は、その足でアリーナに行く前に校舎付近の自動販売機に寄っていた。日曜日で校舎にはあまり人がいないはずなのにいつも買ってる缶コーヒーが売り切れになっていて、僕は思わずため息を吐いた。これを嫌がらせと言わずして何と言う！

「はあ……仕方ない、こっちで我慢しますか」

ひとりごちて、いつもと違うコーヒーを買うことにする。缶コーヒーと言ってもやっぱり好みとかは有るわけでして、いつも飲んでるコーヒーがないってのは軽くショックだったりする。でもここ以外に売ってる場所と言えば、屋上の自動販売機くらいしかないから仕方ない。僕は普段毎回ここか屋上に買いに行ってるのである。

「しかも……誰かな、敵意の塊で僕を睨むのは」

殺人衝動やら闘争本能やらで固まってる僕の根幹は、人の負の感情に対してなかなか敏感だ。おかげでいじめられてた頃はいろいろと苦労したりしたなあ……  
って、そうじゃなくて。

自分に向けられた敵意を探すように周囲を見回せば、その主はあっさりと見つかった。僕の背後に立っていた銀髪赤目、眼帯のオプシヨン付きの（一応）クラスメートであるラウラ・ボーデヴィツヒが僕を睨んでいた。

「……」

一緒に空間にいてもいいことはないと思うので、早々に立ち去ることにする。

「待て」

「……なにかな」

どうしてこう、厄介事から近づいて来るのかな、まったく。  
そういうのは斬った張ったの殺し合いだけで良くて、この日常にまで入り込まないで欲しいんだけど。

「あの時、何故織斑教官は決勝戦を抜け出したのだ」

「キミに言うことではないかな。千冬姉は答えてくれた？  
答え  
てないなら、そういうことだよ」

「貴様らが絡んでいるのは間違いではないだろう、答えろ」

……話を聞いてましたでしょうか。

「答えないよ。悪いけど、人の家庭の事情に首を突っ込むのはいた  
だけないかな」

「……」



「っ！」

反射的に、僕は自分へと踏み込んで来た彼女へ手を伸ばし、僕へ放たれようとしていた右手の手首を掴んでいた。

「なっ……」

「悪いけど、あんま舐めないでもらえるかな。武力行使なんてさせるわけないでしょうに」

手を放して、僕は缶コーヒーを開けて一口飲んだ。  
うん、やっぱり味が違うせいかちよっと変な感じだ。

「それじゃ、人を待たせてるんで僕はもう行くから」

そのまま、僕に手を掴まれたのがよっぱどショックだったのか、僕を睨むだけのボーデヴィツヒに告げて、僕はアリーナへと向かって行った。

「だからね、こうすると比較的ちゃんと狙った場所に飛んで行くん

だ」

「おー、なるほどな。ちょっとやってみるよ」

「狙撃のコツとしては、狙いをしっかり付けることよりも当てることですわ。ISは暗殺者ではありませんので、最初はシールドエネルギーを削ることだけ考えて撃ってみるといいと思います」

「りょーかい。当てるように、だな」

アリーナに着くとそこには一夏くとシャルル、それに午後から一緒にやるはずのセシリアさんがいた。

一夏くんはシャルルからアサルトライフルを借りて射撃訓練。シャルルとセシリアさんはその指導をしてるみたいだ。

「お疲れ様、三人とも」

「あら、春佳さん。ごきげんよう」

「うん、おはよ、セシリアさん。ちなみになんでここに？」

「わたくしも訓練に、と思ったら二人に会いまして。」

せつかくですから一夏さんに撃ち方をと」

「なるほど……あ、けど二人とも、自分の訓練は平気なの？」

「問題ありませんわ。それはそれでしっかり時間を取ってやりますから」

「それに、こうやって一夏に教えてると自分でも改めて気をつけなきゃいけないところに気づけたりして、これはこれで結構勉強になるんだよ」

二人の返答に僕はなるほど。と頷いた。

誰かに教えることは自分も識<sup>し</sup>ることだとは橙子<sup>げん</sup>さんの言<sup>げん</sup>だ。

僕自身、前に橙子さんの代わりに鮮花へ魔術を教えたことがあったけど、教えてるうちにまるで自分が復習しているような感覚に陥ったのを覚えてる。

確かに、教えることは覚えることにも繋がるんだろうね。

「一夏さんは飲み込みも早いですから、教え甲斐がありますわ」

「うんうん。最初は的にもあまり当たらなかったのに、今じゃピンポイントで真ん中に当たることも増えたからね、びっくりするような成長スピードだよ」

「ふふ、一夏くんは千冬姉の弟なんだよ？  
才能が無いわけ無いじゃないか」

やっぱり兄貴が褒められれば弟としては嬉しいわけで、盛大に顔を綻ばせて、僕は二人の言葉に頷いた。

「あら、でもそれだと春佳さんも何か秀でてるものがありそうなものですが？」

「僕は人をからかうことに秀でてるからそれでいいんです。  
そもそもIS乗れないからね、根本的なものからダメだったよ」

「確かにそうですね」

僕を見るシャルルの視線がジト目のような半目だったのは気づかなかったことにしておこう。ちなみにシャルル、僕のこれは千冬姉からの才能とかじゃないんだよ。

最大限、人間の身体を有効的に使ってるだけで、実は何も武術みたいなものは使っていないんだから。

普通なら身体が悲鳴をあげるような身体の使い方でも、僕は痛みには強いし、強化魔術も使ってるおかげで耐えられるだけだしね。一応、生身でも大丈夫なようにいろいろとやっってはあるけど。

「ふう、撃ち終わったぞー」

「あ、お疲れ一夏。結果は……七割が有効点に命中だね、うん、前より着実に当たってるよ」

「おう。けど、銃って難しいんだな。止まってるのに当てるのすらこんなに難しいってのにISの高速戦闘中でこれを当てるんだからすごいよ。」

セシリア、こんな凄いことをやってたんだな」

「そ、そうですね！

一夏さんもようやくこのセシリア・オルコットの凄さに気づいたようですわね」

「うわー、セシリアさん超嬉しそう。」

たぶん本人は優雅に髪の毛を掻き上げてるつもりなんだろうけども、  
う見てるだけで有頂天なのがわかるくらいだ。  
鼻の下伸ばしてる女の子って初めて見た気がする。

「さあ一夏さん！ 次は精密射撃ですわ！

このセシリアが手取り足取り教えますからばっちり行きますわよ！」

「お、おう……お手柔らかにな」

さすがの一夏くんも気合い入りまくりなセシリアさんに気圧されたのか、若干腰が引き気味だ。

けれど、セシリアさんはそんなのお構いなく一夏くんを引っ張って行く。

……その光景に、ドナドナが脳内で再生されたのは秘密だ。あとさ、ISを装着した人間が引き摺られるって、結構ホラーな光景だよな。

「あ、あはは……デレデレだったね」

「そうだね」

あまりのことにシャルルも苦笑していた。間違いなくデレデレではあったので、僕はそつとシャルルに同意しておく。

うん、デレデレだった。

「あれでも気づかないって、凄いよね、一夏も」

「筋金入りの朴念人だからね。しかも男女問わずに言いたいことを言うから友達も凄い多いんだよね、あの人」

僕も今は人並み程度の社交性はあると思うけど、あそこまで言いたいことは言えないかな。

どちらかと言うと、僕は偽ることが多い人間だから。だからこそ、

裏切りは大嫌いなんだけど。

「シャルルとかにもなんか言ったりしてない？  
女の子ならコロツと落ちちやいそんな言葉とか」

「あ、あはは……どうかなあ」

……言われてるんだね、さすが一夏くん。美少年まで落とす気が。  
僕？　僕はあり得ないかな。生まれた時からずっと一緒にいるし、  
一夏くんは今でも僕を過剰に心配することがあるってわかってるから。  
こればかりは昔僕がいじめられっ子だったから仕方ないんだ  
けどね。  
家族として、兄として僕を大切にしてくれてるってわかってるから、  
あり得ない。  
それはたぶんあちらも同じで、だからこそ織斑一夏と織斑春佳は兄  
弟なんだと思う。  
見た目から始まっているいろいろ違って、わりと同じことを考えてた  
りするしね。

「それじゃ、僕はシャルルの訓練を見えますか。ふふ、無駄なく相  
手を殺す手段でも覚えてみる？」

「む、そういうのは嫌だって言ったよね、春佳。  
それに、教える気ないでしょ。からかうのが好きって言っても、そ  
ういうのは趣味が悪いよ」

「あ、うん、ごめん」

確かにからかったつもりだったんだけど……うん、巻き込みたくないとか言ってたのも僕だね、さすがにバカだった。言葉はしっかり選ぶようにしよう。

「でも、僕の動きに変なことがあつたら教えて欲しいな」

「それくらいならいくらでも。ビシバシ行くからね？」

「あはは、お手柔らかに」

僕の言葉に笑顔で返して、シャルルは自分の訓練の準備を始める。途端にすることが無くなった僕は、目の前で行われる準備を手持ち無沙汰で眺めていたのだった。

- Side out -

「さーて、午後からはあたしもばっちり参加よ？」



「ええ、よろしく願いしますわ。ところで篤さんは？」

「さすがに部活に出ないとまずいってことでとりあえず行ってるみたいね。アンタ、恨まれるわよ？」

「ふふ、自分の剣道の実力を恨んで欲しいですわね。この国の同年代女子で一番強いのでしょうか？」

午後になり、昼食を先に終えたセシリアは鈴音と合流してアリーナへと戻っていた。  
ISスーツのままで、二人は食後の軽い運動も兼ねて準備運動をしている。

「一夏さん達はすぐに来ると思いますが、春佳さんはあの人……式さんでしたっけ？  
あの人に呼ばれていましたわ」

「ふーん、最近よく来てるし、式さんも仕事とは言え大変よねー」

伸脚をしながらセシリアの言葉に答え、鈴音は青い空を見上げた。

「あら、春佳さんと親しくしていて心配したりしないんですの？」

「しないしない。だって式さんてあの時一緒にいた幹也さんて人と付き合ってるんでしょ？」

それに本人同士が友人だの親友だの言ってるしね。ほら、あたしが一夏と仲良く話しててもセシリアや篤は心配しないでしょ。」

「なるほど、納得行きましたわ」

「まあ、あそこまで遠慮なく話してるのを見てると羨ましいなー、とかは思ったりするけど」

決して本人には言えないんだろうな、なんて内心で呟いて、鈴音はため息を吐いてから甲龍を呼び出す。隣に立つセシリアもブルー・ティアーズを呼び出し、なるほど。と頷いた。

「確かに、春佳さんがあのような話し方をする人とは思いませんでしたわ」

「あはは、春佳って結構口が悪いわよ。一夏みたいな話し方じゃないけど、時折とんでもない毒を吐くのよね。」

死んでみたら？　みたいな感じの。本人が無自覚だからタチ悪いのよ」

「まあ、そうなんですの?」

「そうそう。……と、セシリア」

春佳のことを話していたからか、どこか嬉しそうだった鈴音の表情が歪んだ。

何かを睨むようにして、セシリアへソレへと注意を向けるように促した。

「……あら」

セシリアの表情も険しいモノに変わった。二人の視線の先にあるのは、一機のIS。黒を基調としたカラーリングを施されたドイツの第三世代機。黒き雨の名を冠する機体、シュヴァルツェア・レーゲン。

そして、その操縦者　ラウラ・ボーデヴィツヒ。

「……」

「「!?!?」」

突如、超音速の砲弾が二人へと放たれた。

二人は、反射的に左右へ回避し、目の前に浮遊する黒き機体を睨みつけた。

「……いきなりぶつ放すなんていい度胸してんじゃない」

鈴音は即座に双天牙月を組み合わせ、肩に担いで怒りにひきつらせた顔を繕いもせずに言った。  
そのまま龍砲を準戦闘モードへシフトさせいつでも放てるようにする。

「甲龍”に”ブルー・ティアーズ”か。

……ふん、データで見た時の方がまだ強そうではあったな」

鈴音の言葉を見無視し、いきなり放たれた言葉の挑発に二人の表情が固まった。

直後、怒りでその表情が完全に塗り固められていく。

「……なに、やる気？」

ドイツくん dari からわざわざ来ておいてボコられるって、マゾか何か？」

「あらあら鈴さん、こちらの方は言語をお持ちでないようだからあまりいじめるのは可哀想ですわよ？  
犬だってワンと言いますのに」

ラウラは怒りの表情になった二人を見て、その言葉を聞いて、鼻で笑った。

安いな、と。内心で毒づいて、再び口を開く。

「はっ、二人がかりで量産機に負ける者が専用機持ち、ましてや代表候補生とは笑わせてくれる。よほど人材不足のようだな、貴様らの祖国は。」

さすが、数だけしか能のない国と古いだけの国だ」

二人の脳内で、何本かの糸が切れる音が響いた。  
我慢の限界など、とつくに超えている。

「いいわよ、やってやろうじゃない。セシリア、どっちからやるかジャンケン」

「ええ。別にわたくしはどちらが先でも構いませんが、少しばかり灸を据えてやる必要がありますわね」

「はっ！ 二人同時でいいぞ」

こめかみに青筋を浮かべた二人に対して、ラウラは涼しげに答えた。  
二人の表情がより険しくなるのを見てもその態度は変わらない。

「一足す一は所詮二にしかならん。だから同時に構わんと言っている。

下らん種馬を他の女と取り合うようなメスと、ゴミのような男に恋などという現を抜かすメスに私が負けるものか」

その言葉に、二人の堪忍袋の緒が全てキレた。

今までのどの挑発よりも、二人には許しがたいことだった。

「……いいわよ、そこまで言うならマジでボッコボコにしてやるから。

べちやんこ  
廃棄処分になっても泣かないでよねッ！」

「この場にいない人を侮辱するような方など、同じ欧州連合の者として我慢なりませんわね。

二度とそのような口を叩けないようにここで叩いて差し上げますわ」

「御託はいらん、とつと来い」

「「上等！」」

鈴音とセシリアは、遂に武装の最終安全装置を外した。

自分へと向けられるアラートにラウラは口元をつり上げ、そして目

の前の二人を見下ろしていた。

## 六（後書き）

と、またキリがいいところで切ってしまいました。

いろいろ書いてると字数がとんでもないことになって、じゃあここ  
まででここからは次回に持ち越すか！　なんてやってるとこんなこ  
とに……

章を進めることに増えていく文量に驚きを隠せません。

さて、次回ですが遂にシャルルの正体が……？

そんな感じの次回をこうご期待ください。

では、次回のあとがきでお会いしましょう！



## 七（前書き）

もう六月ですねー。最近暑くなって参りました。

本編も今六月中の話ですし、ちょっとシンクロしたかなーとか思ったり思わなかったり。

では、始まり始まり。

## 七

「じゃあ、とりあえずは様子見になる感じなのか？」

「そうだね、橙子さんのところにも幽霊を見たって話があれば以来来てないみたいだし」

「へえ」

式はそれっきり、この話に対しての興味を失ってしまったようだった。

まあ、式も僕も終わってしまったことに興味を持たない性格だから仕方ないよね。また現れたら再燃するからもしれないけど。

「なあ、なんか騒がしくないか？」

「うん？ ああ、アリーナの中だね。どうせ一夏くんがなんかしてるとか、そんなとこじゃないかな」

「そういう雰囲気には見えないぞ。あれはどっちかって言うと……アレだ、わりと派手になっちまった不良の喧嘩を見るような感じだな」

「意味がわからないよ、それ。まあ、あの中にはうちの兄貴とかもいるからね、一応見には行くとするよ。  
じゃね、式。あでゅー」

「ん」

式と別れて、僕はすぐにアリーナへと向かった。  
式にはああ言っただけど、あまりいい予感はしなかったから。

「案の定、と言うか……やっぱりか」

アリーナの客席側に出た僕は、そこで行われている風景にため息を吐いた。

僕の視界には、鏑迫り合いのように雪片式型と何かよくわからないものをぶつける一夏くんとボーデヴィツヒさん。そして、その背後でなんか惚けた様子で一夏くんを見るシャルルと、更に離れたところで座ったままの鈴ちゃんとセシリアさんと二人を介抱してる様子の篝ちゃん。

鈴ちゃんとセシリアさん、怪我してる？

「……ふん、やはり弱い！」

「ぐっ……」

アリーナのバリアが砕けてるってのに構わず砲撃を放つボーデヴィッヒさん。

さすがに千冬姉の教え子だ、動き方からもいろいろ違う。強いね。

「じゃなくて、と」

さすがになんかまずい気がするので、僕は自分に認識阻害の魔術を施した。

この状況で、みんなの注意は一夏くん達に向いているから軽い認識阻害で僕はほとんどの人に認識されないだろう。

そのうちに、僕はアリーナ客席の一番上の場所へ移動した。

「……ずいぶんと愉しそうね、ラウラ・ボーデヴィッヒ」

思わず”私”で呟いてしまうくらい、ボーデヴィッヒさんの表情は見覚えのあるものだった。

あの、自分が相手より強いと信じて疑わない、相手を弱者と見下した、いたぶることを愉しむ笑顔。あの笑顔には見覚えがあった。だって、

あの笑顔は、僕自身が浮かべていた笑顔だから。

「楽しいよね、気に入らないモノを見下して、自分が強いって錯覚するのは」

まだ”彼女”を造る前、僕が橙子さんに出会って、それから少しして、僕は自分の殺人衝動に吞まれかかっていた。

その時期はホントに荒れていて、まあ……あまりいいことをしていなかったんだ。

今のボーデヴィツヒさんの笑顔は、その頃の僕の笑顔によく似ている。

「可哀想な人。壊れちゃったらどうしようもないのに」

ポケットからミニ聖書を取り出して、僕はそのうちの半分を破り捨てた。

「IS相手だから、この子でできる限りの全力をぶつけた方がいいよね」

そろそろこのミニ聖書はページがなくなりそうだったし、ちょうどいいかな。

アリーナでは、一夏くんが後退させられていた。劣勢なのは間違いない。劣勢どころじゃない、下手すれば限度を超えた攻撃を叩き込まれる危険もある。

「キミに対して、少しばかり以上の同情を思っけど……  
さすがにそれは許容できないかな。まあ、元々ムカムカしてたりは  
していたけど」

走る千冬姉が見える。百七十センチはあるだろうISの近接ブレイ  
ドを手に、二人へと駆けていた。  
…… ホントに化物だよ、千冬姉。

「でも、間に合わないかもしれないからやっそこっか」

破かれた聖書のページが、質量のある物質へと変換されていく。  
それは、一本の杭へと変わった。ミニ聖書でやったせい、本来の  
カタチより小さいけど、でも神性においてはこのナイフをも凌駕す  
るとおき。

多数の弾で穿つ聖弾に対し、一点を確実に射抜く僕の攻性魔術。

「第二小節、せいせん聖穿」

この聖穿の杭は、捻れが存在する。これはまあ、僕なりに威力を上  
げる努力をした結果なんだけど。

「簡単に言えば、鉄砲の弾みたいにしてるだけだしね」

つまりライフルみたいな横回転　野球なんかで言うジャイロ回転を加えて、貫通力と突破力を上げてあるわけだ。弾速に関してはちょっとライフルには勝てないけど。

「さて、と」

杭を目の前に浮かべて、横に回転させ始める。空気を切って、杭はあっという間に最高速の回転に到達した。その短い間に、僕は右目を魔術回路に繋いで眼を発動させる。より確実に、標的を撃ち抜く為に。

「……そこ、かな」

杭の先端から、細い魔力線がまっすぐに張られる。これが聖穿の軌道であり、そこをなぞってこれは飛んで行く。もちろん、ただまっすぐに飛ぶ以外だってできるよ。応用の利く男なんだ、僕は。

「そんなわけだから　ブチ抜け」

手をボーデヴィツヒさんに向けて、僕は聖穿を放った。一夏くんへと斬りかかる、その顔面へ。

「なにつ!？」

僕の位置から射出された聖穿は、寸分変わらずにボーデヴィツヒさんの顔面へと飛んで行った。

弾丸のような、撃てば到達する速度ではないし、IS兵器のように超音速で飛来するわけでもない。けれど、予想外の一撃は確かにボーデヴィツヒさんの顔面へ何の妨害も受けずに飛んでいた。IS兵器じゃないからアラートも鳴らなかつただろう。それでも咄嗟に片手で払うことができた彼女の實力の高さはかなりのモノだと思う。その間に千冬姉が割って入って、戦闘は終了した。

ダメージ確認ができないのは残念だけど、とりあえずは良しとしよう。右目に繋いでいた魔術回路を外して、軽い目眩と共に僕はその場を後にした。

はぁ、狙撃とかつて慣れないことはするもんじゃないよね、やつぱり。

- Side out -

「午後からはみんなで軽い模擬戦だね、一夏、覚悟しといてね」

「おう、お手柔らかにな」

式に連れ去られた春佳と別れた一夏とシャルルの二人は、鈴音も合



流するはずのアリーナへと歩いていった。

「鈴とセシリアはもう先にいるんだよな」

「らしいね。あとは……」

「私もちょうど向かおうと思っていたところだ」

「「うわあああつ!?!」」

「……そんなに驚くことが、失礼だぞ」

「お、おう、すまん第」

「「ごめんなさい。いきなりでびっくりしちゃって」

「いや……責めてるわけではないが。」

……と、そうじゃない。アリーナへ行くのだろう。私も部活が終わったので行こうと思ってたのだ。上手くすれば私も参加できそうだな。早く行かないか?」

二人の背後から現れた箒は大きく驚かれ、そして申し訳なさそうに謝る二人にバツの悪そうな顔をした。

これ以上続けたくなかったのか、箒はわざとらしく咳き込むと、アリーナへ視線を向けて話を戻した。

「そうだな、うし、行くか」

「うん」

「ところで、春佳は？」

「春佳なら式さんに拉致られてった。なんでも仕事の話みたいだったな。」

式さんも春佳もご苦労様だよホント」

「そうか。春佳も両儀さんもそんなに忙しいのか」

「仕事内容は知らないけどな。それと箒、本人の前で両儀さんて言うなよ。」

あんま名字で呼ばれるのが好きじゃないらしくてさ。初対面時に俺も両儀さんて呼んだらすげえ目で睨まれた。ホントは式さんて呼ばれるのも嫌らしいし」

だからって春佳ほど気軽にはできないけどな。と一夏は苦笑して、再びアリーナへの道を歩き出した。

気をつける。と箒も頷いて一夏の後を歩いて行く。春佳と式の仕事を知るシャルルがその後ろを苦笑いしながらついて行った。

「？ いやに騒がしいな」

「だな……なんだ？」

「！ 一夏！ あれっ！」

アリーナへ着いた三人は、その中心へと視線を向けた。

そこには三機のISが向かい合っていた。

「鈴！ セシリア！」

ひとまず鈴音達を探そうと客席側に出ていた一夏だが、その姿はすぐに見つかった。

その三機のうち二機の操縦者がそれぞれ鈴音とセシリアだからだ。

相対するは、シュヴァルツェア・レーゲンを駆るラウラ。二対一の状況であることは一夏達もすぐに理解できたが、その優劣はおよそ

理解し難いものだった。

二人の機体は至る所が破損し、ISアーマーの一部は完全に失われている。対するラウラも無傷とまでは行かなくとも、しかし二人に比べれば軽微の損傷であることは確かだった。

「所詮はこんなものか」

「この……くらえっ！」

鈴音のIS、甲龍の両肩が開いた。

甲龍に搭載されている不可視の衝撃砲、龍砲の展開だ。

ラウラもそれを理解してはいるのだろう、視線を両肩に向けたまま、しかし、それでも動くことはしなかった。

「無駄だ、このシュヴァルツェア・レーゲンの停止結界の前ではな」

放たれたはずの衝撃砲は、しかし右手を前に出しただけのラウラに届かない。

バリアの様なモノが張られているのか、不可視の弾丸故にどうなっているのかは誰にもわからないが、ラウラが鈴音の龍砲を防いでいることは確かだった。

「捕捉したぞ」

「!？」

ラウラの肩から放たれた二本のワイヤーが鈴音の足と腕へと絡みつく。

そして、そのままラウラは鈴音へと接近して至近距離から砲弾を放とうとし、

横から放たれたレーザーの狙撃を回避した。

「そう何度もさせませんわ」

「セシリア！」

「ブルー・ティアーズ」

「ふん、理論値最大稼働のブルー・ティアーズならいざ知らず、その程度の仕上がりで第三世代兵器とは笑わせる！」

あろうことか、ラウラはセシリアの操作するビット兵器”ブルー・ティアーズ”がレーザーを放った瞬間に、セシリアへと突撃した。

「なっ……」

「障害物も無しに足を止めるとはな、この暗愚めが」

スターライトから放たれるレーザーを回避し、セシリアの二撃目に合わせるようにワイヤーを振って鈴音をセシリアへと放り投げ、そこへ砲弾を放った。

「じ、のおっ！」

「ほっ……」

砲弾は龍砲によって相殺され、爆煙が広がった。

少しばかり感心したような声と共に、ラウラはその爆煙へと突撃した。

「よく相殺したが、ここまでだな」

「いい加減に……しなさいよッ！」

「甘い、この空間状況でウェイトのある兵器を使うとはな」

龍砲が放たれるより先に、その砲門にラウラの砲弾が直撃、肩パ―

ッごと鈴音を吹き飛ばす。

そして、そのまま追撃をかけようとするラウラだが、その眼前に、青い機体が割り込んだ。

「む」

「この距離なら……っ！」

至近距離からのブルー・ティアーズ……それも”弾道型”<sup>ミサイル</sup>による爆撃。

もはや特攻に近いそれは、セシリアを鈴音の近くへ吹き飛ばしていた。

「無茶するわね、アンタも」

「お互い様ですわ。ですが、これで……」

「言っただろう。停止結界の前では意味がないと」

二人が何か言うよりも、反応するよりも速く煙から二本のワイヤーが鈴音とセシリアへと伸び、その首元に絡み付いた。

「「!!」」

「終わりだな」

そのワイヤーは乱暴に二人をラウラの元へ引き寄せ、そこから先は一方的だった。

身動きの取れない二人の顔を、身体を理不尽に殴り付ける。シールドエネルギーなど残るわけもなく、それは瞬く間に機体維持警告域から操縦者生命危険域へ移行する。

冗談が一切抜きで生命の危機へ陥りかねないその状況になっても、ラウラはただ二人を殴った。

そして、淡々としていたその表情が愉悦の笑みに染まった瞬間、黙っていた一夏の何かが切れた。

「うおおおおッ！」

「一夏!？」

瞬時に白式を展開、零落白夜を解放し、一夏はバリアを切り裂いた。そのまま瞬間加速を用いてラウラへ、接近し、雪片式型を振り上げた。

「その手を止めるッ！」



「はっ、感情のままに突っ走るか。絵に描いたような愚図だな」

ラウラの手が雪片式型に触れるか触れないかの位置で、一夏は止まった。

「な、なんだ？　身体が動かない……っ」

見えない腕に掴まれているかのように、一夏はまったく動かない。否、動けない。

「やはり敵ではないな。この私とシュヴァルツェア・レーゲンの前では貴様も有象無象うしやうむしやうの一つにしか過ぎん。消えろ」

動けない一夏へ向けられた砲身が光を帯びた。

まずい、と感じる一夏にプライベートチャネルが入る。通信先はシャルルだった。

「一夏、離れてっ！」

「シャルル!？」

かろうじて意識を向けた先には、オレンジに染まった機体が一夏の元へ銃器を構えていた。ラウラを凝視し、両手に持った銃器の引金を、躊躇いなく引いた。

凄まじい音と共に弾丸がラウラへと放たれた。弾切れを起こした銃器は即座に切り替えられ、新たな銃器によつて銃撃される。異常な拡張領域を持つシャルルのISならではの戦闘だった。

「チツ、旧世代型が……」

攻撃を妨害されたことと、細かい銃撃による鬱陶しさに舌打ちをしたラウラは、意識を目の前の一夏からシャルルへと切り替えた。その隙に一夏は鈴音とセシリアを連れてラウラから離れ、筈のいる客席付近へと移動した。

「……零落白夜に瞬間加速の最大出力同時展開なんかやつちまったから、仕方ないよな」

「一夏！

俺は大丈夫だよ。二人を頼む。ってなんでこっちに来てるんだよ」

「そうじゃないと介抱できないだろう」

「あー、わかったよ。その代わり近づくなよ」

「わかってる。二人とも大丈夫か？」

「う……」

「無様を……晒しましたわ……」

「あまり喋るなって。そうだ、シャルルは……？」

二人の無事を確認した一夏は、後ろで戦ってるであろうシャルルへと振り返った。

「！　シャルル！」

そこには、ラウラに追い詰められてプラズマ型のブレードで斬りつけられる直前のシャルルの姿があった。

その姿に、考えるよりも速く、織斑一夏は行動した。

エネルギーも考えず、瞬間加速を発動してラウラ目掛けて飛んで行く。ただ、自分の仲間を傷つけ、友人を傷つけようとするラウラへと。

「人の友達に何してんだよ、お前はっ！」

怒声と共に、一夏は雪片式型を横薙ぎに振り抜いた。

一夏が逃げ出したのを確認したシャルルはそのまま意識をラウラに向けた。

だが、ラウラは既にそこにはいなく、

「ふん、戦いの最中に意識を敵から外すとはな」

瞬間加速を用いて、ラウラはシャルルの目の前にいた。拳をシャルルの腹部へと放ち、そのまま後退させる。

「愚かだな。そのような事で代表候補生とは……笑わせる！」

「くっ……」

シャルルの両手には先ほどの銃器。武器を切り替えようにも、至近距離で格闘戦を仕掛けてくるラウラが相手ではその余裕もない。蹴りが顔面へと入り、シャルルは地面に片手をつき、尻餅をつくような体勢となっていた。

「しまっ……」

「終わりだ」

笑みに顔を歪めたラウラが、ブレードを展開する。  
もうダメか、とシャルルが目を瞑った刹那に、怒声が響き渡った。

「人の友達に何してんだよ、お前はっ！」

「むっ」

金属音が鳴り響き、雪片式型とシユヴァルツェア・レーゲンの左手のブレードがぶつかり合う。  
シャルルの目の前に立つ一夏が、強い瞳でラウラを睨みつけていた。

「懲りずにまた来たのか」

「そっだよ、悪いかっ！」

「一夏……」

「シャルル！　大丈夫か？」

シャルルに安否を問う一夏は、それでも視線をラウラから外さない。

「う、うん」

その瞳に、横顔に、シャルルは既視感を感じて、少し前のことを思い出していた。

（兄弟に揃って助けられちゃったな……）

場違いとわかっていてもシャルルはそう思わずにはいられなかった。そして、強い灯ひかりを持つ一夏の瞳から、目を離せなかった。暗い、殺し合いでも愉しいと感じる影のある愉悦の瞳の春佳とは真逆の、真っ直ぐな強い瞳に、どうしようもなく惹かれてしまった。

「で、その程度か？」

「くっ……」

鐔迫り合いをしていたのも束の間。ラウラは一夏を力づくで後退させ、両腕のプラズマブレードで斬りかかった。左右から襲い来る斬撃に、一夏は雪片式型を使って防ぐのが精一杯となっている。

「ふん、口ほどにもないな。今度こそ、消えろ」

左手のブレードで雪片式型をかち上げ、右手のブレードで一夏を切り裂かんと振り上げる。

「一夏！」

「なにっ!？」

一夏を助けようと、シャルルは銃を慌てて構えた。

しかし、それよりも速く、ラウラは一夏へとブレードを振り下ろそうとして、

背後へと振っていた。金属音が鳴り響き、三人の周囲に紙のようなモノが散っていく。

「なに、これ……」

「チツ、次から次へと！」

背後へ振った勢いそのままに、背を向ける形となっていた一夏へ右手のブレードを振り抜くラウラ。

しかし、それは一夏へ届かず、金属音に阻まれていた。

「……これだからガキの相手は困る」

「千冬姉!？」

「お前達、模擬戦は大いに結構だが、バリアを破壊するような戦闘は許容するわけにはいかないぞ。

この決着はトーナメントで決めてもらおうか」

「……教官がそうおっしゃるなら」

突然の介入者だが、それが千冬である以上ラウラに従わない理由はない。

頷いて、彼女はISを解除した。

「二人も、それでいいな？」



「あ、ああ」

「馬鹿者、先生への返事はいだらう」

「は、はい！」

「僕も、それで大丈夫です」

「よろしい。それではトーナメントまで、今後一切の私闘を禁止する」

千冬が手を叩き、騒ぎはこれまでと締めにかかった。

シャルルはそれを確認すると、散った紙を拾い上げる。それは、破った後のある、何かのページらしきものだった。英語で何か書かれている。

「これは……聖書？」

知識を頼りに自国語に訳して行けば、それは聖書の内容だった。

飛んで来たらしい場所を見れば、歩き去る人影が一瞬、シャルルの目に映った。

普通ならばわからないが、まだISを解除していないシャルルは、そのシルエットがよく見えた。

「……そうということなんだね」

あの背格好、髪の毛、おそらく春佳なんだろうと内心で納得し、シャルルはISを解除した。  
同じように、紙を拾った千冬も、シャルルと同じ場所を見上げていた。

- Side 春佳 -

「……あのままやってたら勝ってたわよ」

「まったくですわ」

「あー、はいはい。もう、二人とも強がらない のっ！」

医務室にて、ペシン。と鈴ちゃんとセシリアさんの肩を軽く叩いた。  
ほら、痩せ我慢してる。

「……春佳のいぢわる」

「意地悪で結構。人に心配させるような人にはいい薬です。ISに乗る人だって危ないんだからね?」

「あ、うん……えっと、心配してくれてるの?」

「当たり前でしょ」

……おろ?   なんか鈴ちゃんが俯いてしまった。  
えっと、大丈夫なのかな。

「あら、羨ましいですわね鈴さん。心配してただけて」

「な、ななっ!?!」

「普通なら心配するっつの。頼むから命に関わるような無茶はやめてくれよな」

ポンポンとセシリアさんの頭を叩いて、一夏くんは苦笑した。  
さすが天然女落としと言うか……うん、さすがだね。

「……二人とも、好きな人の前ではかっこつけたいんだよ。はい、烏龍茶と紅茶で大丈夫？」

シャルルがボソツと何かを呟いて入って来た。  
鈴ちゃんとセシリアさんには聞こえたようで、なんかすっごい慌ててる。

「な、ななな何を言ってるかわからないわねっ！  
こ、これだから欧州のやつは……」

「そ、そそそうですわよ。そういうのは邪推と言つものですわ！」

うわぁ、なんか凄い狼狽してるけど、何かあったのかな。

「……一夏、僕先に部屋に戻ってるね」

「あ、おう。わかった」

どことなく不機嫌そうに言って、シャルルは医務室を出て行った。  
……シャルル、怒ってる……？  
いや、怒ってるって言うより、なんか拗ねてる感じだったけど、果たしてなんだったんだろう。

「そついや、あの紙はなんだつたんだろうな」

「紙？」

「ああ。千冬姉が入って来る少し前にボーデヴィツヒに何かが飛んで来て、あいつがそれを弾いたら紙が散つたんだ。あんなISの武装、聞いたことなかったからさ」

「そうなんだ」

ああ、僕の聖穿のことだね。と内心で答えておく。  
ごめんね一夏くん、その使用者はキミの目の前の、キミの双子の弟なんだ。

「えっと、その場にいなかったから何とも言えないかな。  
見てればまた違つたんだろうけど」

「別に大したことでもないし、そこまでしなくてもいいよ」

白々しいまでの僕の嘘に、一夏くんは微笑んだ。  
そうされると申し訳ない気持ちになるんだけど、答えるわけにはいかないからね。ごめんね、一夏くん。

- Side out -

「……はあ」

部屋に戻ったシャルルは、一人盛大なため息を吐いた。  
先ほどの自分の行動を思い出し、肩を落としてベッドに座り込む。

「なんであんな態度をしちゃったんだろ」

あれじゃあ、鈍い一夏でも僕が変だって気づいちゃうよね。  
一夏が気づいたかも。と言う事実には、シャルルの心臓が少し大きく跳ねた。  
顔が熱い。頬が紅潮してるかもしれないと自覚したところで、シャルルは首を大きく横に振った。

「シャワーでも浴びよう。うん、それがいい」

自分の頭を駆け巡るいろいろなものにそれで無理矢理話を終わらせ、シャルルはシャワールームへと向かって行った。

「はあ、春佳のやつも先に医務室を出ちまうし、あの後やたらご機嫌でご機嫌斜めだった鈴とセシリアの相手を俺がすることになるとは思わなかった」

数分後、疲れた様子で一夏は自分の部屋へと入った。

ルームメートを探すもその姿は部屋の中になく、シャワールームから聞こえてくる音からシャワーでも浴びてるのか。と一夏は推測して、そう言えば。とクローゼットを開けた。

「確か、ボディーソープが切れかかってって言ってたよな。  
よし、持ってってやるか」

その中からボディーソープを取り出すと、一夏はシャワールームの扉を開けた。

別段、男同士だし気にしなくてもいいかとノックをせずに開けてしまった。

「……………え？」

「シャルル、ボディーソープ切れそうだって言ってたから持ってきた…………ぞ…………？」

そこには、シャルルによく似た女の子が立っていた。



## 七（後書き）

はい、そんなわけで七梓終わりました。

パソコンからやると楽しいですね。ルビとか自分のイメージ通りになつてると気持ちいいです。

さて、本編ですが……もうどちらがヒロインかだいたいわかつちやいましたよね。

まあここからどうするかは御崎の手腕にかかっているわけですが、残念なモノを見るかのような目でご期待ください（笑）

それにしても三章、まだまだ終わる気配を見せないな……やりおる

ではでは、次回のあとがきでお会いしましょう！

## 八（前書き）

気温が変わりまくってますが、皆さん体調は大丈夫でしょうか。御崎は風邪になりかけてました。いつもより寝る時間を早くして治さなかったら確実に風邪になってましたね。

皆さんも体調にはくれぐれも気をつけてください。

では、始まり始まり。

## 八

「はい、どなた？」

「鈴木です」

「はい、入って平気よ」

蒼崎橙子の部屋に、鈴木は丁寧にドアを開けて入った。後ろ手にドアを閉めて、彼女はため息をついた。少女の表情<sup>かお</sup>から魔術師の表情へと変わり、目の前の魔術師へ視線を向ける。

「織斑くんもいたんだ」

「うん、ちょっと野暮用で」

机に視線を向けたきりの橙子に対し、隣に座っていた春佳は鈴木へと振り返った。

右目には白い眼帯が巻かれている。

「目、どうしたの？」

「メンテナンスだよ。定期的に調整してもらわないと僕の脳にも支障を及ぼすから」

春佳の指差す先には、橙子が眼球らしき玉に何かを施している。あまりいい光景でないのは確かで、鈴木は数秒見つめ、視線を春佳に戻した。

「魔術回路を視神経と繋げてたりするからね、あんまり過ぎると廃人になっちゃうんだよ」

「酷使し過ぎても、だがな。元々人間用に造ったわけではないんだから仕方ないだろう」

「まあね。見えるようにしてもらってるだけ、感謝すべきだよ」

眼帯を人差し指で叩き、苦笑する春佳。それから春佳は左目で鈴木を見上げた。

「鈴木さんはどうしたの？」

「途中報告だよ。幽霊騒ぎも収まり始めてるから、また様子見になるかも」

「そうか。ふむ、慌てふためくかと思つてたのだが」

「向こうの手段の一つなんですよ、結局のところ。もう一個か二個の手段をブチ壊せば慌てると思うよ」

「だいいね。ところでさ、その……」

春佳の言葉に頷いて、鈴木は近くの椅子に座った。それから少し悩むそぶりを見せ、再び口を開いた。

「織斑くん、どうして右目を無くしてしまったの？」

「え？　ああ、うん。単純に巻き込まれたんだ、テロ事件に。女尊男卑に不満を持った男共が起こした事件だったんだけど、運悪く居合わせちゃってね。無差別だったのもあって、こう……グサツと」

「さすがの私も右目から血を流して笑う子供を見た時は何事かと思つたぞ。

化物の子と勘違いしたくらいだ。ほら、終わったぞ」

「あはは、まあ……あれで目覚めちゃったからね。と、ん」

苦笑して、春佳は橙子へと身体を向けて眼帯を外した。  
橙子の手が春佳の右目へと伸び、それを覆い隠す。その手が離れた  
時にはもう、春佳の右目はいつもと同じ目に戻っていた。

「どうだ？」

「大丈夫。ありがと、橙子さん」

「どういたしまして。それと身体の方も問題はないか？」

「大丈夫。すこぶる快調だよ」

「ふむ、それならいい。くれぐれも”行き過ぎる”なよ？  
そうなってしまった場合、私か式の手でお前を殺さないといけなく  
なる」

「わかってます。その為の”彼女”で、僕なんだから。一応、自分  
でも危惧してるから大丈夫」

「……？ 何の話？」

「春佳のことだ。まあ、本人がここまで言うならば大丈夫だろう。身体だったら壊れた部位くらい造ってやれるが、塗り潰された人間性は造ってやれないからな。」

もつとも、お前の場合は人間性が塗り潰されるわけではなく、人間性を保った状態のままアレになるから余計にタチが悪いのだが」

「あはは、人間に擬態した化物ほど面倒なモノはないしね」

「そういうことだ。何においても、アレは面倒この上ない。気をつけておくように」

「ん、わかってるよ」

「……もしかして、織斑くんてかなり危ない人？」

「いや、そこまで危険でもない。今の春佳はせいぜい殺人衝動を抱えている程度だからな。」

「……ふむ、キミも一応は魔術師なのだから説明くらいはしてもいいか」

「そうだね。別に話されて困るモノでもないし。  
あのね鈴木さん。僕はね」

「えっと……」

シャワールームを開けた先には、シャルルによく似た女子が立っていた。

……いや、なんだよこれ。しかもはだ

「こ、これ置いとくな」

「え？ あ、うん」

考えるよりも早く、俺はボディソープを目の前の棚に置いてシャワールームを出て行ったのだった。

「じ、じゃあ俺はこれで……」

そそくさとシャワールームを後にして、俺は椅子に座った。  
ここは俺の部屋……だよな。



「で、さっきのはシャルル……だよな」

でも、シャルルは男のはずで、さっきの子は女の子で……見間違いか？

いや、でもあの胸は

「うわあああつ！」

いかん、思い出しちゃいけない。なんか絶対良くないことがおこる！  
けど、そう思えば思うほど鮮明に……

「だからダメだつて！」

えっと、こういう時は　そうだ、素数を数えよう！　そうすると  
落ち着くらしいとか春佳が言ってたよな。

えっと、一は……違うな。二と三は素数だろ、四はちがくて……」

「……あの、一夏？」

「のわあつ！？」

いきなり後ろから話しかけられて本気でビビった。

そこには、シャルルが立っていた。うん、どこからどう見ても……  
どう、見ても？

「……あの、シャルル」

なんか、胸の辺りに膨らみがあるような気がするの俺の錯覚だろうか。

「えっと、その……」

「まあ、とりあえず座ろうぜ」

シャルルもかなりテンパってるようで、さっきから俯いたきり反応しない。  
なわけで、俺はひとまずシャルルを椅子に座らせることにしたのだ。  
った。

「……」

「……」

……重い。沈黙が凄く重い。

どうしたもんだろつか、お茶でも淹れるべきか。

「お茶でも飲むか？」

「……えっ？ ああ、えっと、うん」

シャルルはシャルルでどうも上の空だったらしい。  
うつむ、どうしようか。

そんなことを思いながら、俺はお茶を淹れに行った。

「……よし。はい、シャルル」

「う、うん。ありが　わっ！」

お茶を淹れて、片方をシャルルに渡そうとしたところでシャルルの  
手が俺の手に軽く触れた。

触れただけで、シャルルはやたらオーバーにリアクションして、お  
茶は俺の手へ

「　　うつわちっ！」

熱い！ マジで熱い！ 淹れたてのお茶はやばいって！  
俺は自分の分のお茶をすぐにテーブルに置いて、水道へと向かった。  
自分の分は溢さなかったんだぜ、凄くないか？

「一夏！？

ごめん！ 大丈夫！？」

シャルルもシャルルで俺の隣まで小走りやって来て、水道で冷やす俺の指を心配そうに見つめていた。

だけならいいんだ。シャルルは俺の腕に何故か抱きつくようなカタチで、俺の手を握っている。その、そんな状態だと、

「シャルル、その……」

「え？」

「あ、当たってるんだが……」

さすがに役得。とか言ってる余裕はない。

けど、こうされるとやっぱりシャルルは女の子なのか、と思わされる。感触とかはさておき。

それはさておき、だからな！

「え？ あ、わっ！」

慌てて俺から離れるシャルル。良かった、伝わってたみたいだ。シャルルは一度俺に背を向けて、それから顔だけこっちに向けた。

「心配したのに……一夏のえっち」

「なあっ!？」

これは不可抗力だ！

と言うか、俺なのか？ 俺が悪いのか？

「……ふふ。ありがとう、一夏。  
ちよつと元気になったよ。

全部、話すね」

「お、おう」

俺の反応にちよつと笑ったシャルルは、ひと足先に椅子に座った。待たせても悪いので、俺も椅子に座ることにする。

「……えっと、どこから話せばいいかな。やっぱり男装の理由、か

な」

「そうだな。どうして男装なんてしてたんだ？」

わざわざ男になる理由なんてないだろう。

シャルルがやつぱり女の子だと再確認すると同時に、俺はその疑問を口に出した。

ボーデヴィツヒと同じで、女子として転校すれば良かったのに。

「それはね、実家の方からそうしろって言われてたんだ」

「実家？」

「うん。僕の父がその社長。

でね、その人からの直接の命令なんだよ」

「命令って、そんな……」

親なんだからもうちよい違う言い方も……と続けようとして、それより先にシャルルはどこか冷めたような笑顔を浮かべた。

「一夏、僕は……愛人の子なんだよ。日本風に言えば妾の子って言

うのかな」

「!?!」

驚いて、絶句せざるを得なかった。愛人とか妾って言葉を聞いて、それでも知らないような世間知らずじゃない。

シャルルがどういう立場にいらかって、両親のいない俺にだってわかる。

「引き取られたのが二年前。ちょうどお母さんが亡くなってね、父の部下が引き取りに来たんだ。それでいろいろ検査するうちにIS適性が高いってわかって、非公式ではあったけれどデュノア社のテストパイロットをすることになってね」

そこまで話して、シャルルはお茶を一口飲んだ。それからどこか自嘲気味に笑って、また口を開く。

「父に会ったのは二回くらい。会話したのは数回くらいかな。普段は別邸で暮らしてるんだけど一度だけ本邸に呼ばれてね。本妻の人に殴られたりもしたんだよ」

酷いよね。って言って笑うシャルルに、俺は何も返せなかった。沸々と込み上げる苛立ちを抑えて、話の続きを聞くことにする。

「それから少し経って、デュノア社は経営危機に陥ったんだ」

「え？」

「まあ、これは話すときから省略して話すけど、簡単な話、フランスは欧州連合の統合防衛計画”イグニツション・プラン”から除名されていてね。現状第二世代のリヴァイヴしかないから、第三世代の開発は急務なの。

資本金で負ける国は最初のアドバンテージを取れないと悲惨なことになるからね。イギリス、ドイツの代表候補生もそれぞれ第三世代機の実稼働データを取るって目的もあるんだと思うよ」

「そう、なのか」

なるほど。確かにセシリアも以前欧州連合についてそんなようなことを言ってた気がする。

代表候補生ってのは、ただその国の代表候補に選ばただけってわけじゃないんだよな。

「話を戻すね。それでデュノア社は第三世代機の開発に躍起になったんだけど、元々第二世代機もかなり遅れてたから、本国からの予算も大幅にカットされちゃって、次のトライアルに間に合わなければ予算は全面カット。IS開発許可も剥奪されるらしいから、僕がこうして来たってわけ」



「それが、どうして男装に繋がるんだ？」

「簡単だよ」

シャルルはそう言って一度言葉を切って、それからどこか苛立ちを含んだような声で続けた。

「広告塔としてと、同じ男子なら二人の男子　とりわけ片方の”世界で唯一ISを使える男子”と接近できる。データも探しやすいでしょ？」

「それは……」

「そう。つまり白式のデータを盗んで来いって命令されたんだよ、僕は」

「……」

自分の中で、何に苛立ってるか明確になってきた。

「まあ、一夏にバレちゃったし僕は本国に強制送還されて、よくて牢屋かな。デユノア社もおしまいだろうね。まあ、そこはどうでもいいけど」

「……」

やたら冷めた時の春佳みたいな口調でシャルルは自嘲して、軽く伸びをした。

「でも、こうして話せてすっきりしたよ。ありがとう、一夏。それと今まで黙っててごめん」

深く頭を下げて、それから俺へ向き直るシャルル。

春佳にも、悪いことしちゃったな。って言って苦笑するその表情かおには、もう諦めの色が宿っていた。

「……それでいいのか？」

「え？」

気づいたら、俺は立ち上がってシャルルの肩を掴んでいた。

「それでいいのか？　いいわけないだろ！  
親がなんだってんだ！　親だからってだけで子供の自由を奪って  
いいわけがあるもんかよ！」

そうだ。シャルルの父親は、まるでシャルルを道具のように扱って、  
それが俺は許せなかった。

そして、言いながら気づいた。俺はシャルルのことだけに対して憤  
ってるわけじゃなくて、これは俺自身のことにも憤ってるんだって。  
そして、そのせいで苦労した千冬姉のことにしてもだ。

「確かに親がいなければ子は生まれて来ないだろうよ。

けどな、親だからって子供の自由を奪っていい権利なんてあつてい  
いはずがない。あつてたまるか！」

「い、一夏………どうしたの？」

戸惑いと怯えの表情で、シャルルが俺を見上げていた。  
完全に頭の頂点まで昇ってた熱が、それで少し冷めていく。

「あ………すまん。悪い」

「うっん、大丈夫。けど、ホントにどうしたの？」

「俺は 俺と春佳と千冬姉は、親に捨てられたから」

「あ」

おそらくは、事前に”両親不在”とでも知らされてたんだろう。何かに納得したような声を出して、シャルルは目を伏せてしまった。

「その、ごめん」

「気にしなくていい。俺の家族は春佳と千冬姉だけだから。両親なんて、今更会いたくもないしな」

春佳なんか、「僕が会ったら殺してしまえそう」なんて笑いながら言っただくらいだったからな。さすがにあの言葉には怒ったけど、それくらいには俺らも憤ってるってわけだ。

「それで、シャルルはどうするんだ？」

「どうするって……僕に選択肢はないよ」

やっぱり、もう諦めちまつてるシャルル。ダメだ。そんなの良くない。

「……なら、ここにいろ」

「え？」

「特記事項第二。本学園における生徒はその在学中においてありとあらゆる国家、組織、団体に帰属しない。本人の同意がない場合、それらの外的介入は基本的に許可されないものとする」

「そうだ、そうだよ。こんなことが書いてあったじゃないか。」

「つまり、この学園にいる間の三年間は無事ってわけだ。それだけ時間があればいろいろ考えられるし、なんとかなる方法だって見つけられるはずだ。別に急ぐ必要もないだろ」

「一夏」

「ん？」

「よく覚えられたね。特記事項って五十五個もあるのに」

「……勤勉なんだよ、俺は」

「そうだね、ふふっ」

そう言つて、シャルルはやつと笑つた。

久々に見たような気さえするその笑顔に安堵して、俺も笑つた。

……いかん、ホツとしたら急にさっきの言葉が恥ずかしく思えてきた。

「一夏、どうしたの？」

「い、いや、なんでも……」

シャルルに声をかけられてそつちを見ればさっき詰め寄るようになつて近くにいたせいか、シャルルが目の前から俺を見上げていた。しかも、若干開いた胸元には谷間が……

……俺は、そそくさと自分の席へ戻つた。

「一夏、ホントにどうしたの？」

「い、いや……」

シャルルは俺の行動に首を傾げ、それから視線の位置を思い出してしまったのか、顔を赤くして、バツと胸元を手で隠すようにした。

「……一夏のえっち」

「うぐ……」

「……やっぱり、気になるの？」

そりゃ、気になる。とは言えない。

なんとも微妙な空気になって、俺が何を言おうか悩んでいたところで、ドアをノックする音が聞こえた。

「「！？」」

「一夏さん。良かったら夕飯を食べに行きませんか？」

セシリアだ。普段ならすぐに関けるドアもちよっと今はまずい。非常にまずい。

「ど、どつじよう」

「と、とりあえず隠れる」

「う、うん。じゃあクローゼットに……」

「なんでクローゼットなんだよ！　ベッドで平気だから」

「あ、そ、そっか」

「一夏さん、入りますわよ？」

「お、おう」

慌ててシャルルをベッドの中に放り込んでさも看病してるかのようにする。これで大丈夫……のはず。

「……どうしたのです？」

「い、いや、シャルルが風邪っぽいらしくてさ。

夕飯だったよな、うし。シャルル、ちよっと思ってくる」



「うん。うん。ほんほん、行ってらっしゃい」

……いや、さすがにその咳はどうよ。セシリアが凄い疑惑の眼差しだぞ？

「そ、そうですね？」

えっと、お大事に。では一夏さん、行きましょう」

まだ若干疑惑の眼差しのセシリアだが、とりあえずは大丈夫だったみたいだ。

俺はセシリアと部屋を後にしたのだった。

「で、だ。セシリア」

「はい？」

「歩きづらいんだが」

廊下に出た俺は、何故かセシリアに腕を絡まれていた。

うん、腕には何か当たってる気がするし（あくまで気がするだけだ！）、歩きづらいことこの上ない。

「な、何をしている！」

「お、箒」

「何って、レディをエスコートするのは殿方の役目ではなくて？」

つい二ヶ月前は男を野蛮な猿とか言っていたのにね。

不思議と、そんな春佳の声が聞こえた気がした。

……現実逃避だな、うん。

「セシリアに夕飯を誘われたんだよ」

「そ、そうか。」

……奇遇だな、私も夕飯に行こうと思っていたんだ」

「あら、箒さん。一日に四食も食べては太りますわよ？」

「四食？」

「なんでもない！

……問題もない。私はその分を運動で燃烧しているからな。

それに、今日もこの後は居合いの鍛錬だ。ほら、実家から送っても

らったのだが」

そう言つて、箒は袋から鞘に入つた刀を見せ、あろうことか抜刀した。隣のセシリアが若干ビビってるっぽいな。というか……

……日本じゃ銃刀法違反だぞ、それ。あ、けどここはどの国にも属さない場所だからいいのか？

いや、けど高一の女子が日本刀を持ってるってどうなんだよ。しかもそんな新しい玩具を貰つた子供みたいにキラキラな目で言つなよ。俺は刀剣には詳しくないぞ。

「そういうのは春佳に言つてくれ、俺は刀剣には詳しくないぞ」

「む、そうか」

そんなに残念そうに言わないでくれ。なんか悪いことした気になる。

「春佳さん、刀剣が好きなんですの？」

「春佳がつて言うか、式さんが好きらしくて気がついたら詳しくなつてたつて。」

式さん、ほぼ無趣味だけど刃物を集めるのが好きだとかで」

「な、なんか危ない方ですわね」

それは……まあ、あんな感じの人だしな。しかもなんかとんでもなく強いとかって話だし。

「と、とにかくだ。私も行くぞ」

そう言っつて、箒は刀をしまつて俺の隣に並んだ。

「……っつて、なんでお前まで腕を絡めて来るんだよ」

「レ、レディをエスコートするのは男の役目なのだろう？」

なるほど、自分をレディと申すか。

「……今、非常に不愉快なことを考えなかったか？」

「いえ、滅相もない」

ただ、そうされると両腕に非常に気まずい感触が……

「？ どうした？」

「どうかしましたか？」

「い、いや、なんでもない。なんでもありません。なんでもねえ、なんでもございません」

バレたら命の危険があるのではないのだろうかと思うと、そう言わずにはいられなかった。

「いいなあ、両手に花ってやつ？」

「私もしたいなあ」

「幼なじみってずるい」

「専用機持ちっでずるい」

「やっぱり春佳くんが狙い目だと思うのよやっぱり」

……なんか周りからもあまり嬉しくない話が聞こえて来る気がする。

軽い公開処刑を受けている中、俺は女子二人をエスコートして（どう考えてもエスコートされて）食堂へと向かったのだった。

- Side 春佳 -

「つまり、織斑くんがお兄さんに全然似てない理由も、私と戦った時にあれだけ傷ついてたにも関わらず平気で動いて来た理由も全部それってこと？」

「そ。織斑春佳は人であり、化物である。なかなかおかしくて、でも正しい意見でしょ？」

「……そうだね、その言葉にすらさっきの意味が含まれてるもんね」

洗いざらい、と言うわけでもないけど僕の秘密を聞いた鈴木さんは、予想よりは平静だった。

まあ、びっくりはしてるみたいだけど。

「僕はこいつの根幹に殺人衝動を抱いているから、壊れてしまった場合の代償は非常に大きくなる。凄いよね、日常を謳歌した分だけ人を殺したくなるって」

「しかも、理性を保ったままだ。理性ある化物なぞ面倒この上ない。気づくのに遅れることもあるからな」

「……蒼崎橙子、あなたも変わり者が好きだね」

「お褒めいただき光栄だ。私自身が変わり者とそこそこには自負しているのな、ある程度は諦めている」

「……ま、こうやって話を聞いて妙に納得する私もおそらく変わり者だろうしね」

「僕の場合、生まれた時からだけどね」

「いいじゃないか、生まれた時から変わり者なんてそうそういないぞ。」

「そついう点においても、お前はやはり式と似ているな」

「けれど、絶対に同じではない。でしょ」

「そついうことだ」

「ふふ、そんなもんだよね。じゃなかったら今頃僕か式が死んでるもの。」

さて、と。お腹も減ってきたし、僕は先に出るね。それじゃ」

苦笑して、僕は橙子さんの部屋を出た。

久々にアレの話をしたからか、ちよつと殺人衝動がする気がする。気のせいだろうね、どうでもいいし。

「そうだ、一夏くん達はもう食べたかな」

まだなら誘って一緒に食べよう。そう思って僕は一夏くんとシャルルの部屋へと向かった。

「一夏くん、シャルル、いる？」

「わっ、は、春佳!？」

部屋をノックするとシャルルの声が聞こえた。  
夕飯、まだ食べてないのかな。



「入っていい？」

「う、うん」

中に入ると、シャルルが一人でベッドの中にいた。  
あれ、一夏くんは？

「シャルル、どうしたの？」

「え、えつと、風邪気味で。一夏は夕飯を食べに行ってるよ」

「そつか。シャルル、大丈夫？」

「うん。一夏に助けてもらったから」

ちよつと顔を赤くして、心から嬉しそうに笑うシャルル。

……なんか、僕の一夏くんフラグセンサーがビビッと来たんだけど、  
そんな、まさかね。シャルルは男の子なんだし、そんなうちの学園  
の一部女子が喜びそうな展開にはなったりしないよね……？  
まあ、なっいたらなっただけ仕方ないかもしれないけど。

「そう言えば、春佳」

「うん？」

「今日のアリーナでの出来事だけど、最後にラウラ・ボーデヴィッヒを攻撃したのって春佳だね？」

「……………え？」

……………待て待て待て。僕はあの時認識障害の魔術を張ってたはず。

「ど、どうしてかな」

「どうしてって、春佳っぽいシルエットが見えたから」

……………シルエット？

僕の姿を完璧に見たわけではないみたい。ってことはまさか。

「シャルル、その僕のシルエットを見た時にさ、”もしかして僕が何かした”とか思ったりした？」

「えっと、うん。何か紙が散るなんてIS兵器が考えられないし、

そういう不思議なことは春佳がやったのかな、とは思ったよ」

「……やっぱりか」

「どうしたの？」

「いやね、僕は自分に認識障害の魔術をかけてたんだよ。

周りから極端に認識されなくなるって魔術なんだ。普通、魔術なんて信じないし、あの時はみんなアリーナを見てたから。けれど、シャルルみたいに僕が魔術師であると知ってて、かつそうやって僕を疑える人は僕をある程度認識できてしまうんだ。

魔術自体、誰も注意なんかしないだろうってかなり軽くかけたしね」

それでも、シャルル以外には気づかれてないと思うけど。

ふむ、もっと注意しとく必要があるな。ホントに橙子さん二号になりかねない。

「まだまだ甘いかな、僕も」

「何か言った？」

「なんでもない、こつちの話だよ。

さて、シャルルが風邪気味ならあまり長居しても悪いかな。

僕も夕飯を食べに行ってくるよ。それじゃシャルル、お大事にね」

「うん。またね」

シャルルに片手をあげて、僕は部屋を後にした。

実のところ結構お腹が減ってるので、今度は寄り道せずに食堂に行こう。うん、それがいい。

- Side out -

「た、ただいま……」

「おかえり。って大丈夫？　なんか疲れてるみたいだけど」

「あ、ああ、とりあえずは。……春佳のやつ、覚えておけよ」

「あ、あはは……」

あれから春佳が何かしたんだ。とシャルルは乾いた笑い声で笑った。おそらくは一夏と女の子絡みかな、と推測して、少しばかり嫉妬し

てしまう。

「それより、焼魚定食持って来たぞ」

「あ、うん。ありがとう」

ベッドから出て、一夏がテーブルに置いた焼魚定食の前に向かう。

「……う」

焼魚定食は言わずもがな、和風だ。

つまり、食べる為の手段はもちろん箸であり、シャルルはそれに苦悶の表情を浮かべた。しかし、せっかく一夏が持って来てくれたのだ。食べないという選択肢は彼女にはない。

「い、いただきます」

不器用に割り箸を割り、シャルルは茶碗を片手にご飯を……取るうとした。

取るうという努力もしている。が、ご飯は一向に取れる気配がなかった。

「シャルル、どうしたんだ？  
……あ、もしかして……」

心配そうに自分を見る一夏が、シャルルが苦戦する理由に気づいたのだろう。

言われると恥ずかしいので、シャルルは先に言うことにした。

「練習は、してるんだけどね」

「そうだよな……よし、ちょっと待っててくれ。スプーンでいいかな？」

「え？ そんな、悪いよ」

「いいんだって。」

シャルルは遠慮し過ぎだ。俺達は友達なんだし、少しは甘えてくれた方がむしろ嬉しいぞ。

俺は、シャルルの家のことも含めてシャルルの味方だからな」

「うん、ありがとう。一夏。  
じゃあ、甘えさせてもらおうかな」

「おう。スプーンで」

「えっとね、一夏が食べさせて？」

「……は？」

シャルルの言葉に、一夏は固まった。

シャルルの脳内に浮かんだのは、いつかの昼食のこと。一夏にあらんをしていた筈の姿だった。

「ダメ、かな」

「……甘えていいって言ったのは俺だからな、シャルルがいいならいいぞ」

首を傾げ、上目遣いで自分を見つめるシャルルに押され、少しばかり悩みこそしたが言ったことは守るのが男と言うもの。

一夏は笑顔で頷き、シャルルから箸を受け取った。それで魚を小さく切り、丁寧に手を添えてシャルルの口元へ持っていく。

「あ、あーん」

「あーん」

緊張の一瞬。焼魚が、シャルルの口に放り込まれた。

「ど、どうだ？」

「うん、美味しい。えっと、次もお願いしていい？」

「お、おう！     どんどん来い！」

開き直ったように言う一夏に、シャルルは小さく声に出して笑った。  
今日くらいは、いいよね。  
誰に言うでもなく、シャルルは再び一夏を見上げた。

「じゃあ、これをお願いしてもいいかな」

「おう。任せろ」

「ふふ、ありがとう」

「気にすんなって」



言って、二人はお互いに笑った。

そして、この「あーん」はシャルルが食べ終えるまで続いていた。

## 八（後書き）

アニメにて、この場面で果たして何人の豚がシャルルに落とされたのであるうか。

御崎もその中の一人であるのは秘密

そんなわけで三章の八、更新です。なんか三章は全体的に重く感じるけど、気のせいですよ！

正直、シャルルを可愛く書けてるか不安で仕方ないです。

と言うか、原作とも展開の順序がいろいろ違ってた……

まあ、細かいことは気にしない！

それと、感想でも言われた春佳のシルエットのことでありますが、誰も突っ込まないだろうとここでこっそり認識障害の伏線回収とかしようとしてたら真っ先に突っ込まれていたと言う……

皆さん鋭すぎです（汗）

さて、次回はトーナメント目前。

各々は何を考え、どう動くのか。そんな話の予定ですのでよろしく願います。

では、次回のあとがきでまた会いましょう！

## 九（前書き）

長らくお待ちせしました。そんなわけでその九です。

では、始まり始まり。

## 九

ラウラ・ボーデヴィツヒは暗い闇の中にいた。

少女はそれが自分が眠っている時に見る光景であるとわかっている。

……これが夢と言うのなら、なんともくだらない。

内心で毒を吐いて、ラウラはいつもと同じように座り込んだ。膝を抱え、まるで身を隠すかのように闇の中へ融けていく。

ラウラ・ボーデヴィツヒ。それは、自分の名であり、同時に何も価値のないもの。

少女は自分の名をそういうものだとして理解している。唯一の例外を除き。

「教官……」

自分が憧れを抱く唯一の人間。織斑千冬にその名を呼ばれる時だけは、この名に暖かみを感じられた。

「あの人の強さが、私の目標であり、存在理由」

少女はその強さに、力に、一目見た時から心を奪われた。そして、願った。

こうなりたいと。これに、私はなりたいと。

その時から、虚無感に包まれていたラウラの人生は変わった。たった一つの目標の為に、全てをつぎ込もうとした。

自らの師であり、理想の姿であり、絶対的な力。  
自分を重ね合わせてみたいと思った、たった一人の姿。  
故に、それが完璧でないことが許せない。

「織斑一夏、織斑春佳……」

教官に、唯一の汚点を残した張本人達。  
ラウラに、それを許せるはずがなかった。  
特に、織斑春佳は。

お前は千冬姉じゃないんだから。

「っ……何もわかっていないやつが」

ISにすら乗れず、その癖に偉そうに話す男を思い出し、ラウラは  
拳を握った。

「……私は、絶対に許さない」

唯一の光にすぎるあまり、少女は気づかない。  
それが仮初めの光であることも。結局のところ、やはり自分が虚無  
から抜け出せていないことも。

- Side 春佳 -

「ふああ……」

あくびを隠しもせずに、僕は食堂へ向かって廊下を歩いていた。  
一夏くん達も誘おうとしたところ、なんか物凄い勢いで先に行けと言われた。  
もしかして嫌われてる？

「だとしたらショックだなあ」

わりと冗談抜きで。  
まあ、多分そんなことはないと思うけど。

「……織斑、春佳」

「うん？」

ピシリ、とうなじが少しばかり疼いた。  
気持ちいいくらいの敵意に、僕は誰だか大体予想して、振り返った。

「名前は覚えてくれたみたいで何より。  
おはよう、ボーデヴィツヒさん」

ほら、その主はやっぱりラウラ・ボーデヴィツヒだった。  
僕にこんな敵意をぶつける人なんてここじゃほとんどいないだろう  
しね。

「……ふん」

片方の目が僕を睨み付ける。悪いけど、それでも直死の魔眼と真正  
面から戦ったことだってあるんだ、それくらいの眼力じゃ退かない  
よ？

とも言えず、何も知らない風を装って首を傾げた。

「何か、用かな。まさか親の仇みたいに名前を呼んだだけ、とかじ  
やないよね」

「……ふん」

……笑われた。不快感を通り越していつそ清々しくなるくらいバカ  
にしたように笑われた。

「お友達もお前の兄も、ずいぶん弱いものだな。私一人に勝てないとは」

「あー、みたいだね。まあ、実は僕も見ていたんだけど。うん、ボ―デヴィツヒさんは強く見えたよ？」

ムカムカした分は昨日顔面に聖穿を叩き込んですつきりしたし、僕としてはむしろこの人には軽く同情すらしてしまう。

痛めつけることに狂喜してた頃の僕になんか似てる気がするから。

「けど、果たして次も上手く行くのかな。決着はついていないし、一夏くんは強くなるのがとても早いからね」

「ふん、ごっこ遊びのような感覚の人間に私は負けん」

「あれをごっこ遊びって言えるなら、キミじゃ絶対勝てないかな」

「なに？」

「一人でも大丈夫、くらいで思ってるのかな。残念ながら、一人つてのは限界が近いんだよね。これ、経験者談」



橙子さんと出会って、”手段”を手に入れた僕は壊れる一歩手前まで暴走した。

式に会って、”彼女”を造るって方法を考えなかったらどうなってたかわからない。

ううん、たぶん、壊れてた。

「結局のところ、僕は必ず誰かに助けられてるんだ。一人でどうにかなって、絶対にできやしない」

千冬姉の教え子なら、それくらいわかりそうなもんだけど。

千冬姉って存在が、違う方向にでも働いちゃったかな。

「白純理緒における両儀式のような？

いや、アレはまた違うか。アレはアレで被害者でもある。荒耶が何もしなければ哀れな殺人犯で済んだのにね」

ひとりごちて、ロクな例えがないなと苦笑した。

ボーデヴィツヒさんは、そんな僕を怪訝そうに睨んでいて、そちらにも苦笑してしまう。

「私が、お前の兄程度に負けると言いたいのか？」

「そうだよ。少なくとも一夏くんを程度。って切って捨てれるような人じゃ絶対に。千冬姉だって一夏くんを相手にしてもそんなはずれな余裕を持たないもの」

それは余裕じゃなくて、慢心。

足元を掬われるのなんか、いつだって一瞬だ。

僕は足元を掬う側の人間だけど、そうやって地べたを這うことになったやつらを、それなりには見てるつもりだし。

「千冬姉にそういうことを言われなかったかな」

「っ……貴様が教官のことを」

「言うよ。僕から言わせれば千冬姉だって悪いんだ。僕や一夏くんはどこで働いてくれるかくらい言ってくれても良かったと思うんだよね」

僕もあまり人のこと言えたもんじゃないけどね。けどそれとこれとは話が別だからいいかな。

「ま、心配かけまいとしていたのかもしれないけどね。まったく、うちの兄と姉はいい人過ぎて困るよ、ホント。と、脱線しちゃったね」

敵意の薄れない視線が僕を睨んだままだ。別にシカトして行ってもいいのにボーデヴィツヒさんはまだ目の前に立っていた。

「三人しかいない家族だからさ、できれば大目に見て欲しいかな。じゃ、ご飯食べたいから、またね」

かと言って自分から話すこともないので、僕は食堂へ向かうことにした。

しかしまあ、昔の自分を見るような感じと言うか。僕はあそこまで上から目線ではなかったけど、それなりに調子に乗ってたからね。

「僕が身内って分類した以外の人間は、全て僕のストレス解消道具くらいにしか思ってたからなあ。よく殺人衝動に吞まれなかったよ」

ひとりごちて、食堂へ向かって行く。  
一人での朝食とか、久しぶりだなあなんて思いながら。

「おはよう、織斑くん」

「おはよ、鈴木さん」

「今日は一人なんだ」

「うん。一夏くん達は忙しいみたいで、他の人とは会えなくて。たまには悪くないかな、こういうのも」

向かい側に座る鈴木さんに醤油を渡して僕はお茶を飲んだ。  
なんで醤油を渡したか？ 答えは簡単。鈴木さんのおぼんに豆腐が乗ってたからね。

「ありがとう」

「いえいえ」

醤油を豆腐にかけてパクリと一口。

咀嚼して、鈴木さんは僕に視線を向けた。

「ところで、織斑くんのその眼つてどこまで視れるの？

蒼崎橙子の話では理解しうるモノなら概念でも魔術でもって言うだけだ」

「それで間違っ  
てないよ。極論を述べると死ぬ  
ってことを理解すれば直死の魔眼  
みたいなこともできるからね。」

もつとも、その時はもう僕は  
この世にはいられないけど」

「死を理解すればってことだから  
……えっと、臨死体験でもダメな  
の？」

「結局は死んでないからね。死を  
理解するってのは脳が停止する直  
前と言ってもいいよ。」

だから、普通は無理なの。死な  
なきゃ理解できないんだから」

式は例外中の例外だ。生粋の化  
物はさすがに違うよね。

僕みたいな人間ばけものとは造りが違  
うんだもの。」

「それと、魔法も無理だし魔法  
に限りなく近い魔術も無理。  
理解する前に僕が壊れるからね。  
けれど幽霊とか有名な魔物……  
そ  
うだね、狼男とかそういう感じ  
の。アレらに関しては弱点とか  
視れるし、魔術も理解できる範  
囲なら形成時点で収束がわかる  
から、先  
手を取ることは可能だよ」

「それは目の前でやられたから  
大丈夫。確かにあれは相手にす  
ると厄介だね」

「でしょ？      でもさ、一個  
くらいこういう”ズルいモノ”  
を持つ

てないとやってけないでしょ？」

「……確かにね」

僕らのいる世界に、本来ズルいなんて言葉は当てはまらない。だって、それを言ったらみんなズルいからね。橙子さんや式なんてその最たるモノの一つだろう。僕自身だって、普通の人に比べればよっぽどズルい。

「そういえば……あそこはどうしてあんなに賑やかなの？」

「ああ、織斑くんのお兄さんとかデュノアくんがいるところだね。多分、あれかな」

「あれ？」

「来週のトーナメント、タッグマッチになったんだよ。今日寮の掲示板に貼り出されてたんだけど見てない？」

「うん」

朝からボーデヴィツヒさんに遭遇しちゃったし、そもそも掲示板を

見る習慣がないから残念ながら見ていない。

しかし……なるほどね、タッグマッチになったのか。

「だから一夏くとシャルルは大人気なわけだ」

「そういうこと。織斑くんはIS乗れなくて良かったね」

「え、なんで？」

「……自分が男だって、ちゃんと自覚してる？」

「してるよ」

例えば僕がISに乗れたとしても、あそこまで行列はできないと思うけど。

「……この朴念人」

「む、それは僕じゃなくて一夏くんだよ」

「どっちも同じ。双子揃って朴念人」

呆れたように言って、鈴木さんはご飯をパクリと食べた。  
……一夏くんはともかく、僕まで朴念人扱いとは、ちよつと酷いかな。

「で、結局男子二人が組むことになったんだ？」

「ああ。お互いそつちのが楽しさ、さすがにあんな詰め寄られるのは勘弁だ」

「あ、あはは……ごめんね、一夏」

「気にすんなって」

ふむふむ、予想通りと言うか……男二人しかいないんだからそんなもんだよね。

箒ちゃん、ドンマイ。

ちなみに、セシリアさんと鈴ちゃんはISの損傷が激しいので今回のトーナメントには不参加となっています。



「ま、今回はボーデヴィツヒさんと決着とかも着けなきゃだし、少なくともそこまでは勝ち上がらないとね」

「だな。と言うかさ、なんかいろいろ邪魔が入って勝つ勝たない以前になることが多い気がする」

「それは間違いないかも」

何か陰謀みたいなものを感じずにはいられない。  
鈴木さんの話ではあの時の無人機は一切関係がなく、たまたま無人機による襲撃でチャンスが来ただけらしいけど。

「ちなみにお兄ちゃん、勝算は？」

「……プランBだな」

「んなもんじゃないよね」

つまり、現在は無策か。と言うかこのネタは僕と一夏くんと弾くんしか知らないよねたぶん。

ほら、シャルルだって首を傾げてる。

「い、いや、あるぞ！　この一週間みっちりシャルルと練習する！」

「えっと……それは計画プランでも作戦でもないかな」

「うぐ……」

「ま、まあまあ、事実、小細工が通じる相手でもないんだし」

「そ、そうだぞ。シャルルの言う通りだ」

「まあ、そうだけど」

シャルルのフォローを得て攻勢に出て来る我が兄貴にため息を吐いて、けど間違いないので賛同する。

「タッグマッチだし、確かに一週間連携とかも込みで練習すれば行けるかもしれないね。どうせ向こうは連携も何もないだろうから」

「おう。だからシャルル、これから一週間はよろしくな。一人じゃキツくっても二人でやれば勝てるって」

「二人でなら……うん！」

「……」

おおう、一夏くんあんなこと言っただけで恥ずかしくないのかな。

あと昨日も思ったけど、やっぱりシャルルの一夏くんに対する反応が変な気がする。

や、別にいいけどね。うちの兄貴は男にも女にもモテるような人ってのは前からわかってるから。

「でも二人とも、気を逸らせるのは構わないけど、まずは授業を乗り越えないとダメだよ？  
初っぱなから千冬姉の授業なんだからさ」

ね？ と二人にウインクをして、僕はカバンから自分の勉強道具を取り出したのだった。

- Side 一夏 -

「ふう、疲れた」

「うん、お疲れ様」

「おう、シャルルもな」

放課後の訓練を終えた俺は、部屋に着いて一息ついた。

あれから考えたけど、やっぱりラウラ・ボーデヴィツヒの攻略法はタッグマッチであることを有効活用する他になさそうだ。

そんなわけで、訓練もシャルルとのコンビネーションが主で、どんな時にどう動くかとか、そういう練習をすることにした。その過程でももちろん俺も普通の練習はしてるけど。

「あいつとの戦いになったら、注意すべきはあの停止境界ってやつだよな」

「うん。アレは恐ろしいね。一夏の零落白夜みたいにはっとけば自滅するようなりスクがあるわけでもないし。

こればかりは正々堂々と正面から！　なんて言ってられないよ」

「だな。それにISは全方位をカバーしてるんだ、あまり関係ないさ。

でも、極力二対一に持ち込みたいから、まずは……」

「うん、相方を最速で撃墜<sup>お</sup>とす。さすがにそう何人も専用機持ちも

いないし、量産機相手なら機体的にも僕が思いっきり攻めれば行けると思う。

だから、その間一夏は――

「あいつの相手をしろってことか」

「うん。大丈夫かな」

「当たり前だろ。相棒の信頼くらい応えてみせるよ」

せめてそれくらいのことはやってみせないとな。シャルルにおんぶに抱っこはさすがに恥ずかしい。

「ありがとう、一夏」

「当たり前だろ。相棒」

お、なんか今上手く決まったんじゃないだろうか。相棒とか一度でいいから言ってみたかったんだよな。

「一夏……ありがとう」

少し顔を赤らめて、シャルルは微笑んだ。

う……やっぱりつい最近まで男だと思ってたせいか、やっぱりこういう女っぽい反応されるとなんか気恥ずかしい。

「お、おう」

「……ふふ、さてと、着替えないとだね」

「ん、じゃあ俺は外出てるな」

「え？」

「いや、だってさすがに悪いだろ」

男だと思ってたときならともかく、さすがに女だってわかってるのに同じ場所にいるのはまずいだろう。

そんな意味とかを含めて言っただつたのだが、シャルルはなんでかムツとしたような顔で俺を見上げていた。

「でも、一夏だつて着替えたいでしょ？」

「まあ、それはそうだけど……  
よし、それじゃあ洗面所で着替えてくるよ」

「それじゃあ一夏に悪いよ。ほら、お互いに背を向けてれば大丈夫でしょ？」

「お、おう」

そこまで言われるともう何も言えないので、着替えを持ってシャルルに背を向けることにする。

「……」

「……」

服が擦れる音だけが部屋の中に響く。会話が無いせいで妙によく聞こえてくるせいかな……ええい！ 煩惱退散！  
くそ、俺が十代男子だったことをみんな忘れてるんじゃないか？

「わっ……きゃあっ！」

「シャルル!？」

ここの誰にも言えないような苦悩に悶えていると、後ろからとても男には聞こえない（事実女だけど）声と何かが床に倒れるような声が聞こえた。

慌てて振り返って、それから俺は絶句した。

シャルルが、その……ズボンが半脱げ状態で前のめりになっていた。たぶん

「い、一夏！？ み、見ないで！」

「わ、わかってる！ けど大丈夫か！？」

「大丈夫だから！ あっち向いてて！」

「お、おう。

……のわっ！？」

極力そちらを見ないようにして、また背を向けようとしたところ、俺は何かに躓いて盛大に転倒した。

……痛い。かなり痛い。床が絨毯仕様で良かった。

「てて……」



痛みが和らいできたのでゆっくり目を開けると、そこにはシャルルの足があった。うん、生足だ。

……………え？

「ま、まさか……………」

この先は、もしかして…………

「い……………」

「え？」

「い、一夏のえっち！」

ガン！ と鈍い音と共に同じく鈍い痛みが俺の顎を襲って、俺の顔はアッパーをくらったボクサーよろしく、カチ上げられていた。

…………意識が黒に染まる直前、俺の視界には何か黄色い衣服のようなモノが見えた気が、した。

- side シャルル -

「……まったくもう」

一夏の顎を力カトで思い切り蹴り上げてしまった僕は、ひとまず着替えてから絶賛意識不明の一夏をベッドに運んで横たわらせていた。全力で蹴った僕も良くないけど、一夏も一夏だ。狙ってないってわかるから余計に酷いし、なんか悔しくなってしまう。他の人もこんな感じなのかな。

「……ふふ」

でも、不思議と悪い気はしなかった。

蹴ったのはともかく、こうして一夏を眺めてることも、それを客観的に考えてる自分も。

つい最近まで、まるで考えられないことだった。

「それもこれも、一夏のおかげだよ。ありがとうね、一夏」

そつと額にキスをする。

一夏も起きてないし、他に誰もいないのに恥ずかしい。頬に熱が集まるのがわかる。

けど、やっぱり嫌な気がしなかった。むしろ心地いい気さえする。

「ふふ、頑張ろうね」

だから、これは僕からの恩返しでもある。一夏をラウラ・ボーデヴ  
イツヒに勝たせてあげたい。

秘策のようなものは一応考えてある。けどまだ足りない。

あの停止結界を止めて、本人をどうにかしないといけない。どうす  
れば……

「……そうだ！」

ふと、一人の友達が頭に浮かんだ。生身とはいえ、今の僕が知る中  
で一番”戦い慣れてる人”。

彼ならどうするだろう。何か参考になるかもしれない。

そう思った僕は、すぐに部屋を出て行った。

「はい」

隣の部屋のドアを叩くと、春佳の声が返ってきた。良かった、いる  
みたい。

「春佳、僕だよ」

「シャルル？ ちょっと待って」

少しして、ドアが開いた。春佳は僕を見て、それから周りを見回した。一夏を探してるのかな。

「僕だけだよ」

「あ、そうなの？ どうしたのさ」

「ちょっと相談したいことがあって」

「ん、じゃあ中に入って」

言われるがままに中に入って、春佳に言われた席に座る。

しばらくして春佳がコーヒーを両手にやってきて、僕の向かいに座った。

「ありがとう」

「いえいえ。ふむ、シャルルならいいかな」

「え？」

僕が聞き返すより早く、春佳は自分の机から何かを持って来た。  
えっと……本のカバーと、紙？

「春佳、それって？」

「ああ、うん。これは僕の武器だよ」

「武器？」

この、紙と本のカバーが？

「今は設計途中なんだよ。もうページはできてるから、あとは本の形にするだけ」

「本が春佳の武器なの？」

「まあね。最近はポケット聖書を使ってたんだけど全部破り切っちゃったし、せつかくだから本来の武装を造ろうかと思って」

「それが、その本？」

「そう。イミテーション・バイブル模造原典。当たり前だけど、あらゆる聖書や歴史書の原典でね、今世間に出回ってるような聖書とかより遥かに神性が高いんだ。で、これらはその模造品。僕お手製のね」

「ってことは、春佳の手作りなの？」

「そだよ。ちゃんと魔術を使って中身も全部手書きで書いてるんだ。ふふ、模造品とはいえ原典だからね、まず単純に魔術の威力が上がるよ？」

「そ、そうなんだ」

よくわからないけど、春佳にとっては必要なモノなのはわかった。けど凄いね春佳は。あれだけのページを全部手書きで書いてたんだから。

「あと仕上げだけだから、相談はこれをしてしながら聞いてもいい？」

「あ、うん。いいよ」

「ありがとう。んで、相談って?」

「えっと……もし春佳だったらどうやってラウラ・ボーデヴィツヒと戦うかな」

「……はい?」

あ、春佳が固まった。

……なんかバカを見るような目でこっちを見てる気がする。

「え、えっとね、一夏を勝たせてあげたいんだ。秘策も考えてはあ  
るんだけど、何かモノ足りない気がして。それと、接近戦とか、ど  
う挑もうかも悩んでて」

「なるほどね。」

けど、僕はISに乗れないよ?」

「うん。だけど参考にしたいくて」

あの時の僕を助けてくれた春佳はとても強く見えた。実際、生身の  
身体なら僕より強いと思う。だから、春佳なら……

僕の意図を理解したのか、春佳は「うーん」と呻いて、それから「ヒーを一口飲んだ。」

「スイッチの入れ方とかは式に教えてもらったりしたけどそういうのじゃないしなあ……  
あのねシャルル。僕ってかなり適当に戦ってるんだ」

「……え？」

「そりゃ、戦況とかそういうのはしっかり把握して戦ってるけど、攻撃の仕方とかはかなり適当かな。  
視界に入った相手の身体の部位で、どこが一番死にそうな場所か咄嗟に見つけて攻撃してるだけだから。」

あとは無駄な動きを極力しないようにしてるだけ。　こうしたら死にそう　とか、　こうしたらダメージが大きそう　程度の間隔だよ」

「……」

思わず絶句してしまった。なにそれ、そんな適当であんな幽霊みたいなのを簡単に倒してたの？

……さすが織斑先生の弟さん。一夏の成長度合いも凄いけど、春佳の戦闘に関するセンスも相当な気がする。

あ、それは当たり前か。両儀さんて人もだけど、およそ常人にはできないような速さで動いてたし。失礼だけど、本当に人間なのかな。



「……シャルル、今とても失礼なことを考えなかった？」

「そ、そんなことないよ」

……顔に出ちゃってたみたい。ごめんなさい、春佳。

「……まあいいや。けど、そうだねえ……あらかじめ対策を立てるならしつかりデータを見るのは大事だと思うよ。」

例えば、あの停止結界だっけ？ あれなんかの弱点を探すとかさ。

僕的には、あんな反則チートがノーリスクとは思えないんだよね。魔術であんなことするなら確実に他に意識が向かわないし、集中力が散漫になったらすぐに崩れそうな気がするよ」

「なるほど」

確かに、あの時も僕が攻撃したら一夏を停止させていた結界は解除されたみたいだし、調べてみよう。

「あとは、こっちがデータにない攻撃をするとかね。近接しか攻撃がない一夏くんが射撃とかしたら面白そうかも」

なるほど、そういう方法もあったんだ。一夏が射撃とか、かあ。う

ん、あとで話し合ってみよう。

「と、まあこんな感じかな。大したアドバイスになってなくてごめんね」

「ううん。ありがとう、春佳」

「いえいえ。よし、こっちも終わりっ」と

僕に話しながらずっと作業をしていた春佳は、右手に本を持っていた。これが春佳の武器になるんだ……  
魔術って不思議だ。

「じゃあ、僕は部屋に戻るね」

「うん。頑張ってね」

「もちろん。本当にありがとう、春佳」

「お気になさらずー。  
うん、いい出来だ」

自分の本に満足してるのか、本を眺めてにつこり笑顔の春佳。僕も  
そんな彼に笑って、それから部屋を後にしたのだった。  
……よし、あと少しの期間、頑張らないと！

## 九（後書き）

携帯からI p h o n eに変えたらいろいろ使い方がわからなくて、結果投稿が遅れてしまい申し訳ありませんでした。

そんなわけで最新話です。

今回は春佳の主武装がチラリと出たり、まあ三章最後の日常パートです。一夏めえええっ！ ってなってくれば幸いです

ではでは、また次回のあとがきでお会いしましょう！ あでゅー！

## 十（前書き）

暑いですが、皆さん体調管理などは大丈夫でしょうか？

突然熱中症でしたっけ？

いきなりボタンキューとなってしまうらしいので無理はせず、しっかりと睡眠時間を取ってくださいな。

では、始まり始まり。

十

「ついに来たな」

「……うん」

俺とシャルルは一緒に掲示板の前に立っていた。  
言わずもがな。今日は学年別”タッグ”トーナメントの日だ。

「一夏、わかってるよね？」

「おう」

あれから一週間、ずっとシャルルと練習したんだ。絶対とまでは行かなくても自信はある。簡単には負けない。

「と言うか、勝つ気だからな」

「？ 一夏、何か言った？」

「いや、独り言だよ。それよりシャルル、準備はいいか？」

「うん。頑張ろうね、一夏」

「おう」

お互いに頷き合って、俺達はトーナメント表の書かれた掲示板へと向かったのだった。

- s i d e    春佳 -

「……これはこれは」

掲示板の前で、僕は一人笑みを浮かべた。一回転戦のその初戦。記念すべき最初の対戦が、当事者にとっては決勝戦みたいなものだからだ。他人事のように言ってるけど、僕だってその一人だったりしないこともないので、余計に笑いが止まらない。だって、

「一回戦……織斑一夏、シャルル・デュノアとラウラ・ボーデヴィツヒ、篠ノ之箒……ねえ」

多分、あちらは幹旋だったんだろう。箒ちゃんには悪いけど、ちょ

うと良かった。少なくとも、一夏くん達がネタを晒す前で、しかもお互い万全の状態で戦える。

「まるで、誰かに仕組まれたみたいだね、そんな気がしない？」

「……ふん、好都合だ。私と当たる前に負けられる可能性もこれになくなったのだから」

横で僕を睨むボーデヴィツヒさんに笑って、僕はそちらへ顔を向けた。

「最初に言っておくけど、今のあの二人は強いよ？  
”ごっこ遊び”だなんてまだバカにしてるようなら、マジで負けると思うから」

「ふん、万に一つもありえないな」

「……そ」

ボーデヴィツヒさんの僕を見る目が少し険しくなった。いけないけない、ちょっと冷めてたみたいだ。  
だって仕方ないでしょ、この人、セシリアさんと違って本気で慢心



してるんだから。ホントに千冬姉の教え子なのか聞きたくなりそう  
なくらいだ。

「ま、ここから先は僕は蚊帳の外だからね。  
客席から見させてもらっよ」

片手をあげて、僕はアリーナへと向かった。  
ここから先は神のみぞ知る。ってね。

「あ、春佳！ こっちこっち！」

アリーナに入るなり、鈴ちゃんが僕にブンブンと手を振ってきた。  
一人で見える気もなければ誰かとする約束をしていたわけでもないの  
で、素直に鈴ちゃんの隣に行くことにする。

「セシリアさんもいたんだね」

「ええ。にしても、一回戦からとは……」

「宿命か、運命か、それとも何かの企みかってね。」

なんであれ、一夏くとシャルル、ボーデヴィツヒさんには都合が  
いいでしょ。箒ちゃんには申し訳ないけど」

あとでコーヒーでも奢ろうかな。

巻き込まただけなのに、まさかの一夏くんと試合だとは……

「春佳さんはこの勝負、どう思います?」

「一夏くん達が勝つよ」

「珍しいわね、春佳が断言するなんて」

「まあね。でも、ボーデヴィツヒさんは一夏くんに絶対勝てると思  
ってる。だから負けるよ」

「? どういう意味ですか?」

「絶対には負けない」って思って戦うのと、絶対には勝てる」って  
思って戦うのは同じようで違うんだ。負けないように戦うるのは  
例え優位でも最後まで油断がない。けど、勝てると思って戦うのは、  
勝つことよりも更に違う。行き過ぎてるんだよ。いわゆる慢心  
とか、自信過剰とか言われてるアレに分類されるの。ボーデヴィツ  
ヒさんは確かに強いよ。あの自信も実力に伴ってるんだと思う。で

もね、

所詮は独りよがりの強さなんだよ。だから、無理だね」

「なるほどねー。」

「なんか、ずいぶん詳しいじゃない」

「そうかな」

「そうですわね。まるで戦い慣れているかのような……」

「き、気のせいだよ」

「危ない危ない。調子に乗り過ぎた。と言うか、二人ともISに乗れない僕の話に納得しちゃっていいのだろうか。」

「お、入って来たわね」

「二人とも気合い充分みたいですわ」

「箒ちゃんも大丈夫みたいだね。」

「ふふ、初戦が一番楽しみなかなかな凄いやね」

今の僕はここから見てるだけ。だからせめて応援でも……頑張れ、二人とも。

- side out -

「よう。まさか初戦で当たるとはな」

「ふん、私と当たる前に負けられては困るからな、好都合だ」

「はは、ご心配どうも。」

安心しろよ、その天狗の鼻をへし折ってやるから」

織斑一夏と、ラウラ・ボーデヴィツヒは互いを鋭く見据えた。

中央モニターが戦闘開始までのカウントダウンを開始する。アリーナ全体の視線が二人へ向けられ、ブザーが鳴り響いた。

戦闘が、始まった。

「叩きのめす！」

白と黒、相反する二色が同時に後ろへ弾けた。それに追従するよう

に、オレンジ色の光と、灰色の光も移動を開始する。

「シャルル！ とりあえず最初の作戦で行くぞ！」

「うん！」

「ふ、小細工など捻り潰す！」

「安心しろ」

一夏へと砲弾を放つべく、ラウラは肩の砲身に少しの意識を向けていた。

その隙を縫って、一夏は瞬間加速イグニッション・ブーストを使ってラウラの眼前にいた。雪片式型を大上段に構え、まっすぐにラウラを見据える。

「真正面から、小細工なしでぶっ叩いてやるからな！」

「っ！ 上等だ！」

ラウラに向けて放たれた斬撃はすんでのところで回避された。即座にプラズマブレードを展開し、一夏へと向き直った。

『じゃあシャルル、頼むぞ』

『うん、一夏も気をつけて』

プライベートチャネルもそこに、シャルルはアサルトライフルを構えた。

相対するは、篠ノ之箒の駆る打鉄。

「ごめんね、一夏じゃなくて」

「なっ……侮るな!」

「侮らないよ。侮れないから、全力で行くんだ」

言葉を終えたと同時にシャルルがアサルトライフルの引き金を引いた。数回の銃声と、それを上回る銃弾が箒へと襲い掛かる。

「くっ……」

咄嗟に手に持つ刀型のブレードで防ぐも、数発は装甲へ当たり、エネルギーを削っていく。

すぐさま反撃にでるべく顔を上げた箒の先には、両手にサブマシンガンを持ったシャルルが宙空へと飛んでいた。

「な、に……？」

「篠ノ之さんには言ってなかったっけ？

これが僕の特技、ラピッド・スイッチ高速切替だよ！」

言っ、て、シャルルは両手の引き金を躊躇いなく引き抜いた。

「っ！ この……」

例えISを装着した箒の身体が銃弾に追いつけたとしても、量産機たる打鉄の限界値は低い。

先ほどを遥かに上回る連射で、雨のような弾丸を受け、箒はたたらを踏んだ。

「！ ダメージが上がっている……？」

「サブマシンガンの効果的な射程に入ってるからね。ずるいとか、言わないでよねッ！」

徐々に距離を詰め、シャルルは両手のサブマシンガンを箒へと投げつけた。箒はそれをブレードで薙ぎ払い、そして、目の前に現れたシャルルに驚愕した。

「速い……まさか、イグニッション・ブースト瞬間加速!？」

「そうだよ。とっておきなんだけど、キミの相手はこちらに見向きもしていないからね。一気にケリをつけさせてもらっよう!」

シャルルの右手からブレードが実体化する。そして、箒がブレードを構えるよりも速く、装甲を切り裂いた。打鉄からブザーが鳴り、そのまま地面にしゃがみ込むようにして、機能を停止させていた。

「くっ!」

「篠ノ之さんが専用機に乗っていて、彼女がもつと仲間をちゃんと見れるような人だったらこんなになんて上手く行かなかったのにな。でも、僕も一夏を勝たせてあげたいから」

箒の反応も待たず、シャルルは一夏のいる方へ振り返った。そして、ラウラへとアサルトライフルの弾を数発叩き込む。



「シャルル！」

「大丈夫？」

「ああ、一応な。箒は？」

「退場してもらったよ。作戦通り」

一夏は箒のいる方に視線を向け、動かない箒の打鉄を視認した。少しばかり申し訳ないと思う気持ちこそあるが、今はそちらに意識を割いている余裕はない。

当初の目的通り、ラウラと二対一の状況にこそなったものの、彼女が強力なISの操縦者であることは変わらない。故に、一夏は極めて冷静に雪片式型を正眼へと構え直した。

「ふん、有象無象が増えて足手まといが消えたところで何も変わらん」

「そうかよ。じゃあ

その言葉、後悔してもらうぜ！」

土煙が上がり、一夏は白い閃光となってラウラへと直進した。瞬く間にラウラの眼前へと現れ、袈裟の形に振り下ろす。

突撃の最中に展開したのであろう、零落白夜<sup>らいつ</sup>の刃を以て。

「ぬるい。」

あの人の動きを劣化トレースしたような動きで、私に触れると思うな！」

しかし、ラウラ・ボーデヴィツヒは白式の速度にも動じなかった。触れば問答無用でシールドエネルギーを消滅させる零落白夜の刃を前にして、自身の右腕をそれに振り上げた。

「この停止結界の前ではその剣も意味をなさないと理解できなかったのか。学習能力のないやつだな」

嘲笑し、ラウラは目の前の敵に向けて肩の砲身、その銃口を構えた。しかし、敵 夏も同じように笑い、ラウラを見ている。それが少女にはたまらなく不愉快だった。

「何がおかしい」

「いや、ルールすら理解してないやつが学習能力云々を言っているのが面白くてな」

「何を……っ!?!」

突如、ラウラの背後に衝撃が走り、シールドエネルギーが減少した。集中が途切れたことにより結界から解放された一夏の斬撃をかわし、ラウラはひとまず距離を取った。

自分の背後にいたのは、シャルル・デュノア。ショットガン散弾を手に、ラウラを見つめていた。

「悪いけど、僕らはタッグ戦をやってるんだ。敵は一夏だけじゃないから、よろしくね」

自分を小バカにしたような言い方に、ラウラは憎々しげに舌打ちをした。

そして、その心のままに、少女は砲弾を二人へ放ったのだった。

「凄いですね、織斑さんとデュノアくん」

「スタンドプレーにしか走らないボーデヴィツヒに対し、しっかりと連携を組んでいる。個人技では学年トップクラスでも、これでは上手くいかないだろうな。」

……その辺りはやはり、相変わらずと言ったところか」

モニター越しに試合を眺め、千冬は内心でため息を吐いた。

これは個人ではなく、タッグ戦である。その点において、ラウラよりも一夏やシャルルの方が上手だと言える。

お互いに連携を取り合い、不利な点を補っていく。ただでさえ幹旋による組み合わせな上に、相手である箒を足手まといとしか見ていないラウラは、この勝負で、間違いなく不利だった。

「それに、停止結界の致命的な弱点にも気がついたようだしな」

どうなることかな。と呟いて、千冬は再びモニターに意識を向けたのだった。

「停止結界の弱点……ですか？」

「うん。断言できるほどでもないけどね」

客席にて、春佳はセシリアの問いに頷いた。視線は三人の戦いから離さず、射殺すように三人の動きを見つめ、セシリアの言葉に答えるべく口を開いた。

「相手の動きを止めることができるんだもの、もちろん使用にはか

なりの集中力を要するもんだと思うんだ」

「つまり、集中力を乱すように立ち回ればいいってこと？」

「そんな感じだと思う。鈴ちゃんが龍砲を撃つのも、セシリアさんがブルー・ティアーズを操作するのも集中力をつかうでしょ？相手の動きを止める。なんてその二つより遥かに集中すると思うんだ」

「だから、停止結界を発動させても片方がそこを突き、基本的な立ち回りに戻すってわけね？」

「その通り。個人技が高くても連携の取れる専用機持ちを二人相手にやり合うのは辛いと思うんだよね」

連携の取れる。と言う春佳の言葉に鈴音はムッと拗ねたような顔を  
して、そっぽを向いて胸を張った。

「ま、まああたしはあの時には気付いてたけどね。そんな風な予感  
はしてたし。

春佳も良く気付いたじゃない。あたしとまったく同じね」

「……鈴ちゃん……」

「な、なによ」

「今回ばかりはわたくしも何も言えせんわ」

「　　ッ！　何よ二人して！  
春佳のバカーッ！」

「あいたあつ！　な、なんで僕だけ！？」

晴天の元、アリーナの客席で春佳の背中から気持ちのいい乾いた音が鳴り響いたのだった。

「くっ……」

一夏が攻めればシャルルがフォローし、シャルルが攻めれば一夏がサポートする。

停止結界を使えばそれは自らの最大の隙となる。二人の連携は隙がなく、個人技ではどうにもならない。

その点において、一夏もシャルルも徹底していた。

（私が……押されている……？）

二人に攻め込まれ、後退したラウラはそんなことを内心で考えた。考えて、その事実に激昂した。

「そんなことがあつてたまるものか……  
ふざ、けるなあッ！」

零落白夜の刃を避け、その勢いのままに白式の背後へと回る。

シャルルのフローよりも速く、ラウラは白式の背を蹴り飛ばした。

「一夏！」

「遅い！」

自分に向けられたシャルルのアサルトライフルをワイヤーで弾き飛ばし、砲弾を放つ。

そして左手にプラズマブレードを構え、背後へと全力で振り抜いた。

「なっ！？」

金属音が鳴り響き、雪片式型が宙を舞った。驚愕の顔に染まる一夏にラウラは斬撃を放った。

シールドエネルギーを確実に削り、次の敵を確認するべくすぐさま一夏を殴り飛ばした。

「貴様らごときに、負けるものか！」

「悪いけど、負けてもらうよ！」

ラウラの正面からシャルルがサブマシンガンを両手に突撃した。

弾丸の雨を掻い潜り、ラウラは右手をシャルルへと向けた。

「は、迂闊だな！」

弾丸は停止し、既に武装を近接用に換装していたシャルルも停止する。

一夏が近接武器しか使えないのを事前にデータで確認していたラウラはそのまま肩の砲身に意識を向ける。

片方を潰してしまえばもう片方はどうとでもなる。そう確信しているラウラは笑みを浮かべ、シャルルへと砲弾を放とうとした。その笑みは勝者の笑み。故に少女は

背後からの攻撃を意味するアラートに、その身を固めた。



「な……に……?」

驚愕しつつも、すぐさまシャルルを置いて真横へと飛んだ。

手にアサルトライフルを持った一夏は、ラウラへと向けて引き金を引いた。

貴様! というラウラの声は、連続して鳴り響く銃声に掻き消された。

「ぐっ………どういうことだ! ヤツは近接武器しか保有していないはずだ!」

「僕が訓練の時に使用許可したんだよ。残念だったね」  
アンロック

「ッ!?!」

「でやあああッ!」

風切り音から金属音へ、シャルルが高速切替によっていつの間にか切り替えたブレードがラウラの腹部へ直撃した。

痛みを感じずとも、その衝撃は身体へ通る。たまらず後方へ下がるラウラに一夏の銃撃が再び襲いかかった。

獣の咆哮を思わせる連続した銃声は地面を這うように着弾し、ラウラを追いかける。銀髪の少女は、まるでダメージを受けたかのように、苦悶の表情を浮かべた。

「ふざけるな！ 私がこんな……こんなことがあつてたまるかあッ！」

鋭く伸びたワイヤーが一夏の手にあるアサルトライフルを弾き飛ばした。もう片方のワイヤーで一夏の首を絞めて拘束、視線はシャルルへと向けられていた。

いつでも一夏をシャルルへ放れるように、隙を作らず、隙を見逃さず。いつ高速切替をされてもいいように、戦闘体勢を保ったまま、ラウラはシャルルを睨み付けた。

「……」

「……」

睨み合う二人。ちらりと一夏は雪片式型の位置を見つめ、そして二人へと視線を戻す。

そして 唐突に、動き出した。

瞬間的に、”それまでのシャルルからは考えられない程の

”加速をして。

「なっ……瞬間加速だ！？」

「やっぱりさっきを見てなかったみたいだね」

「何故だ！ データにはなかったはずだ！」

「当たり前だよ。この試合で初めて使ったからね！」

超音速で接近するシャルルの右手にはブレードが握られたまま。予想外の出来事にラウラが一瞬の硬直で動けないところへ肉薄した。

「隙あり。だよ」

右手を振り上げ、シャルルがラウラへ攻撃の意思を表す。

それを防ごうとラウラが左手のブレードで受けようとその手を上に向け、防御の姿勢で構えた。

直後、ラウラの右脇腹に、想像し得ない衝撃が走っていた。

「がッ……」

一夏を拘束していたワイヤーが離れ、ラウラはアリーナ端へと吹き飛んだ。

右手を振り上げたままのシャルルの左手のシールドの下には、パイルバンカーが仕込まれていた。

「これで……一気に決める！」

体勢を立て直せないラウラへと瞬間加速で接近し、動く間すら与えずにラウラへと追撃を放つシャルル。

シールドエネルギーがゼロになるまで、何発も何発も。

ふと、観客席で誰かが「終わったかな」と呟いた。

（私は……負けるのか……？）

腹部を強打する衝撃に顔を歪め、ラウラは他人事のようにそんなことを思った。

思った途端、それは他人事ではなくなる。激昂したラウラは、自分を攻撃するシャルルを、後ろで雪片式型を回収し、自分を見る一夏を睨み付けた。

（ふざけるな！ 私は負けない！ 負けるわけにはいかない！）

自分を照らす唯一の光、織斑千冬。彼女になるには、負けは許されない。

彼女のようにあるには、最強であることが前提条件である。最強である為には、負けることなど許されるわけがない。

負けたくないのか？

（私は、負けるわけにはいかない！）

願うか……？ 汝、自らの変革を望むか……？ より強い力を  
欲するか……？

言うまでもなかった。自らの虚無を理解してしまっているからこそ。  
織斑千冬になりたいと渴望しているからこそ。

（それを得られるのなら、私など……空っぽの私など何から何まで  
くれてやる！

だから、力を。比類なき最強を。唯一無二の最強を 私に寄  
越せ！）

D a m a g e   l e v e l …… D .  
M i n d   C o n d i t i o n …… U p l i f t .  
C e r t i f i c a t i o n …… C l e a r .

『V a l k y r i e   T r a c e   S y s t e m ……… b o o t .

ラウラの縋る光から黒い影が溢れ出す。それは瞬く間にラウラの視

界を埋め尽くし、自身を照らすはずの目の前の光さえも  
飲み込んでいた。 侵し、

## 十（後書き）

はい、そんなわけで三章その十です。

やっと戦闘に入りましたね。なんかラウラがちょっと歪み過ぎてる気がしなくもない。

しかし……これでやっと二巻の七割くらいだと思つとまだまだ長いなあと思いますね（笑）

書き応えたつぷりですよもう

さてさて、次回はまたオリジナルが加わって行く感じです。”あのシステム”が発動したラウラと一夏達、そして相変わらず暗躍する春佳をどうぞ見守つてやつてください。

ではでは、変わらず皆さんの通学、通勤の暇つぶしにでもなれば幸いです。

そんなわけで、次回のあとがきで会いましょう！

## 十一（前書き）

そんなわけで、ガンガン行きますよ！

目指せ、今週中に三章完結！

ちなみに、今回の話が三章セミファイナルの予定です。

では、始まり始まり。



## 十一

「あああああッ！」

突然、ラウラが絶叫をあげたかと思えば、シュヴァルツェア・レーゲンから稲妻が走り、シャルルを吹き飛ばした。空中で体勢を整え、一夏の隣に着地したシャルルは、目の前で起きている光景に目を疑った。

「なんだよ……あれ……」

呆然と一夏が呟く。二人の視線の先では、ラウラが……ISが変化していた。

「そんな……ISが変化してるなんて……ありえないよ」

「わかってる。けど、じゃああれはどう説明すればいいんだよ」

装甲をかたどっていたはずのモノはドロドロになり、影になるかのようにラウラを飲み込んで行く。

そして、粘土のようにグニヤリと形を歪ませて、徐々に形成を始めた。

「な……あ……」

一夏の表情が、驚愕に染まった。

ラウラと、専用機”だったもの”は全身を黒の装甲に身を纏い、そこに佇んでいた。

その装甲は極めて人間的で、ボディラインからも女性と判断できる。頭部にもフルフェイスのアーマーに覆われており、”それ”は赤く光る、人間の目のようなラインアイ・センサーで一夏を、シャルルを見つめていた。

その頭部は、一夏と春佳の姉 織斑千冬に酷似していた。

そして、その手に持つものは、一振りの刀。その形を見て、一夏は奥歯が軋む程に強く噛み合わせた。

「雪片……!」

自分でも意識をせず、一夏は雪片式型を正眼に構えた。

「  
!」

その瞬間、”それ”は動いた。

構えただけの一夏に勢いよく飛び込み、居合いのような動きで手に持った刀を真横へと一閃していた。

「なっ……ぐッ!？」

白き太刀が黒き太刀とぶつかり、金属音を鳴らして火花を散らす。無意識に構えただけであり、そこに反応された一夏が動けることはもちろんなく、弾かれた雪片式型に引かれるように体勢を大きく崩した。

そして、黒きそれは”まるでそうなるのが当たり前”かのように刀を大上段に振り上げ、柄尻に左手を添えた。

まずい！

そう思つと同時に白式へ後方回避命令を出して、一夏はそれから距離を取った。

刹那、一夏の眼前の空気が”歪んだ”。

遅れて風切り音が鳴り、刀の切っ先が地面にめり込んでいた。

「……なんでだよ」

その太刀筋に、一夏は驚愕するよりも、憤怒した。

幼き頃に、自分に剣を教えてくれた姉の剣にそっくりだったからではない。それだけなら、一夏は何も言わない。

重いだろう。それが、人の命を絶つ武器の、その重さだ。

あの時、幼い自分に刀を持たせた姉の言葉が脳裏に蘇る。

この重さを振るうこと。それがどういう意味を持つのか考える。  
それが強さというものだ。

そう言う姉は厳しくも、優しい顔をしていた。そして、何か眩しい  
ものを見るかのような、不思議な表情だった。  
一夏は、そんな姉に憧れた。少しでも姉の力になりたいと、弟を守  
つてやりたいと、その為の強さを、”武器の重さを振るう”意味を  
追い求めた。

そう、鋼鉄の重さを知ったあの日からずっと。

「……けんなよ」

だから、我慢ならなかった。

あの黒い何かが、おぞましさしか感じないアレが千冬の剣を使うこ  
とに。

それが、一夏に初めて見せ、教えた”真剣”の剣技であつたことに。

「ぶざけんなよ！ 許さねえッ！」

零落白夜、展開。  
出力、最大。

「一夏!？」

シャルルの言葉も耳に入れず、一夏は閃光となってそれへと突撃した。

そして、ありったけの力を込めて、雪片式型を横へと薙いだ。

「  
」

しかし、その斬撃はいとも簡単に受け止められた。

一夏と相對するそれは、雪片式型を刀で受け止め、込められた力の方へへと捌いた。

「なっ!？」

体勢を崩す一夏へ、斬撃が黒き光となって襲い掛かる。

回避も許さない鋭さで、それは今度こそ一夏に直撃した。

「ぐあっ!」

腹部にはまだ装甲が残っていたから良かったものの、最大出力で展開した零落白夜のせいで切れかかっていたエネルギーのせいだ、左

の装甲が緩く、一夏の左腕からうつすらと血が滲んだ。

そして、零落白夜によるエネルギー消費と、先ほどの斬撃のダメージによって白式のエネルギーは底を尽いたのか、白式は、光となつて一夏の周りから消滅した。

「くそッ！」

それでも一夏は止まらず、生身のままでそれへと殴りかかった。

許せねえ、許せねえ、許せねえ！

怒りに身を任せ、拳を振りかぶる。

そして、放った拳が当たるか当たらないかのところで、一夏の身体は大きく後ろへと傾いていた。

「!？」

「何をやっている！」

生身でISに向かうなど、死ぬ気か！」

「離せ！ あいつ、ふざけやがって！  
ぶつとばしてやる！」

一夏は目の前の敵を睨み付けた。怒り一色に染まったその瞳が、敵意を剥き出しにして……だから、黒きISはその敵意に反応し、刀の切っ先を一夏に向けた。

「離せ箒！ 邪魔をするならお前も」

「いい加減にしろ！」

パシン。と乾いた音が鳴り響いた。

一夏は無理やり横に向けられた顔を正面へ戻し、ヒリヒリとした痛みがする頬に手を触れた。そこで、自分が頬を叩かれたのだと自覚する。

「箒……お、俺は……」

「ひとまず落ち着け。

話ならば聞く。だから、あんなことを言っな」

「あ、ああ。すまん」

「……落ち着いてる余裕があればね」

「シャルル？」

生身の二人の前に今だISに搭乗したままのシャルルが着地した。両手にはサブマシンガンを持ち、いつでも攻撃できるよう、黒きISを見つめている。

「あれがなんにせよ、その場に立ってるだけの存在には見えないよ。だから、二人とも僕から離れないで」

「お、おう」

「わかった」

『非常事態発令！ トーナメントの全試合は中止。状況をレベルD、危険域と認定、鎮圧のため、教師部隊を送り込む！ アリーナ観客席の生徒及び来賓は速やかに避難せよ。アリーナ内の生徒は危険のため、無理な接近を控えるように。繰り返し』

直後、観客席が喧騒に包まれ、避難が始まる。そこまで大事でないにせよ、生徒達の焦りが一夏達にも伝わった。

「春佳……？」



そんな中、一夏の視線に春佳が映った。

移動しながらも、その視線は黒きISから外れない。そして、その目は、一夏が今まで見てきたどんな視線よりも冷ややかで、寒氣のするような目だった。

まるで別人のような気がして、一夏は一度瞬きをした。もう一度目を開くと、そこに春佳はいなかった。

「無理に近づくな、かぁ。相手がそうさせてくれるといいんだけど。……こういふときの対処も聞いておくべきだったかな、春佳」

観客席を見つめる一夏を余所に、シャルルは目の前の敵から視線を離さずにひとりごちて、苦笑いを浮かべたのだった。

「……そこまでするかな、普通」

廊下を歩きながら、春佳は一人呟いた。鈴やセシリアとは意図的に離れ、春佳はラウラを飲み込んだ黒を思い出していた。

「成れの果てっていうんだっけ、ああいうの。それがVTシステムとは、ISらしいといえはらしいけど」

ヴァルキリートレースシステム。教科書で読んだ程度の知識しかないが、その内容が春佳の頭の中で蘇る。

「モンド・グロッソの部門ヴァルキリー受賞者の動きをトレースするシステム。けど、現在使用や開発、研究は禁じられてるはず。それに、ラウラ・ボーデヴィツヒがあれを喜んで使うタイプには見えなかったけど」

「積まれてたんじゃないの？」

それが、劣勢になったことによって発動した。ってところかな」

「！ 鈴木さん」

「探したよ、織斑くん。いろいろ考えてるところ悪いんだけど、お仕事の時間だから、よろしくね」

春佳の背後から現れた鈴木は、片目を閉じて春佳へと笑いかけていた。

「ってことはなに、もしかすると何かいるかもしれないの？」

「そういうこと。蒼崎橙子は生徒とかの誘導で動けないから、代わりに私達がつてわけ」

廊下を走りながら、二人は会話していた。

鈴木の話によれば、探知魔術に魔術の発動が引かなかったことで、それがアリーナ付近だったこともあり、学園から警戒の要請を受けたのである。

途中、生徒達とすれ違うが、彼女らは二人に見向きもしない。それは二人が認識阻害の魔術を自身にかけているからであり、以前春佳がかけたものよりも遥かにしつかりとした魔術だからである。これならば、春佳が魔術師であると知っているシャルルですら認識できないだろう。

「何が出るかわからないけど、準備は大丈夫？」

「大丈夫だよ」

走りながら、ポケットからナイフ、そしてポーチから一冊の本を取り出して、春佳はそれを両手に持った。

「それがイミテーション・パイプル模造原典？」

「そだよ。この二つがあれば……まあ、大丈夫でしょ」

「そうだね。」

そろそろ発動場所に着くから気をつけて」

「ん、了解」

アリーナ付近の、もうみんな避難し終えたのか無人となった廊下の先、休憩所となっている場所に通じるドアを春佳は蹴り開けたのだった。

「　　はは、これは凄い」

「……酷い間違いじゃなくて？」

「変わらないよ。化け物がいるってこと自体は」

そこには、白いワンピースを着た少女がいた。背中から赤い、鋭い爪を思わせる手を四本構え、その左目はくり抜かれたかのように空洞となっていた。

「はいはい、話は通じる？」

「が……ぎ……イレ、モノ……」

春佳の質問に途切れ途切れ答え、二人の周囲に浮遊する少女が多数現れる。そのどれもが目の前の化け物と同じ顔で、いつか春佳が殺した幽霊と同じ顔をしていた。

「ちょっと、本当に勘弁して欲しいんだけど」

「あら、鈴木はこういうのが苦手なの？」

「これでも現代女子の端くれでもあるんだけどね、織斑ちゃん？」

女性的な声の春佳に引きつった笑みを浮かべ、鈴木は周囲の幽霊を見回した。

「それ、区別のつもり？」

「そんなところ。で、どうする？」

「たぶん、本体はアレだと思うんだけど……鈴木さん、やれる？」

「できれば却下かな。織斑くんが大丈夫ならだけど」

「別にいいよ。じゃあ、周りのを引き付けておいて。」

あいつは最速で、絶対に死んだってわかるくらいバラバラにして殺すから」

「……怒ってる?」

「そこまでじゃないよ。けど、あいつは何かを入れる為の器を探してる。この間シャルルを襲ったんだから、このまま行けばアリーナにいる一夏くんや箒ちゃん、シャルルにボーデヴィツヒさん達が狙われると思うんだ。」

そんなの、許さない。僕の家族と友達に害をなそうってなら、容赦なくブチ殺す。

ボーデヴィツヒさんは友達でもないけど、それでも見殺しにはしたくないし」

A z z i d o l t h

春佳の眩きと共に原典から破られた二枚のページが一つになり、刀の形へと変わっていく。

そして、右手を右目に当てて、瞳の色を橙色へと変化させた。

「ま、たまにはこんな正義の味方的理由で殺り合うのもいいんじゃないかな。」

おいで化け物、その醜い容姿が更に醜くなるくらいバラバラにして殺してやるから」

「……正義の味方はそんなこと言わないと思うけど。  
はあ、今回は損な役回りだなあ、私。冗談抜きで苦手なのに」

ナイフをポケットにしまい、右手に刀を持つ春佳。  
その背後で、鈴木がため息を吐いて周囲に火の玉を浮かべたのだっ  
た。

「ぐっ……」

「シャルル！」

斬撃を受け、シャルルは後退する。  
その後ろに控えていた一夏はシャルルへと駆け寄った。

「まるで一夏と戦ってるみたいだよ。しかも、完全防御型のね」

「……くそ！」

「一夏、デュノア。じきに先生が来る。

おそらくあのISもエネルギーはさほど残ってはいないだろう。だから」

「退こう。ってか」

「そうだ。無理に危険に飛び込む必要はない」

確かに。とシャルルは箒の言葉に頷いた。

あのISは攻撃に対して反応し、反撃する。退くだけならば何事もないかもしれない。

けれど、一夏は首を横に振っていた。

「違うぜ箒、全然違う。別に無理してるわけじゃないし、『やらなきゃいけない』って使命感の元にやろうとしてるわけでもない。俺が『やりたい』からやるんだ。他の誰がどうとか知らないし、興味もない。

それに、ここで退いたらもう俺じゃない。織斑一夏じゃないんだ」

まっすぐに、箒から視線を外さずに一夏はしっかりと言った。  
決して怒鳴ったわけでも、強い口調で言ったわけでもない。静かに、けれどよく通る意思の強さをわからせる声で言い聞かせるように言った。



「一夏……でも、どうするつもりだ？ 白式のエネルギーは空なのだろう？」

「それは……そうだけど……これから考える」

「……はあ、やっぱり兄弟だね。一夏、エネルギーがないなら他から持ってくればいい、でしょ？」

箒の言葉に声を詰まらせる一夏に、シャルルはため息を吐いて、それから微笑んだ。

一夏と箒の視線がシャルルに移る。

「シャルル、何を……？」

「普通ならできないけど、リヴァイヴならコア・バイパスでエネルギーを移せると思う」

「できるのか！？ だったら頼む！ 早速やってくれ！」

「いいよ。でも、その代わり条件があるんだ」

「なんだ？」

「絶対に勝つこと。いい？ 絶対だよ」

「はっ、当たり前だろ！ ここまで啖呵を切って飛び出すんだ。これで負けたら男じゃねえよ」

「じゃあ、負けたら明日から女子の制服で通ってね？」

「んなつ！ な、なんか春佳みたいだな、シャルル。いいぜ、負けたら女子の制服着てやるよ」

「約束だからね？ じゃ、始めるよ」

今現在の状況に似合わない軽いやり取りに二人は笑い合って、シャルルは一夏の手を握った。

「リヴァイヴのコア・バイパスを白式に接続。エネルギーを流出。僕の残存エネルギーも少ないからね、大した量じゃないけど……よし」

箒が見守る中、シャルルは頷いて一夏から手を離れた。  
そして、少し自分の手を見て、一夏に笑いかけた。

「一夏、白式のモードを一極限定にして。それで零落白夜が使えるはずだから」

「わかった」

一夏は白式を呼び出した。いつもならば全身に展開される白き装甲も右腕から右肩にとどまり、その手には雪片式型を持つのみ。  
それ以外は生身のままで、一夏は黒きISと向き合おうとした。

「い、一夏!」

「箒?」

それまで見守っていた箒が慌てたように声をかける。  
真剣そのものの表情で、心配そうな声音で。

「死ぬな。絶対に死ぬなよ!」

「当たり前だろ。俺を信じろよ、箒。心配も祈りも不必要だ。ただ、

俺を信じてくれ。

絶対に勝って帰ってくるからさ」

にやりと、箒の心配を払拭するように不敵に笑う一夏。  
大丈夫だから。と、その笑顔に込めて。

「……絶対だからな」

「おう。嘘ついたら針千本飲んでやる」

心配に瞳を揺らしていた箒の瞳が、いつもの強さを取り戻した。  
それに安心して、一夏は改めて黒きISと向き合った。

それでこそ、一夏くんだね。

ふと、一夏の耳に春佳の声が聞こえた気がした。

まあな。と口元を少し笑みに変えて、雪片式型を正眼に構えた。

「行くぜ、偽者野郎」

「オンオフアビリティー」

零落白夜、展開。

怒りなどとうに消えていた。今はただ、目の前の敵を倒すだけ。

いつものようなエネルギー刃ではない、小さな、刀の大きさしかない、ISから見れば小さな刃。けれど、それは今の一夏にとって、何よりも頼もしく見えた。

「うおおおおっ！」

地を蹴り、一心に黒きISへと駆け出す。  
最初の一撃は、お互いの斬撃が交わった。

「まだまだあつ！」

相手の斬撃は、姉のそれとそっくりだった。でも、何かが違う。同じであるはずがない。

その斬撃を避けて、一夏は斜め下から切り上げた。  
金属音が鳴り、相手の刀が中空へ吹き飛ぶ。

「これで、終わりだッ！」

切り上げた勢いをそのままに、一夏は零落白夜の刃を振り下ろした。  
斬撃が黒きISの肩にめり込んだ時、相手は自分の後方を見てるように見えたが、躊躇わずに振り抜いた。

装甲が裂け、中からラウラが現れる。

すでにその意識を失っているのか、目を閉じた状態で一夏へと倒れ込む。その足元に、ラウラの眼帯が落ちた。

「……とりあえず、これでチャラにしてやるよ」

咄嗟にラウラを抱き止め、一夏は白式を解除して小さく呟き、ため息を吐いたのだった。

「よいしょっと！」

春佳は右脇に構えた刀を真横へと一閃した。自分に伸びて来た爪の一つにそれが当たり、真つ二つに切断された。化け物の、金切り声のような叫び声が廊下に響いた。春佳も頬に傷を負っているがそれ以上に深い傷は見当たらず、対する相手は身体中に切り傷を作っていた。

「あははははッ！　こんなものかよ化け物。  
ほら、もっと私を追い詰めなさいな」

妖しく、そして底冷えのするような声で言って春佳は低く構えた。視線は相手から離さず、体勢のみが前のめりになっていく。

相手との距離は、約十メートルほど。春佳にとって、それはもう手の届く範囲内。相手を殺せる距離。

「そろそろおしまいにしましょう。大して楽しくもなかったし、五十点つてところかしら」

両足の筋肉が軋み、力を溜めていく。

地面と平行になりそうなくらい前のめりになったところで、春佳の姿がそこから”消えた”。

それから、タン、タン、と床から二回足音が鳴って、春佳は化け物の目の前に現れていた。まっすぐに化け物を睨み付け、両手で左脇に構える。

その突撃のスピードも二歩という歩数も常軌を逸しており、化け物は遅れて残りの三本の手を春佳に向けた。

「  
小節棒外、せいじん聖刃」

春佳の持つ刀の刃から、零落白夜のような光が発せられる。その刀を左から右へ一閃。腕の一本を先ほどよりも鋭利な斬撃で、斬られることが当たり前のようになくなり自然に斬り落とした。

「|||||||」

「喚かないで、五月蠅うるせいから。」

これ以上見苦しいのも嫌だし、うん……死ね」

腕を斬り落とした際の斬撃から、返す刀で右から左へと斬撃を放つ。今度は腕ではなく、首に狙いを定め。

金属音に近い悲鳴も、風切り音をあげて自分に迫る腕も視界に入れない。春佳は、躊躇いなく刀を振り抜いた。

ザン。と、発光する刃からは考えられないほど現実的な音がして、春佳は化け物から距離を取った。一度刀を振って、刃から光を消し、普通の刀と同じ、鋼の刃を覗かせる。

「じゃあね。おやすみ」

一拍置いて、化け物の首がズレ落ちた。それから化け物はその場から霧散する。

同時に鈴木を周りを浮いていた幽霊も霧散し、敵の最期を確認した春佳は刀を原典のページに戻し、大きく息を吸った。

右目のスイッチをオフにして、襲い来る眩暈に壁へ寄りかかり、吸った息を吐き出す。

「お疲れ様。大丈夫？」

「うん。眩暈<sup>めいげん</sup>は仕方ないんだ。視神経と魔術回路<sup>マジツル</sup>を繋いでるから、嫌でも負担がかかる。今回ののは純粹に首を刎<sup>は</sup>ねて殺せたけど、この手のは大体普通の手段じゃ死なないから使わないわけにもいかないし」



「難儀だね。」

そつえば、頬を切ったみたいだけど……！」

治療をしようかと春佳の頬を見て、鈴木は絶句した。少し垂れた血の奥にはもうかなり塞がった傷があったからだ。

「噓。普通なら縫うような怪我なのに」

「ああ、これ？」

仕方ないよ、こういう身体なんだから。怪我つてさ、基本治り難いじゃない？ だからこそ、僕の怪我は”早く治る”。僕は 痛ければ痛いほど、痛みを感じない って前に説明したでしょ？ あれと同じ。鈴木さんにつけられた傷みたいのならまだしも、こんなただの攻撃で傷ついただけならすぐに治るよ。すっぱり切られたからくつつくのも早いしね」

「……便利な身体なんだかそうじゃないんだか、本当に悩むよ、織斑くん」

「こついうところは便利かな。ま、弊害も多いけど。  
よし、くつついたかな」

ハンカチで血を拭い、傷のあった場所を触る春佳。確かにそこにはもう怪我をした後など微塵も残っていなかった。

「にしても、なんだったのかね、アレは」

「おそらくけど、使い魔だと思うよ。そうだね……この混乱に乗じてアリーナにいる織斑くんのお兄さんやデユノアくん、ボーデヴィツヒさんみたいなIS操縦者に乗っ取るうとしたんだと思う」

「だろうね。専用機持ちはスペック高いから、さぞ使い勝手もいいんだろうね。

で、もしアレが使い魔だとしたら……本体はまた別か」

「だと思う。まったく、趣味の悪い使い魔」

本当に嫌だったのだろう。鈴木はとても軽そうに思えない表情で肩を竦めた。

意外だ、と春佳が苦笑する。

「ホントにダメなんだ？」

「それでも華の女子高生だからね。魔術ができてダメなものはダ

メなの」

「なるほど」

もう触れないであげよう。と春佳はそこで話題を打ち切った。それからさてと。と一度伸びをして、鈴木へと振り返る。

「僕はせっかくだからアリーナの様子を見に行くけど、どうする？」

「私は蒼崎橙子に報告しなきゃだから。とりあえずあんなのを倒したんだし、今日は大丈夫でしょ。だからここまでかな」

「ん、了解。じゃ、お疲れ様」

「うん、お疲れ様、織斑くん」

制服の膝部分を両手で二回ほど叩いて埃を落とし、春佳はアリーナに向かうべく鈴木に背を向けた。

鈴木も後者に向かうべく春佳に背を向けて、二人は反対の方向へ同時に歩き出したのだった。

「えっと、これはどういうこと？」

アリーナに着いた春佳が見たのは一夏とシャルルが手を重ねているところだった。

しばらくして二人は離れ、一夏が白式を右腕部分だけ展開させる。よくはわからないが、あの二人の行動はこの為だったのかな。と自分を納得させて、再び一夏達に注意を向けた。

箒が心配そうに一夏へと詰め寄って行き、一夏が答えている。

「それでこそ、一夏くんだね」

何を話しているかまではよく聞こえないのでわからないが、一夏の言葉で箒の表情が明るい方向に変わった。きっと、いつものようにかつこいいことを言ったのだらうと、春佳は微笑んだ。

「その姿には同情するよ、ボーデヴィツヒさん。僕も一歩狂えばそうなってしまうから。」

ううん、キミのそれが可愛く見えるだらうね、なんせ、僕が狂った場合、白純理緒とほぼ同義の化け物になってしまうんだから。しかも僕の場合は 食べる なんて野蛮な起源じゃないから余計にタチが悪いけど。でもね、こんな僕もこうしていられるんだから大丈夫だとは思うよ。だから、」

千冬によく似た姿を模<sup>かたど</sup>ったISを、春佳はじつと見つめた。敵意も殺意もなく、ただジツと。

それに正面から相對する、自分に背を向ける形になっている兄の背がどこか大きく見えて、嬉しそうに笑った。

「とりあえず、一夏くんに成敗されておきなよ。ね？」

一瞬、黒きISも自分を見ていたように錯覚するも、直後一夏によってそれは破れ、ラウラが中から現れる。  
春佳はそれを見届けて、一人笑った。

「一件落着、かな」

「ああ。ここにお前がいなければな」

「!？」

突然聞こえた声に、春佳は肝を冷やした。ゆっくりと背後を振り返り、その声の主を確認する。

「千冬……姉……」

「どうしてお前がここにいる。……いや、  
どうやってここに来た？」

腕を組み、春佳を鋭い目で見つめ、千冬は一步前へ出た。  
引きつった笑みを浮かべ、春佳は身体ごとそちらに向き直った。

「えっと……先生方の死角に隠れたりして……  
心配だったんだ。一夏くん達が」

露骨な嘘に、春佳は内心で舌打ちをした。自分のしてることに後ろ  
めたさはなくとも、家族に嘘をつくのはいい気分ではない。  
表に出さないように必死に、春佳は嘘を真実にしようとした。

「……それでお前になにかあったらどうする。  
お前は私に姉としてだけでなく、教師としても心配させたいのか？」

「……ごめんなさい」

少し間を置いてため息を吐く千冬に春佳は素直に謝った。この謝罪  
は、嘘も偽りもなかった。

その謝罪に込められた内容に、相手が気づかないとしても。

「何もなかったから良かったが、避難命令に反した以上、罰則はあるぞ。ついてくるように。」

お前が言った通り、もう一件落着だ。最悪、こうして私も控えている。だから、お前はこれ以上無茶をするな。いいな？」

「……気をつけます」

心配されていることに嬉しく思うも、それを破ることになるとわかってるので内心でごめん。ともう一度謝った。

織斑春佳はこういうヤツだから……こうじゃないとダメだから。と、更に誰も聞くことのない言い訳を言って、千冬の後ろについて歩き始める。

「……まあいいだろう。」

お前も一夏も、あまり私を困らせるなよ？」

「うん。ホントにごめん」

もう一度ため息を吐いて、ややおどけたように千冬は言った。

それで緊張していた空気は解け、もう一度謝って春佳は苦笑した。罰則って、どんななのかな。なんて思考しながら

## 十一（後書き）

ちよつと駆け足だったかな、と思わなくもない十一でしたが、どうでしたでしょうか。

地味にいろいろ伏線張ったりして、次章とかで回収しようとか考えてます。

春佳の壊れっぷりはちよつと御崎のお気に入りだったり。あんなバトルジャンキーが主人公格の一人でいいのか気になるけど、普段はわりと常識人だから大丈夫ですよね？

さて、そんなわけでラウラの成敗も完了し、伏線の設置も万端。これで安心して三章を終えることができそうです。

次で三章最後となつて、四章突入の予定です。これからよろしくお願いします！

では、次回のあとがきでお会いしましょう！ あでゅー！



## 十二（前書き）

微妙に前回から週が変わってしまいました。そんなこんなで三章ファイナルです。

では、始まり始まり。

## 十二

「報告はこんなところかな。化け物自体は織斑くんが殺してしまったから詳細は不明だよ」

「了解だ。ご苦労様」

橙子の部屋で、鈴木はソファに座って事の顛末を話していた。吸っていたタバコを灰皿に捨て、橙子は一人頷く。

「そういえば、織斑くんていつもあんな感じなの？」

「あんな感じ、とは？」

「バラバラにする。とか言ってたのに首を斬っただけだったりとか……あの治癒力とかね」

「ふむ……確かにそうだな。あいつは相手を解体するような発言をよく宣言するが、実際にやっているのは見たことないな。実のところ、春佳にとってそこはどうでもいいのだろうな、結論として殺せていれば。治癒に関しては……そうだな、私が初めて春佳と会ったとき、右目をなくしていただけでなく身体中に重度の骨折をしていた。だが、翌日にはそれが並の骨折になり数日の入院で済んでいる。

極論だけ言えば、あいつは普通の怪我なら切断していたり致命傷に至ってない限り常人より早く治る。ただし、魔術でついた傷や概念のあるものならばそれはあいつにとって、”枠外”のモノとなるわけだ。だから、キミの魔術はちゃんと傷が残っていたし、今回はすぐに治ったのだろう。……まあ、それでも魔術による攻撃への治癒速度は常人よりも速いが。ふむ、やはり荒耶といい白純といいあの手の人間はまったくもって理解しがたい」

「あなたがそれを言えるのか疑問でしょうがないけど……なるほど、聞けば聞くほどんでもないね。”起源覚醒者”ってのは」

「そう言うことだ。　　クク、厄介な相手に好意を持ったな、キミも」

「残念ながらもう好意はないんだよね。友達としてしか見れないと言っか」

「む、そうなのか？　子孫を残すにしても、アレは一代の突発型とは言えそこそこには優秀だと思うが。しかもちよつとした希少種だぞ？」

意外だ、と言わんばかりに笑顔を消して、橙子は鈴木へ視線を向けた。

鈴木はあまりに直接的な橙子の言葉に苦笑して、肩を竦めた。

「そうかもしれないけど……」

好きでい続けるには、ちょっと知らなくていいことまで知りすぎたかな。

これが私の最大の欠点だけど、だめなの。友達としてなら問題ないけど、やっぱり織斑くんを普通には見れない。私の同じ側……ううん、もっと奥の人じゃない？

それでもわりと普通の恋愛がしたいから、もう無理かな」

「意外だな。随分年相応じゃないか」

「うん。だから、これが私の最大の欠点。私は魔術師<sup>わたし</sup>になり切れない。

ある意味で織斑くんの起源と同じかな。魔術師のくせに、普通の女の子でもありたいだなんて」

「確かに魔術師としては致命的だな。現に、それが原因でキミは春佳に敗れている」

鈴木言葉を肯定して、橙子はタバコを口に加え、火をつけた。ゆったりとそれを吸って吐き、だがな。と続ける。

「人間としては、間違いなく私や春佳よりも優秀だ。羨ましくすら思うよ。私はそんな感情など　　とうの昔に忘れてしまったからな」

目の前の人間にそう言って、魔術師は再びタバコを加えたのだった。

「教官は、何故そんなにもお強いのですか？」

「他の人より訓練して、知識を得たからだな」

ラウラは、目の前に立つ自分と千冬を見つめた。

夢を見るとは珍しい。とひとりごちて、けれど千冬の出ている夢を嬉しく思い、しばし二人を見つめた。この場所も見覚えがある。これは、懐かしき記憶でもあった。

「それと……そうだな、私が姉だからだな」

「姉……ですか？」

「ああ。言っていなかったか？ 私には弟が二人いる。双子なんだが、これがまた似ていなくてな」

どこか照れているようで、そして嬉しそうに言って、千冬は微笑ん

だ。ラウラが見たことのない表情のそれは、彼女にとって意外で、そして、あの強い千冬がこんな表情をすることが、少しばかり嫌だった。

「その二人を守りたい。というのは間違いなく私の糧となっているだろう。」

そうだ。機会があったらお前にも会わせてやろう。特に春佳  
下の弟はお前と波長が合うかもしれん」

「それは、何故ですか？」

「今でこそ明るくなったが、昔は最初に会ったときのお前のようだったんだよ。左右もわからないようで……それこそ、何に悩んでいるのか本人もわかりかねていたみたいでな。だからと思ったわけだ」

「……私は左右くらいわかります」

「言葉のアヤだ、真に受けるな」

からかうように言って、千冬はラウラに振り返った。

その笑顔に見惚れて、そして、千冬をそんな表情にさせる弟達に、嫉妬した。

「それと、一つ忠告しておく。  
あいつらに会うのなら気は強く持て。あいつらはなかなかどうして、未熟者の癖に妙に女を刺激する。油断していると惚れてしまうかもな」

「教官も、惚れているのですか？」

「馬鹿を言うな、私は姉だ。家族間の愛はあれ、情愛を抱くことはない。ただの家族自慢みたいなものだ。あいつらは二人ともとりわけ弟の方の春佳は自分をよく偽善者だとかっこつけるが、根はどうしようもないお人好しだ。

もし会うことがあつて、何かあつたら話してみるといい。なんだかんだで力になってくれるだろう」

そう言う千冬に頷くも、内心でそんなことはないだろうと否定した。自分の目標は千冬であり、それ以外はいらないからだ。

だから、ラウラには千冬が何を言いたいのか、よくわかっていなかった。

「……ここは」

「保健室だ」

「！教官！」

「織斑先生と……まあいい。

Vシステムは知っているな？ あれがお前のISに積まれていた。今学園がドイツに問い合わせているところだ。近く、ドイツ軍に委員会から強制捜査が入るだろう」

千冬の言葉にラウラは目を丸くした。そしてその意味を咀嚼してきたのか、どんどん暗いものになっていく。

「……きっと、私の負の感情が引き金になったのですね。

そして、そうになっても、私は負けた。ああまでして、望んだのに」

あなたに、なることを。

内心で呟いて、ラウラはため息を吐いた。それだけで、その内心は千冬にも伝わってしまう。千冬は少々バツの悪そうな顔をして右手で前髪を掻き上げ、それからため息を吐いた。

「ラウラ・ボーデヴィッヒ！」

「は、はい！」



「質問だ。お前は誰だ？」

「私……ですか？ 私は……私、は……」

名前を言うだけのはずの、本来ならば何でもないような質問。なのに、答えることができない。

そんなにも自分は虚無なのかと。悲しさと悔しさが襲い、ラウラは自分にかかっている布団を強く握った。

「わからないか、答えられないか。

ならばちょうどいい。お前に課題をくれてやる」

「課題、ですか？」

「ああ。お前はこれからラウラ・ボーデヴィツヒになるがいい。この三年間は在籍しなければいけないんだ、時間はたっぷりあるぞ。それでも足りないなら、死ぬまで悩め。ただ、卒業する際に私に何者であるか聞かれて、ラウラであると答えられるくらいにはしてあげ。いいな」

「え、あの……」

「返事は!？」

「は、はいっ！」

「よろしい。

せいぜい悩めよ、小娘。と、最後に一つ。

お前では私にはなれん。それでもあいつらの姉というのは忙しくてな」

ニヤリと笑って、千冬はドアへと振り返った。ちょうどラウラからは見えていないようだが、そこには誰かいるのだろうか、なんとなく人の気配がする。とラウラは少し警戒した。

「では、私は戻るから後は任せたぞ。

始末書をこれでチャラにしてやるんだ。サボるなよ？」

「大丈夫です。サボったりしないってどっかの姉にしっかり仕込まれてるから」

「それはいい姉を持ったな。では、またな」

ドアの開閉する音がして、足音が遠ざかって行く。少しして、再び室内に足音が響いた。

自分に近づく人影を見て、ラウラは思わず息を呑んだ。

「織斑……春佳……」

「やつほ、気分はどう？」

「……私を笑いに來たのか」

友達に話しかけるような気安さで言って、春佳は右手を上げて微笑んだ。

それから先ほどまで千冬が座っていた椅子に座り、缶コーヒを開けて心外そうな表情でラウラに視線を向けた。

「何でそうなるのさ。千冬姉にキミの念のための看病を任されただけだよ。」

それに、敗者を笑うような趣味は持ち合わせておりません」

「そうか」

「そ。ま、一応お疲れ様」

「……」

反応がないことに苦笑するも、まあいつか。と内心で呟いて春佳はコーヒーに口をつけた。

少しして、ラウラは静かに深く息を吸い、口を開いた。

「……お前は、何者だ？」

「ん？ 僕？ 僕はね、織斑春佳。血どころか肉すらもわけた兄がいるけど、絶対にそこだけは変わらない。どんなことがあっても、僕は織斑春佳だ。僕の全ては僕のモノ。誰にだって渡さない」

例え、自分自身にも。と小声で呟いて、再びコーヒーに口をつける。春佳の答えにそうか。とラウラはやや落胆したように答えた。

「本当に弱いのは、私だったのか。お前がそうなのだ、織斑一夏もそうなのだろう」

千冬になろうとして、自分の虚無を誤魔化していた自分とは違う。なるほど、どうりで負けるわけだ。と少女は自嘲気味に笑った。

「何もない私が、どうにかできるものでもなかったか。冷や水をかけられた、とはこういうことを言うのだな」

「そうなのかもね、別人みたいだよ」

「私は、自分が何者がよくわからないからな」

「いいんじゃないの？」

何も考えずに答えたから、春佳の言葉にラウラは驚き、視線を春佳へと向けた。

春佳は笑みを浮かべて、もう一度同じ言葉を口にした。

「だから、いいんじゃないの？  
わからないならわかればいいんだよ。ね？」

「ずいぶん簡単に言ってくれるな」

「うん。だって、経験者だもん」

「そう、なのか？」

「そうだよ。昔ね、僕は僕が誰なのかわからなかったんだ。ある人

と出会ってその悩みは解消されたんだけど、今度は自覚しちゃった分の歪みが入っちゃってさ。結構酷いことをしてたりしたんだよ。僕が身内って定義した枠内以外の人間なんて、みんな僕のストレス解消道具にしか思ってたなかったし」

「夏くんと千冬姉には内緒だよ？　と言って、春佳は人差し指を立ててシーと笑った。

ラウラとしては、春佳がそんなことを思っていたことに驚きを隠せないように、素直に頷いていた。

「で、僕はそんな僕も嫌いだね。ストレスは溜まる一方だったんだよ。その度に誰かでストレスを解消して。ホントに最悪だったって言っている。

でも今の親友に会って、僕は”自分が自分”でいられる方法に気づいたんだ。それから、ずっと今の僕のままでいられてる。

ね、だから大丈夫だよ」

「……それはお前が強かったからではないのか？」

「そんなことないよ、僕自身は弱いもの。いつまた壊れるかわからないしね。

強かったのは、周りのみんな。みんなが僕を助けてくれた」

「ならば尚更私には無理だな。その”周りのみんな”がない」

「そんなことはないと思うよ。例えばさっきの千冬姉だってそう。キミのことを想ってのことじゃなきゃあんなことは言わないよ。それに……そうだね、いないなら作ればいい。まだ一年なんだから、友達の百人くらい余裕だよ」

「どうかな？」と笑って春佳は首を傾げた。

ラウラは相手の言葉をゆっくりと考え、できるものなのかと思考した。

今はもう負けて、千冬にああ言われたからこうして春佳とも普通に話しているが、自分は千冬以外の人間とまともにコミュニケーションを取っていない。できるとは、思えなかった。

「うーん、難しいかな。じゃあ仕方ない」

ラウラの態度からその心境を理解したのか、春佳は苦笑して肩を竦めた。

自分よりも人との関わりに慣れていない少女の気持ちは、わからなくもなかった。だから、

「僕が最初の一人目になるよ」

「え……？」

「だから、僕がキミの”周りのみんな”の最初の一人目になるよ。  
僕はキミじゃないからキミが何をすべきかはわからない。けれど力  
にはなつてあげれる。」

大丈夫、絶対に一人になんかならないから。ううん、僕がそう  
させない」

ポンポンと頭を軽く叩き、春佳はニツコリと笑った。

その笑顔に表も裏もなく、驚くほど素直で、ドクン。とラウラの心  
臓が跳ねた。

「い、いいのか？」

「良いも悪いもないよ。僕がそうしたいからするだけだし」

「……随分と強引だな」

「ふふ、これは織斑家のみんながそうだからね。とりわけ僕は偽善  
者で利己主義者だから特に酷いよ？」

そんな風にしてるキミを見てたくはないから、無理やりにも助け  
てやる。覚悟しておいてね？」

ああ、こういうことか。

春佳は軽く頭を叩く動作から撫でる動作に変えた。撫でられながら、  
ラウラは先ほどの夢の中の千冬との会話を思い出していた。



この男は千冬の言う通り、根はどうしようもないお人好しみたいだ。けれど、ラウラはそれがたまらなく嬉しかった。確かに、油断しない方が良かった。この男の笑顔に、ラウラはときめいてしまっていた。

「完敗だ。教官にも、お前にも、お前の兄にも負けた。ずるいな、織斑家は」

「世界最初の男のIS乗りと、世界最強のIS乗りがいるところだよ？　ずるいに決まってるじゃん」

「……お前が一番ずるいのだが」

「え？」

「なんでもない」

首を傾げる春佳に言って、ラウラは笑った。ぎこちなくとも、しっかりと笑った。どうしようもなかった。惚れてしまったと、あっさり自覚して。

「そっか。」

「それじゃ、はい」

ラウラの笑顔を見て嬉しそうに笑った春佳は、右手をラウラへと差し出した。  
いきなりで右手を見つめ首を傾げるラウラに、春佳は続けた。

「握手だよ。今度はちゃんと掌と掌てのひらを合わせて、しっかりとね」

「……ん、そ、そうか」

恐る恐る、春佳の手を握るラウラ。自分に笑いかける少年の手は、ひんやりとしていて心地よかった。

「あ、ところでさ、それって、見えてるの？」

「へ？　　っ！」

春佳の質問と、その視線にラウラは自分の身体の違和感に気づいた。いつもは左目を覆っているはずの眼帯がなかったのだ。

咄嗟に手で押さえて、眼帯を探した。幸い、テーブルの上に置いてあり、すぐさま左目に装着した。

「見えては、いる。……好きではないが」

「そっか。綺麗な目だと思っただけだね」

「世辞はいい」

「お世辞なんかじゃないよ。僕　の友達にも一人、右目が見えてない人がいるけど、その人の右目はとても綺麗だと思うし、気に入ってるみたいだったよ。」

「少しずつでも、そうやって好きになっていけるといいね」

「そつと、自分の右目を触ろうとして止めて、誤魔化すように笑った。けれど、自分の言っていることに嘘偽りはなかった。橙子のくれた右目は、本人には言えないが綺麗な色をしてると思っているし、気に入っている。そんなところまで似なくてもいいのにね。と内心で笑って、春佳はコーヒーを飲んだ。」

「そつ、だな。ふふ、協力してくれるんだろう？」

「もちろん！」

「……やはりずるいぞ、お前は」

笑顔で頷く春佳に呟いて、ラウラも同じように笑ったのだ<sup>わたし</sup>った。  
彼女は、今までにない清々しさを感じていた。これから私はラウラになる。その為の努力も、なんだか楽しくなりそうな気がしていた。

- side 一夏 -

「ふう……」

大浴場に浸かって、俺は一息ついた。今日はいろいろなことがあったけど、これに浸かれたのもう何でもいい気がした。山田先生には心から感謝したい。

俺は風呂つてのが好きなんだ。春佳は「シャワーで事足りる」とか言うんだけど、やっぱり風呂だ。このなんとも言えない脱力感がたまらない。春佳め、俺の双子の弟なのにどうしてわからない。

「そっいえば」

あの時、ラウラ・ボーデヴィツヒが暴走してみんなが避難してる時に見かけた春佳は、とんでもなく冷たく見えた。

確かに、あいつは普段から自分を冷めてるって言っていたりしてるけど、それは結局かっこつけてるだけで、なんだかんだお節介をするようなやつだ。けど、あの時の春佳は本当につまらないものを見るかのような目だった。生まれてからずっと一緒にいるけど、あいつの

あんな表情はじめて見た気がする。

けど、さっき会ったときはいつも通りだったし、気のせいかもしれない。あいつ、なんか罰則をしたみたいで今日はラウラの看病をさせられてるらしい。あの春佳が怒るほどに犬猿っばいから不安で大丈夫か？ って聞けば、和解したとのこと。大丈夫だよ。と笑っていた。

「うん？」

考え事していると、不意に大浴場のドアが開いた。  
誰だ？ 男は俺一人のはず……

「お、お邪魔します」

「なあっ！ シャルル!？」

そこには、バスタオル一枚に身を包んだシャルルが立っていた。いや、確かにシャルルは男ってことになってるから……けど、

「ち、ちよつと待て」

慌てて身体ごと後ろを向いてシャルルを見ないようにする。  
ちやぶ。と湯船に何かが入る音がして、俺の背中に何かが当たった。

「シ、シャルル!？」

「せ、せつかくだから僕もやっぱり入ろうと思って。  
あ、で、でも見ないでよ!？」

「わかってるっつの」

そんなことしたらダメに決まってる。

……なんで今後ろからため息が聞こえたんだ？

「……あのさ、一夏」

「お、おう」

「ありがとう」

「え？」

ありがとう？ サンキュウ？ シエイシエイ？ 何故にそんな単語  
が出てくるんだ？

どちらかと言うと俺がありがとうではないんだろうか。  
それを言うと、シャルルは「違うの」と言って笑った。

「試合が終わったと言おうと思ってたんだ。ありがとうって」

不意に浴槽の床についていた手にシャルルの手が重なった。  
一瞬、びっくりして心臓が跳ねた。

「一夏がここにいろって言うてくれたから、そんな一夏がいるから、ここに居ようって思えるんだ。だから、僕はここに残ろうと思う。まだ、自分の居場所を見つけてないしね」

「  
そっか」

そう言うシャルルの口調は明るかった。きっと、しっかり考えて、決めたんだろう。

不思議と俺も明るく答えていた。

「だからありがとう。それと、もう一つ、僕のあり方にも気づかせてくれたから」

「  
そうなのか？」

「うん。」

他の人には負けたくないくらいには」

「？ 勝負事なのか？」

俺が首を傾げると、シャルルは露骨にため息を吐いた。  
なんだなんだ、なんだってんだ？

「やっぱり、一夏って鈍いよ」

「なっ？ そんなことはないぞ」

「気づかないのは本人だけってね。ちょっと、憎らしくなっちゃうな」

「う、すまん」

よくわからないけど、謝っておいた。少なくとも、春佳ほど鈍くはないと思うんだけどなあ。

「いいよ、許してあげる」



ただし、と続けて、シャルルの手が俺から離れた。同時に湯船に波紋を感じる。シャルルが動いてるみたいだ。俺は振り返るわけにもいけないから、ちよつと確認のしようがないが。

「シャルロットって呼んで」

「シャルロット？」

「そう。お母さんがつけてくれた、僕の本当の名前。二人きりの時間でいいから、そう呼んでくれないかな？」

「ん、わかった、シャルロット」

「うん」

嬉しそうに言つて、俺の背中に面積の広い何かが触れた。それがシャルル……じゃなくて、シャルロットの身体だって気づいて、途端に慌てる。

「あ、あの、シャルロット？」

「お礼みたいなものだから、気にしないで」

いや、気にするって。俺男だぞ！？ 春佳みたいなのと違って正真正銘の男だぞ！？

「……居場所、見つかるといいな」

「見つかる、じゃなくて、見つけるんだよ」

「ふふ、そうだね」

シャルロットにつられて、俺も笑った。

そっか、力になれてたのか。なら、良かった。

”周りのみんなに”支えられてきた俺は、そうされてきたように、俺も”周りのみんな”を支えたいと、優しさを少しでも与えたいと思っていた。

だから、自己満足かもしれないけど、そう言われて、とても嬉しいと思う。

それが、俺の”そうありたいと願う姿”だから。

「……だけど、この体勢はまずいと思うんだ」

「一夏、何か言った？」

「あ、ああ。その……そろそろ離れてくれないと、正直いろいろとまずい事態が起こりそうなんだが」

俺の背中に当たる、シャルロットの華奢な身体。そして、そこにある確かな膨らみが、その……な。

大きさは普通くらい（と言ってもどれくらいが普通なのかはわからないが）なんだが、張りのあるその感触が……って、何を考えてるんだ俺は。

「え？ あ、ああっ、うん。じゃ、じゃあ僕身体を洗って来るね！」

慌てたように言って、シャルロットの身体は急速に離れて行った。残念な気もしないではないけど、ホッとした俺は小さくため息を吐いた。

「……ま、何はともあれ、お疲れ様」

それから天井を見上げて、俺は白式と俺自身にも労いの言葉をかけたのだった。

「おはよー」

早起きをしてしまった僕は、一足先に教室にいた。もう少しで先生が来るからか、みんな一気に入ってきて来る。もう少し早く来てもいいと思うんだけど。

昨日あれからボーデヴィツヒさんと寝る少し前まで話していた。僕のこと、一夏くんのこと、ボーデヴィツヒさんの知らない千冬姉のこと、織斑家のことばっかだけど悪くはなかった。このままボーデヴィツヒさんもいい方向に進んで行けるといいなっと思う。無論、協力するけどね。

「はい、席についてくださーい」

あ、山田先生が入ってきた。もうホームルームの時間か。

山田先生はいつも以上に拳動不審で、僕らをきょろきょろと見ていた。

「あの、皆さんにまた新しいお友達を紹介することになりました」

「……へ？」

「入って来てください」

驚く間もなく、入って来た生徒を見て絶句した。えっと、シャルル……だよね？  
よく似た双子とかじゃ、ないよね？

「シャルロット・デュノアです。皆さん、改めてよろしく願います」

「……つまり、どういうこと？」

「デュノアくんが、デュノアさんだったってことです」

独り言のような僕の呟きに、山田先生は丁寧に返してくれた。  
要するに、シャルルは女の子だったのだ。僕の中の”彼女”みたいなのと違う、本物の。

……あれ、ちよつと待てよ？

「お兄ちゃん。もしかして……知ってたのかな？ かな？」

「な、なんでそんな鉈でも振り回しそうな女の子の言い方をしてくるんだよ」

「質問の答えになってないよ、一夏くん」

「う……」

……あー、これは知ってるな。酷いや、僕だけ知らずに男子三人で仲良くやれてるって思ってたのか。  
まあ、僕も人には言えないような隠し事してるからあまり言えたもんじゃないけどさ。

「そう言えば、昨日から男子の入浴時間があつたよね」

「まさか……」

瞬間、教室が凍りついた。うなじの部分が焼けるように疼いてる。  
誰？ こんな強烈な殺気を振りまいてるのは！

「……あー」

真横と真後ろにいました。言わずもがな、僕らのファースト幼馴染とイギリス代表候補生でした。  
やばい、凄くやばい。セシリアさん、ブルー・ティアーズを展開し

ないで！　ってかなんで千冬姉はいないの！？

「いち　か　さ　ん　？」

「せ、セシリア？」

「……覚悟なさい！」

慌ててかがむ。怒り狂ったセシリアさんは、一夏くんに向けて引き金を引いた。

って、死んじやう死んじやう！

「っ！」

けど、それは一夏くんへと当たらなかった。ホントに良かった。じやなくて、誰が……？

「大丈夫か？」

「ボーデヴィッヒさん？」

ISを展開したボーデヴィツヒさんがそれを防いでいた。僕に視線を向けて、心配するように言ってきた。とりあえず頷いておくと、良かった。と彼女は呟いた。

「……よし、一気に、一気に行け、私」

何かを呟いてるけど、とりあえず助けてもらったなら礼を言わないと。

「あ、ありがと、ボーデヴィツヒさ」

僕の言葉は途中で遮られた。同時に、僕の唇に何か柔らかいものが当たって、それがボーデヴィツヒさんの唇だってわかった瞬間、僕の思考は停止した。

「……何が、どうなったんだ？」

一夏くんの声が聞こえた気がする。けど、言葉に変換されない。そこまで頭が回らない。

少しして、ボーデヴィツヒさんの唇が離れた。

「お、お前は私の嫁にする！ これはもう決定事項だ、異論は認めん！」



そんな言葉が聞こえて、直後、教室内がとんでもない喧騒に包まれた。

残念ながら僕は、そんなことに反応する余裕なんてなく、視界は暗転し始めた。

「お、おい春佳!？」

暗くなっていく視界の中、僕は一夏くんのそんな言葉を聞いた気がした。

……こついつの、ダメなんですよ、僕。

- s i d e   o u t -

「もすもすひねもすー! はーい、みんなのアイドル、篠ノ之束さんだよー!

つて、ああダメ! 切らないでちーちゃん!」

暗い、研究所を思わせる場所で、その場の雰囲気似合わない明るさで束は話していた。

なんせ、着信の相手は自分が人間と認識できて、幼い頃から一緒にいた織斑千冬なのだから。

「……お前なら知っているだろうが、VTシステムは」

「私じゃないよ、ちーちゃん。東さんはね、完璧にして十全。だから、作るものも完璧にして十全じゃないとダメなの。あんな不細工なシロモノは私は知らないよ」

「そうか」

少し、安堵の混じった声に東は口元を笑みに変えた。信用されていいのかとちよつと悲しかったが、やっぱり幼馴染、ホツとしてくれることが嬉しいのだ。

「ちなみに、あんな不細工なモノを作ってくれた研究所はつい二時間ほど前にこの世から消えてもらったから。ああ、もちろん死亡者はゼロ。あんなの赤子の手を捻るより簡単……と言うか、赤子の手を捻るって難しいと思わない？ 私だけかな？ ふふふ」

「……春佳見たいなことを言うな」

「あれれ、ハルくんもそんなことを言うんだ。やっぱり私に似たタイプなんだよ、彼も」

「私の弟を変人にしないでくれ」

「あ、ひどーい。けどねちーちゃん、ハルくんもなかなかの完璧主義者だよ？」

「造りモノのアルバイトをしているくらいだから、当たり前だ」

それだけじゃないんだよー。と言おうとして、なんだか春佳に殺されてしまいそうな気がして、束は一人笑うだけにとどめた。

「最後にもう一つ。

魔術師、と言うものを知っているか？」

「……知らないよ。

束さんは、興味の無いことはどうでもいいから」

「……そうか、邪魔をしたな。  
では、またな」

「いやいや、邪魔なんてとんでもない。私はちーちゃんの為なら二十四時間フルオープンだよ！」

束の反応に無言で切れて、通話が終わる。  
突然切られたにも関わらず、束は笑顔のままだ。

「ごめんねちーちゃん。束さんは約束を破りたくはないから、こればかりは答えられないよ？」

果たして、ハルくんのことを言ってるのかは怪しいけど」

束の知る幼い頃に比べ、豹変したと言ってもいいほどの変化を遂げた少年を思い出して、束は笑った。  
あの子は壊れてる。と、嬉々として殺してもいいかと聞いてきた時に痛感した。

そうした原因であろうあの魔術師には殺意に近いものを覚えるが、勝てる気がしないので何もしない。一応仕事を頼んでもあるので、せいぜい頑張ってもらおう。と一人結論付ける。  
そんな彼女の携帯から、着信音が響く。

「おお？ おおっ！」

凄まじい速度でそれに飛びついて、束は携帯を開いた。

当たり前だ、だって相手は自分のたった一人の妹にして最愛の家族。

「……姉さん」

「ハロー 箒ちゃん！ うんうん、わかってるよ？ 箒ちゃんが私に電話してきた理由。  
欲しいんだよね、キミだけの専用機。オンリーワン もちろん用意しているよ、最ハ高性能にして規格外仕様。マジシャンだってびっくりな箒専用のとっておきを」

「……」

「聞いて驚け見て騒げ、その機体を。」

真紅あかつはきを持つ椿の花を。そう、その名も

『紅椿』」

妹からの返事はない。けれど、束は笑った。

その笑顔は一人の姉としてなのか、それとも研究者としてなのか。その両方なのか、それを知る者は 誰もいない。

## 十二（後書き）

……実は、この三章はその四くらいでルート分岐があったんです。シャルルートとラウラルートで考えていて、シャルが春佳側ヒロインになってた場合、ラウラに春佳が魔術師だとバレることになってました。

悩みに悩んだ末、ラウラルートとなりました。

シャルルートは要望があれば短編にでも書こうかなと思ってます。と言っても本編進めるからだいぶん先になりそうですが

さて、いろいろあった三章ですがいい感じに春佳のこともばらして来て、やっと始まった感じがします。

これからも頑張って書きますので皆様の時間潰しにでもなれば幸いです。

では、次章のあとがきでまた会いましょう！

## 一（前書き）

遅れてすいません！ 課題やったりテスト間近だったりで時間が全然ありませんでした……

しかもまだテストは終わりじゃない。そんなわけで執筆はちよつと遅れてしまいかもしれませんがご容赦ください。

では、始まり始まり。

真っ赤だった。

目を閉じてそのまま太陽を仰いだときのような、けれど、あんなに明るい色でもない、血のような黒の混ざった赤が、僕の視界を覆っていた。

「……………あ、ああ……………」

右目を襲う激痛に、叫ぶことさえ許されない。目を開いても見えるのは左側だけ。さっきまで見えていたはずの右側は赤と黒に覆われていて、見える気配を見せない。

「きひひひひ、そうだ、苦しめガキめ！ 貴様のようなヤツはこの腐った世の中を知らない。女尊男卑の惨さを知らない。だから生きている価値などないいつ！

女に媚びを売る可能性は全て摘む。よって、苦しんで死ね」

吐き気のするような声に、その主を見ようと視界を上げる。いた、歪んだ笑みを浮かべて僕を見下ろす男が。

無数の叫び声と、下卑た笑い声。時折肉を裂く音が、死に瀕しているとは思えないような叫びが響いていた。

僕は、小学六年ながらに理解した。この人達は悪いヤツだと。



「ッ!？」

そう認識した瞬間、僕の心臓が大きく跳ねた。まただ、昔から人と競うようなことになるといつもこうなる。いじめられた時もそうだ。これは、なに……？

「さあて、次はどこを無くしてやろうかなあ」

全身の痛みに僕は動けなかった。下卑た笑顔が僕に近づく。

「い、や……こないで」

殺されてしまう。とさすがに僕も理解できた。

わかった瞬間、怖くなった。泣きたくなった。そして、悔しかった。千冬姉が、良いことをした人には良いことが返ってくるって言うってたはずなのに、僕は殺される寸前だったのだ。悪いことなんか、してないのに。

こんなに悔しくて、嫌な気持ちになるのは初めてだった。

「……だったら、」

悪いことをした人は、悪い報いを受けなければならない。

「女だったらたつぷり可愛がってやったのにな、残念だ」

なら、この人は報いを受けなければならない。良い子の僕がされたのと同じことをされないといけないんだ。  
だから

「おまえも、いつしょ」

僕は目の前の男の右目に人差し指を突き刺した。

人差し指は暖かかった。最初は先端がめり込んだだけだから、それをそのまま押し込んで、ぶちゅ。と気持ち悪い音を立てて貫通させた。

男の、まるで獣のような悲鳴が響き渡った。ああ、やっぱりこうであるべきなんだ。

「あは……あはは、なんだあ、こうすれば簡単だったんだね」

僕は悪い子じゃない、なら、僕がこんな目に遭う必要はない。人差し指をグリグリして遊ぶ。急に全身の痛みが引き始めた。なんだろう？  
なんでもいいか。

「そうだよ、こうすれば良かったんだ」

苦しく感じるとき、こうすれば良かったんだよきつと、僕の苦しみはこれに気づかなかったからあったものなんだ。  
でも、だからこそ僕は良いこともしなきゃダメなんだ。  
こついう、人を殺そうとする人を　すために。

「あは、あははははは！」

嬉しくて、笑いが止まらなかった。そつか、僕が苦しかったのはこついうわけだったんだ。  
勢いよく人差し指を抜いて、僕は男の人を見上げた。

「ぐああ……このガキがあ……てめえ……ぶつ殺す！」

殺す、と言われて心臓が大きく跳ねた。殺すかあ、ああ……なんて心地良い言葉なんだろつ。でも、キミのそれは悪いことだよね？

なら、そうおつのむくいを受けなきゃ。

だから、躊躇いなく、僕は男の左目に人差し指を刺していた。  
また聞こえるうるさい叫び声、感じる変な感触、でも、僕は笑っていた。

「……………」

目が、覚めた。飛び起きたとかじゃなくて、そうであることが当たり前のように、ごく自然に。

けど、目が覚めた理由はわかる。飛び起きてても問題ないような、あの時の夢だった。

僕が僕に目覚めた日。右目を無くしたけど、素晴らしいものを得た日。そして、僕が橙子さんと出会った日。

あの直後の記憶が欠けてるけど、僕は橙子さんと出会って、今の右目を貰った。ホント、とても良い日だったと思う。

「ふふ、こういうのって普通は嫌な思い出になるものなのに、笑顔で振り返っちゃうだなんてね」

嫌悪する理由なんて見当たらない。狂ってる人間がその狂いに気づいたんだから。

あの日がなかったら僕は今ごろ起源覚醒した殺戮者となって式か橙子さん辺りに殺されていただろう。今のような僕だからこそ式と互角に戦えるのであって、あのままの僕なら戦闘にすらならず、バラバラだったと思う。

つくづく、僕は運が良い。

「うん？」

そこまで思考して、僕は腰から下に何かが巻きついているような違和感に気づいた。

基本的に半袖長ズボンで寝てるので、あんな夢を見たからか、最初は全然気づかなかった。

「何、が……？」

少しばかり警戒しつつ、僕は布団をめくった。来週には臨海学校があつて、夏が本格的に到来してきたせいか、一枚しかないそれは簡単にめくれた。

めくれて、僕は絶句した。

「……う、ん……？」

そこそこに長い銀髪と、白い肌。見覚えのある眼帯もつけた女子が、僕の腰に巻きついていていた。

言わずもがな、ラウラ・ボーデヴィツヒさんである。

「なっ、なななな？」

なんでここに！？

と言うか、いつの間に？

僕は別に熟練した人斬りとかじゃないから完璧ではないけど、それでも人の気配には敏感な方だ。僕に敵意とかを抱いているなら幽霊にだって気づく自信がある。なのに、僕は起きなかった。

「軽くショックなんだけど……」

「……なにがだ？」

「わっ」

起きた。ボーデヴィツヒさんは僕から離れて上体を起こして、眠気を誤魔化すように目を擦っていた。

って、なんで全裸！？　僕がめくった布団が辛うじて肩にかかっているからあれだけど、このままだと見てはいけない場所まで見えてしまいそうで、僕は慌てて視線を逸らした。

「なんでもない！　と言うか、何でここにいるのさ！」

「……夫婦とは何事も包み隠さず、そして寝食を共にするものと聞いた。お前は私の嫁だ。だからこうして一緒にいておかしいことなど何もあるまい」

「あります！　第一、僕がいつキミの嫁になったのかな」

「日本では、気に入った者を”俺の嫁”と言う習慣があると聞いた。よって、お前は私の嫁となっている」

眠気が残っているのか、少しろれつの回っていない話し方で、ボーデヴィツヒさんは僕の質問に返答した。

その嫁つてのはあくまでテレビやパソコンの画面、それか紙の向こう側の人達に対して有効なだけであって、僕には意味がないと思うんだけど。

と言うか、あの日から僕とご飯と一緒に食べていたのはそう言うわけだったのか。それで鈴ちゃんが何故か不機嫌になって、ボーデヴィツヒさんと一悶着あつたりして、ちよつと大変だったんだよね。今は和解したみたいで話をするのを見たりするけど。ホント、どうなるかと思つたよ……鈴ちゃんがボーデヴィツヒさんを泣かしたりね……

何か、失言をしていたのはボーデヴィツヒさんみたいだったけど。

うん、和解してくれてホントによかつたよ。

「じゃなくて！僕は誰かの嫁になつたつもりは無いからね！」

きつぱりと言つてやつた。そうだ、僕は式みたいに依り代にしてるモノがない。

そういうものが見つからないし、今のところ”彼女”と上手く理性と本能を分けていられるからだ。

そついうのを抜きにしたって、さすがに嫁になつたつもりはないし、なるつもりもない。せめて恋愛くらいは普通の恋愛を試してみたいもんだ。叶わぬ願いだつてわかつていてもね。

まあ、好みの女性は？　って聞かれると答えられない僕だから、そついうのはかなり先の話になると思うけど。

「それに、気に入った相手に言う言葉でもないよ。やっぱり嫁にするなら好きになった相手じゃないと」

「……なるほど、これが噂の……  
確かに兄となんら変わらない鈍さだな」

「なっ……心外です。撤回を要求する」

ビシッと人差し指を突きつけて（本人は見ないようにして）、少し強めに言う。さすがに一夏くんほど鈍くはないと思うんだ。  
そもそも、僕は一夏くんみたいに女子からきゃーきゃー言われるようなタイプでもないしね。

「却下する」

「それを却下……うわっ!？」

僕の要求を却下するってことを却下するよりも早く、何かが僕の右手首を掴んで僕自身を引き倒した。

それはボーデヴィツヒさんの両手で、抱え込むようにされて、そのまま腕ひしぎの関節技へと入っていく。



「ちよつ！ 何を……」

そこそこ強くやってるみたいだけど、残念ながら僕にこれくらいの攻撃じゃあダメージが通ることはない。

ってそうじゃなくて、と言うか痛がった方が自然じゃないんだろうか？

そんなことを考えてる間にも、僕の腕を抱えるボーデヴィツヒさんの力は強くなっていく。

「お前はなかなか身体能力がいいみたいだが、寝技はできないようだな。ISに乗れなくとも身体は鍛えておいた方が良い。

……私が指南してやろう」

「なんでそこで顔を赤くするんだッ！」

半袖の僕の腕にボーデヴィツヒさん（ほぼ全裸）の身体が当たるわけ、なんだか妙に柔らかいなぁとか思ったりして、いよいよもって僕も叫びたくなってきた時に、僕の部屋のドアが開かれた。

助かった！ けど、この状況って大丈夫なの？

「春佳、一夏を見なかったか？ 稽古に誘おうと思ったらもう部屋にいなかったのだから……」

声から察するに箒ちゃんっぽい。せめてノックとかはして欲しかった

たかな。や、今はこんな事態だから助かるんだけど。

「な、なな……」

「……箒ちゃん、助けて」

「なんだ、夫婦の寝室に入ってくるなど無作法だぞ。  
それと、義兄上あにうえならシャルロットと外出するみたいだったが」

「誰がキミのお兄さんになったのさ、まったく。  
って箒ちゃん、へるぷみー！」

学年別トーナメントを終えて初の休日は、なかなかハードな始まり  
を迎えたのだった。  
……できれば平穩に迎えたかったのは僕の心の内に隠しておくこと  
にする。とほほ……

「はあ、疲れた」

箒ちゃんにどうにか助けてもらった僕はそのまま稽古に行きそびれ

てしまった箒ちゃんと食堂に来ていた。

一通り朝食を食べ終えて、僕はコーヒーを飲みながらため息を吐いた。ボーデヴィツヒさん、キャラ崩壊しすぎじゃないだろうか。

「むっ……まさかもうシャルロットが動き出していたとは……」

向かい側には同じくため息を吐く箒ちゃん。いつの間にかみんな名前呼び合うくらい仲良くなったのにはびっくりだけど、うん。仲良きはいいことかな。

「一夏くんも水着持っていないって言ってたからね。たぶん買いに行っただんじゃないかな」

「くっ……汚いぞシャルロット！」

「うわわっ、ちょっと箒ちゃん怖いって」

割り箸じゃないんだからそんな風に箸を折らないでよ箒ちゃん。ホントに人間ですか？

「む……すまん。」

そう言えば、春佳は知らなかったのか？ シャルロットのこと」

「知らなかったよ。シャルルが女の子だったってのは。確かに男のわりには女の子っぽいなあなんて思ってたけど、僕が言えたことでもないからそういうものだって納得してたんだけどね」

更に言えば、一夏くんがシャルル攻略してたことにもびっくりだ。たぶん本人に自覚がないだろうから、いつも通りのパターンなんだろうと思う。さすがと言うかなんと言うか……

「ふふ、ホントにいろんな人が集まるよね、うちの兄貴って」

「……随分楽しそうだな」

「だって楽しいもん」

「性悪め」

「お褒めに預かり光栄ですってね。ま、箒ちゃんも頑張ってたね？」

「……わかっている。」

そのうちお前も驚かせてやるからな」

どこか含みのある箒ちゃんの笑顔。なんだかホントに秘策があるみたいだ。

それじゃせいぜい驚かされるとしましょうか。僕も微笑んで、コーヒを一気に飲み干した。

「さて、と」

「なんだ、春佳も外出するのか？」

「うん、僕も水着を買わなきゃでさ。友達とちよつとね」

今から出れば約束の時間には余裕で間に合うかな。あいつはそういうので怒るようなヤツじゃないけど僕自身あまり遅刻するのは好きじゃないんで出ることにする。

「あの、両儀さんと言う人か？」

「まさか。あいつに水着買いたいから手伝えって言ってもやだって言われるよ。

もし良くつてもあいつも水着なんて持つてるか怪しいからちよつと任せづらいし」

よって、もっと真つ当な感性の持ち主に依頼してある。僕も水着は

どれがいいかわからないからあいつに任せるのが一番だろう。  
ちよつとしたおまけとお昼ご飯を奢るって条件で受けてくれた。

「そんなわけで僕はもう行くね」

「うむ、では、またな」

うん。と篝ちゃんに笑ってからおぼんを流しへ持って行って、僕は食堂を後にしたのだった。

「遅い！」

「集合時間の五分前に着いた人間に言うことかな、それ」

「私達は今と前から来てましたよーだ。ね、兄さん」

「まあ、実際僕らが先にいたからね。久しぶり、春佳」

「……兄さんは春佳に甘すぎです」

そうかな？　と首を傾げる幹也に僕は苦笑だけ返してこの兄妹の隣りに並んだ。

そう、今日のお買い物相手は黒桐兄妹。鮮花に頼んだところを渋られたから幹也オマケを呼んで再びお願いしたところ、更にお昼も奢れって言われたので約束もしてたし了解して来てもらった。

白純の件の時に僕は見てるだけで何もなくて、その結果幹也は片目をなくしてしまったから、その時に鮮花と約束したのがお昼を奢ることだった。これで許してくれるって言っのだから、なんだかなだ鮮花も優しいと思う。

「で、水着だっけ？」

「そうなんだ。生まれてこの方プールも入ったことないから泳ぎ方も知らないしね」

「小学校とか中学校の時は？」

「全部病欠。あの頃は病弱と思われてたから」

「病弱……ねえ？」

ジト目で僕を見て嘲笑つかのような笑みを浮かべる鮮花に、僕は無

言で睨んで抗議することにした。

仕方ないじゃないか。運動って人と争ったりすることが多いから、僕の殺人衝動が強く働いてしまうんだよ。

もつとも、あの頃は僕もその正体がわからなかったから身体が弱いんだって信じていたけど。

「相変わらず難儀してるみたいね。式より酷いんじゃない？」

「そうだって前から言ってなかったかな。生粋の化け物な式は、けれどどこまで行っても人間。僕はもう修正できるようなもんでもない人間。<sup>ばけもの</sup>今更何をいつてるのさ」

「こらこら、そんなこと言わないの。春佳だってまだ十五の子供なんだから」

「ふふ、そんなことを僕に言うのはキミくらいだよ、幹也」

僕を子供扱いするのなんて千冬姉か幹也くらいしかない。千冬姉はともかく、幹也は僕がどういう人間か知った上でそう接するから、ちよつと嬉しかったりする。なるほど、こうやってみんな幹也にオとされていったのか。うちの一夏くんとはちよつぴり違うけど、モテる男はこういうセリフをなんてこともなく言えちゃうんだね。殺すとか死ねとかは全然平気でも、僕にはこういうセリフはちよつと無理かな。



「僕は本当のことを言っているだけだよ。キミを一目見て、子供じやないって思う人は相当なひねくれ者か、それとも神様か何かだよ」

「　　そういうことね」

ああもう、この男はどうしてこう……

はあ、やめよう。人間には絶対に天敵がいるもんだ。僕にとってそれはこの幹也で、天敵である以上勝率は何よりも低い。つまり、僕は幹也に勝てないのだ。

「ほらほら、兄さんも春佳も行きましょう？　時間は有限なんだから。話なら歩きながらでもできますから」

幹也を前にしてすっかり猫を被った鮮花が僕らを促すように言って、先頭を歩きだした。

一度顔を見合わせて、僕らも歩き始める。

「そうそう春佳、所長が今日は息抜きも兼ねてって言ってたから、とことん普通に過ごそうか。」

いつもみたいのは一切無しで、子供らしく、ね？」

……こいつは、

「私はやっぱりあなたのそういうところが苦手よ、コクトー」

「はは、そっか」

あまりにもズバツと言われてしまったので悪あがきのつもりで言い返したら、幹也は楽しそうに笑った。

……ホントに、何をしても裏目に出る。

「あら、何がおかしいの？」

「ああ、いや、ごめん。相変わらずそっちのキミは”彼”と性別も性格も違うのに、その”コクトー”って呼び方だけはびっくりするくらい似てるなあって思ってたさ」

「それって、”両儀織”のこと？」

「さあね」

「この男は……」

今の式も覚えていない、そして僕も会ったことのないもう一人の”

シキ”。そいつは僕みたいに殺人衝動も持っていたって聞くけどよくは知らない。

けど、僕や式の知らない人を幹也は知ってる。なるほど、こっちの僕でも言い負けるわけだ。ただでさえ幹也には僕や式のことは調べ尽くされてるんだから。くそ、このストーカーめ。

「春佳……悪意が見てわかるくらいに表情に出すのをやめてもらえないかな……」

「いいでしょ。僕も私も勝てないんだから、これくらいは許容してよね」

「こらー！ 二人とも、行きますよ！」

鮮花の介入により僕らのお話は終了した。はあ、やっぱり天敵だなあ、黒桐幹也。

- side out -

「……手を握っているぞ」

「ですわね」

とあるデパートの前にて、電信柱の後ろに隠れる箒とセシリアはこっそりと握り拳を作った。視界に映るのは一組の男女。二人が思いを寄せる織斑一夏とつい最近まで彼と同じ、男子だと思われていたシャルロット・デュノアだ。

二人　特にシャルロットは嬉しさを周囲に滲み出しながら手なんか繋いで歩いており、それが箒とセシリアの握り拳を作っている原因になっていたりする。

「……ま、ある意味凄い美味しいポジションよね。男友達と思ったら女の子で、一夏はすっかり騙されてたわけなんだから」

「狡猾にして大胆な手口だな。春佳にも通用すると思うか？」

「無理に決まってるでしょ。ってか今更どんな手段を使う気よ」

嫉妬に狂う（？）箒とセシリアの後ろで、ため息を吐く鈴音。彼女はと言うと、なんと隣にいるラウラに買い物に付き合えと誘いをかけ、一緒に学園を出てきたのである。

「べ、別にこの間のことを悪いかなーとか思ってたわけじゃないんだから！」とは彼女の内心の弁。テンプレ乙なんて言葉が聞こえてきそうだが気にしないことにしておく。

そんなわけで二人は学園を出て単純に水着を買っただけのはずだったのだが、何故か箒とセシリアの二人に掴まり、こうして一夏とシャ

ルロットを尾行しているわけなのである。

「私が男だと言って、それから改めて女だと告げる」

「あんたバカ！？　んなことやったって、  
『えっと……どう反応すればいいのかな』とか言われて苦笑されて  
おしまいよ！

そもそもあんたが女なのはみんな知ってるから意味ないっての」

「む、やはりダメか？」

「当たり前でしょーが」

「むう……」

と、鈴音。今のは春佳の真似か？

「……そうだけど？」

「悪いが、似てなかったぞ」

「わかってるわよ！　あいつの喋り方って基本的にフワフワしてて  
よくわからないから簡単に真似できないのよ！」

うがー！ と怒涛の勢いで突っ込む鈴音に確かに。などとすまし顔で納得するラウラ。どこか温度差のある二人だった。

「二人とも、漫才はいいから行くぞ。一夏達が中に入った」

「あくまで、サイレントに行くのですからあまり騒がないでくださいね、お二人とも」

「了解だ」

「……………こいつらは……………」

……………なんだかんだで息のあっているこの四人組なのであった。

「ふわふわり、ふわふわるー」

「なんだシャル、ずいぶんご機嫌だな」

「ふふ、嬉しいことがあったからね！」

歌まで口ずさむシャルロットは、右手に一夏の手の温もりを感じつつ、そして一夏から”シャル”という愛称を付けてもらってご満悦だった。

一夏は一夏で理由がわかってもないのにシャルロットが元気だからと一人悟りを開いた年寄りのような心境で後ろを歩くシャルロットを見て笑った。

「さて、水着だけど　あれ、春佳？」

「ほえ？　あ、一夏くんか。シャルルも、やつほ」

水着販売のフロアに着いた一夏は目ばしいものがないかと周りを見回して、それから視界に入った少年の名を呼んだ。

少年　春佳は一夏とシャルロットを見つけると片手を挙げて、早歩きで二人の元へと向かった。

「春佳、僕はシャルロットだよ」

「あ、そっか。うーん、どうも呼びなれちゃうとクセで言っちゃうね。気をつけるよ」

「はは、まったくだな。んで、お前も水着買いに来たのか？」

「うん。僕水着持ってないしね。だから援軍つれて買い物ってわけ」

「誰が援軍ですか、もう」

「えっと……この人は？」

春佳が援軍と指を差した少女に、一夏は首を傾げて尋ねた。IS学園の制服を着ている春佳と並ぶこの少女は修道女の着る服のようなものを着て、少し拗ねたように春佳を睨んでいる。

「ああ、この人は幹也の妹の鮮花。年齢的には僕らより上だけど、いろいろと僕の方が先輩だったりする」

「幹也って……ああ、黒桐さんか！ あ、どうも、織斑一夏って言います。弟がお世話になってます」

「はじめまして、黒桐鮮花です。いえ、手がかかるけど可愛い後輩ですから」



「うつわ、なに先輩みたいなこと言ってるの？ 人のことよくパシリに使うくせに」

「後輩なんだから当然でしょ」

「ふーん、そういうこと言うんだー。じゃあもう式に勝てるかもしれない方法教えてあげないでいいよね」

「む……」

「えっと……」

「あ、ごめん一夏くん。ま、そんな感じで僕も来てるわけなのです。ホントは幹也も来てるんだけどちょっと別行動中でね、今は鮮花と行動してるってわけ」

「なるほどな。もう買ったのか？」

「いや、まだだよ。どれが似合うかとかよくわからないからもう少し悩むと思う。一夏くんは？」

「今来たところだよ。良かったら一緒に見るか？」

「……いや、今回はいいかな。僕は友達の邪魔をしたくはないし。そっちはそっちでこゆっくりー」

ちらりとシャルロットを横目に見て、春佳は肩を竦めた。その瞳はさも楽しそうで、シャルロットは春佳が自分をからかっているのだとすぐに理解した。ジト目で睨んで見るも、春佳は既に一夏に視線を戻しており、効果がない。

そのまま手をヒラヒラと振って、春佳と鮮花は二人の前から去って行った。

「友達って、幹也さんか？ うーん、よくわからないなあ」

「春佳……あとで覚えておくといいよ……」

「ん？ どうしたんだ、シャル」

「ううん、なんでもないよ」

愉しんでいる。春佳は一夏と自分達（おそらく他の二人のことも含め）で愉しんでいる。

やられっぱなしになるものか。絶対にやり返してやる！ と一人復讐を誓うシャルロットだった。

「……鈴音、今のは誰だ？」

「こつちが聞きたいわよ」

影に隠れて一夏とシャルロットを観察していた四人にも変化が起きていた。

それは、ここに春佳が現れたことと、その春佳が”誰も知らない女性と二人で”いたことである。

一夏達との会話が聞こえてなかった四人には、鮮花が幹也の妹であるとは知らない。そして、春佳が式以外の女性、しかも中学時代を共にした鈴音も知らない女性といたこと、ここが何よりも問題だった。式の場合、鈴音は面識があるから問題はない。だが、今回の女性はその鈴音の脳内に引っかけりすらしなかったのだ。

「一夏も知らなかったようだ……」

「あの制服は確か、礼園女学院のものですわね」

「礼園って、お嬢様学校じゃない！　なんでそんなところのお嬢様と一緒にいるのよあいつは！」

「鈴音、これは」

「そうね、もう少し様子を見る必要がありそうだね」

「うむ。篤、セシリア、申し訳ないが私達は別任務の為に離脱させてもらう」

「構いませんわよ。春佳さんだっतेなんだかんで一夏さんの弟。何があるかわかりませんもの」

「そうだな。では、あとで合流ということでもいいか？」

「オーケー。じゃ、行くわよラウラ」

「了解だ」

鈴音の声にラウラが頷き、二人は春佳達の後を追い始めた。その動きは少なくとも女子高生の尾行ではなく、その筋の訓練を積んだ代表候補生のものだった。それだけ二人が本気ということだろう。

「あの二人、なんだかんだで仲良いですわね」

「険悪でい続けるよりはいいと私は思うぞ。」

……む、一夏とシャルロットも動き出したな。私達も行くぞ」

「了解ですわ。見失わないように頼みますわよ」

「当たり前だ」

動き出した一夏とシャルロットに合わせて、箒とセシリアも動き出す。

こうして、四人の少女の尾行劇<sup>ストーキング</sup>は今ここに、開始された。

## 一（後書き）

そんなわけで始まった第四章。

とりあえずまだ冒頭ですが次回に続きます。そして、これを書いて思ったのがこの四章を終えたら閑話を書こうかなと思います。ゴールデンウィークにあった話と鈴とラウラのお話。鈴に泣かされるラウラとかなんであの二人があそこまで現在仲が良いかとか御崎の脳内でだけ出てても面白くないんで。

そしてこの章の原作との違いが篠ノ之箒さんが篠ノ之空気さんじゃないということ！

原作だと箒メイン回なのに序盤の扱いが散々だったんでちよつと出番をちゃんと出していこうと思います。専用機への葛藤とかはあるのですが、それはちゃんと違う方向で出していくと思いますのでご安心（？）ください。

そんなわけで、この章はかなりオリジナル色が濃厚ですがよろしくお願いします。

今回は買い物組と尾行組でもうちよいいろいろやるつもりです。春佳の重大なこととかサラツと言うと思うのでご注意を

ではでは、次回のあとがきで会いましょう！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5071s/>

---

IS(インフィニット・ストラトス)-the Garden of sinners-

2011年8月4日18時29分発行